

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 35 —

福岡県朝倉郡朝倉町・杷木町所在 外之隈遺跡の調査(墳墓編)
(外之隈遺跡 I)

1995

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告

— 35 —

福岡県朝倉郡朝倉町・杷木町所在 外之隈遺跡の調査(墳墓編)

(外之隈遺跡 I)



1. 外之隈遺跡 I区・V区と筑後川（西から）



2. 外之隈遺跡 I区・II区・VII区（西から）



1. 外之隈 I 区全景（西上空から）



2. 外之隈 I 区 1 号墳 1 号墓（北から）



1. I区1号墳1号墓鏡・勾玉出土状態（北から）



2. I区1号墳1号墓出土画像文帶神獸鏡



1. 外之隈II区全景（南上空から）



2. 外之隈II区 1号墳全景



1. II区1号墳1号墓出土重圏連弧文鏡



2. II区1号墳2号墓出土飛禽鏡

序

福岡県教育委員会では、九州横断自動車道の大分自動車道建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度から実施してきました。本書はその第35集にあたります。

この報告書で扱った外之隈遺跡は昭和62・63年度に発掘調査を行い、遺跡全体では縄文時代から江戸時代にかけての住居跡や墓が検出されていますが、本書には古墳初頭期の墳墓と6世紀代の古墳、江戸時代の墓の報告を収めて墳墓編として刊行するものです。

特に古墳発生期の墳墓は、その形態や中国鏡などの出土遺物に注目すべきものがあり、本書が今後の研究の一助ともなれば幸甚であります。

なお、発掘調査および報告書作成において多数の方々に御協力・御援助を賜りました。厚くお礼申し上げます。

平成7年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

例　言

1. 本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した、九州横断自動車道関係遺跡についての35冊目の報告書である。
2. 本書に収録したのは、1987・88（昭和62・63）年度に調査を行った福岡県朝倉郡朝倉町・杷木町所在の外之隈遺跡であり、そのうちの墳墓編である。これを「外之隈遺跡I」とし、集落等については「外之隈遺跡II」にて後年報告の予定である。
3. 遺構については、実測は井上裕弘・伊崎俊秋・小田和利が行い、中間研志・高田一弘・佐土原逸男・石橋丸子・谷口晶子・丸山啓子・石井律子・高倉美智子の援助を受けた。写真は伊崎・小田が撮影した。
4. 出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもとに、九州歴史資料館および福岡県文化課甘木事務所とで行った。鉄器については九州歴史資料館の横田義章氏のもとで保存処理を実施した。
5. 遺物については、実測は伊崎・小田が行い、写真は石丸洋氏・北岡伸一が撮影した。
6. 遺構・遺物の製図は豊福弥生・原カヨ子・伊崎が行った。
7. 本書で使用した方位は、新平面直角座標系のII系に基づく座標北である。
8. 出土人骨の現地での実測と取り上げは土肥直美・田中良之氏にお願いし、形質的所見は田中・金宰賢氏に依頼してその内容を収録した。
9. 赤色顔料の分析は福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏にお願いし、その結果を収録した。
10. 出出土器の砂礫について、奥田尚氏（奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託）の観察結果を収録した。
11. 当遺跡の北方に位置する本陣古墳の埴輪についての紹介を小田が、遺跡内を通っていた旧街道についての考察を佐藤尚隆氏（現福岡県立八幡中央高校）が行い、ともにVに掲載した。
12. 本遺跡にかかる図面・写真の記録と遺物については、当分の間、九州歴史資料館および文化課太宰府事務所・甘木事務所において保管している。
13. 本書の執筆は、IV-Aを田中良之・金宰賢氏、IV-Bを本田光子・川村秀久氏、IV-Cを奥田尚氏、V-Aを小田和利、V-Bを佐藤尚隆氏が、その他を伊崎俊秋が行った。
14. 本書の編集は伊崎が行った。

本文目次

I	序論	1
A.	はじめに	1
B.	調査の組織と関係者	2
C.	調査の経過	6
II	遺跡の位置と環境	8
A.	位置	8
B.	歴史的環境	9
C.	朝倉高校による過去の調査	15
III	調査の内容	21
A.	概要	21
B.	I 区の調査	23
1.	1号墳	23
2.	2号墳	34
3.	その他	38
C.	II 区の調査	42
1.	1号墳	43
2.	2号墳	56
3.	その他	56

D.	V区の調査	58
1.	古墳	58
2.	近世墓	66
IV	自然科学系の調査分析	71
A.	外之隈遺跡出土古墳時代人骨の調査	71
B.	外之隈遺跡出土の赤色顔料について	79
C.	外之隈遺跡出土土器に含まれる砂礫の観察	81
V	関連する諸調査	85
A.	本陣古墳採集の埴輪	85
B.	外之隈の旧街道について	89
VI	結語	93
A.	外之隈遺跡の古墳・近世墓その他	93
B.	外之隈遺跡 I・II区の墳丘墓	94
1.	土器の検討	94
2.	鏡の検討	101
a.	画文帶環状乳神獸鏡	102
b.	飛禽鏡	104
c.	重圈連弧文鏡	105
3.	墳丘墓の年代と位置づけ	106

卷頭カラー図版

- 1 1. 外之隈遺跡 I 区・V 区と筑後川（西から）
2. 外之隈遺跡 I 区・II 区・VI 区（西から）
- 2 1. 外之隈 I 区全景（西上空から）
2. 外之隈 I 区 1 号墳 1 号墓（北から）
- 3 1. I 区 1 号墳 1 号墓鏡・勾玉出土状態（北から）
2. I 区 1 号墳 1 号墓出土文画帶神獸鏡
- 4 1. 外之隈 II 区全景（南上空から）
2. 外之隈 II 区 1 号墳全景
- 5 1. II 区 1 号墳 1 号墓出土重圈連弧文鏡
2. II 区 1 号墳 2 号墓出土飛禽鏡

図 版 目 次

- | | | |
|-------|--|-----------------------|
| 図版 1 | 1 外之隈遺跡遠景（西南から） | 2 外之隈遺跡遠望（南から） |
| 図版 2 | 1 外之隈遺跡と恵蘇八幡宮遠景（西から）
3 高山より遺跡をのぞむ（東南から） | 2 I・V 区空中写真（西から） |
| 図版 3 | 1 I・II 区遠景（西から）
3 II 区より I 区をのぞむ（北西から） | 2 同（南東から） |
| 図版 4 | 1 I 区全景（西上空から） | 2 I 区 1 号墳全景（西上空から） |
| 図版 5 | 1 I 区 1 号墳（南西から） | 2 I 区 1 号墳北側トレンチ（北から） |
| 図版 6 | 1 I 区 1 号墳 1 号墓（北から）
3 同上（北から） | 2 同上遺物出土状態（西から） |
| 図版 7 | 1 I 区 1 号墳 2 号墓（西から）
3 同上（北から） | 2 同上蓋石除去後 |
| 図版 8 | 1 I 区 1 号土壙（東から）
3 I 区 SK 1（南から） | 2 同上土器出土状態 |
| 図版 9 | I 区 1 号墳 1 号墓出土遺物（1 文画帶環状乳神獸鏡 2 鏡・玉・剣） | |
| 図版 10 | 文画帶神獸鏡の神像・獸像部分と方格銘 | |
| 図版 11 | 文画帶神獸鏡の文画帶部分 | |

- 図版12 外之隈遺跡Ⅰ区出土土器
- 図版13 外之隈遺跡Ⅰ区出土土器・鉄器
- 図版14 1 外之隈遺跡Ⅱ区遠景（西南から）
2 同（西から）
3 Ⅱ区墳裾部分（北から）
- 図版15 1 外之隈遺跡Ⅱ区全景（南西上空から）
2 Ⅱ区1号墳全景（真上から）
- 図版16 1 Ⅱ区1号墳主体部検出前（北から）
2 同上検出後（北から）
- 図版17 1 Ⅱ区1号墳1号墓（北から）
2 同上蓋石除去後（北から）
- 図版18 1 Ⅱ区1号墳1号墓人骨出土状態（西から）
2 同上人骨上半部（西から）
- 図版19 1 Ⅱ区1号墳1号墓鏡出土状態（南から）
2 同上鐵器出土状態（西から）
- 図版20 1 Ⅱ区1号墳2号墓（北から）
2 同上蓋石除去後（北から）
- 図版21 1 Ⅱ区1号墳2号墓遺物出土状態（西から）
2 同上鏡出土状態（南から）
- 図版22 1 Ⅱ区1号墳3・4・5号墓（北から）
2 同3・4号墓（北から）
- 図版23 1 Ⅱ区1号墳5号墓（北から）
2 Ⅱ区1号墳6号墓（西から）
- 図版24 1 Ⅱ区1号墳1号墓出土重圈連弧文鏡
2 Ⅱ区1号墳2号墓出土飛禽鏡
- 図版25 外之隈遺跡Ⅱ区出土遺物
- 図版26 1 外之隈遺跡V区全景（西上空から）
2 外之隈遺跡V区1号墳全景（東から）
- 図版27 1 V区1号墳全景（南から）
2 同上一次床面（南から）
- 図版28 1 V区1号墳石室（東から）
2 同上（西から）
- 図版29 1 V区1号墳石室基底部（南から）
2 二次床面鐵器出土状態
3 同砥石出土状態
- 図版30 外之隈遺跡V区出土土器・鉄器・石器
- 図版31 1 外之隈V区1号近世墓（東から）
2 同上土層の状況（東から）
3 同上墓標下部の状態（東から）
- 図版32 1 1号近世墓墓標下部の状態（北から）
2 同上（南から）
3 同上墓標除去後（東から）
- 図版33 1 1号近世墓墓壙（東から）
2 同上遺物出土状態（東から）
3 同上遺物近影
- 図版34 1 外之隈V区2号近世墓（南から）
2 同上土層の状況
3 3号近世墓（北から）
- 図版35 外之隈遺跡V区近世墓出土遺物

〈IV-A〉

- P L . 1 外之隈遺跡出土人骨（左：II-1-1号、右：朝倉高校1号石棺）
P L . 2 外之隈遺跡出土人骨細部

〈V-A〉

- P L . 3 本陣古墳採集埴輪 1
P L . 4 本陣古墳採集埴輪 2

〈V-B〉

- P L . 5(1) 上座郡志波村本陣山古城ノ図（部分）〈複写〉
(2) 従上座川筋博多迄堀川目論図（部分）〈複写〉
P L . 6(1) 国道と旧道の分岐点 (2) 峠道を西側から
(3) 峠より志波宿を臨む（左手） (4) 峠の切り通し
(5) 峠道を東側から (6) 六地蔵

挿 図 目 次

(頁)

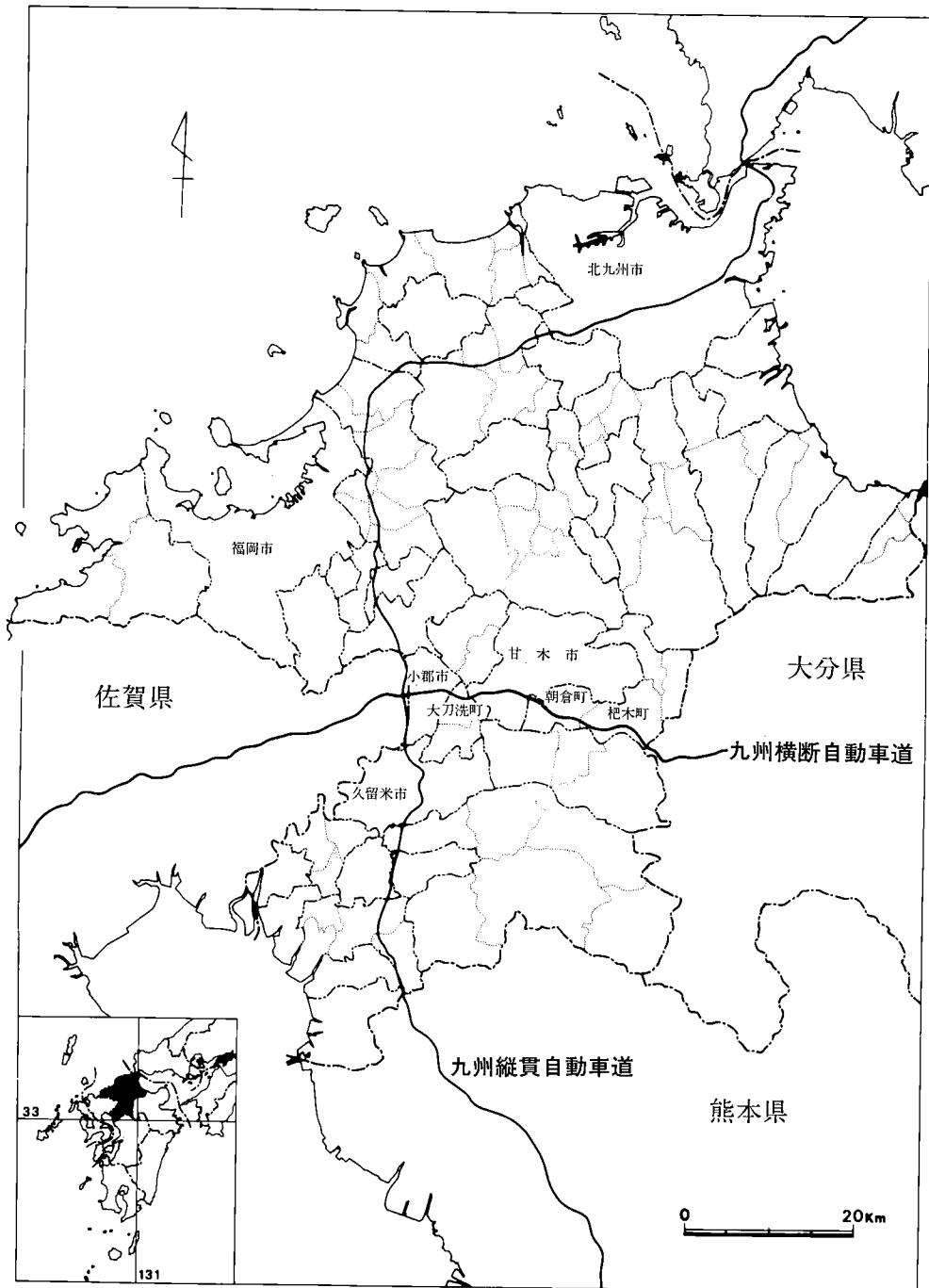
第 1 図	九州横断自動車道路線図 (1/842,000)	viii
第 2 図	外之隈遺跡位置図・周辺遺跡分布図 (1/50,000)	10
第 3 図	外之隈遺跡の朝倉高校調査時出土鉄器実測図 (1/3)	19
第 4 図	外之隈遺跡地形図 (1/3,000)	20
第 5 図	外之隈遺跡 I 区遺物出土位置と遺構配置推定図 (1/200)	22
第 6 図	外之隈遺跡 I 区地形図 (1/300)	24
第 7 図	I 区 1 号墳測量図 (1/150)	26
第 8 図	I 区 1 号墳土層図 (1/60) ; 棺材実測図 (1/30)	27
第 9 図	I 区 1 号墳 1 号墓実測図 (1/30)	29
第 10 図	I 区 1 号墓鏡・勾玉出土状態実測図 (1/10)	30
第 11 図	I 区 1 号墓出土鏡拓影・勾玉実測図 (1/1)	31
第 12 図	I 区 1 号墳 2 号墓実測図 (1/30)	33
第 13 図	I 区 2 号墳測量図 (1/100)	34
第 14 図	I 区 1・2 号墳出土土器実測図 (1/3)	36
第 15 図	I 区 1 号土壤実測図 (1/30)	38

第 16 図	I 区 1 号土壤等出土土器実測図 (1/3)	39
第 17 図	I 区 SK 1 実測図 (1/30)	40
第 18 図	I 区出土石器実測図 (1/3)	40
第 19 図	外之隈遺跡II区地形図 (1/200)	41
第 20 図	II区遺物出土位置図 (1/300)	42
第 21 図	II区 1 号墳測量図 (1/150)	42-43
第 22 図	II区 1 号墳 1 号墓実測図 (1/30)	44
第 23 図	II区 1 号墓人骨・遺物出土状態実測図 (1/15)	45
第 24 図	II区 1 号墓出土鏡拓影・実測図 (1/1)	46
第 25 図	II区 1 号墳 2 号墓実測図 (1/30)	48
第 26 図	II区 2 号墓遺物出土状態実測図 (1/15)	49
第 27 図	II区 2 号墓出土鏡拓影・実測図 (1/1)	50
第 28 図	II区出土鉄器実測図 (1/3)	51
第 29 図	II区 1 号墳 3・4 号墓実測図 (1/30)	52
第 30 図	II区 3・4・5 号墓断面土層図 (1/20)	53
第 31 図	II区 1 号墳 5 号墓実測図 (1/30)	54
第 32 図	II区 1 号墳 6 号墓実測図 (1/30)	55
第 33 図	II区出土土器実測図 1 (1/3)	57
第 34 図	II区出土土器実測図 2 (1/3)	57
第 35 図	外之隈遺跡V区遺構配置図 (1/600)	58
第 36 図	V区 1 号墳、2・3 号近世墓周辺測量図 (1/200)	59
第 37 図	V区 1 号墳周溝等土器出土状態実測図 (1/60)	60
第 38 図	V区 1 号墳石室実測図 1 (1/60)	60-61
第 39 図	V区 1 号墳石室実測図 2 (1/60)	62
第 40 図	V区 1 号墳出土土器実測図 (1/3)	63
第 41 図	V区 1 号墳出土鉄器・石器実測図 (1/3)	64
第 42 図	V区 1 号近世墓周辺測量図・実測図 (1/30;1/60,1/150)	66-67
第 43 図	V区 1 号近世墓墓標拓影 (1/6)、出土遺物実測図 (1/3)	67
第 44 図	V区 2・3 号近世墓実測図 (1/30)	68
第 45 図	V区 2・3 号近世墓出土遺物実測図 (1/2,1/1)	69
第 46 図	V区 2 号近世墓付近出土遺物実測図 (1/3)	70
第 47 図	外ノ隈遺跡 I・II区出土土師器実測図 (1/4)	94
第 48 図	長瀬高浜遺跡出土土器 (1/8)	95

第 49 図	二重口縁土器等実測図 1 (縮尺不同)	96
第 50 図	二重口縁土器等実測図 2 (縮尺不同)	97
第 51 図	外ノ隈遺跡出土鏡 (1/2)	100
第 52 図	山田後山遺跡出土鏡 (1/2)	105
<IV-A>		
Fig. 1	頭蓋最大長、最大幅 (女性)	76
Fig. 2	中顎幅、上顎高 (女性)	76
Fig. 3	眼窩幅、眼窩高 (女性)	77
<V-A>		
Fig. 4	本陣古墳埴輪採集位置図 (1/2,000)	86
Fig. 5	本陣古墳採集埴輪実測図 (1/4)	87
<V-B>		
Fig. 6	外之隈の旧道と周辺石碑等位置図 (1/5,000)	91

表 目 次

表 1 九州横断自動車道関係遺跡一覧表	2-3	
<IV-A>		
Table.1 外之隈遺跡人骨頭蓋主要計測値	73	
Table.2 外之隈遺跡人骨上腕骨計測値	73	
Table.3 外之隈遺跡人骨橈骨計測値	73	
Table.4 外之隈遺跡人骨大腿骨計測値	73	
Table.5 外之隈遺跡出土人骨の頭骨小変異	74	
<IV-B>		
Table.6 外之隈遺跡出土赤色顔料の試料一覧と分析結果	80	
<IV-C>		
Table.7 外之隈遺跡出土土器の砂礫種構成	83	
Table.8 甘木市付近の河川の砂礫種構成	84	



第1図 九州横断自動車道路線図 (1/842,000)

I 序 論

A. はじめに

九州横断自動車道と総称されるうちの大分自動車道の福岡県内部分は、西端部の小郡市から東端部の朝倉郡杷木町まで約37kmの距離がある。その建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査は、日本道路公団からの委託を受けて、福岡県教育委員会によって1979（昭和54）年から始められ、1990（平成2）年までの12年間に、62箇所を対象として実施された。その発掘調査の総面積は約53万m²に及んでいる。

自動車道の供用開始に向けて発掘調査を最大限に優先してきた中においても、調査担当者それぞれが順次調査報告書の作成を行ってきたところであるが、調査終了後の1991（平成3）年度からは年間5冊を目途として、1994（平成6）年3月現在、32集まで刊行した。平成6年度は、33集（21-D地点：上の原遺跡III）、34集（27地点：長島遺跡I）、35集（38地点：外之隈遺跡）、36集（21-C地点：大庭久保遺跡）、37集（57地点：柿原遺跡I地区）の5冊であり、今後さらに20冊ほどが予定されている。

報告書の作成にかかる遺物・図面等の整理は、福岡県文化課甘木事務所および太宰府事務所、九州歴史資料館において行った。

本書に収録した外之隈遺跡は、九州横断道に関する発掘調査が最も集中した時期である昭和62・63年度（1987～88）と、追加として平成2（1990）年に、調査を行った。

この38地点は、丘頂から斜面、谷部分と起伏に富んだ地形を包括していたので、便宜的に既存の農道や里道を境に区分けを行って調査した（第4図）。各区の調査期間と面積の内訳は下記のとおりであるが、総計12730m²が第1表の総面積18950m²とくい違うのは单年度に終了していない部分が一部重複するからである。

I・II区を除いたIII～IX区においては縄文前期と6～8世紀代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙等が検出されており、特にV～IX区における住居跡は斜面を造成して営まれたものであって、その占地形態は注意されるところである。

なお、のべ1年2ヶ月の長きにわたる各区の調査の間には、諸般の事情により他の地点の調査に従事したり（昭和63年4月13日～4月30日の間は杷木インターE地点の調査）、また途中での発掘調査そのものの一時中断（昭和63年9月15日～9月30日の間）もあった。

今回の報告は墳墓編ということで、その中のI・II区の全部とV区の一部である。

・ I 区	1987年11月16日～1988年 1月18日、3月5日～3月23日	約 380m ²
・ II 区	1987年12月11日～ 1988年4月13日、 5月26日～ 7月 5日	約 380m ²
・ III 区	1988年 1月 7日～ 3月 9日	約 930m ²
・ IV 区	1988年11月25日～12月27日	約 220m ²
・ V 区	1988年 1月19日～ 2月18日、 5月 5日～10月12日	約 2870m ²
・ VI 区	1988年 7月 1日～ 7月 9日、10月17日～10月26日	約 730m ²
・ VII 区	1988年 7月 1日～ 7月 5日、10月 4日～12月26日	約 5840m ²
・ VIII 区	1988年11月25日～12月26日	約 470m ²
・ IX 区	1990年 9月 5日～10月11日 (追加調査)	約 910m ²

総計約12730m²

B. 調査の組織と関係者

発掘調査を行った昭和62・63年度と、報告書作成の平成6年度における関係者は次のとおりである（平成2年度については省略）。

日本道路公団

福岡建設局

	昭和62年度	昭和63年度	平成 6 年度
局長	杉田 美昭	杉田 美昭	倉沢 真也
		臼井 信	
次長	菱刈 庄二	吉岡 康行	三重野堅二
	吉岡 康行	進 哲美	
総務部長	安元 富治	進 哲美	水田 章佳
		堀 義任	
管理課長	森 宏之	副島 紀昭	三根 敬正
	副島 紀昭		
管理課長代理	三野 徳博	三野 徳博	岡 芳則
		荒木 恒久	

福岡建設局甘木工事事務所

所長	風間 徹	風間 徹
----	------	------

表1 九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内 容	面 積	調査年度と面積										備 考	報告書			
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	H2			
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落、歴史溝	11,200					5,000		560						完了	7集	
2	前伏遺跡	" "	弥生・古墳散布地	10,400						330	6,000						完了	11集	
3	大板井遺跡	" 大板井	弥生・古墳	5,400							3,000						小郡市委託完了	15集	
4	" "	大板井城跡		9,200						3,500	5,000						小郡市委託完了	15集	
5	井上薬師堂遺跡	" 井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700							10集	
6	薬師堂東遺跡	" 薬師町	弥生・古墳散布地(首切塚)	32,000					500	7,300	10,100						完了	13・16集	
7	" 今隈		弥生散布地	7,200					200		100						遺構なし完了	—	
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	古代道路遺構	4,000					3,600								完了	26集	
9	春園遺跡	" "	先土器・弥生・遺跡・近世墓	10,800					100	6,700							完了	26集	
10	十三塚遺跡	" 甲状本郷	古墳集落	34,400				700		300							完了	26集	
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	古墳・奈良集落・墓地	33,800				13,860	13,500	10,000	3,000						2・5・8 14・17集		
12	小石川西条里	" 上浦	中世	48,000				8,100									遺構なし完了	—	
13	" 東条里	" 上浦馬田	"	56,000	200	7,600											完了	1集	
14	上々浦遺跡	" 上浦	弥生・古墳集落	18,400	200												完了	1集	
15	西原・下原遺跡	" 一ツ木屋永	" "	54,800	A B 地点 3,850			4,200	C 地点 1,400							完了	1・2・3集		
16	高原遺跡	" 屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400							完了	31集	
17	口ノ坪遺跡	" 牛鶴	近世積石	100						100							完了	31集	
18	" "		散布地	2,550					300								遺構なし完了	—	
19-A	塔ノ上遺跡	" "	古墳集落	30,000					700	8,200							完了	9集	
19-B	大還端遺跡	朝倉町大字石成	古墳集落・奈良墓地	20,000							8,400								
19-C D	石成久保遺跡	" "	古墳集落	20,000							6,100								
20	中道遺跡	" 大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300		11,400								
21-A	西法寺遺跡	" "	奈良集落・中世								8,400								
21-B	経塚遺跡	" "	散布地					800	600		2,300								
21-C	大庭久保遺跡	" "	弥生墓地・奈良集落								9,650						完了	36集	
21-D	上の原遺跡	" "	弥生集落・墓地・古墳集落								12,300						完了	18・27・33集	
22-A B	治部之上遺跡	" 入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300	4,800							完了	32集	
22-C	狐塚南遺跡	" "	弥生・中世集落・墓地	5,000							3,420						完了	28集	
23	座禅寺遺跡	" "	弥生集落・古墳	2,600							2,600						完了	32集	
24	才田遺跡	" "	中世散布地・歳田廃寺	5,400							1,050	6,650							
25	東才田遺跡	" "	" "	4,000							1,300	4,400							
26	" 須川		散布地	1,600													遺構なし完了	—	
27	長島遺跡	" "	縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000				C 地点 5,000	C 地点 6,640			500	16,000				34集		
28	中妙見遺跡	" "	縄文・歴史集落	2,400				200	458										
29-A	原の東遺跡	" 菱野	縄文・弥生集落・墓地	16,800					600				5,240	2,100					
29-B	妙見古墳群	" "	古墳方形周溝墓										4,660				完了	29集	
30	鎌塚遺跡	" 菱野・山田	縄文・弥生集落	4,000									6,550				完了	22集	
31	山ノ神遺跡	" 山田	縄文・ご集落	2,000									1,980				完了	22集	
32	" "		散布地	2,400				300									遺構なし完了	—	
33	長田遺跡	" "	縄文・弥生・古墳集落	2,000									5,500	2,000			完了	30集	
34	金場遺跡	" "	縄文・古墳	3,600									680	15,400					
35-A	上ノ宿遺跡	" "	弥生・散布地	2,600									880	2,900				完了	20集
35-B	恵蘇山遺跡	" "	古墳集落										2,400				完了	20集	
36	稗畑遺跡	" "	古墳散布地	2,000									3,980				完了	20集	
37	大迫遺跡	" "	奈良～平安火葬場・集落	2,400									5,410	9,900	700		完了	24集	
38	外之隈遺跡	" "	弥生～中世・箱式石棺	125									5,150	12,600	1,200		完了	35集	
39-A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生・古墳・中世散布地								320	3,400					完了	21集	
39-B C	中町裏遺跡	" "	" "	22,000							11,000						完了	21集	
40	志波桑ノ本遺跡	" "	中世・散布地	2,500							300	7,700							
41	志波岡本遺跡	" "	" "	18,000							300	9,400							
42	江栗遺跡	" "	中世-字-石軒	8,000							300	9,700							
43	大谷遺跡	" 若市	古墳群	12,000								500	7,560						
44	" 久喜宮		散布地	1,800									150				遺構なし	—	
45	笹隈遺跡	" "	"	2,400								400	3,710						
46	夕月・天園遺跡	" 古賀	"	1,800								300	2,210	225					
47	上池田遺跡	" 池田	弥生・古墳・中世散布地	4,000								3,200							
48	畠田遺跡	" "	縄文・弥生・中世集落・墓地	1,800								6,800							
49	"	林田	散布地	3,200									150				遺構なし	—	
50	" "		"	2,400									200				遺構なし	—	
51	楠田遺跡	" "	縄文集落	5,200									6,500						
52-A	小覚原遺跡	" "	"										1,000	1,250					
52-B	二十谷遺跡	" "	"										1,550						
53	陣内遺跡	" 穂坂	中世	3,500									5,700						
54	上野原遺跡	" "	弥生・中世	1,800									2,700						
55	" "		散布地	1,600									100				遺構なし	—	
56	" "		"	2,400									800				遺構なし完了	—	
57	柿原遺跡	甘木市大字柿原	古墳群・縄文・弥生集落	200,000		測量 14,700		900	8,300	15,000	18,500	4,400					土取場	4・6・12・ 19・37集	
58	山田古墳群	朝倉町大字山田	古墳群	40,000		測量 4,435				2,500	2,500	8,710					土取場完了	23集	
杷木イン ターA	鞍掛遺跡	杷木町大字寒水	弥生・古墳集落										6,450				完了	25集	
杷木イン ターB	前田遺跡	" "	弥生集落										2,600				完了	25集	
杷木イン ターC	西ノ追遺跡	" "	弥生高地性集落	100,000									1,270	1,270			完了	25集	
杷木イン ターD	クリナラ遺跡	" "	縄文・古墳集落										4,180						
"	若宮遺跡	" "	溝																

副所長	西田 功	藤田 栄三
		藤田 栄三
副所長（技術）	友田 義則	
庶務課長	徳永 登	大河 尋光
大河 尋光	下川 節生	
用地課長	松尾 伸男	松尾 伸男
工務課長	後藤二郎彦	豊里 栄吉
	豊里 栄吉	
朝倉工事区工事長	上野 満	上野 満
杷木工事区工事長	小沢 公共	小沢 公共

福岡県教育委員会

	昭和62年度	昭和63年度	平成 6 年度
〔総括〕			
教育長	竹井 宏	竹井 宏	光安 常喜
教育次長	大鶴 英雄	大鶴 英雄	松枝 功
		渕上 雄幸	
指導第二部長	大平 岩男	大平 岩男	丸林 茂夫
指導第二部参事	窪田 康徳	葉石 熱	
文化課長	窪田 康徳（兼）	葉石 熱	松尾 正俊
文化課参事			柳田 康雄
文化課課長補佐	平 聖峰	平 聖峰	清水 圭輔
〃 課長技術補佐	宮小路賀宏	宮小路賀宏	
〃 参事補佐	中矢 真人	中矢 真人	井上 裕弘
〃 〃	加藤 俊一	栗原 和彦	橋口 達也
〃 〃	栗原 和彦	大塚 健	川述 昭人
〃 〃	大塚 健	柳田 康雄	木下 修
〃 〃	柳田 康雄	松尾 正俊	磯村 幸男
〃 〃			児玉 真一
〃 〃			馬田 弘穎
〃 〃			池辺 元明
〔庶務〕			
文化課庶務係長	加藤 俊一（兼）	池原 健二	

文化課管理係長 杉光 誠

〃 事務主査 竹内 洋征

〃 主任主事 沢田 俊夫

高田 裕康

〔調査〕

文化課調査班総括	柳田 康雄 (兼)	柳田 康雄 (兼)
〃 技術主査	井上 裕弘	井上 裕弘 (調査担当)
〃 〃	木下 修	木下 修
〃 〃		中間 研志
〃 主任技師	中間 研志	
〃 〃	佐々木隆彦	
〃 〃	伊崎 俊秋	伊崎 俊秋 (調査担当)
〃 技 師	小田 和利	小田 和利 (調査担当)
〃 〃		水ノ江和同
〃 文化財専門員	木村幾多郎	木村幾多郎 (調査担当)
〃 臨時職員	日高 正幸	日高 正幸
〃 調査補助員	高田 一弘	高田 一弘
〃 〃	武田 光正	武田 光正
〃 〃	佐土原逸男	

〔整理〕

南筑後教育事務所 生涯学習課 文化班 技術主査 伊崎 俊秋

九州歴史資料館 調査課 主任技師 小田 和利

文化課 整理指導員 岩瀬 正信

〃 〃 北岡 伸一

【発掘調査従事者】

井手 役人	・安部 亀喜	・鳥居 貞美	・井上 武雄	・小川 人己	・友納 浩
中村 光恵	・本石 セツ子	・高瀬 セツ子	・後藤 カミヨ	・矢野 静子	・牟田 サエ子
渡辺 輝子	・石橋 丸子	・谷口 晶子	・石井 律子	・丸山 啓子	・山口 由美子
高倉 美智子	・安高 マキ子	・井手 美貴枝	・田中 伊津子	・因間 美枝子	・足立 イツエ
阿部 恵美子	・坂元 ヨリ子	・岩下 幸子	・鳥居 アイ子	・財津 キヨカ	・日吉 キヨノ
梶原 トミエ	・伊藤 千代香	・熊谷 ヨリ子	・武藤 ヒデ子	・塚本 ヤエ子	・日吉 スミ子
林 ツユカ	・奈須 道子	・佐藤 扶美子	・時川 千代子	・塚本 トシエ	・伊藤 夏子
小川 貞子	・藤本 公子	・野田 ミエ	・山本 フミ子	・伊藤 ミネヨ	・梶原 ハヤ子

梶原 マツエ・田中 サツキ・原田 ヨネ・井手 照子・山下 けさ江・青柳 美雪
日野 マツ子・藤本 和子・櫻村 スズ子・井手 和枝

【整理作業従事者】

豊福 弥生・原 カヨ子・閑 久江・平田 春美・若松三枝子・棚町 陽子
土山 真弓美・岡 由美子・久富 美智子・田中 典子・坂田 順子・堀江 圭子
藤原 さとみ・江口 幸子・山本 千鶴子・堀之内久美子・小島 佐枝子・中塩屋リツ子
石井 紀美子・藤井 カオル・渡辺 輝子・塙足 里美・高瀬 照美・近藤 恵美子
大野 愛里・宮田 ゆみ・西田 美代子・秋吉 邦子・岡 泰子・有馬 信子
植山 洋子・鬼木 美知子・栗栖 絹子・奥村 千恵子・竹田 スミ子・友清 光子
平石 史子・古賀 陽子・竹田 まち子・砥上 トシ子・武藤 瞳子・坂口 好子
白水 マサエ・若松 和子・辻 光子・坂田 ミチヨ・政住 理恵子・矢野 里美
穴見 裕子・寺町 恭代・小国 みどり・吉賀 八重子・高島 妙子・坂本 恵津子
安永 啓子・近藤 京子

調査中及び報告書作成の段階で多くの方々に御指導・御教示を得た。深甚の謝意を表します。

【調査時】梶原一雄・七熊キヨミ・山下瑞恵、石井徳昌（杷木町教育委員会）、高山明・佐藤尚隆（朝羽高校）、西谷正・渡辺正気・小田富士雄（福岡県文化財保護審議会専門委員）、伊藤晴明・時枝克安（島根大学）、賀川光夫（別府大学）、岡本東三（千葉大学）、田中良之・土肥直美（九州大学）、高橋徹（大分県教育委員会）、藤丸紹八郎（北九州市立考古博物館）、山口信義（北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室）その他多数の方々

【報告書作成時】西村強三（元九州歴史資料館）、濱田信也・砥上廣明・稻益則久・上川靖彦・原佳子・小野智明・堤純雄・東勝典・黒田講和・大津重昭・梅崎雄二・江上靖則（南筑後教育事務所）、横田義章（九州歴史資料館）、新原正典（甘木歴史資料館）、高松義治・板谷雅子（朝倉高校）、田中良之・金宰賢（九州大学）、本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）その他多数の方々

〈順不同〉

C. 調査の経過

1年2ヶ月の長きにわたる調査のうち、I・II・V区の今回報告に関連する部分について調査日誌を抄録する。

【I区】

(昭和62(1987)年)

- 11月16日 柏木町の43地点・大谷遺跡から器材を搬入し、テント設営。
17日 C面のトレーナー発掘
24日 A面の発掘にかかる
12月8日 A面に1・2号墓検出。1号墓は朝倉高校がかつて発掘したものと判断する。
11日 11時頃、1号墓から画文帶神獸鏡片出土。
23日 1号墳丘墓の規模を探るため、隣地の地権者・梶原一男氏に承諾を得て発掘す。
24日 西谷・渡辺両先生現地視察。新聞発表。
25日 昭和31年当時の朝倉高校調査の件で、朝羽高校高山先生に現地をみてもらう。

(昭和63(1988)年)

- 1月6日 現場仕事はじめ。
10日 酒井仁夫氏逝去の報入る。
11日 平板測量。18日まで。
2月17日 小田富士雄先生現地視察。
3月5日 平板測量再開。
23日 墳丘墓断面図作成。

【II区】

(昭和62(1987)年)

- 12月11日 表土剥ぎにとりかかる。
24日 石棺の存在を確認。

(昭和63(1988)年)

- 1月28日 平板測量にかかる。
2月25日 3・4号墓の断面土層実測。
3月24日 11時30分頃、1号墓から連弧文鏡片出土。
4月5日 11時頃、2号墓から飛禽鏡出土。
4月6日 九州大学医学部第二解剖学教室の田中・土肥氏により1号墓の人骨取り上げ。

5月27日 空中写真撮影。

7月5日 II区終了。

【V区】

(昭和63(1988)年)

1月19日 表土剥ぎにかかる。

1月26日 1号近世墓周辺の地形測量。

2月5日 横穴式石室を持つ古墳を検出。

2月9日 遺構検出作業。18日まで。

5月5日 1号近世墓を掘り始める。

6月15日 古墳石室の発掘。

8月2日 2号近世墓実測。

8月10日 古墳清掃・写真。

8月31日 V区の空中写真。2号近世墓実測。

10月12日 V区終了。



photo. 1 II区人骨実測寸景

II 遺跡の位置と環境

A. 位置

(図版1・2、第2図)

福岡県筑紫野市と大分県日田市をつなぐ国道386号線は、宝満山・宮地岳・砥上岳・古処山・馬見山などの山塊の南麓を南東方向に走っている。甘木市を経て朝倉郡朝倉町恵蘇宿を過ぎると筑後川にぶつかり、ここで東にカーブしてここから先は山裾を川に沿って走ることになる。その屈折点の所に恵蘇八幡宮があって、外之隈遺跡はその東北方にある。

外之隈遺跡の位置は、横断道の路線STATIONナンバーでいえばNo.227+80～No.231+20の間にある。その地籍はI・II区のごく一部が杷木町にかかっているが、大半は朝倉町であり、III～V・VII・VIII区の小字である外之隈を遺跡名とする。新平面直角座標系のII系に基づく座標値でいえばおよそX=40270～40420m、Y=-21620～-21960mの間にある。

福岡県立朝倉高校が調査した「外隈遺跡」は、『福岡県遺跡等分布地図(甘木市・朝倉郡編)』(1978)で「外隈1～4号棺」が570338～570341として登録しており、その内容は後に引用する報告(II-C)によって知られるところである。今回調査した外之隈遺跡は遺跡番号570390にて新規に登録されている。

各区の地番等は次のとおりである。

- ・ I 区…………福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字本陣461-51ほか
　　〃　〃　杷木町大字志波字本陣5828-96ほか
- ・ II 区…………福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字本陣461-138, 461-7
　　〃　〃　杷木町大字志波字本陣5828-86・87ほか
- ・ III区…………〃　〃　朝倉町大字山田字外之隈73-1ほか
- ・ IV区…………〃　〃　朝倉町大字山田字外之隈61-2ほか
- ・ V区…………〃　〃　朝倉町大字山田字外之隈17・18ほか
- ・ VI区…………〃　〃　朝倉町大字山田字本陣461-2ほか
- ・ VII区…………〃　〃　朝倉町大字山田字外之隈57-3・4、62-1ほか
- ・ VIII区…………〃　〃　朝倉町大字山田字外之隈63-1ほか
- ・ IX区…………〃　〃　朝倉町大字山田字本陣461-4ほか

朝倉町・杷木町は果樹栽培の盛んな所であり、柿・ぶどう・梨・りんご等々の果物があちらこちらに植えられている。なかでも杷木町における柿の生産額はかなり高い割合を占めていて、町の主要農産物としては米のそれをはるかに上回っている。

『朝倉町史』(1986)によれば、朝倉町では昭和28(1953)年に長安寺で富有柿が植えられたのが柿栽培の始まりであり、次いで恵蘇宿でも栽培が始まったという。この周辺一帯には今でも柿畠が広がっており、今回報告のI・II区やその他の地区も段々畠に開墾されていて、もとは柿が植えてあったものである。後に引用する朝倉高校調査時の開墾というのも柿のためのものであったとみてまちがいない。

B. 歴史的環境

(第2図)

(註1)

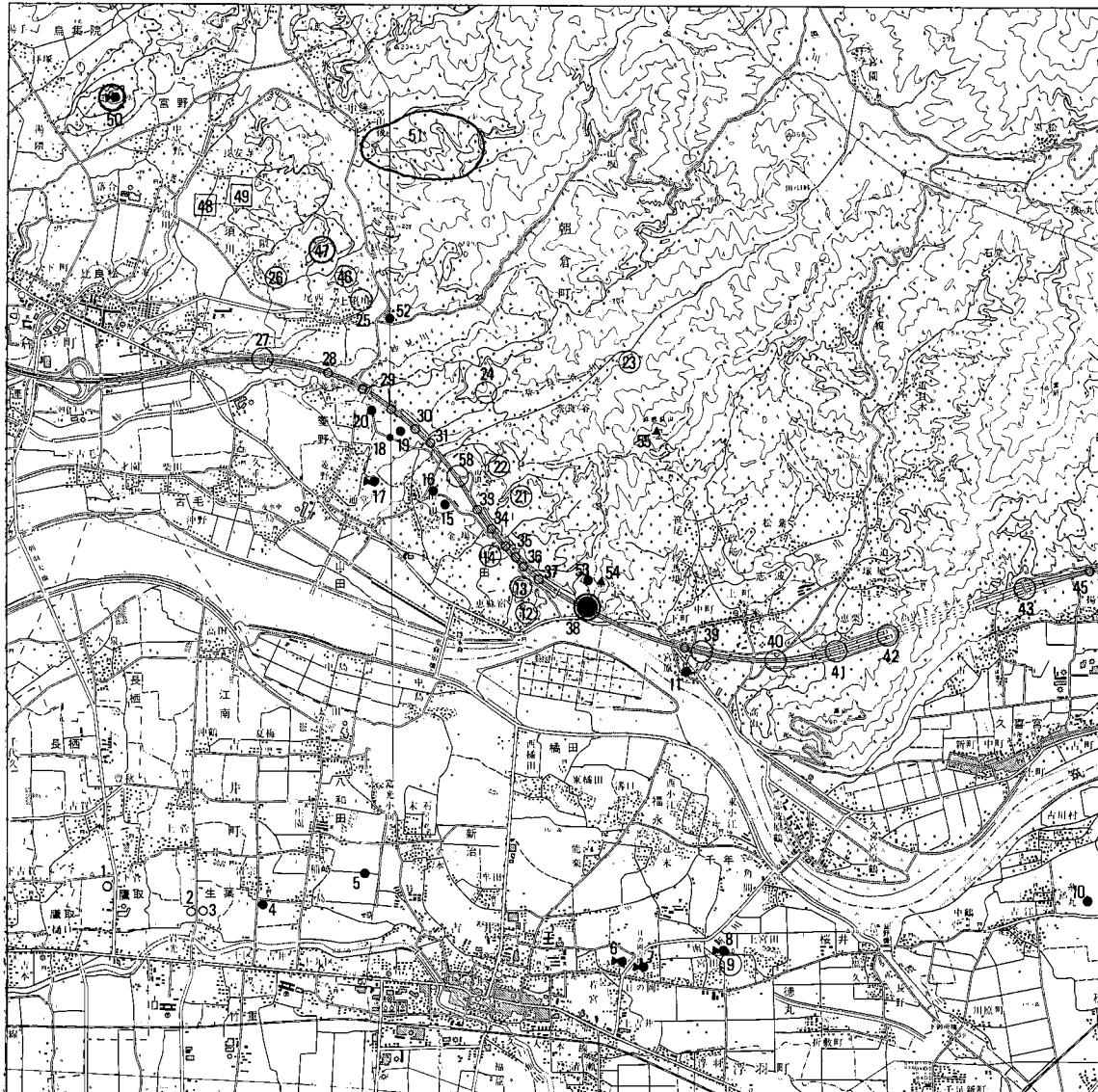
『日本書紀』によれば、齊明天皇7(661)年3月、天皇は中大兄皇子らと軍勢を引き連れて「嫗大津」に至った。その前年に新羅・唐の連合軍に敗れた百濟を救援するためである。同年5月に天皇は「朝倉橋廣庭宮」に遷るが、7月には崩御する。すぐに中大兄皇子が称制して磐瀬宮(長津宮)に遷り、12月には畿内飛鳥にて殯をおこなっている。百濟救援の戦はその後も続くが、結局のところ天智天皇2(663)年には白村江において新羅・唐の連合軍に敗れ去ってしまうのであった。

わずか3ヶ月弱の行宮であった「朝倉橋廣庭宮」の所在地については福岡県朝倉郡朝倉町山田、同須川(旧宮野村)あるいは朝倉郡杷木町志波といった説がある。今もって確定はしていないが、『日本書紀』の中に「朝倉社」「朝倉山」の地名が見えることからも、麻底良山の麓であったことは間違いないところである。(註2) 杷木町志波の杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡そして朝倉町山田の大迫遺跡からは大型の建物跡が検出されており、その実在の証跡が確認されつつある。(註3) (註4)

さて、朝倉町大字山田字恵蘇宿にある恵蘇八幡宮は応神・齊明・天智天皇をまつたお宮であり、その背後の山上には齊明天皇御陵と称する古墳の存する所がある。またこの近くには朝倉関(名乗関)があったと伝えられ、それに関連しての“隠家の森”にはいまも大きな枝を張った国指定天然記念物の大樟がある。

日田市の方から西流してきた筑後川は、恵蘇八幡宮の位置する山塊にぶつかってその流れの方向を変えるが、そこには朝倉地方の利水のために江戸時代・寛文4(1664)年に山田井堰が(註5) つくられている。恵蘇八幡宮のすぐ北東側、国道386号線の北側に「秋の田」という田があった(註6) とされ、ここの東側一帯が横断道38地点の外之隈遺跡である。

この遺跡内をはしる農道はいまは柿の収穫等におもに利用されているが、もともとは江戸時代の元文3(1737)年に付け替えられた旧街道と重複する部分があるらしい。この点についてはV-Bの考察を参照されたい。



- | | | | | |
|--------------|-------------|------------|-------------|---------------|
| 1. 鷹取五反田遺跡 | 13. 恵蘇山古墳群 | 25. 上須川古墳群 | 36. 稗田遺跡 | 48. 朝倉橘広庭宮推定地 |
| 2. 堀町遺跡 | 14. 上ノ宿古墳群 | 26. 小隈古墳群 | 37. 大迫遺跡 | 49. 長安寺廃寺 |
| 3. 大碇遺跡 | 15. 長田1号墳 | 27. 長島遺跡 | 38. 外之限遺跡 | 50. 宮地嶽古墳群 |
| 4. 生糞1号墳 | 16. 山田ウラ山遺跡 | 28. 中妙見遺跡 | 39A. 柏木宮原遺跡 | 51. 山後山古墳群 |
| 5. 女塚 | 17. 劍塚古墳 | 29A. 原の東遺跡 | 39B. 中町裏遺跡 | 52. 上須川山田石棺 |
| 6. 月岡古墳 | 18. 鎌塚西遺跡 | 29B. 妙見古墳群 | 40. 志波桑ノ本遺跡 | 53. 本陣古墳 |
| 7. 曜岡古墳 | 19. 鎌塚古墳 | 30. 鎌塚遺跡 | 41. 志波岡本遺跡 | 54. 本陣山古城跡 |
| 8. 塚堂古墳 | 20. 堤古墳 | 31. 山の神遺跡 | 42. 江栗遺跡 | 55. 麻底良城跡 |
| 9. 塚堂遺跡 | 21. 山田柳古墳群 | 33. 長田遺跡 | 43. 大谷遺跡 | |
| 10. 田島北遺跡 | 22. 山田古墳群 | 34. 金場遺跡 | 45. 笹隈遺跡 | |
| 11. 志波宝満宮古墳群 | 23. 奈良ケ谷古墳群 | 35A. 上ノ神遺跡 | 46. 上須川石棺群 | |
| 12. 恵蘇八幡宮古墳群 | 24. 山ノ神古墳群 | 35B. 恵蘇山遺跡 | 47. 天皇山遺跡 | |

第2図 外之限遺跡位置図・周辺遺跡分布図 (1/50,000)

当外之隈遺跡の北方には標高294mの麻底良山があり、その山頂には延喜式神名帳にその名の知られる麻底良神社が祀られていて、灯籠には「宝暦11巳年」(1761)、狛犬には「安政4年」(1857)、下宮十九社の一つである弥永宮一座には「宝暦十庚辰年11月16日」の銘がある。またここは中世秋月氏の築城した麻底良城のあった所でもある。

本陣山古城はII区からそれほど離れていない北方にあり、これも中世秋月氏の築城と伝える。その本陣山古城のすぐ西には直径50m近い本陣古墳があり、墳裾から円筒埴輪の破片が採集さ^(註9)れている(V-A参照)。4世紀代に属する可能性も高い大円墳である。

外之隈遺跡の今回報告分は古墳時代初頭期の墳丘墓と、古墳、近世墓であるが、周辺における関連する遺跡を瞥見しておこう(第2図)。

・弥生時代終末頃～古墳時代初頭期

まずこの時期に営まれた遺跡としては、天皇山石棺群・上須川山田石棺・山田後山遺跡・妙見墳墓群・志波桑ノ本遺跡・田島北遺跡・塚堂遺跡・生葉遺跡などがあり、現時点では筑後川の北岸側に多く知られている。

^(註11) 天皇山石棺群は箱式石棺墓6基、石蓋土壙墓2基が調査されている。副葬遺物は鉄器(剣・鉈)のみであるが、墳墓でない土壙内から出土したという手焙形土器は平底であることからすれば弥生時代後期に属するのであろう。それにしてもきわめて注意される遺物である。

^(註12) 上須川山田石棺からは合葬された2体の人骨と素環頭鉄剣が出土している。素環頭鉄剣は切先部が両刃であるが他の身部は片刃の刀状となっている。

^(註13) 山田後山遺跡は山田遺跡群の一部であるが、昭和8(1933)年に煙草乾燥場を建設する時に箱式石棺4基が発見され、そのうちの2基からそれぞれ小形仿製鏡と連弧文鏡片が出土している。小形仿製鏡は高倉洋彰氏のいう内行花文日光鏡系仿製鏡第II型b類であり、連弧文鏡片は「長宜子孫」系の舶載鏡で穿孔があり破片として副葬されたものである(第52図)。弥生時代後期後半～終末のものである。

^(註14) 妙見墳墓群は横断道に關係して調査された(29-B地点)。布留式期の墳墓群で、石棺・石蓋土壙を主体にして方形周溝を持つもの13基と単独のもの19基があり、隨葬墓を含めると総数38基が検出されている。總体に出土遺物は少なく、供献の土器以外には副葬品として鉄器8点、ガラス玉2個がある。その中で意識的に折り曲げた鉄器があるのは注意されよう。なお、妙見古墳群はこの墳墓群と一部重複し、おもに横穴式石室を主体部におく後期群集墳である。

^(註15) 志波桑ノ本遺跡(40地点)では墳墓群と住居群とがあり、ここも布留式期の遺構があるという。この遺跡は外之隈遺跡の東方1.5kmにあるので、あるいは関連する遺跡ともみられる。

^(註16) 田島北遺跡は筑後川の南側平野部にあり、竪穴住居跡のほかに石棺墓・甕棺墓・方形周溝遺構が検出されている。布留式併行期のものがあるらしい。

(註17)

塚堂遺跡では塚堂古墳のすぐ横に集落があり、バイパス建設に伴って調査されたうちのA・B・C・E区から庄内式新～布留式期の竪穴住居跡・溝等が検出されている。

(註18)

生葉遺跡では布留式古段階相当の土器の出土する濠が三重に巡る古墳であり、主体部が見られないのが惜しまれる。周辺には竪穴住居跡や土壙も検出されている。

以上の遺跡において、土器が出土して古墳時代初頭期に属することが明確なものについてはそのほとんどに畿内・山陽～山陰等に由来する外来系の土器が見られる。

もう少し広い範囲で古墳初頭期の遺跡をみると、ここ外之隈遺跡の西北方5kmほどの所にある治部ノ上遺跡(29-A・B地点)・座禅寺遺跡(23地点)では主体部の不明な庄内新式～布留古式期の方形周溝墓が検出されている。神蔵古墳で発見された三角縁神獣鏡は甘木朝倉地方での正式な発掘調査における初めての出土例であったが、ここは外之隈遺跡の西方約10kmにあり、この一ツ木-小田台地上にはやはり三角縁神獣鏡が出土したという平塚大願寺遺跡のほかに小隈松山遺跡・上々浦遺跡(14地点)等の集落遺跡がある。その西方の小石原川をはさんだ対岸の台上には立野遺跡(11地点)・温水遺跡などが知られている。さらに西へ行って宝満川西岸のみくに丘陵には定型化以前の前方後円形墳墓である津古生掛古墳があり、そこまでだと外之隈遺跡からは約20kmの距離がある。

・古墳時代後期

朝倉山塊の西南麓と、筑後川をはさんで南方の水繩(耳納)山麓は福岡県下でも有数の群集墳地帯であり、特に水繩山麓は装飾古墳の多いことで著名である。初期の群集墳は5世紀後半代から築造が始まり、大半は6世紀代に盛行するが、甘木市柿原古墳群D地区(横断道57地点)のように7世紀中頃以降の築造にかかるものもある。いま近くの古墳・古墳群の一部を垣間みてみよう。

朝倉町大字山田・菱野の一帯では前方後円墳として剣塚古墳がある。上ノ宿古墳群は古く朝倉高校が関与したものと横断道関係(35-A地点)とで総数12基が調査されている。5世紀後半から6世紀末に及ぶものである。妙見古墳群(29-B地点)は古い墳墓群と一部重複するが、横穴式石室を主体部におくものは8基が調査されている。そのうちの8・17号墳のプランは外之隈V区1号墳のそれと近似する。原の東遺跡(29-A地点)では5世紀代と思われる古墳16基が円形周溝を巡らせて築かれていた。そのほかには山田古墳群や山ノ神古墳群などの群集墳がある。

恵蘇八幡宮古墳群は齊明天皇御陵と称されているが、おそらく円墳群であろう。

朝倉町大字須川では山後山古墳群・上須川古墳群や前方後円墳を含む宮地嶽古墳群などがあり、一部に方形プランの石室が見られることは注意してよい。

杷木町中町裏1号墳(39-B・C地点)と志波宝満宮古墳群とは一連の古墳群で、5世紀代の初期のものであろう。志波桑ノ本遺跡(40地点)でも初期の古墳群が検出されており、前者の古墳

群とあわせて時期的に注意される。

筑後川をはさんで南側の浮羽郡においては、吉井町における月岡古墳・塚堂古墳・日岡古墳のいずれも西に前方部を向けた3基の前方後円墳について触れるにとめよう。月岡古墳は丘長80~95mで三重の周濠を持つ。後円部の竪穴式石室内に長持型石棺を納め、棺内からは甲冑・馬具・鏡など多量の副葬品が出土している。きわめて畿内的色彩の強い古墳であり、「的臣」の奥津城ではないかといわれ、5世紀中頃の築造とみられている。塚堂古墳は墳丘長91mで二重の周濠を持つ。前方部・後円部双方に横穴式石室があり、桂甲や馬具・太刀・鏡などが出土している。5世紀中頃の築造とされる。日岡古墳は墳丘長74mで、後円部に築かれた胴張りのある横穴式石室は单室で石棚を持ち、壁面が彩色された装飾古墳である。壁画は4色で描かれ、幾何学文を主体とする。6世紀前半代と見られている。

註

1. 坂本太郎他校注『日本書紀 下』 日本古典文学体系68 岩波書店 1973
2. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—21—』 1991
3. 小田和利「建物群の立地とその意義」 註4所収
4. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—24—』 1992
5. これにちなんで中大兄皇子（天智天皇）が詠んだとされる歌がある。
朝倉や木の丸殿に我をれば名乗りしつつ行くは誰か子ぞ
6. 朝倉町史刊行委員会『朝倉町史』 1986
7. 天智天皇はここで次の歌を詠んだといわれ、これは『後撰集』から小倉百人一首に収められている。
秋の田のかりほの庵の苔をあらみわが衣手は露にぬれつつ
8. 内閣文庫の大倉喜太郎献納本である『古戦古城之図』における「上座郡志波村本陣山古城之図」に描かれた古道と現在の農道とは少しばかりズレがあるように見うけられる。そのためV区の西端部あたりに古道の一部が遺存するかもしれないと考え、トレンチを設定してみたが何ら検出されなかった。「上座郡志波村本陣山古城之図」の図が省略気味に描いてあるためか、または全く削平されてしまったかのいずれかであろう。
9. 北東に前方部の付く前方後円墳の可能性もないではない。
10. 朝倉町教育委員会『須川遺跡群』 朝倉町文化財調査報告書 第1集 1968
11. 福岡県立朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』 1969
12. 註11に同じ
甘木市史編さん委員会『甘木市史 上巻』 1983
甘木市史編さん委員会『甘木市史資料 考古編』 1984
13. 高倉洋彰「弥生時代小形倣製鏡について(承前)」 考古学雑誌70-3 1985
14. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—29—』 1994
15. 福岡県教育委員会が九州横断自動車道に関係して発掘調査を実施した。小池史哲氏教示。
16. 浮羽町教育委員会『田島北遺跡』 浮羽町文化財調査報告書 第6集 1991
17. 福岡県教育委員会『塚堂遺跡 I』
一般国道200号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 1983
福岡県教育委員会『塚堂遺跡 II』

一般国道200号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集 福岡県教育委員会『塚堂遺跡III』		1984
一般国道200号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集		1984
18. 吉井町教育委員会『生葉地区遺跡I』 吉井町文化財調査報告書 第5集		1990
19. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—32—』		1994
20. 甘木市教育委員会『神蔵古墳』 甘木市文化財調査報告 第3集		1978
21. 甘木市史編さん委員会『甘木市史 上巻』		1983
22. 甘木市教育委員会『小隈出口遺跡・小隈松山遺跡』 甘木市文化財調査報告 第18集		1987
23. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—1—』		1982
24. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—5—』		1984
25. 大刀洗町教育委員会『大刀洗町内遺跡群』 大刀洗町文化財調査報告書 第3集		1993
26. 小郡市教育委員会『津古生掛遺跡II』 (みくに野第二土地区画整理事業関係埋蔵文化財 調査報告—9—) 小郡市文化財調査報告書 第44集		1988
27. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—19—』		1990
28. 註11に同じ		
29. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—20—』		1991
30. 註11に同じ		
31. 福岡県教育委員会が九州横断自動車道に関して発掘調査を実施した。佐々木隆彦氏教示。		
32. 朝倉町教育委員会『県営宮野地区農地開発事業地区遺跡調査報告書(III)』 朝倉町文化財調査報告書 第4集		1974
33. 註11に同じ		
34. 註2に同じ		
35. 吉井町教育委員会『月の岡古墳』 吉井町文化財調査報告書 第3集		1986
吉井町教育委員会『月岡古墳—国指定重要文化財出土図録—』		1989
吉井町教育委員会『若宮古墳群I』 吉井町文化財調査報告書 第4集		1989
36. 吉井町教育委員会『若宮古墳群I』 吉井町文化財調査報告書 第4集		1989
吉井町教育委員会『若宮古墳群II』 吉井町文化財調査報告書 第6集		1990
37. 註36に同じ		

C. 朝倉高校による調査と出土遺物

昭和31（1956）年、福岡県立朝倉高校史学部はこの外之隈遺跡の調査を行っている。下に再掲した内容を読めばわかるように、緊急の応急調査であって遺構図を欠くなど不十分な点はあるものの、それにもまして、戦後10余年の文化財行政がまだあまり行き届いていない時点においてこのような記録が残され、かつ活字となって広く知られていることの貴重さは高く評価されねばならない。

この調査は当時朝倉高校の史学部顧問であった高山明氏が中心になって行われたものであり、文章も氏の筆による。

横断道関係の調査を行っていた昭和62（1987）年12月25日に、そのとき県立朝羽高校教頭であった高山明氏に現地へ御足労を願い、昭和31年当時の状況について伺ったところ、“1号墳の南側は小高くなっていた記憶がある”とのことであった。それは「1号石棺」か「2号石棺」が存したあたりなのである。

以下に『埋もれていた朝倉文化』より全文を引いておくが、この中でいう「4号無蓋土壙」は明らかに今回の調査における1号墳1号墓のことである。文中に記された各遺構の位置関係と、今回調査の結果とを照らし合わせてみると、方位等に若干のズレを感じる所があるものの第5図の如くに復原されるであろう。

なお、出土遺物は現在も朝倉高校郷土資料室に収蔵されているが、仿製内行花文鏡のみは所在不明となっている。鉄器については再実測を行ったのでそれを図示しておく（第3図）。

朝倉町外隈遺跡

所在地 朝倉郡朝倉町山田字外隈

調査期日 昭和31年7月18日、21日

恵蘇宿八幡宮の所で、杷木町への県道は筑後川に沿って大きくカーブをする。これを廻って間もなく、左手の山に登るダラダラ道を上ると、筑後川への次の突出台地上に出る。これが現地である。この道は現在の県道になる前の杷木への古道であったらしい。現地は恵蘇宿後方に連る、上ノ宿、金場、柳の墳群遺蹟の一部と見てよい。この台地頂上部が朝倉町、杷木町の町界線であり、町界線の西側が紀平氏の開墾地である。筑後川の流れを直下にして眺望絶佳の地である。下古毛の古賀氏より電話連絡で「開墾中に塚が出て、人骨がある。午前中でくずす」とのこと出かけるが

当時は午後は父兄会であり、実測も何も出来なかつた。

1号石棺

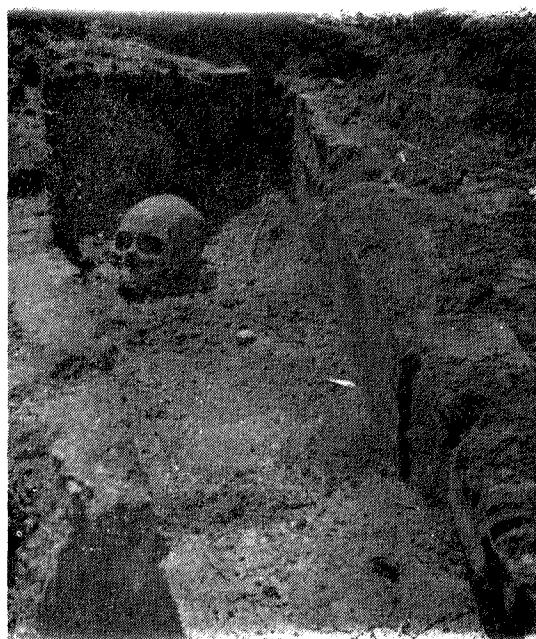
西端が破られ、棺内に頭蓋が出ていた。蓋石4枚で、軸は略東西、東枕になっている。長さ2m、巾45cmと40cm、床面に敷石あり。頭蓋は全面に朱附着し、略完全、やや小型で女性か（鑑定未了）。他に脛骨2本。敷石は枕の部分だけが少し上がっている。棺の造りは雑であるが、山頂のために排水よく保存されたのであろうか。棺の東南隅、頭蓋のそばに仿製内行花文鏡を副葬

仿製内行花文鏡 径8.6cm、わずかに外縁がそっており、縁厚4mm、径1.6cm、高さ7mmの円座鉢で、1.5cmの巾で外縁がある。その内部に
※2 10cm巾の櫛歯文帯があり、この文帯の中に二重線がある。その内部が径3.8cmの花文帯で六花文よりなる。全面に鏡を包んでいたと思われる布の繊維が附着しており、又、巾4mmの鉢孔にも鉢の残存物がつまつてこの折損部分が鏡表面に、その外縁を全く重ねて出土していた。この重なり方は偶然によるものとは考えられないほどぴったり一致していたので埋葬当时、人為的に行なったものと断定せざるを得ない。従って折損破片の裏面は鏡表面と密着していたので、裏面ではこの部分のみ布附着物はなく、鏡表面には密着の跡が残っている。定型の鏡を欠いて副葬するという慣習の現われとみるべきであろうか。鏡の質は悪く、全面に緑青をふいている。

2号石棺

※3

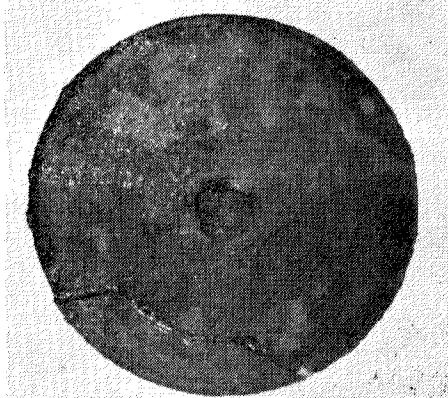
1号の南5.5cmの地点で、1号と平行に小型石棺があった。すでに破壊された後で規模不明。鉢を一本副葬。鉢は現存19.3cmで先端を欠く。



外隈石棺



石棺内出土の頭蓋



仿製内行花文鏡

現存6cmくらいの所で「へ」の字型にゆるく曲っている。刃部4cm程が「逆への字」に曲っている。巾約9mm, 刃部は扁平でノミ型になっている。曲り方からして鎌とした。

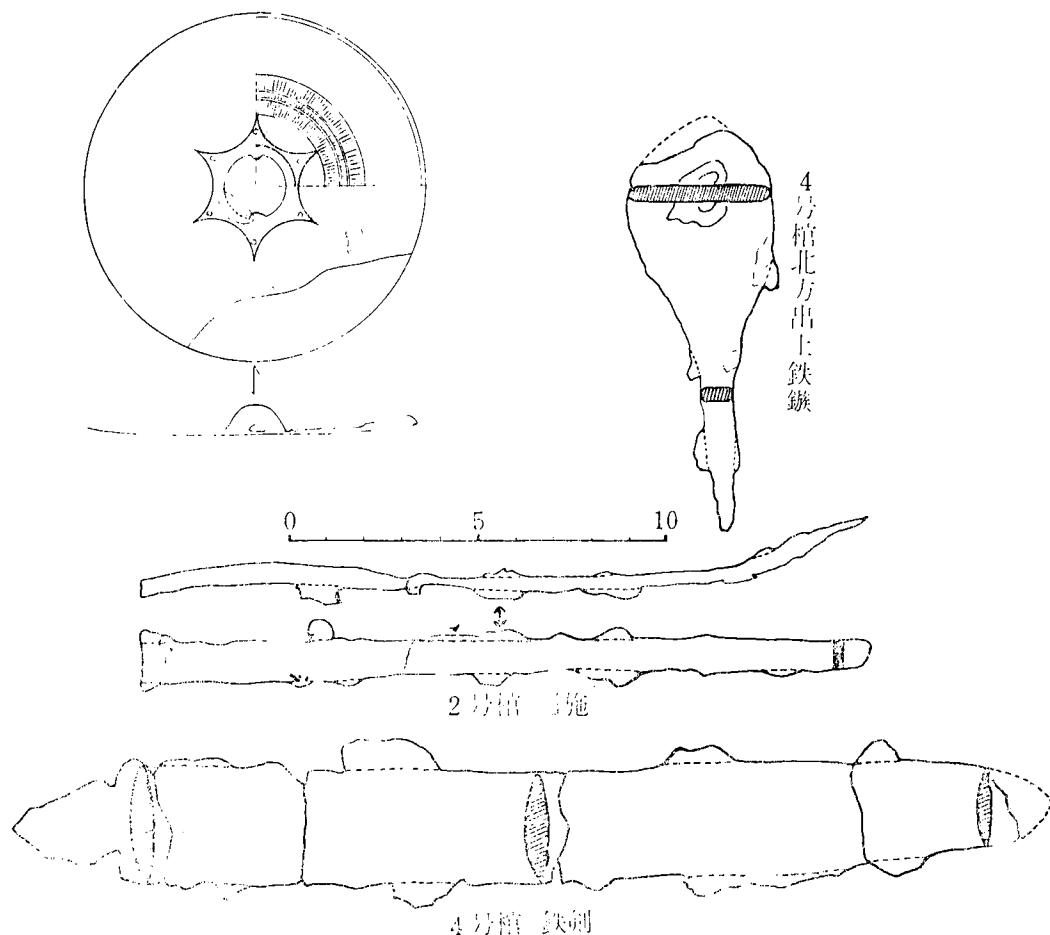
3号無蓋土壙

2号の下段より出土。土壙床面に朱附着、又剣と思われる小鉄片を出土。

4号無蓋土壙

1号石棺の北方15mの地点で、7月18日にその所在をみていたので、21日に調査。床面に朱が出るので、この線を追うと、巾50cm, 長さ1.1m以上の本棺が現われる。長さはこれ以上は町界線で他人所有地になるので不明。軸は東南から西北。棺は箱型で、床全面に朱。西端に小石が置かれていて、他は地山のミソ岩である。鉄劍一本が刃先を西方に向けて副葬してある。

鉄劍は5片に折れているが、刃先と茎の先端を欠き、現存長さ26.5cm, 内茎の長さ2.5cm, 刀巾3cm, 刀中央部厚さ7mmである。なお4号棺の北方2mの地点より鉄鎌一本出土。この鎌は広根平造の斧箭形式で、頭の部分を欠くが圭頭になるのであろう。現存長さ10.5cm, 刀最大巾3.9cm, 厚さ4mmの平造。



第1図 朝倉町外隈出土遺物

※1 古墳群の(古)字の脱字

※2 10mmまたは1cmの誤り。

※3 5.5mの誤り。

出土遺物（図版13, 第3図）—朝倉高校郷土資料室収蔵鉄器—

朝倉高校の郷土資料室には『外隈4号』のラベルを貼付した木箱があり、その中に昭和31年5月2日付け朝日新聞夕刊と、昭和31年6月14日付け西日本新聞にくるまれて茶色小封筒に入った鉄器があった。封筒の表に「外隈○号」と鉛筆書きがなされている。

3は4号無蓋土壙、すなわち今回調査の1号墳1号墓出土品であるのでその項において述べる。Aは2号石棺の鉢、Bは4号無蓋土壙の北方2m出土の鎌である。以上は上掲の『埋もれていた朝倉文化』に図示・説明されており、法量も記述どおりである。

Cは「外隈4号」の表書きの封筒に入っていた鉄器である。何の一部かよくわからないが、剣の茎か鉢であろうか。現存長4.8cm。4号無蓋土壙は鉄剣以外の鉄器は知られていないので誤記入であろう。

D・Eは、封筒を切り開いてその内面に出土状態を示す略図が記され、本来の表には何ら注記のない封筒紙に包まれていた鉄器である。出土状態の略図には、「枕」の字の下方に鏡かと思われる円が描かれ、その下方に一部円環に覆われているらしい鉄器と「銀環」の字と図がある。円の表現が鏡であるならば「1号石棺」がその候補になるが、上掲の文章には鏡と人骨以外の出土遺物の記述はない。全く関係のない遺跡の出土品が紛れ込んでいるのかも知れないが、封筒は他の「外隈○号」のそれと同じである。ともあれ参考までに示しておく。Dは刀子で全長16.2cm、身部長は11.1cm。身はその中央付近と先端部で歪んでおり、刃はかなり研ぎ減りしている。Eは片丸造の鎌で全長15cm。

なお、仿製内行花文鏡については前述のとおり所在不明であるが、この類の鏡は従前では5世紀代のものとして捉えられていた。しかしもっと遡る可能性があると考えられる。

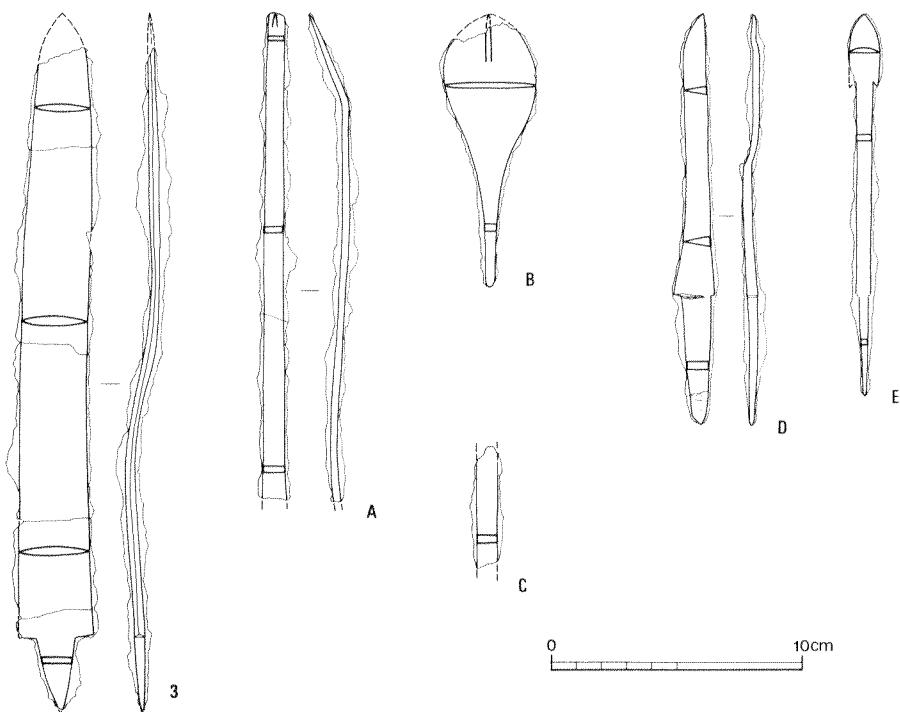
註

1 福岡県立朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化—甘木・朝倉地方の発掘調査報告集録—』 1969
P132~134より再録

なお、『朝倉町史』の「第二編 考古—朝倉町の弥生時代—」（高山明氏執筆 1986）の中にも上掲の『埋もれていた朝倉文化』より外隈遺跡が抄録してある。

2 引用文の説明にあるように、1号石棺の内行花文鏡が「打割鏡」または「破碎鏡」として出土したという事実は重要である。

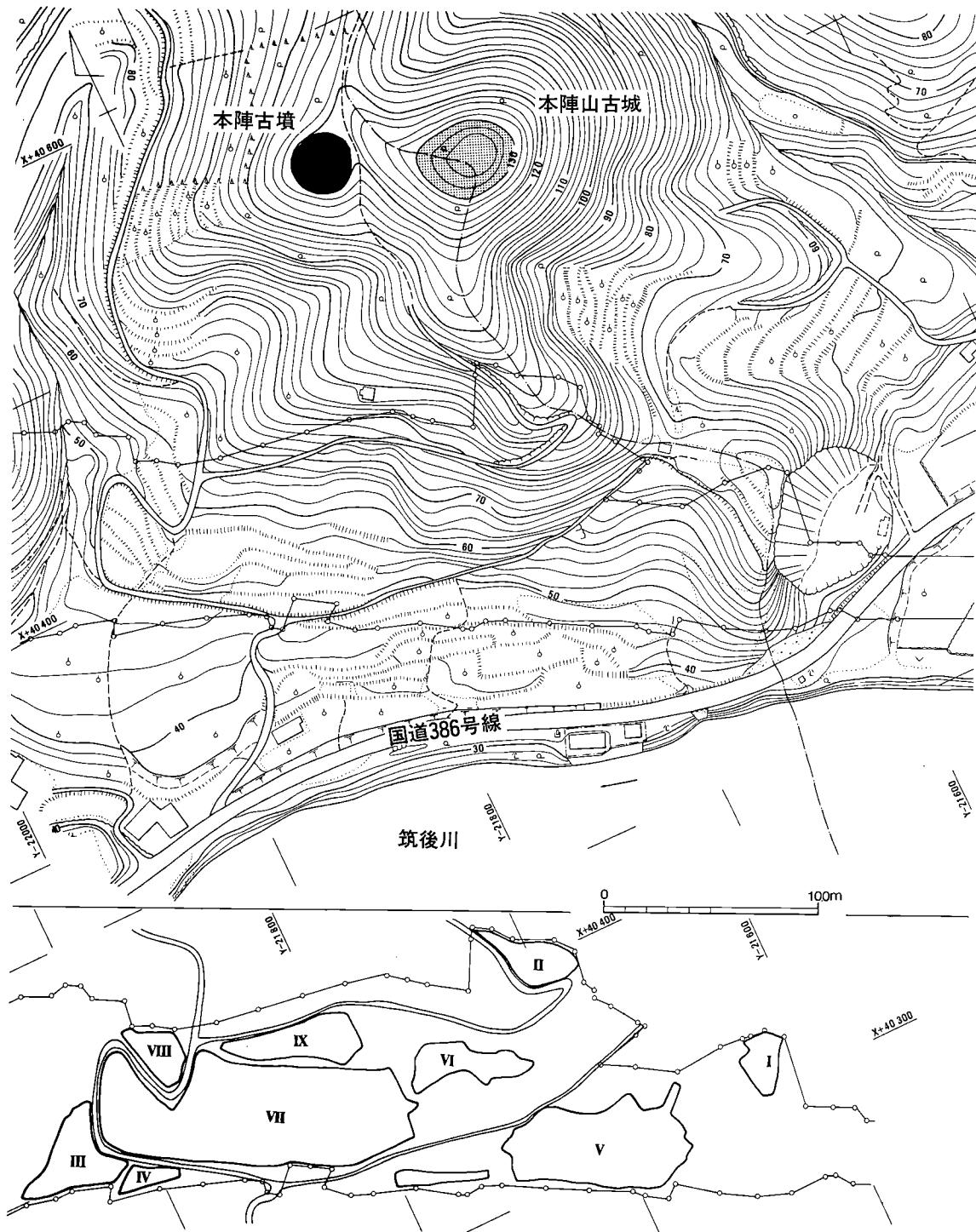
小山田宏一「破碎鏡と鏡背重視の鏡」 『弥生文化博物館研究報告 第1集』 1992
森岡秀人「近畿地方における銅鏡の受容」 季刊考古学43 1993



第3図 外之隈遺跡の朝倉高校調査時出土鉄器実測図 (1/3)



photo. 2 篠後川対岸からI区をのぞむ



第4図 外之隈遺跡地形図 (1/3,000)

III 調査の内容

A. 概要

今回報告するのは、外之隈遺跡の墳墓編ということで、I区～IX区と区分けしたうちのI・II区の全部と、V区の古墳・近世墓である。

I・II区には墳墓と直接関係のない古代～中世の土壙があり、また僅かの土器・石器等が検出されたが、それはここにおいて報告する。V区には古墳・近世墓以外に斜面を造成して當まれた竪穴住居跡群その他があったが、それについては他の区とあわせて次回の報告に譲ることとする。今回報告の各区の概要は下記のとおりである。

なお、I・II区における墳墓については、不定形の「墳丘墓」または「台状墓」と称すべきものであり、定型化した古墳の出現と同時かまたは一步先んじた時期の所産と考えている。ここで名称としては適切でないかもしれないが、各々1号墳・2号墳としておき、必要に応じて墳丘墓の言葉をも使うこととする。

〈I区〉

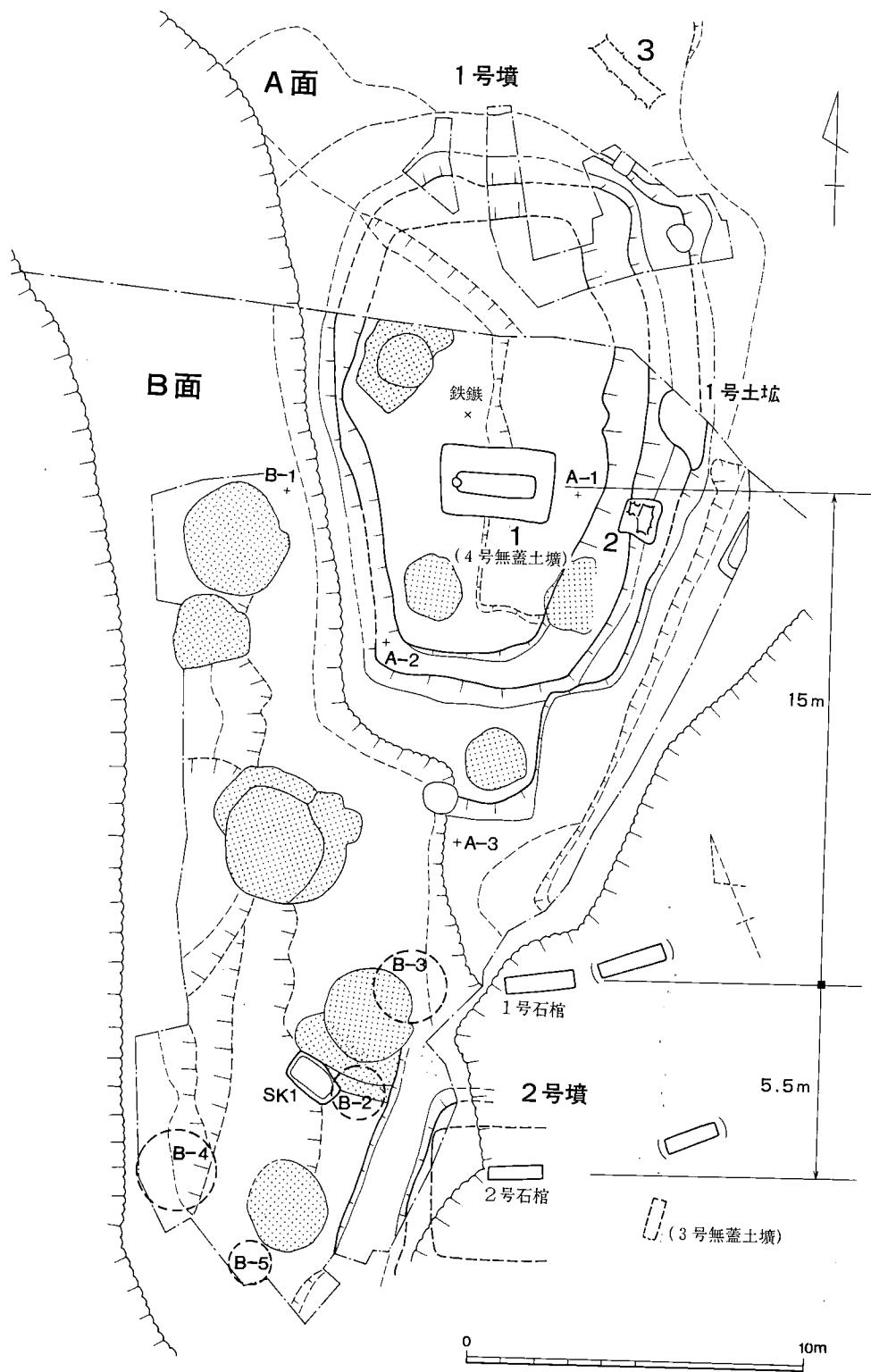
- ・ 墳丘墓 …… 2基 (1・2号墳)
- ・ 土壙 …… 2基 (1号土壙・SK1)
出土遺物 …… 画文帶神獸鏡片・勾玉・古式土師器・糸切り底土師器・石斧・人骨
〔過去に内行花文（連弧文）鏡・鉄剣・鉄鎌・鉄鉈〕

〈II区〉

- ・ 墳丘墓 …… 1基 (1号墳) <ただし調査区外にもう1基>
- ・ 土壙 …… 2基 (焼土壙あり)
出土遺物 …… 重圈連弧文鏡片・飛禽鏡・鐵器（鉈・刀子・素環頭？）・土師器・人骨

〈V区〉

- ・ 古墳 …… 1基 (1号墳)
- ・ 近世墓 …… 3基 (1～3号近世墓)
出土遺物 …… 須恵器・土師器・鐵鎌・磁器・陶器・漆器椀・砥石・鉄釘・数珠玉
寛永通宝等



第5図 外之隈遺跡I区遺物出土位置と遺構配置推定図 (1/200)

B. I 区の調査

(巻頭カラー 1・2・3, 図版 1~13, 第 4~6 図)

ここは、標高135.88mの本陣山から南の筑後川へと延びた丘陵がII区を経て急激に下り、一度標高70mほどまでおちて掘切状の凹地を形成(江戸時代に使われていた古道での峠にあたる)したあと、再び高くなつて小山風の地形をなす、その頂部を中心とする。標高は最高所で77m強を測る。この稜線上には朝倉町と杷木町との境界線がはしっていて、I区の東側、杷木町側はすぐ下を走る国道386線に向かって大きく崩れさっていた。

この地点は段々畑に開墾されて、もとは柿が植えてあった。調査区内でもその植栽用あるいは肥料用の大きな穴がいくつか‘検出’されている。

段々畑にした時の平坦面を、最も高い部分から便宜的にA面、B面、C面とし、A面とB面はその表土の大半を剥ぎ、C面には2箇所にトレンチを設定した。

A面では1号墳丘墓が検出されたが、その北側の約3分の1は用地外となっていたため地権者の承諾を得て、柿の木を避けつつ不規則ながらもトレンチを入れ、それによっておよその規模を把握することができたのは幸いであった。

B面の南端は朝倉高校が調査した時の中心地にあたるらしく、石棺の棺材が散乱していた。方形になろうかという削出しのごく一部が検出されたのでそれを2号墳とした。

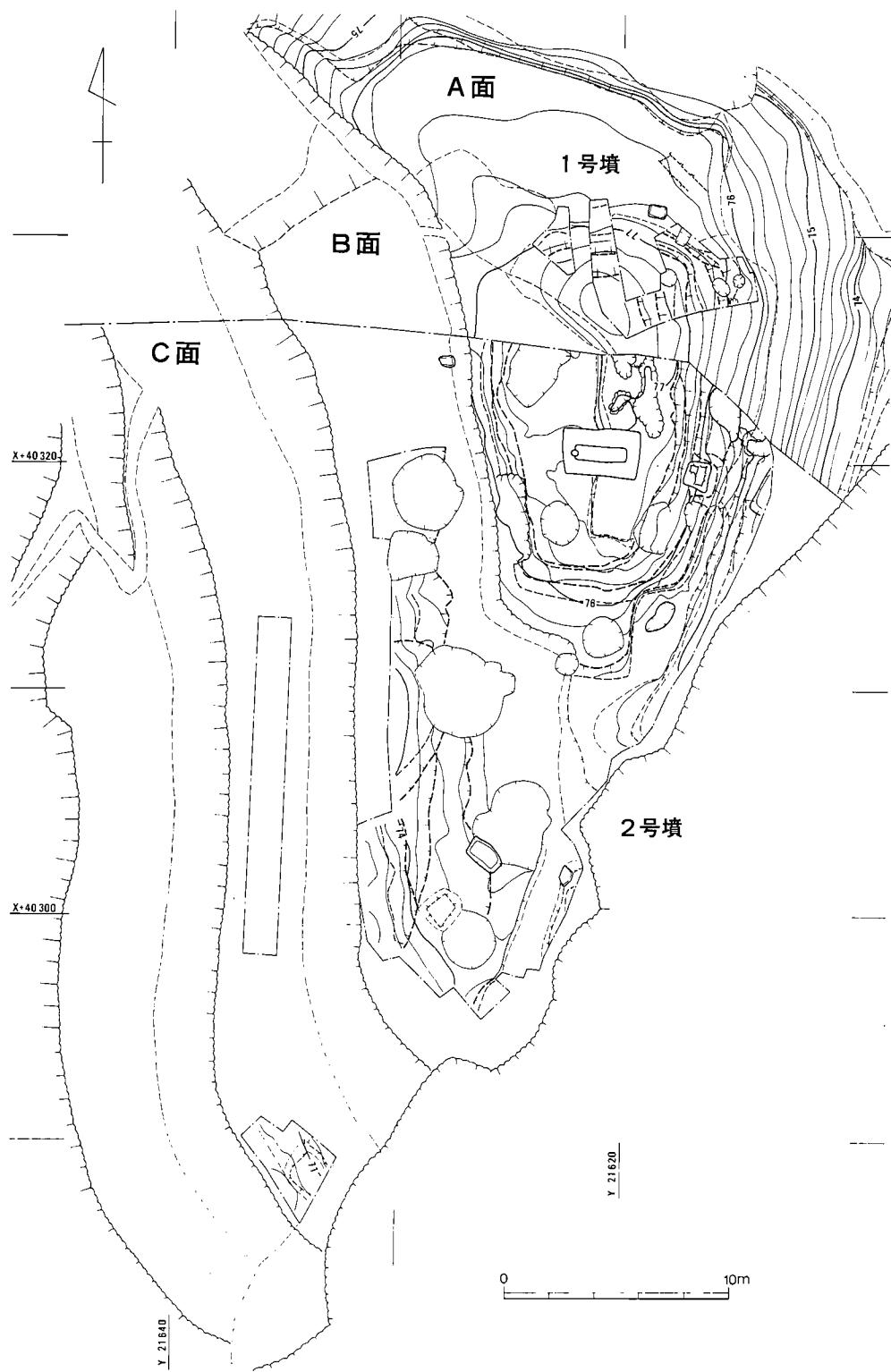
A・B面からは表土下および地山面、または整地層において、原位置をとどめないながらも土器片がいくらか出土している。第5図中に示すA-1~3、B-1~5がその出土した場所であるが、A-2とB-4・5はそれぞれの面の整地層にあたる。A-1~3とB-1はその位置からみて本来は1号墳に伴っていた可能性を考えている。B-2~5は2号墳に関連するものであろう。土器等の所属のはっきりしない遺物については後述する。

地山は緑泥片岩を基盤とする岩盤であり、それはB面の西端から急傾斜となって下り、C面のトレンチでは地山の傾斜面と柿植栽用の土壙が見られたのみであった。

1. 1号墳 (巻頭カラー 1・2, 図版 2~8, 第 7・8 図)

主軸を略南北にとり、南側に張出し部を持つ長台形状の墳丘墓である。張出し部と主墳丘部とのコーナーは、東側はL字形に削り出されるが、西側部分はそれが見られない。しかし、東側下方からの見栄えを意識した墳丘墓であったと捉えれば「前方後方形墳丘墓」と称してよいであろう。

中心主体として1号墓があり、その東側の斜面に2号墓が検出された。用地外の北側墳裾と思われる所に片岩の板石が転がっており、ボーリング棒にて周辺を検索したところではそのすぐ近くに石棺(3号墓)がある。なお、2号墓の北側でこの墳丘墓を切って1号土壙があり、



第6図 外之隈遺跡I区地形図 (1/300)

その上面には中世の土師器があった。

1号墓の中心部で、X=40320.30m、Y=-21621.00mの座標値をとる。

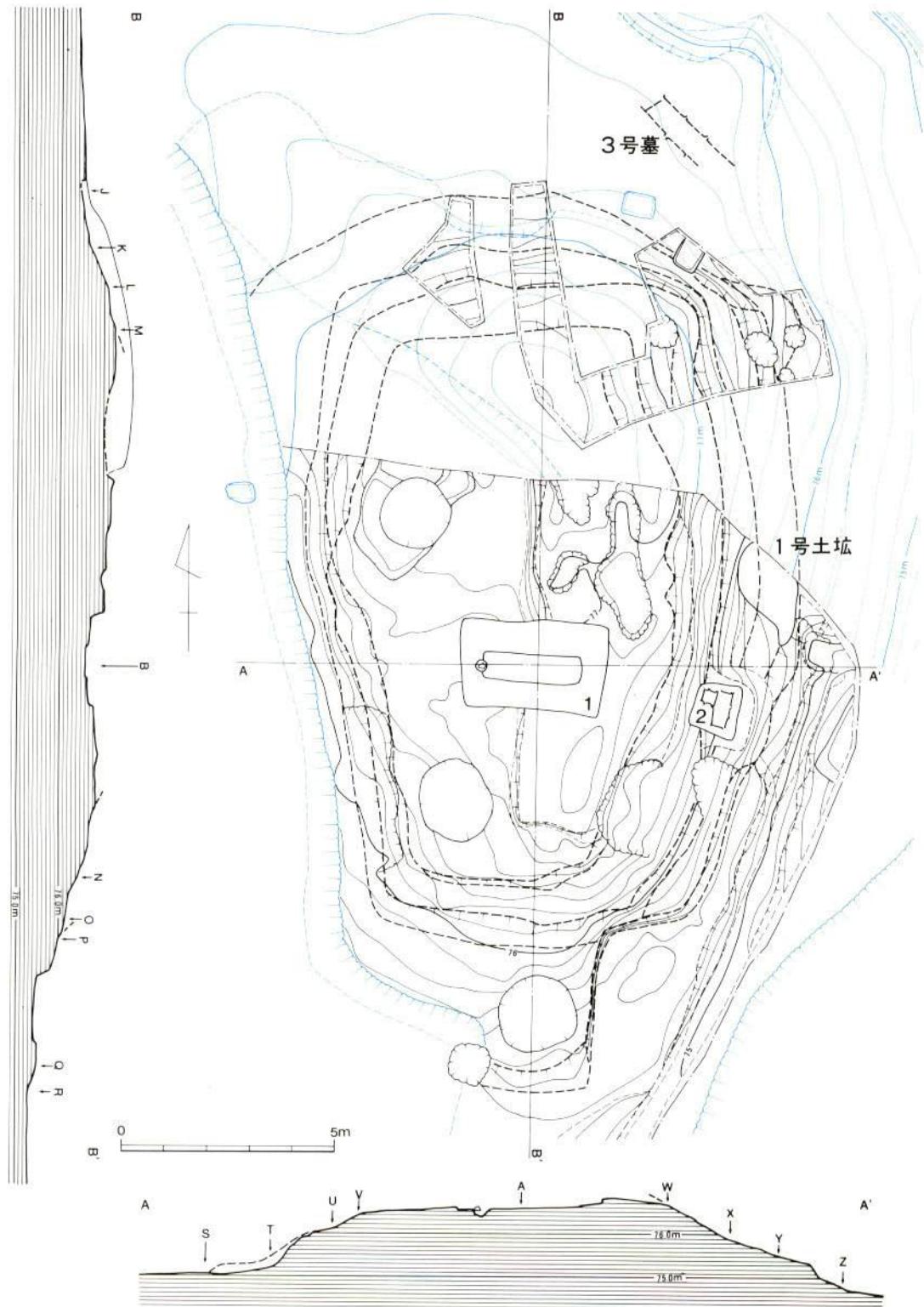
1号墓の残存状況からすると、墳丘の上半部はかなり削平されているものと考えられた。しかし第7図の平面図、および第8図の調査区北端の頂部から東斜面にかけての土層図に見る削出しの段の下端が当初の様相を表しているとすれば、墳丘の削平は頂部のみであったと捉えられる。頂部においてはいくらかの盛土を行い、それ以外は地山整形で高さを現出していたものであろう。

第7図を参照しつつ、地山を整形した変換線によりその規模を見てみるが、北側の用地外に設けたトレンチの調査範囲があまり広くないために、一応図示したような復原ラインとしたものの、特に北西コーナーなどはっきりしない所もある。また前述のように、立地上からは東側下方よりの‘見た目’がかなり意識され、その部分については数段の削り出しが行われているとみられるので、主軸をはさんで対称的な形態と数値にはならない。

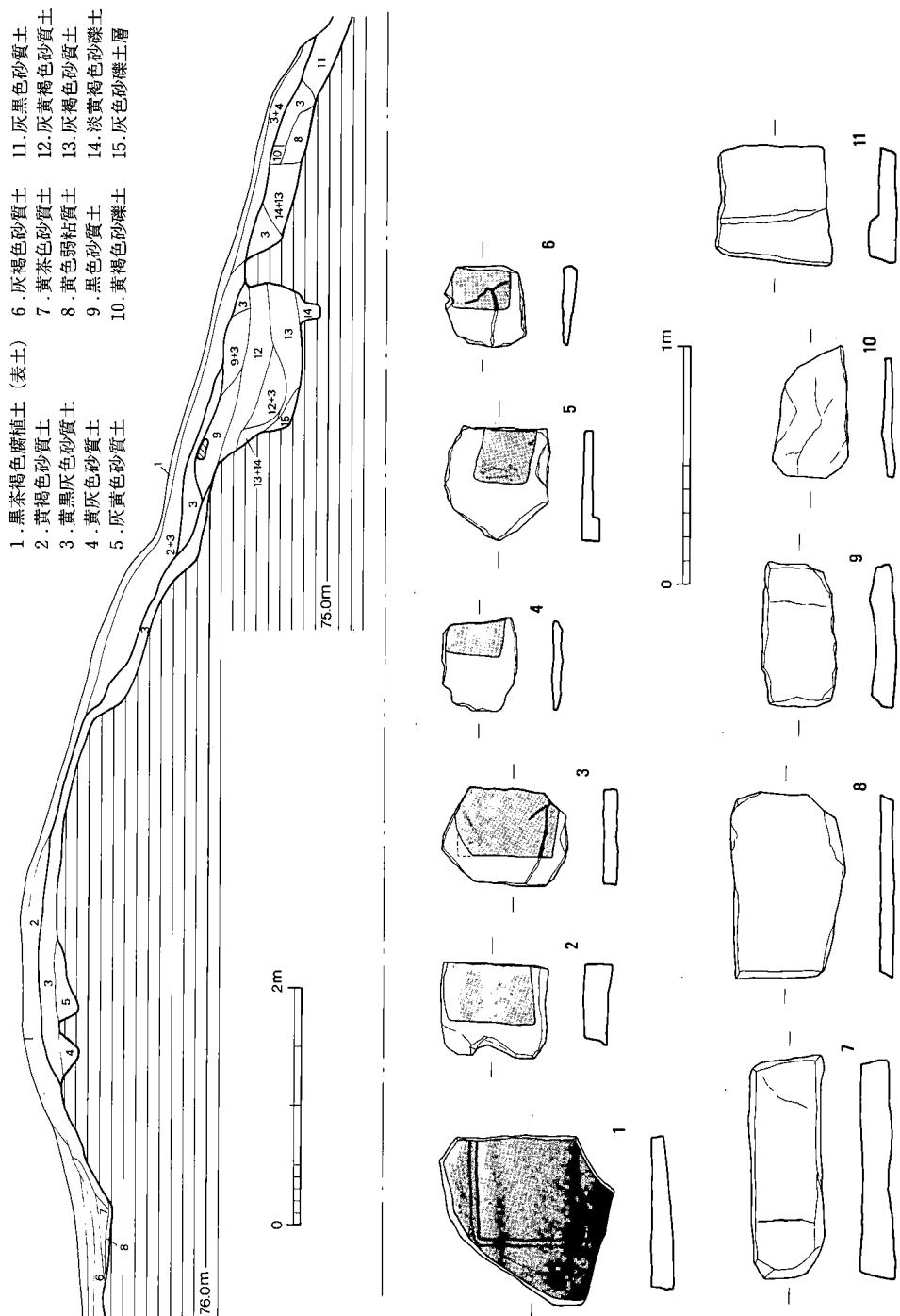
「前方部」は長さ（P-R間）が3.5mで、南端部幅は2.6mが残っている。この中央には柿植栽用の直径約1.8mの穴が掘り込まれている。



Photo. 3 I区作業風景・ふりむくひと



第7図 I区1号墳測量図 (1/150)



第8図 I区1号墳土層図(1/60);棺材実測図(1/30)

「後方部（主墳丘部）」は、平面的にはやや中膨らみの羽子板状の形態に復原されるよう、北端部はJ点を墳裾に指定すると主軸長（J-P間）17.5mを測る。台状部上面はかなり削平されているであろうが、現状でM-N間12.8mである。幅は、1号墓を横断するあたりのV-W間が7.5m、U-X間が9.5m、張出し部の付く南端部（P点）で7.5m、北端部はややいびつながら12~13mくらいに復原されよう。

「前方後方形」としては裾で測って全長21mになり、「前方部」は長さ3.5m、幅2.6m以上、「後方部」は西側が削平されているが長さ17.5m、幅7.5~13mとなる。この復原による面積は200m²くらいになる。

この墳丘墓に伴う周溝は確認できなかったが、巡っていなかった可能性が強い。

なお、朝倉高校調査時には1号墓の北2mにて鉄鏃（第3図B）が出土したとされているので、その部分を精査したが墓壙すら検出されなかった。もしそこに別の主体部があったとすれば、全て削平されていることになるが、もともと埋置されておらず、そこに鉄鏃が出土したのは何か別の理由によるものと考えたい。ただ1号墓の北東部には浅い攪乱部分がいくつか見られた。またその北西と南西には直径1.5~1.8mの柿穴があった。

1号墳に伴うとみられる土器は第14図4~6である。

1号墓（巻頭カラー2・3、図版4・6、第9図）

朝倉高校が調査した時の「4号無蓋土壙」がこれである。先に掲げた文章には、「巾50cm、長さ1.1m以上の本棺が現われる。長さはこれ以上は町界線で他人所有地になるので不明。……床全面に朱。西端に小石が置かれていて……」とあって、西小口部に石があることが符合とともに、そこから約1mまでは床面の赤色顔料が薄くやや色あせて拡散していたこと、そして掘り形もそこで段がついて西側の方が低くなっていることなどは朝倉高校の調査による結果である。30余年の歳月を経て全貌が明らかになった主体部である。

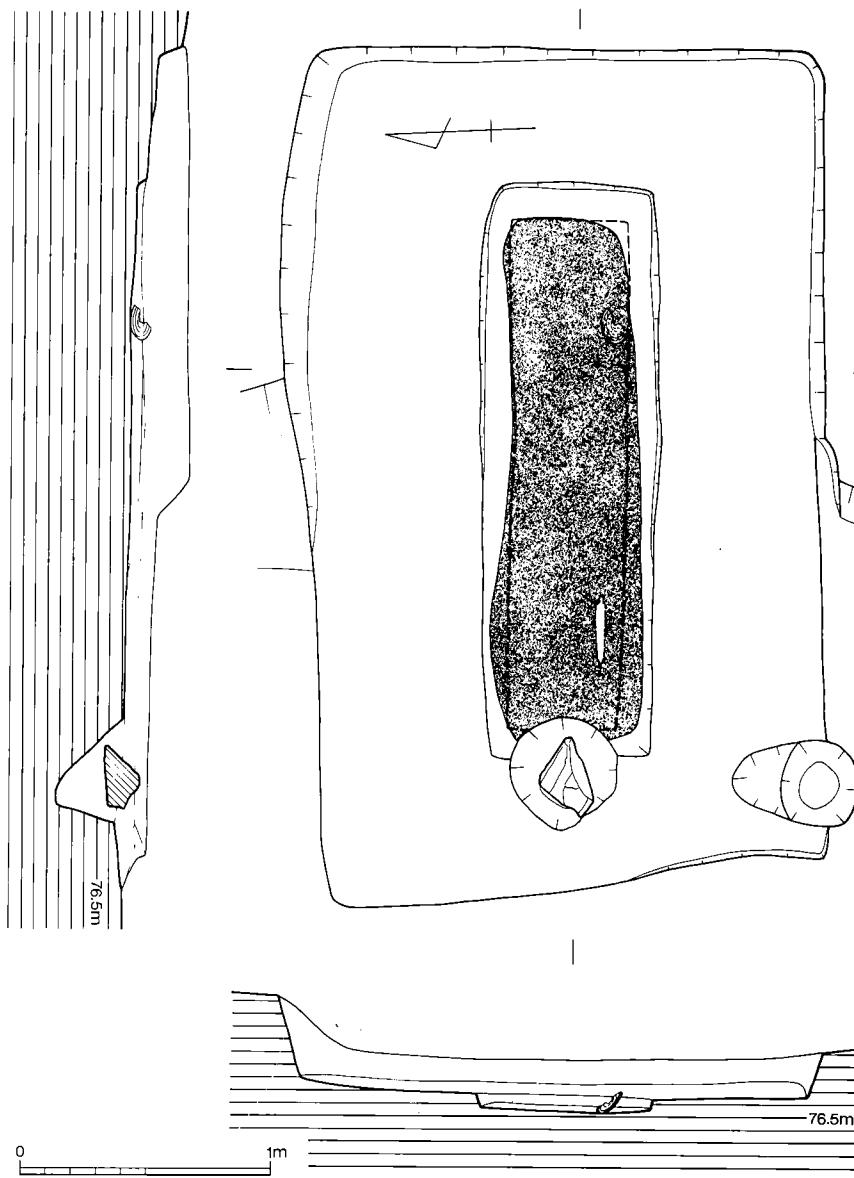
掘り形は「後方部」の中心より南に偏した所にあるが、「前方部」を含めて見れば主軸長のはば中央にあると言ってよい。南北2.0m、東西3.17~3.35mの長方形プランをなす。西端部は削平が著しく壁面はほとんど遺存しない。

棺は掘り形の中央に、主軸をN-93°-Eのほぼ東西にとって埋置された箱形木棺である。床面が、頭位と思われる東小口付近がやや高いもののほぼ水平であり、側板や小口板が突出していないので箱形の木棺と判断した。棺の内法は、赤色顔料の範囲等の痕跡から東小口幅46cm、西小口幅43cm、長さ201cmを測る。棺の内法面より外に8~12cmの空間をおいて黄灰褐色砂礫土の裏込土となるが、この間が棺材の厚さなのであろう。

赤色顔料は最も残りのいい所で2cmほどの厚さがあった。赤色顔料の分析は本書中のIV-Bにおいてなされているが、多くのベンガラのほかにごく少量の朱が含まれていた。

西小口部は安山岩と思われる石の入った直径42cmの穴に切られている。この石が何に使用されたものかわからない。

棺内の東小口部より約40cmの所で、鏡背を内側に向けて、南側の側板に立てかけた状態にて画文帶神獸鏡片が出土した。当初のままかどうかわからないが、約40°の角度で立てかけてあった。鏡には布痕や木質の付着は見られないので布に包んだり箱に入れることなく、むき出しの



第9図 I区1号墳1号墓実測図 (1/30)

まま副葬されていた可能性が高い。また、この鏡の北西10cmの所には勾玉が孔のある頭を北に向けて出土した。

なお、朝倉高校が調査した時に「鉄剣一本が刃先を西方に向けて副葬して」あったが、その位置が棺の南北いずれの側なのかわからなかった。図中には推測の位置を示している。

出土遺物

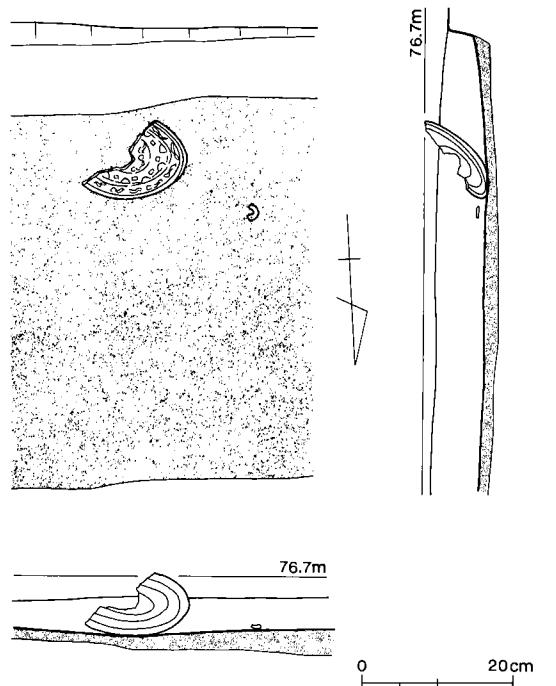
(巻頭カラー3, 図版9~13, 第3・11図)

画文帶神獸鏡 (巻頭カラー3, 図版9・10・11, 第11図1) 平縁の画文帶環状乳神獸鏡の約半分の破片である。緑鏽が著しく、文様の不鮮明な所も多々あるが、残りの良い部分は漆黒色を呈し、質はきわめて良い。鏡面の方が鏡背よりも鏽が著しいように見受けられるが、その鏡面に擦過痕は見られない。鏡背の黒光りする

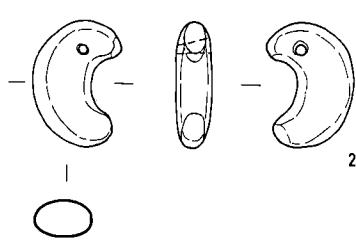
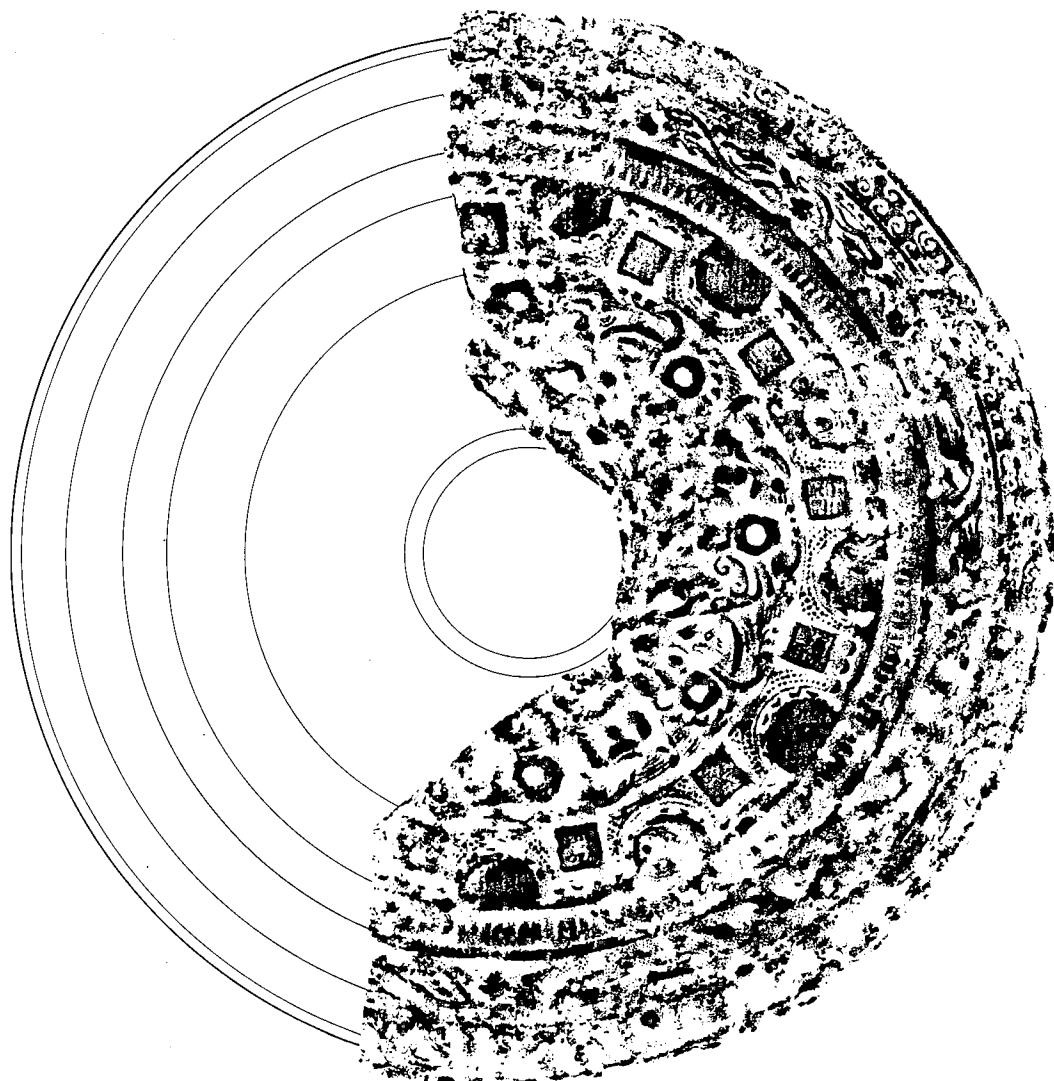
部分は手ズレによるものかどうかはわからないが摩耗したところがある。破断面にも緑鏽がふいており、はじめから鏡片として副葬されたものである。破断面は割れたままの状態で研磨された様子はない。中国は後漢の後半以降に作られて船載された鏡である。径は13.8cm、縁厚0.37cm、最も薄い部分の厚さは0.17cm、鏡面の反りは0.4cm。以下は鏡背文様について説明する。

内区は、鉢は欠くが、半球式の円鉢であったろう。鉢座は円圏のごく一部が見えており、有節重弧文圏座と思われる。主文様は、半肉彫りの神獸像で、正面を向いて座った一神をのせて左手に一獸があり、その獸形の肩と腰の部分が環状乳になったものが一セットとして、鉢のまわりに四神四獸が環繞式に配されたものである。破片中では二神と二獸に、一獸の一部が見えている。環状乳は8個であり、破片中に5個が見える。神像の一体は左前の服を着ており、その頭に何をかぶっているかはよくわからないが一部に髪らしきものが見える。その横には脇侍が立っている。他の一体は服などほとんどわからない。獸像は巨をはみえ、右を向くが、その右の肩部環状乳の上にも小獸の配されたものがある。

主文帶の外には粟粒文を地文とする上に半円方格帯がある。残存破片中に半円が7個、方格が8個見えるが、本来はともに12個であろう。方格内には区画なしで四字ずつの銘文があり、



第10図 I 区 1号墓鏡・勾玉出土状態実測図 (1/10)



第11図 I区1号墓出土鏡拓影・勾玉実測図(1/1)

残存8個のうち6個は文字がわかるが、潰れたところもあって読みとることは至難である。そんな中でまず間違いないと思われるものに「與(其)師命長」があり、そのほかは「□□君長?」「日□五?□」「天日□三」「樂周?□□」「□師□□」のように見てとったが、違うところもある。脱字や同じ文字の繰り返しもあるらしい。直径1cmの半円帯上面は無文である。この半円帯の斜面部分と半円帯間に外向の小半円帯が配される。

内区と外区の境は斜面となってそこに太めの櫛歯文が配され、上縁は幅1.5mmほどの突線圏帶となる。

外区は、内区より一段高くなり、まず左向きの飛禽走獸の画文帯があるが、鎌が膨れ上がっていて飛禽・飛龍がわかる程度である。これの外に外向の小半円帯があるが、それは半円方格帯の所のそれよりも小さい半円である。縁は渦文あるいは渦雲文・波頭文・連草文などと呼ばれる文様帯となった平縁である。

勾玉(図版9, 第11図2) やや硬質の蛇紋岩製の小さな製品である。淡い灰青色を呈し、3箇所に黒褐色の斑点がある。頭部に細い穿孔があるがそれは片方からなされている。長さ16.3mm、幅7.8mm、厚さ4.7mmで、孔径は1.2~1.9mm、重さ1.2g。

鉄器(図版9, 第3図3) 朝倉高校が調査した時に出土していた剣である。説明はII-Cに引いた文章にもあるが、現存長26.4cmで、復原長は27.8cmほどになろう。茎は長さ2.8cmと短く、尻は尖っている。闊幅3cm。側面で見ると湾曲している。

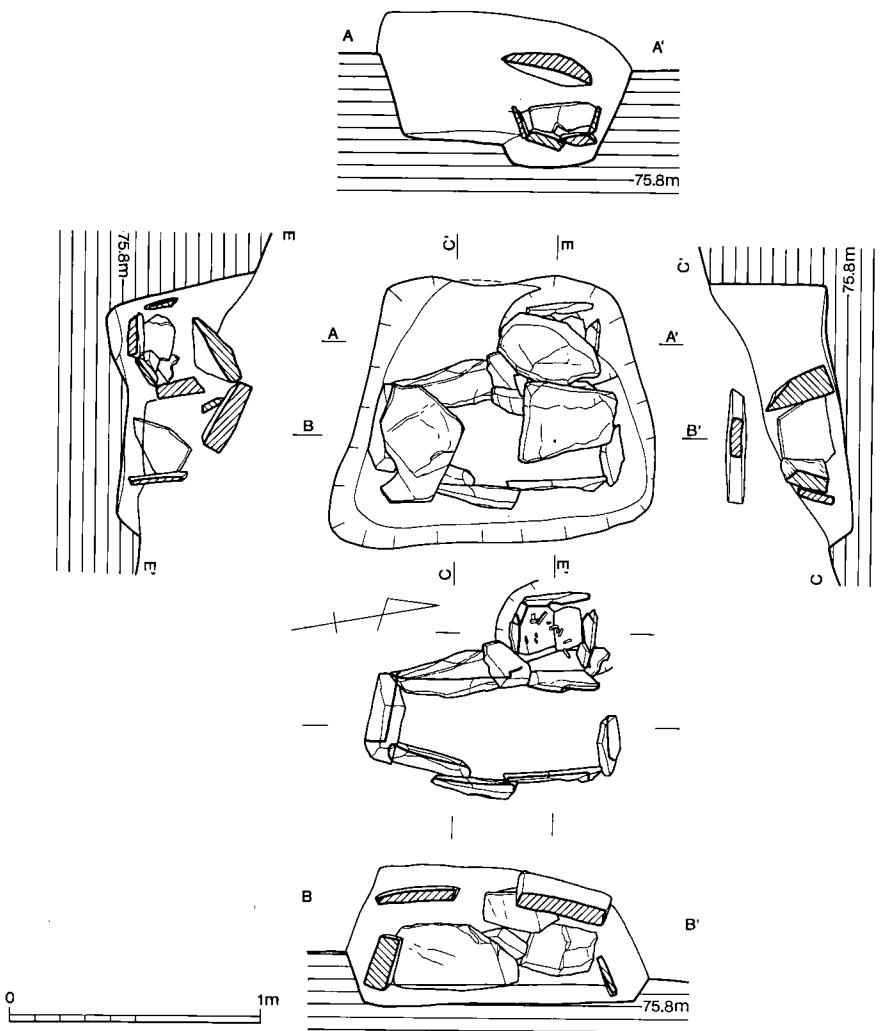
2号墓(図版7, 第12図)

1号墓の中心から東4.5mの所にある石棺墓である。削り出された墳丘墓斜面を掘削して平坦面を造り、排土は東側に置いてテラスとしている。南北0.9~1.3m、東西1.05mの台形プランの掘り形内の東寄りに小石棺があり、その北西部には側板を利用しての副室が付属する。ともに凝灰岩質の片岩を使用している。

小石棺はN-10°-Eの主軸を持ち、南小口幅26cm、北小口幅33cm、中央部幅40cm、長さ86cmを測る中膨らみのプランである。小口石は各々1枚だが、北側のそれは小さくて幅いっぱいに及んでいない。側石は東が3枚、西が2枚である。床面に敷石等はない。蓋石は中央部を除いた2枚が架かっていたが、北側のそれは東へ低く傾き棺を覆いきっていない。

副室は小石棺の北西側石を使い、南北25cm、東西30cmの矩形の小部屋として造られている。1枚の蓋石が北側に低く傾いて架けられていた。床面は偏平石3枚を敷き、その上には小人骨片がばらばらになって入っていた。この人骨は焼けたような痕跡こそなかったが、集骨して再埋置されたものであるように思えた。

小石棺内からの出土遺物はなかったが、この周辺から12世紀代の土師器が採集されている。小石棺および副室の蓋石の架かり方が整然としていたことなどを見ると、あるいは副室



第12図 I区1号墳2号墓実測図 (1/30)

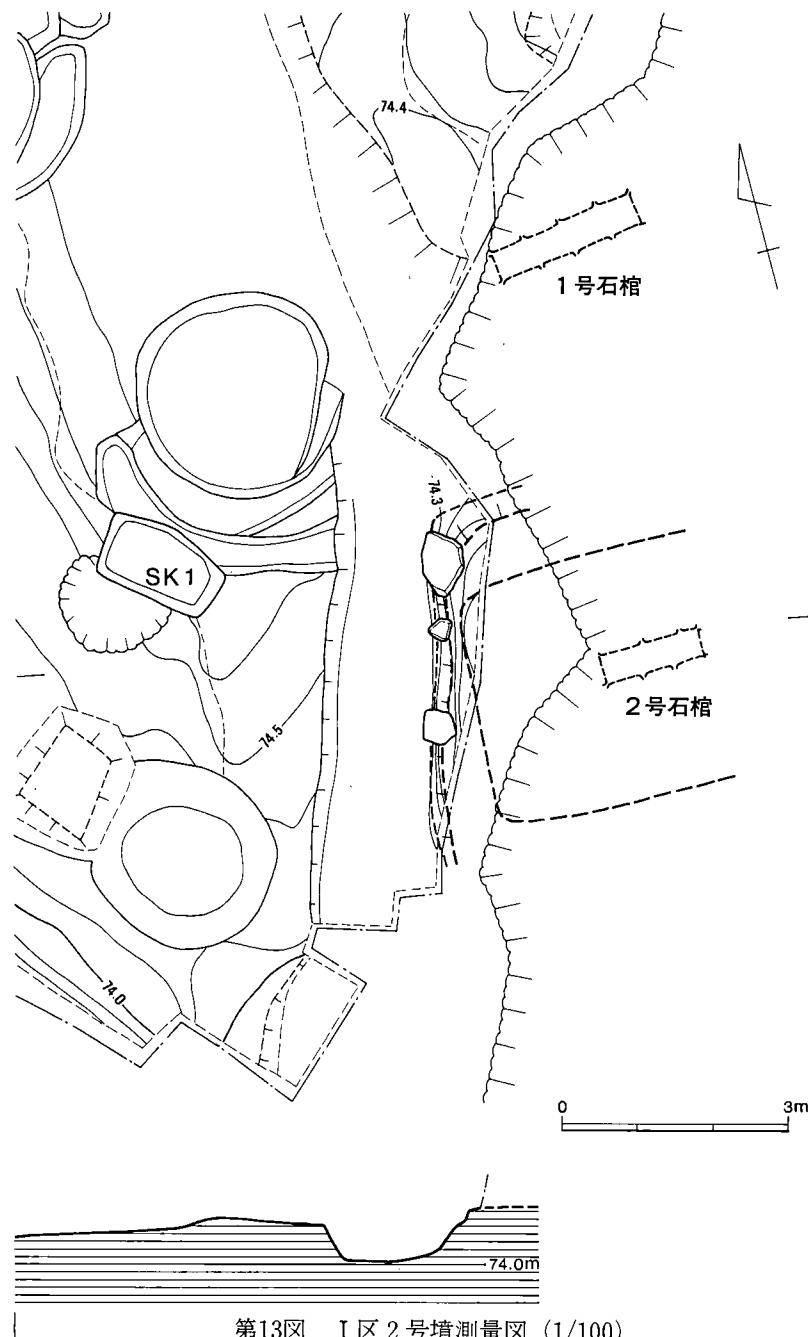
の人骨片はこの時期に関連あるのかも知れない。

3号墓（第7図）

1号墓の北方やや東寄り11mほどの所に、平面が約1×1.5mの長方形をした安山岩偏平板石が転がっていた。そこでその周辺をボーリング棒で探索してみたところ、その北東約2mの所で、主軸を北西—南東にとる石棺墓が埋もれているらしいことがわかった。地形的にみて、この石棺墓が別の墳丘墓の主体部であるとは考えにくいので、これを3号墓として1号墳の墳裾付近に埋置されたものとしておく。当然ながらその実態については不明である。

2. 2号墳 (図版4, 第5・6・13図)

1号墳の前方部先端から7mほど南側の所に、南北方向よりやや西にふれて南下する溝状の、



多分に道として掘削された窪みがあった。この東側斜面には安山岩板石が散乱していたが、そのさらに東側には溝状の窪みとは方向が少しずれて、南北方向に一辺を持ち、おそらく方形に巡るであろう削り出しの一部が検出された。遺存度のあまりよくない削り出しであり、またこの東側はあと少しで崖線となっていて危険性もあったためごく一部しか知り得ないが、これを2号墳とする。

高さ20cm程しか残っていない削り出しは南北約1m、東西約0.3mがみえるのみである。

この2号墳の周辺について、朝倉高校調査時の記録に示された数値・方位（II-C参照）から復原すると第5図のようになり、「2号石棺」がこの2号墳の主体部であった可能性がでてくる。しかし、そうすると鏡の出土した「1号石棺」は1・2号墳の間にあって単独墓の形状を示すこととなる。朝倉高校調査時の方角の捉え方が、例えば「4号無蓋土壙（1号墳1号墓）」の「軸は東南から北西」と記述されているけれども実際はほぼ東西方向であるので、現地調査の時の方角を実際よりも西寄りに認識していたと思われる。第5図においてはそれを括弧付きで示したが、そうなると位置的にみて「1号石棺」を主体部とする別の墳丘墓がもう一基あつた可能性もある。いまとなってはいずれとも決し難い。

1号石棺をも含めて、2号墳に伴っていたと思われる土器は第14図7～18である。

なお、2号石棺出土の鉈は第3図に示した。また1号石棺で検出された人骨は成年後半期の女性であるとの鑑定結果を得た（IV-A参照）。

● I区墳丘墓に関連する土器（図版12・13、第14図4～18）

4～6は1号墳、7～18は2号墳に伴う可能性の強いものである。

4は1号墓の東側表土中より出土（A-1）の甕の口縁部小片である。少し強引に復原図示した。胎土中に角閃石・金雲母・長石粒を含み、黄茶褐色を呈する。内面下半はミガキ風のナデを施す。復原口径16.1cm。

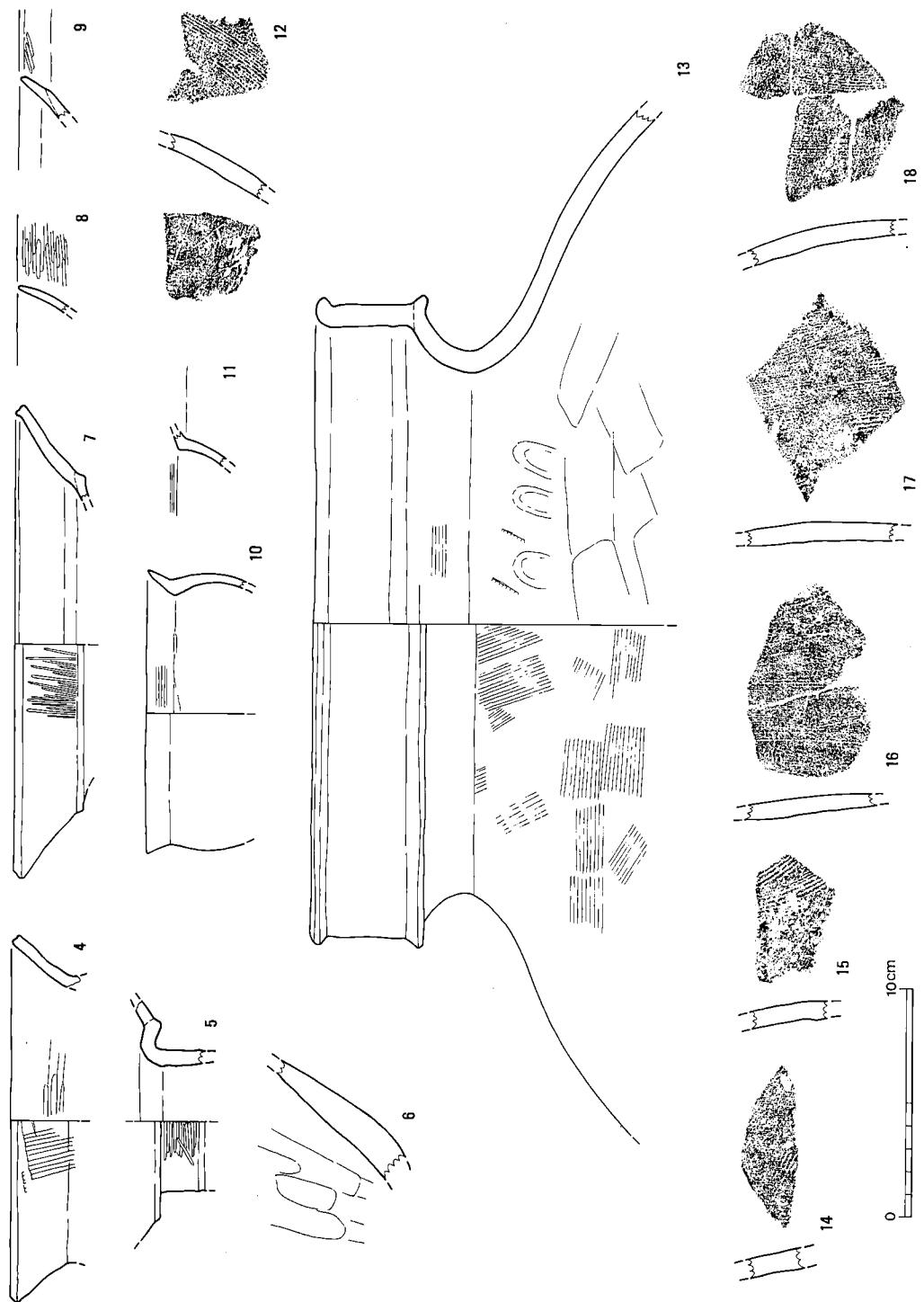
5は1号墓西方のB面出土（B-1）の畿内系二重口縁壺の頸部片である。直立した円筒形の頸部から一次口縁は大きく外反して垂れ下がっている。二次口縁が不明であるのは惜しまれる。内外ともに丹塗りの痕跡があり、頸部外面は丹塗りの前にヘラ先で横に粗くミガキを施しているらしい。小型の精製品である。頸部外径6.2cm。

6はA面整地層の出土で、壺の底部付近の破片であろうか。内面はナデである。胎土は粗い。

7は二重口縁壺の口縁部片であろう。一次口縁の先端部が突堤風となり、二次口縁はそこから外弯しつつ外反し、口唇上端部はつまみあげている。内外ともナデを施すが、外面はナデの上に細い縦ミガキを行っている。復原口径20.8cm。5とは全くの別個体である。

8・9は壺であろう。ともに精製品で外面には横ミガキが施される。

第14図 I区1・2号墳出土土器実測図 (1/3)



10・11は堆になる。10については磨滅が著しいため口縁端部は図のように終わっているのかどうか定かではない。あるいはもう少し長いのかもしれない。口縁内面に刷毛目が残る。

12は甕の胴部破片で内面ヘラケズリ、外面刷毛目である。

13は山陽から山陰にかけて見られる二重口縁壺の口縁から肩部の破片で、張りのある肩から頸部で窄まり、大きく外反した一次口縁の先端は突帶風となって、その上に直立した二次口縁部が付く。口唇部は外側へつまみ出されてこれも突帶風になる。一次口縁の内面には黒いものが付着しており、黒塗りがなされているのだろう。外面は刷毛目の上にナデ、内面は肩部以下にヘラケズリが施される。内外ともに赤橙色の化粧土が掛かっているらしい。復原で口径28.7cm、頸部径24cm。

15～18は13と同一個体の胴部片である。

10がB-5、12がB-2、他はB-4から出土した。



Photo. 4 I区作業風景・見上げるひと

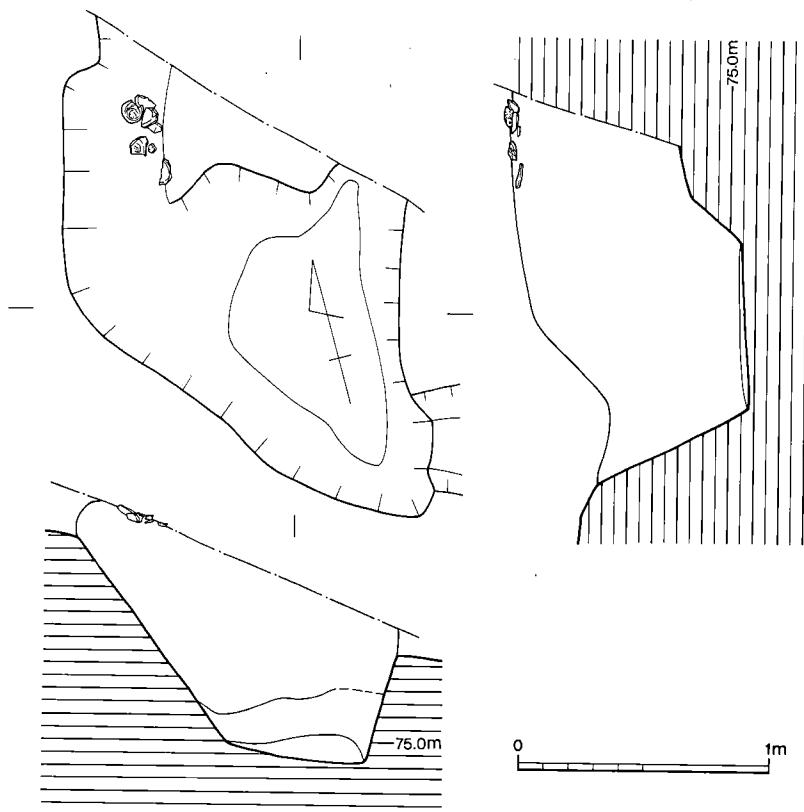
3. その他

1号土壙（図版8, 第15図）

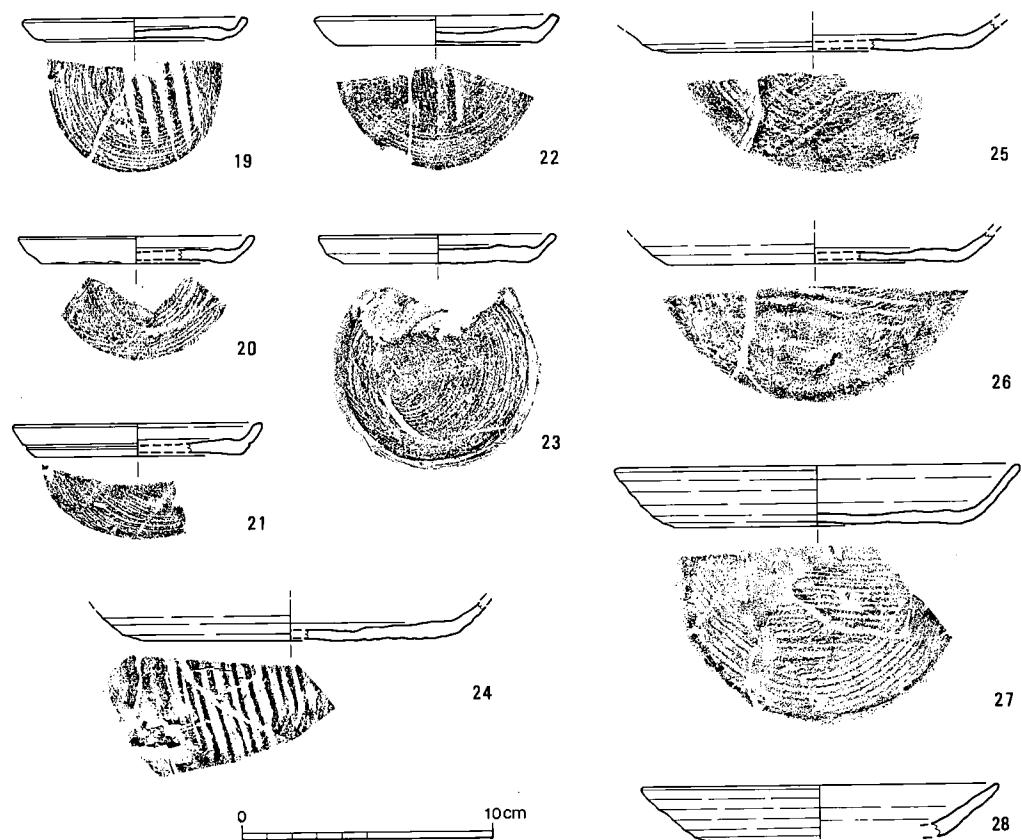
1号墳の2号墓の北3mほどの所にあり、一部は調査区外にかかっている。南北に長くなる不整形のプランなのである。北側にテラスをもつ二段掘りで、西壁はやや緩やかだが東壁は急傾斜の立ち上がりとなる。東西幅1.3m。最深部で約1mの深さがある。第8図の土層図で見るにおいては、この土壙の掘り込みラインがはっきりしないが、上面の北西部で土師器群が検出され、一部の破片が壙内からも出土していることより新しい時期の遺構とした。12世紀後半代のものであろう。

出土土器（図版13, 第16図19~27）

土師器の小皿と壺である。小皿(19~23)の外底部は全て糸切り痕の上に板ではない植物質圧痕を有するもので、口径9~10cm、底径7.1~8.2cm、器高0.9~1.25cmを測る。底部に比べて体部（口縁部）が薄いのが特徴である。



第15図 I区 1号土壙実測図 (1/30)



第16図 I区1号土壙等出土土器実測図 (1/3)

坏(24~27)は24ははっきりしないが、他の外底部には粗々しい糸切り痕の上に板目痕がある。この3点は胎土・焼成ともによく似ており、あるいは2個体分の破片であるかもしれない。27の口径16cm、底径11.4cm、器高2.4cmを測る。

S K - 1 (図版8, 第17図)

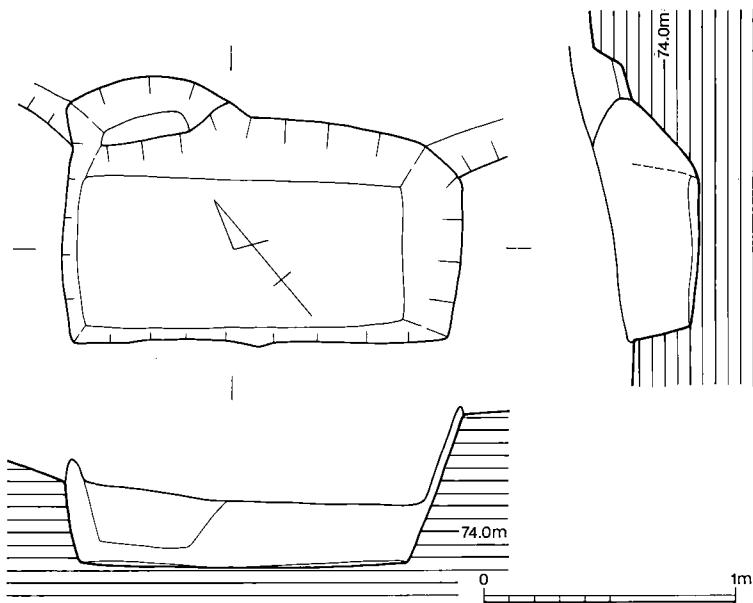
2号墳の西4mほどの所にある長方形の土壙で、主軸方位はN-50°-Eをとる。北側を柿植栽用の穴に切られているが全形はわかる。底面において幅52~58cm、長さ130cm、上面では幅約80cm、長さ160cmを測る。出土遺物はなく、時期も不詳である。

◎ I区のその他出土遺物

・石棺棺材 (第8図)

主に2号墳の西側に散乱していたもので、一部は1号墳の西側にもあったものである。全て

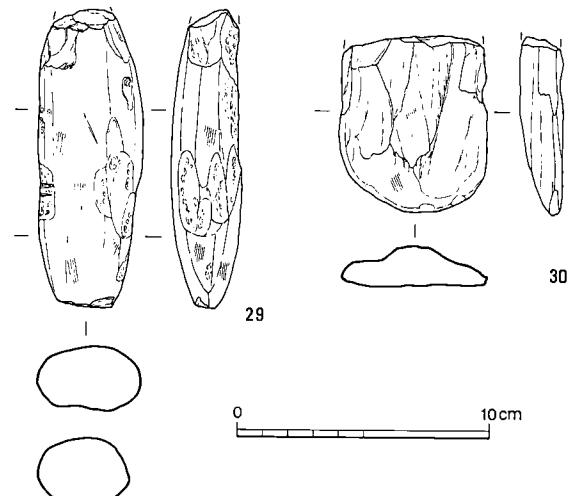
安山岩であり、1～6は蓋材、7～11は側板であったとみなされる。1～6には棺の内側に赤色顔料を塗布していたことの痕跡が付いており、これでもとの石棺の天井部の幅が知られる。5・6は幅が24cmと狭いので小型棺である。朝倉高校調査時の「1号石棺」「2号石棺」の棺材であったと見てよい。



第17図 I区SK 1実測図 (1/30)

・土師器（第16図-28）

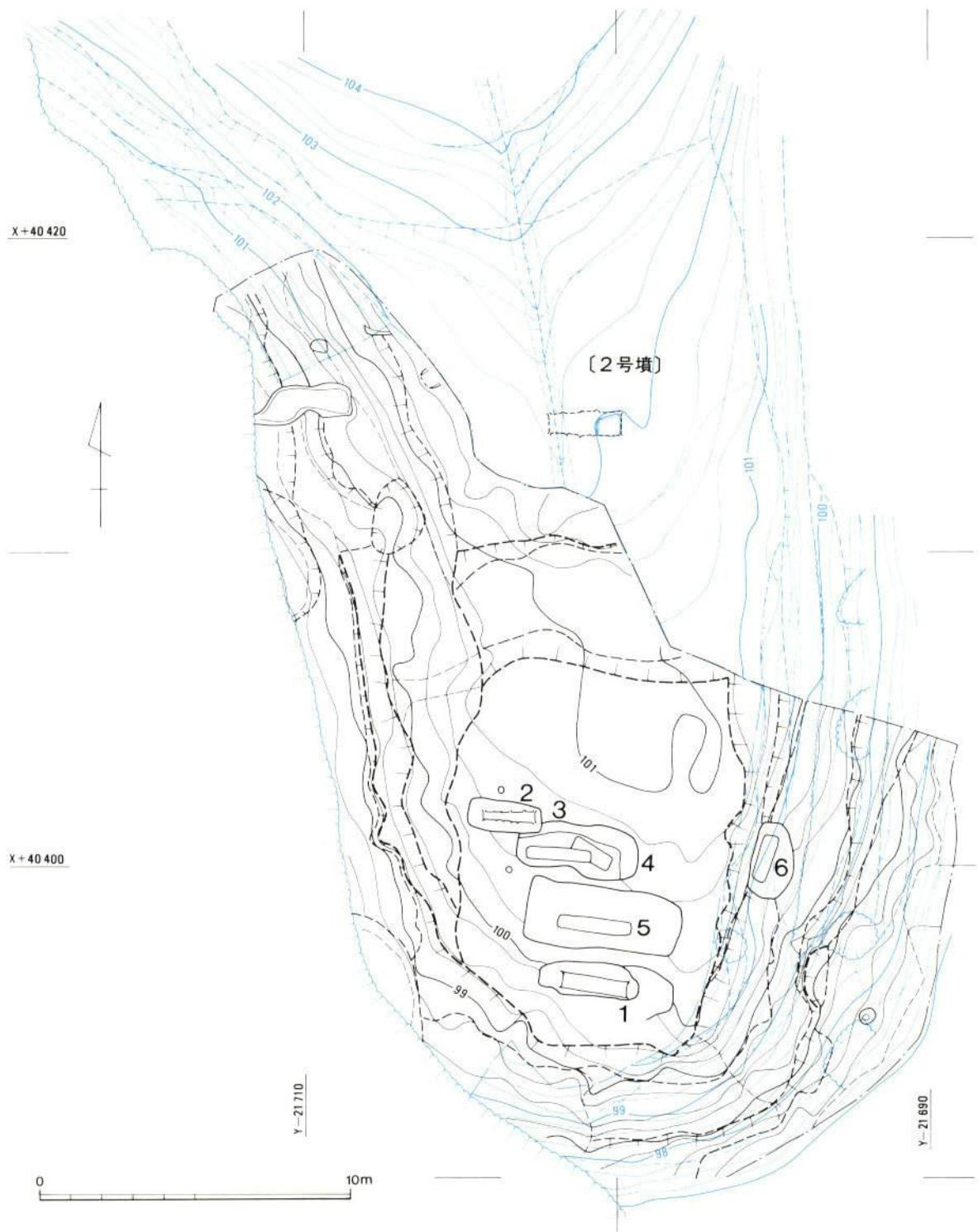
1号墳の2号墓周辺から採集された土師器の壺で、1号土壙に伴っていたのではないかと思われたが、体部の立ち上がり方が少し異なっている。復原口径14.2cm。



・石斧（第18図29・30）

B面の整地層から出土したものである。29は刃部・頭部とともに欠くが、棒状の自然石を部分的に磨いて石斧としている。頭部と体部の両側面に敲打

痕がある。現存長11.8cm、幅4.2cm、厚さ最大2.8cm。30は緑泥片岩の打製品だが、刃部近くを一部磨いているらしい。現存長7cm、幅5.8cm、厚さ最大1.7cm。縄文時代のものであろうが、該期の遺構はない。



第19図 外之隈遺跡II区地形図 (1/200)

C. II区の調査

(巻頭カラー1・4, 図版1~3、14~25, 第4・19・20図)

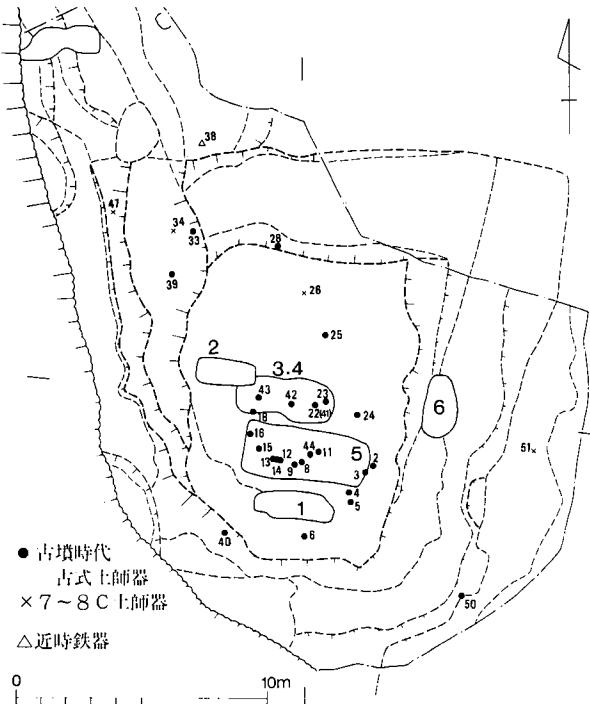
本陣山古城の築かれていた本陣山（標高135.88m）から、西南方向へ派生した丘陵が角度を変えて南下してきて舌状に突出した先端部分の、若干の平坦面を有する標高100m前後の所をII区とした。ここもI区と同じように朝倉町と杷木町の町界線が走っている。そのI区はここから南東方向へ直線距離にして約100mの所に見おろせる。眼下には筑後川を含めた両筑平野が、その向こうには水繩連山が一望できる絶景の地である。

町界線の走る部分は片岩礫を積み上げて、低いながらも土壘状の高まりが形成されているが、これが本陣山古城に關係するものかどうかはわからない。

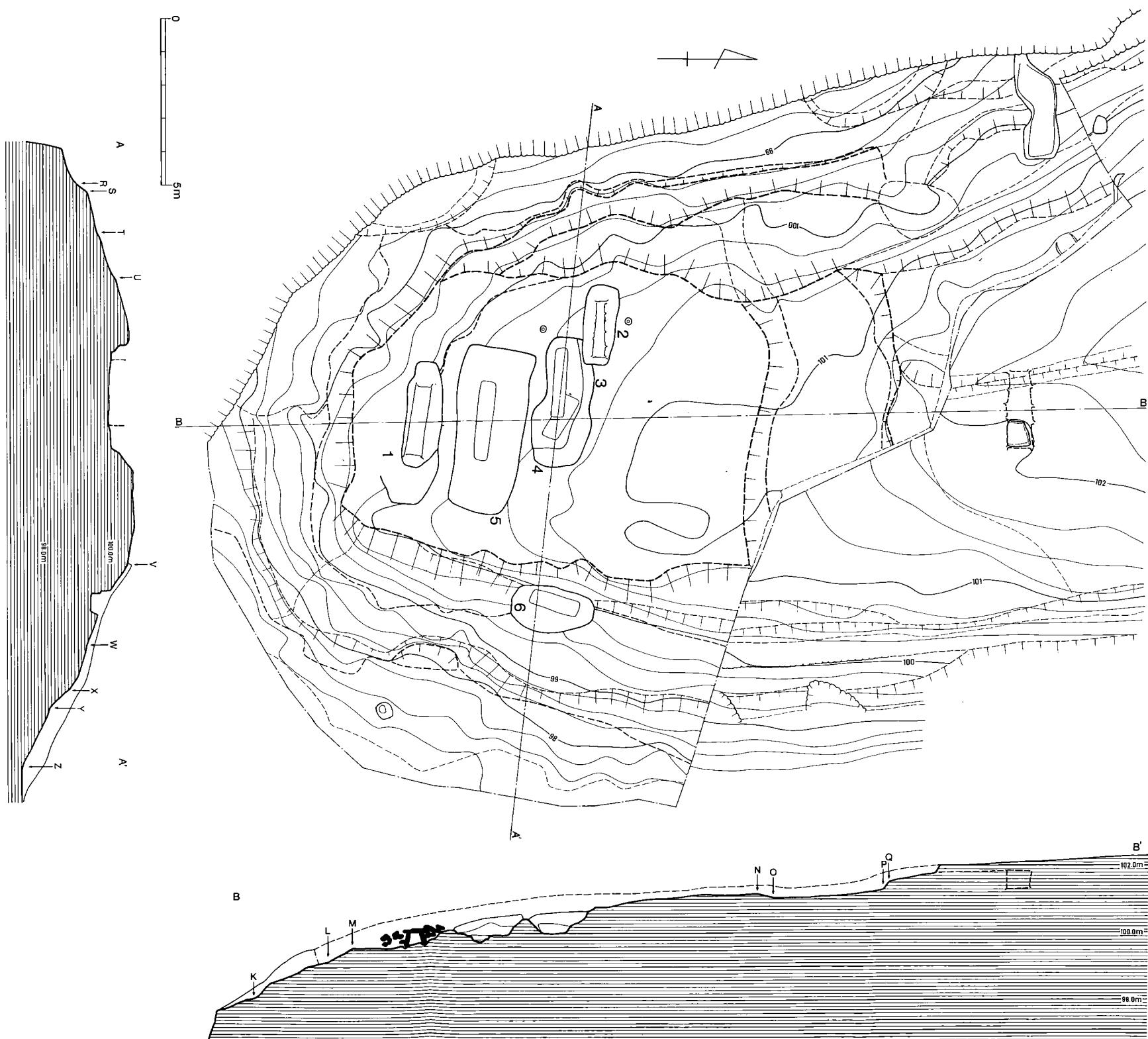
当地はもとは柿が植えてあったのであるが、発掘に入る前は片岩の盤と遊離した片岩礫が見え隠れする荒れ地となっていて、見た限りでは遺構の存在など推測しうる状況ではなかった。しかし、I区に墳墓があったことに照らせば、この地にも墳墓群が存してもおかしくない立地であることから調査に入ったものである。果たして、削り出しの墳丘墓（1号墳）が確認されたのであった。

また用地外において石棺墓の蓋らしき石材が見えており、そこに石棺墓本体も存することがわかったのでこれを2号墳とした。

1号墳の1~5号墓上面や周辺の礫中その他から土器片がいくらか出土しており、調査中においてNo.51までを取り上げた。その中には土器でなかったもの、あるいは墳墓群と無関係の時期のものも含まれるが、遺物として捉えたものについて出土位置を第20図に示す。この中で墳墓群に關係した土器で図示できたのは3号墓の上面にて出土した(18)・(43)、5号墓の上面にあった(12)・(16)・(44)だけである。これらを含む土器等については後述する。



第20図 II区遺物出土位置図 (1/300)



第21図 II区1号墳測量図 (1/150)

1. 1号墳（巻頭カラー4, 図版14~23, 第21図）

丘陵先端にて平面を不整長方形に削り出した墳丘墓である。

調査前は、舌状部先端の上面がやや平らであるという程度であり、西側と南側の裾は農道によって削られ、東側にのみ裾部らしき変換線が見られた。表土を除去するとすぐに片岩の岩盤と、そこから遊離した片岩礫群とが現れた。1・2号墓の蓋の上にも片岩礫がかぶせられていたので、すぐには石棺の存在に気づかないほどであった。しかし遊離した片岩礫を除去していく中で1~5号墓を確認していった次第である。そしてこれら墳墓群の周囲を詳細に観察すると、削り出しの行われていることがわかったのである。

地山である岩盤が筋理の入った片岩であることもあるって、削り出しを行ったと思われる線を捉えるのに難渋し、一部は強引に措定したところもある。また後世の削平もあってその規模は捉えにくいところがあるが、第20図の一部復原図および第21図を参照しつつ見てみる。

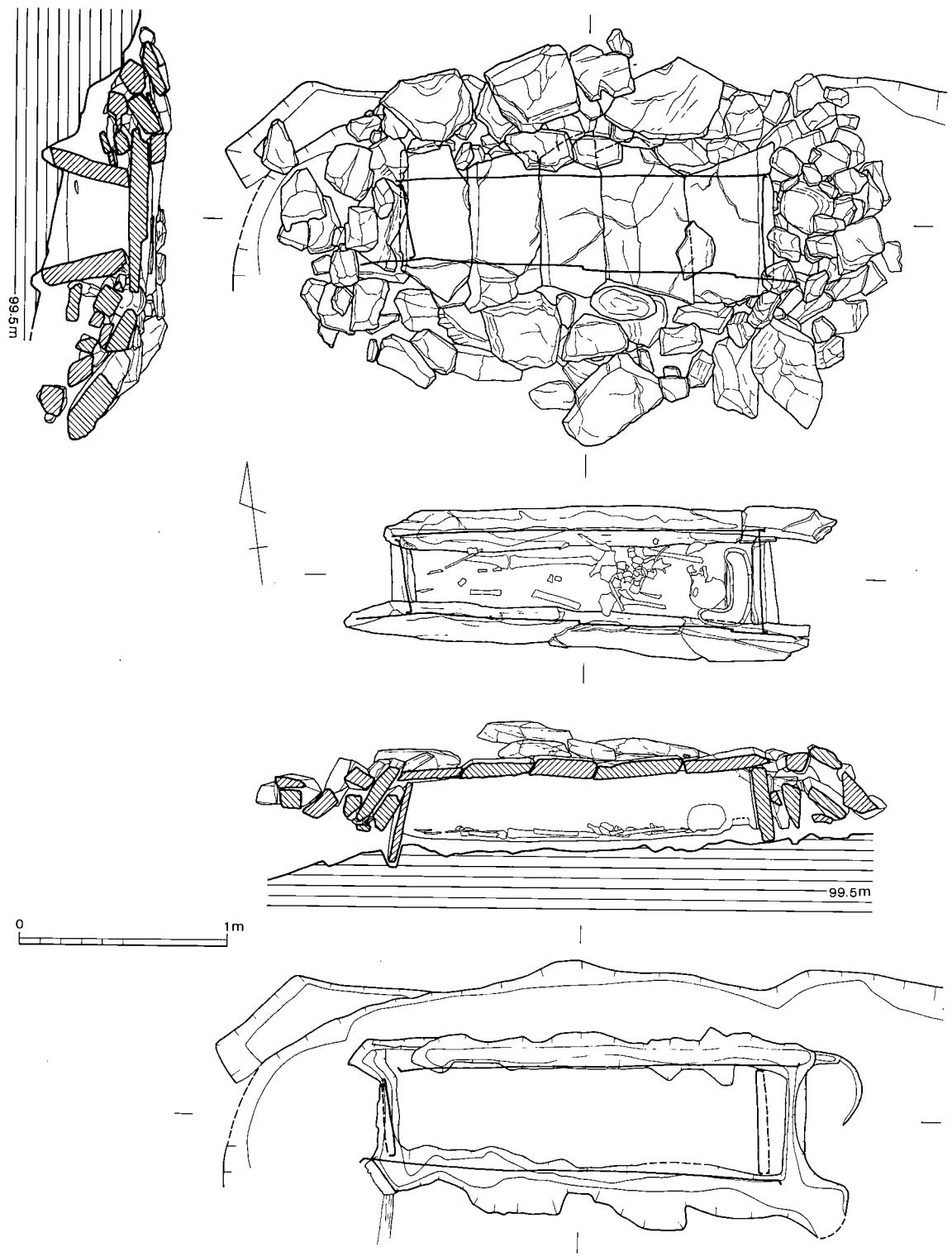
北側の丘陵基部側には幅が内法で2~3.4m、外法で4~4.4mの浅い溝が掘られて区画を行っている。1~5号墓ののる上端面は西南隅の欠けた長方形と見て取れる。問題なのは裾部ラインの捉え方であって、西側は現況以上に把握できないけれども、東側から南側にかけては6号墓の構築された所を通るラインとするもの（A案）と、それより更に外側のY点とする捉え方（B案）とがある。いずれにしても南西隅がはっきりしないのと北東部が用地外であるものの、おおよそ南辺が短く北辺が長い羽子板状の長方形プランとなることは間違いないとしてよい。なおB案の場合には、Y点を通るラインが南方へ延びてのち西へ屈折し、2.7m先で南へ折れ曲がるのは、I区1号墳におけると同様に前方後方形墳の様相を示しているようにもとれる。しかしこの点については「前方部」先端が不明であることから何とも言えない。

南北方向については、1・5号墓の中心付近を通るラインを主軸としてみるとM-N間が12m、L-O間13.3m、L-Q間16.7mである。B案をとって南側の裾をK点よりさらに南側とすると20m以上の長さとなる。

東西方向は3・4号墓から6号墓を通るラインで見ると、U-V間8.6m、R-W間13.8mである。B案では東側裾をY点としてR-Y間15.6mになり、Z点までだとR-Z間17.8mとなる。南北両端の東西幅復原値は、A案においてL点で10m、Q点で16m、B案にてK点で12m、Q点で19mほどになろう。

以上より、東側裾部の捉え方によってその規模に差異が生ずるが、A案では南北が16.7m、東西が10~16m、B案では南北20m以上、東西が12~19mの不整長方形プランの墳丘墓とされる。いまはA案を妥当性の高いものとしておきたい。このA案によれば平面積は220m²ほどに復原できる。

主体部は上端面の南側に偏した格好で1~5号墓の5基が主軸をおおよそ東西方向に向けて、



第22図 II区1号墳1号墓実測図 (1/30)

東側裾部に6号墓1基が南北向きに検出された。座標値は5号墓の中心部にてX=40398.2m、Y=-21700.8mほどである。

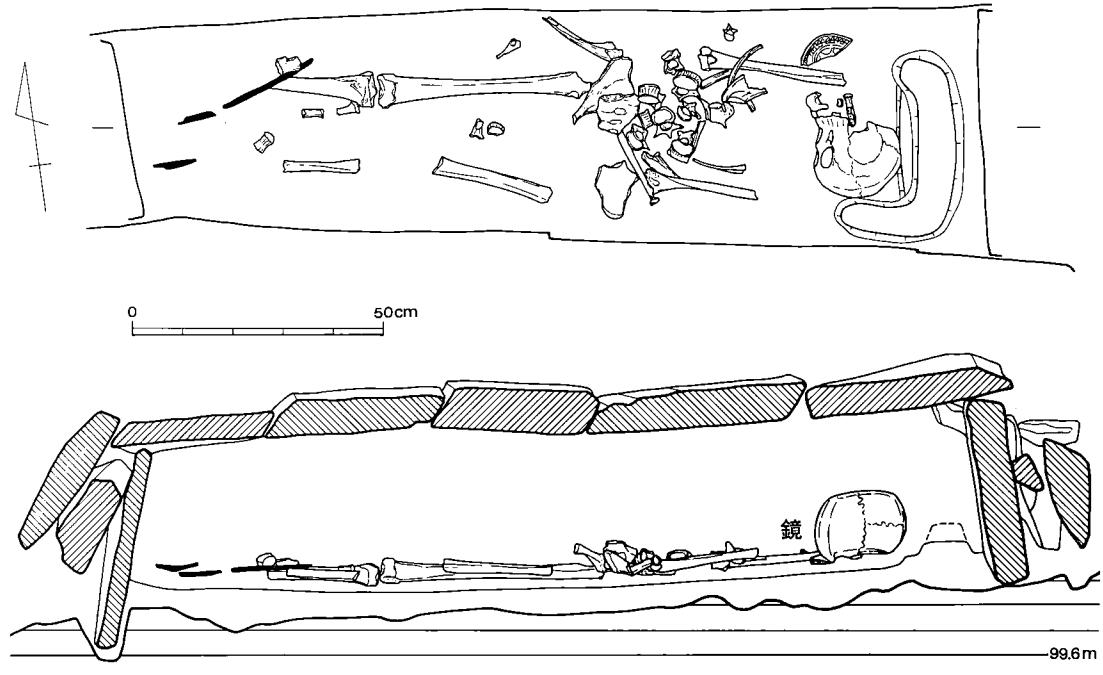
1号墓（図版15～19, 第22・23図）

上端面の最南部で東西方向に主軸をおいて検出された箱式石棺墓である。棺材は安山岩の板石を使っている。

掘り形としては北側の高い方のみを段として深さ20cmほど掘り下げ、やや傾斜のある平坦面を造り、その中に棺材を埋め込む溝を掘っている。南側はもとの傾斜のままであって段をつくらない。掘り形の東西長は約3.7mである。

棺は側板・小口板ともに1枚ずつで、両側板が各々の小口板を挟み込む型式にして内傾して置かれる。東側小口石は当初予定の埋置用溝の中には置かれていません。床面で長さ172cm、小口幅は東側49cm、西側38cmを測る。主軸方位N-97.5°-E。棺内壁面には赤色顔料が塗布されています。裏込めには掘り形掘削時の片岩礫を若干の土とともに充填している。

棺内床面はほぼ水平ながら東側がやや高くなっています。東小口壁側に砂粒を多く含んだ黄灰色粘土による枕がしつらえてあるが一部は崩れています。人骨が原埋葬に近い状態で遺存していましたが、頭蓋骨は枕から転げて左側頭部を下にしていた。そのほかの人骨に一部に乱れがある

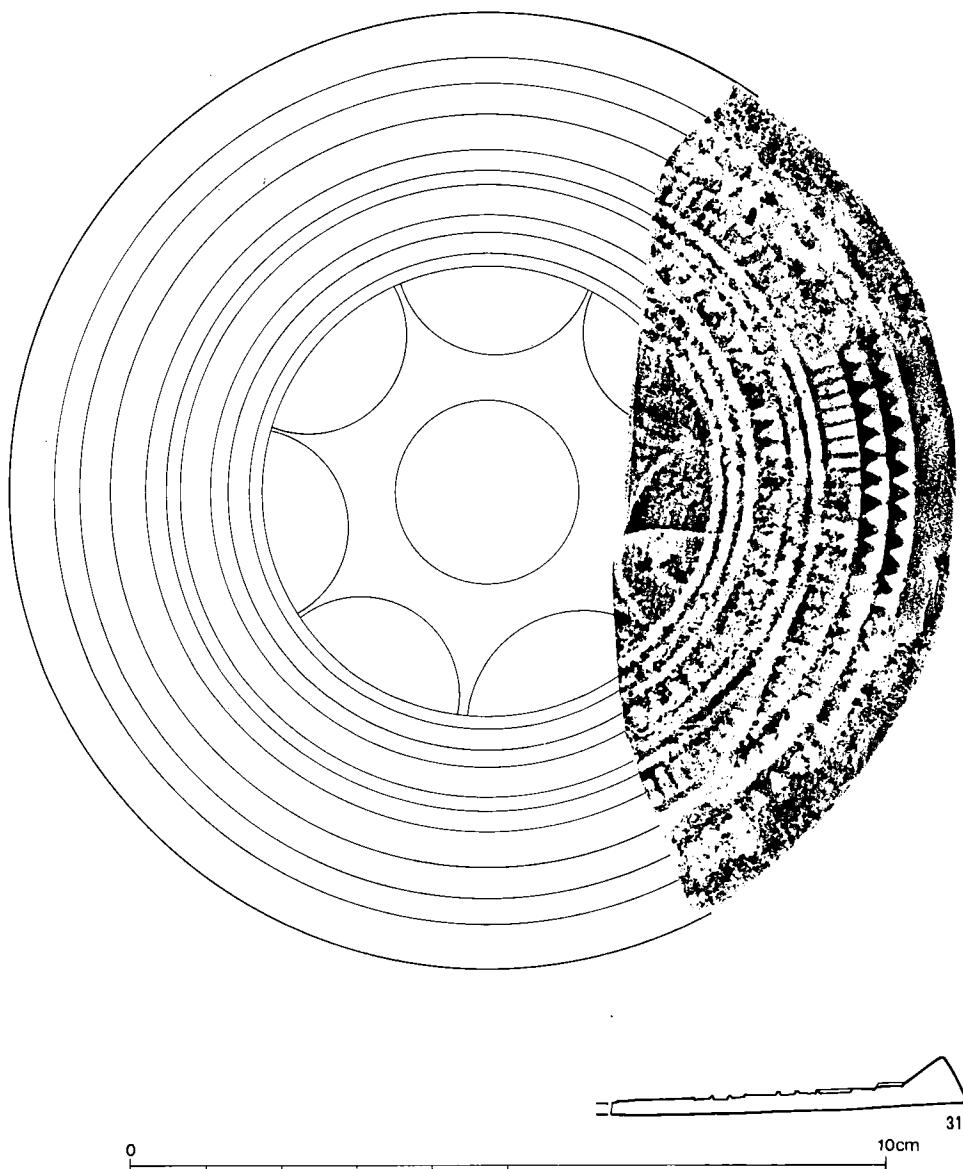


第23図 II区 1号墓人骨・遺物出土状態実測図 (1/15)

はネズミ等による攪乱かもしれないとの指摘がある。人骨についてはIV-Aに鑑定結果を収録したが、成年前半期の女性のことである。

頭蓋骨の右手に東小口から約30cm離れて重圏連弧文鏡片が鏡背を上にして、また足元には鉄器3点が副葬されていた。連弧文鏡片は布等に包まれていたような痕跡はなかった。

蓋石は5枚を頭位である東側から架けている。蓋石を置く前に、北側側板の外側上部には枕



第24図 II区1号墓出土鏡拓影・実測図(1/1)

と同じ黄灰色粘土が埋め込まれ、一部粘土は蓋石の安定化にも使われている。蓋石上面や周辺にも裏込めと同じように掘り形掘削時の片岩礫が置かれていた。

出土遺物（巻頭カラー5,図版24・25,第24・28図）

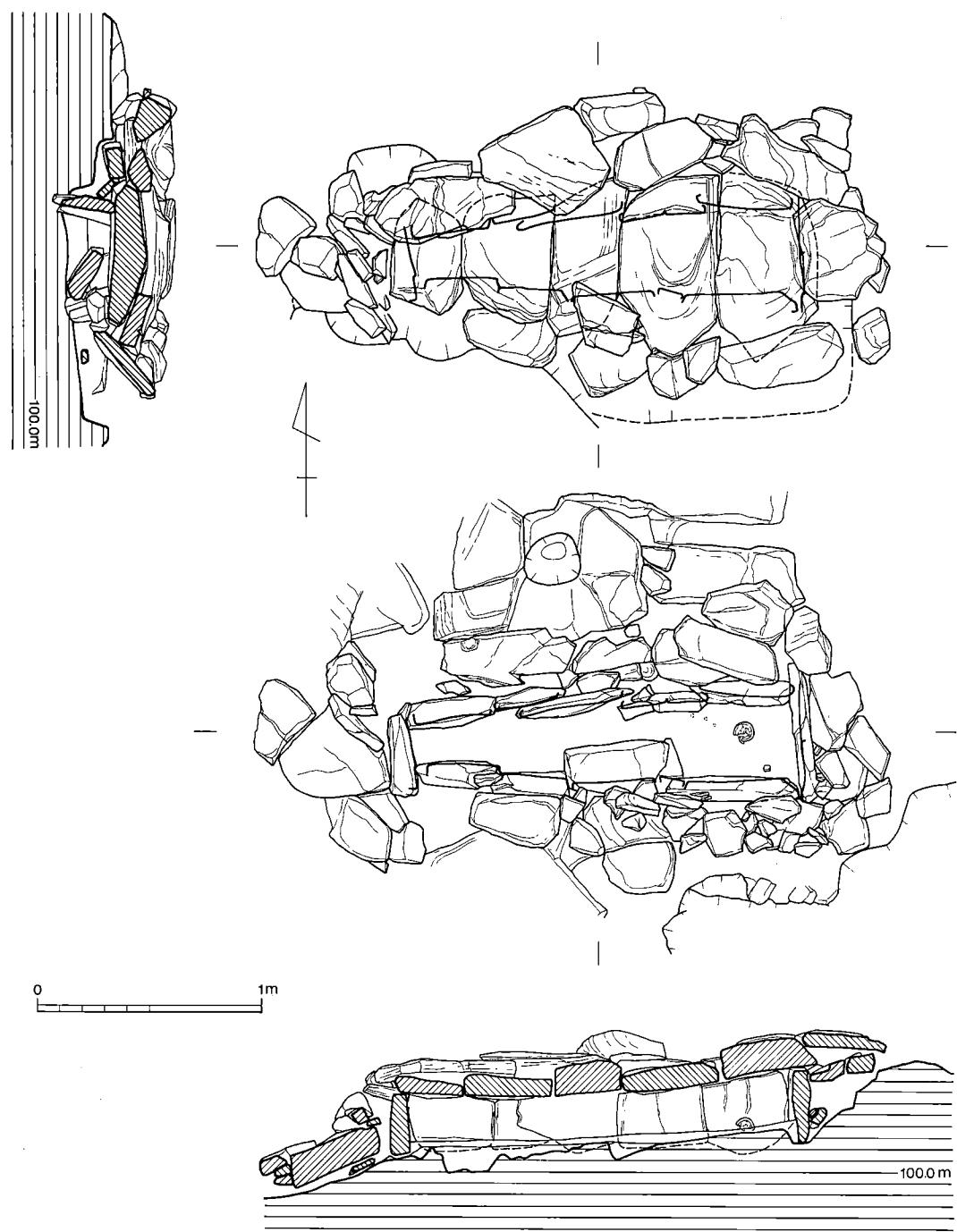
重圏連弧文鏡（巻頭カラー5,図版24,第24図31） 全体の約3分の1の破片であり、さらにいくつかのひびが入っている。かなり縁鏽をふいているが、鏡背の鏽のない所は漆黒色を呈し、その上に赤色顔料が付着する。鏡面はほとんど鏽に覆われていて擦過痕があるかどうかなどはわからない。破断面にも鏽があるが、鋤に近い部分の破断面の一部に、研磨といえるほどではないが明らかに擦った痕跡がある。鏡胎は新しく割れた面で見るとすい紫色をなしている。復原で面径12.6cm。鏡面の反りは0.15cmで、最も薄い所の厚さ0.15cm。断面三角形をなす縁の高さは0.55cm。多数の圏線があるので重圏連弧文鏡とする。

内区は鋤を欠き、鋤座もわからない。連弧文は3弧が見えるが、復原すれば7弧になるようだ。弧文間には文字か文様か判じ難いものが鋸出されている。その外に3圏線があって、次に外向の鋸歯文、また3圏線があって櫛歯文となる。外区は少し高くなつて外向の鋸歯文が二重に巡り、断面三角形の縁でおわる。手にとると重量感がある。圏線の多いのが特徴であり、連弧文が7弧になることからすれば国産鏡とすべきであろうが、これまでに同様な出土例を知らない。またかような例は漢・三国期の中国鏡にも見られない。

鉄器（図版25,第28図32~34） 3点ともに鋸が著しい。32は小さな刀子である。関から身に移行する所で曲がって歪んでいるが、これが意図されての形状であったのかどうかわからない。身部に布痕が付着している。全長7.9cm、身長5.9cm、刃幅1.05cm。33は幅0.9cm、厚さ0.4cm弱の棒状品の一端が抉れて細くなったものであるが、素環頭の柄の部分であろうと考えた。現存長7.6cm。34は鉈であろう。図示した下端部が鋸で膨れあがっているが、あるいはこの部分が刃部になるのかもしれない。かなり多くの布痕が付着している。現存長20cm、幅0.7~0.8cm、厚さ0.3cm。

Photo. 5
成年女性





第25図 II区1号墳2号墓実測図 (1/30)

2号墓 (図版15・16・20・21, 第25・26図)

上端面にある5基の中では、最も北で西側に偏して東西方向に営まれた箱式石棺墓である。

掘り形は片岩の岩盤に造られているため、平面形も底面もいびつであるが、棺を置くに必要最小限の長さ245cm、幅80~110cm程の範囲を約25cm掘り込んでいる。その東南部は3号墓の掘り形を切っている。

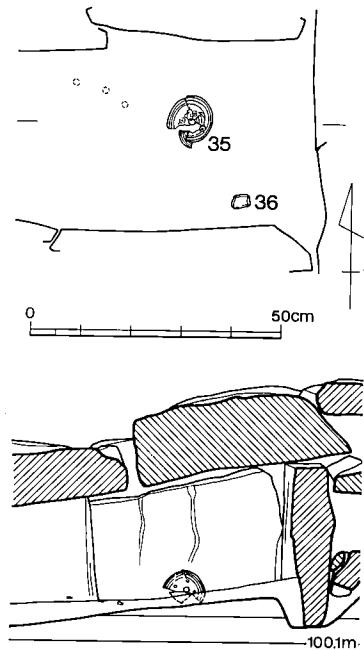
棺は両側板ともに5枚を立てるが、各々そのうち1枚は補助的な置き方である。小口板は両方とも1枚で、両側板は小口板にせき止められていて突出しない。南側の側板の中央の板石は内側に倒れかかっていた。床面で長さ174cm、小口幅は東側36cm、西側18cmを測る。東側の広い方が頭位であろうが、それにしても足位部は狭い。主軸方位N-88°-E。棺内壁面には薄く赤色顔料が塗布されていた。裏込めには掘り形掘削時の片岩礫を若干の土とともに入れ込んでいるが量は多くない。

棺内床面はほぼ水平ながら東側がやや高くなっている。枕は造りつけられていない。人骨は全く遺存せず、東小口壁から20余cmの所に飛禽鏡が鏡背を上にして、北側を高くして副葬されていた。布などに包まれていたような痕跡は見られなかった。この鏡は割れており、欠損部位と思われる極小破片がそれぞれ9cm、13cm、20cm離れて3箇所に検出された。また鏡の南東15cmに鉄器があった。

蓋石は5枚を頭位であると思われる東側から架けているが、それ以外にも偏平石を補助的にいくつか置いている。

出土遺物 (巻頭カラー5、図版24・25、第27・28図)

飛禽鏡 (巻頭カラー5、図版24、第27図35) 内区の一部を欠くもののほぼ完形に近い船載鏡である。欠けた部分の一部と思われる破片が棺内3箇所にあったが、それらを全てあわせても完形にはならなかった。出土状態を見ても、副葬する段階から割って納められたものであろう。鏡面にはごく僅かに擦ったようなところはあるが、擦過痕というような意図的なものは見られない。鏡背はおもに縁に近い方に緑錆をふいているが、総体に錆は少なめであり、遺存状態は良好といえる。錆のない所は漆黒色を呈し、文様間には赤色顔料が付着して残っている。鉢の上方、鳥の上胴部の所に僅かながら斜めの擦過痕がある。面径9.0cm、縁高0.355cmで、鏡面の反りは約0.1cm。最も薄い所では厚さ0.075cmしかない。



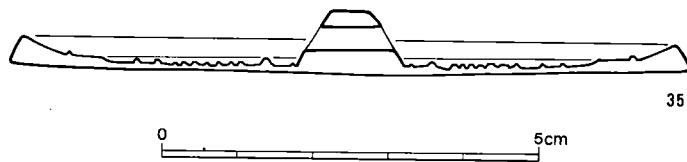
第26図
II区 2号墓遺物出土状態実測図
(1/15)

鉢は半球式であり、鉢径1.5cm、鉢高0.85cmを測る。頂部には径約6mmの平坦に近い面がある。鉢孔は底面が平らで天井部が丸くなつた断面半円形をなし、その底面部分の高さは左右同じではなく飛禽の右羽の方が高い位置にある。紐ズレのような痕跡は認められない。鉢座は円圏である。

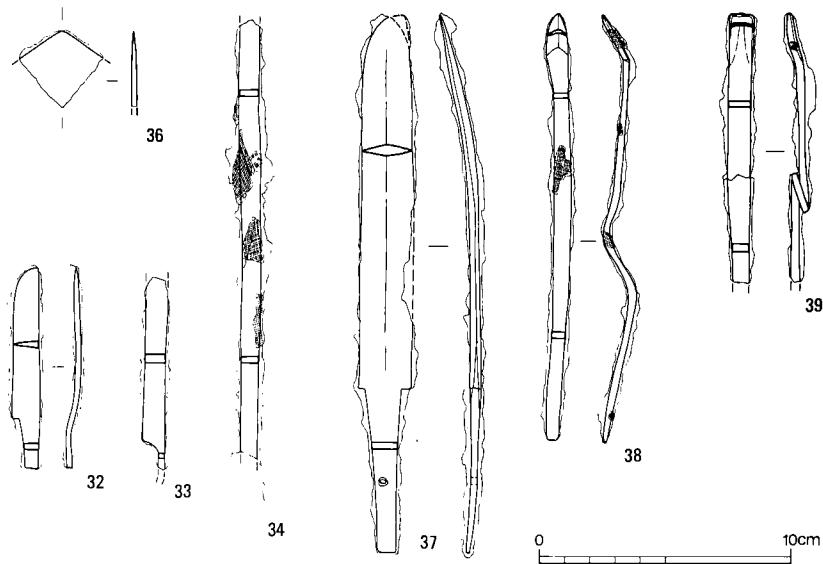
内区は、鉢の所を胴の中心として一羽の鳥が羽を広げており、羽の上下には円圏を持つ4個の乳が配されている。鳥は頭を左に振るが、目などははっきりしない。鉢をはさんで鉢孔と直交する所の鳥の胴部には、小乳を半円圏で囲んだような文様がある。飛禽の外は2条の圏線を経て狭い間隔の櫛歯文となる。

外区は一段高くなつて外向の鋸歯文が巡り、一圈をおいて無文の斜縁となる。

鉄器（図版25、第28図36）菱形状をした鉄板であり、4辺のうち2辺は破損部のようである。先端が尖っているのは確かであるが、図示したような鐵の形状になるのかどうかよくわからない。いまは不明鐵製品とするしかない。



第27図 II区2号墓出土鏡拓影・実測図 (1/1)



第28図 II区出土鉄器実測図 (1/3)

3号墓 (図版15・16・22, 第29・30図)

2号墓に一部を切られてその東南にあり、4号墓を切って営まれた木棺墓である。

掘り形はこれも片岩の岩盤をくり貫いているためややいびつであり、かつ東側が判然としないが、上面で幅は105cm、長さは290cm程であったろう。底面で幅70cm、長さ215cm程の大きさである。

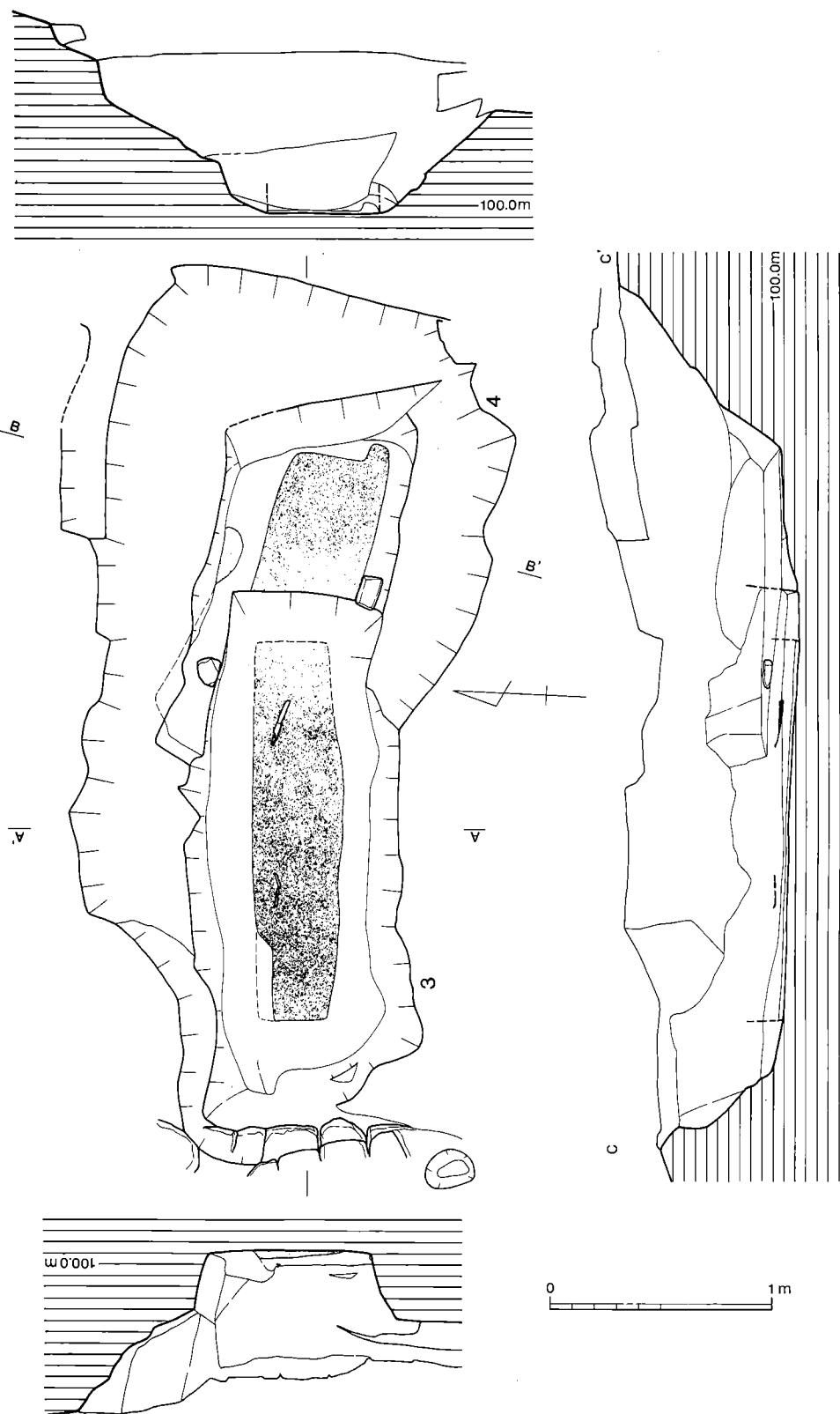
棺は赤色顔料の範囲でもってその内法の大きさを推定するしかないが、東端部がやや不明瞭であるものの長さ172cmで、幅は東小口33cm、西小口31cm、中央部40cmを測る。箱形木棺が埋置されていたと考えるべきであろう。主軸方位はN-96°-E。棺内床面はほぼ水平に近いが西側がやや高くなっている。床面レベルの高い方を頭位とすれば西側になる。

枕は造りつけられていない。人骨は全く遺存せず、東小口から35cmあたりに鉄剣が切先を東に向けて、また西小口から60cmの所に鉈が切先を西に向けて出土した。いずれも床面から5cmほど浮いている。

掘り形の検出面付近から土師器 (第33図40・41) が出土している。

出土遺物 (図版25, 第28図)

鉄器 (図版25, 第28図37・38) 37は短剣である。身にはしのぎがあるが、切先と関の付近はよく見えない。切先については錆が著しいが、通常の剣のように左右対称ではなく、刀のよう



第29図 II区1号墳3・4号墓実測図 (1/30)

に片反りになるのかもしない。茎の中央やや下半に目釘穴がある。側面図で見るように特に身の切先に近い方が反っている。全長21.1cm、身長14.6cm、刃幅2.1cm。38は鈍である。柄部の中央はS字状に屈曲しているが、これは本来の使用する際の形状であるのか、あるいは副葬に際して故意に曲げられたものなのはわからぬ。刃部は左右対称には見えないので研ぎ減りによるものであろう。柄には布痕が付着する。全長17cm。

4号墓（図版15・16・22, 第29・30図）

3号墓に西半分を切られてその東側にある木棺墓である。この1号墳の上端面においてはほぼ中心の位置にある。

掘り形は切られた西半分がはっきりしないが、上面で幅は175cm、長さは300cm程であったろう。二段掘り風となってさらにこの中に上面で長さ180cm、幅85cm程の掘り形がある。

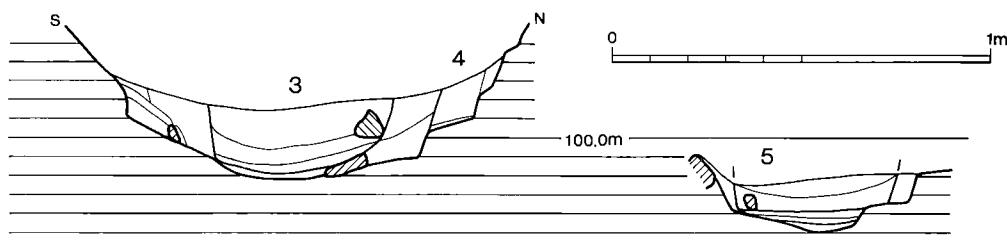
棺は西半分については削平されていて赤色顔料が長さ約65cmまでしかわからぬが、もとは130cm前後であったと思われる。東小口幅は45cm、中央部で幅47cmである。箱形木棺が埋置されていたと考えるべきであろう。主軸方位はN-113°-E。中央部の棺外にも赤色顔料が認められたがこの意味は不明である。棺内床面はほぼ水平である。

枕等はなく、人骨も全く遺存していない。副葬品もなかった。

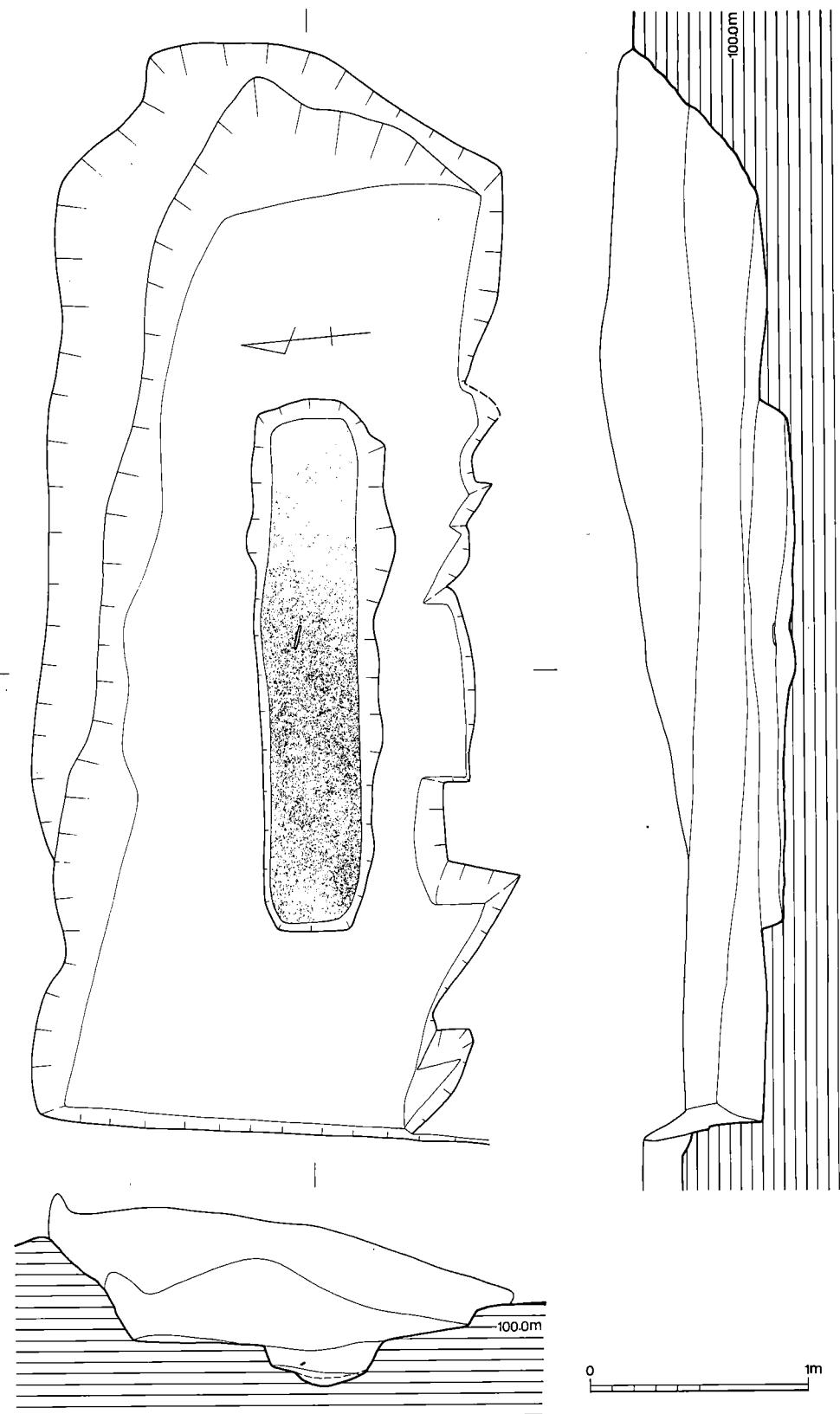
5号墓（図版15・16・23, 第30・31図）

1号墓と3・4号墓の間にあって、主軸も1号墓・3号墓と同じ方向に営まれた木棺墓である。

掘り形はこれも片岩の岩盤をくり貫いているため特に南側は凹凸が著しいが、西側は節理面にあたっているため直線となる。上面で長さ500cm、幅200cm程、底面で長さ420cm、幅150cm程を測り、この2号墳の中では最も規模が大きい。



第30図 II区3・4・5号墓断面土層図 (1/20)



第31図 II区1号墳5号墓実測図 (1/30)

棺は長さ230cm、幅40cmを測る大きさで、床面にかなりの凹凸がある。床面には赤色顔料が遺存しており、厚さ10cmにも及ぶ所もあった。これは分析結果ではベンガラとごく少量の朱である。横断面で見ても割竹形にはならず、箱形の木棺である。この棺を埋置する壙は長さ244cm、幅約50cmの掘り込みである。主軸方位はN-95°-E。棺内床面レベルは西側がやや高くなっている。

枕はなく、人骨も全く遺存していなかった。東小口から100cmの所に鉄器（鉈）が切先を西に向けて、床面から僅かに浮いて出土した。

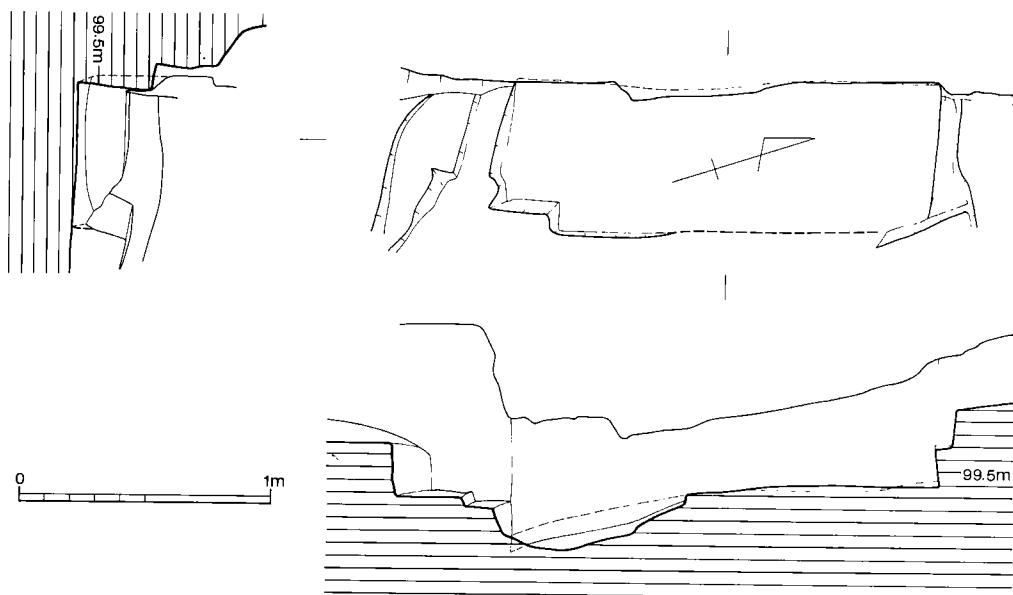
掘り形の検出面付近から土師器（第33図42～45）が出土している。

出土遺物（図版25、第28図）

鉄器（図版25、第28図39） 鉈であろう。刃先が方頭状になっているのは研ぎ減りによるものと考える。一見して二つの鉄片が銹着しているようであるが、柄の途中で折れ曲がっているものらしい。現存長10.7cm。

6号墓（図版15・23、第32図）

3号墓の主軸延長上、東側の裾部にある。片岩の岩盤をくり貫いた粗雑なつくりで、盤棺と称しうるものである。木棺が埋置されていたかどうかはわからない。床面で長さ173cm、幅60cmを測る。床面の南側はかなり低くなっている。主軸方位はN-18°-W。赤色顔料の塗布は見られなかった。出土遺物はない。



第32図 II区 1号墳 6号墓実測図 (1/30)

2. 2号墳（第19図）

1号墳の北を画する周溝北端から北に約4m、3号墓からすれば約14mの所の用地外に安山岩の板石があった。その周辺をボーリングしてみると、東西方向に主軸をもつ長さ2.3mほどの石棺墓の埋置されていることがわかった。1号墳に付属するものと捉えられないこともないが、周溝外であることと少し離れすぎていることから別の墳墓の主体部と考えたものである。

現況の地形から石棺墓を主体部とした墳丘墓状の区画を捉えることは難しいが、この石棺墓より北へ約4~6.5mの所に地形変換線が見られるので、あるいはこれが区画の一部なのかも知れない。

不確定要素が多いが、ここにもう1基の墳丘墓があるものとしておきたい。時期としては1号墳と同じ頃であろう。

3. その他（第19図）

調査区の北西端に近い所で、東西方向に主軸を持つ長さ約3m、深さ30cm前後の土壙や、用地境の所にあって精査できなかつたけれども直径70cmほどで壁が焼けて焼土の入った浅い土壙などが見られた。いずれも性格不明である。ただ後者については、調査区内で7世紀後半~8世紀前半代に比定される土師器甕が出土しているので、あるいは狼煙に関連するようなものであった可能性もある。この地点から北方を除いた三方向への眺望はすばらしいものがある。

◎ II区の出土遺物

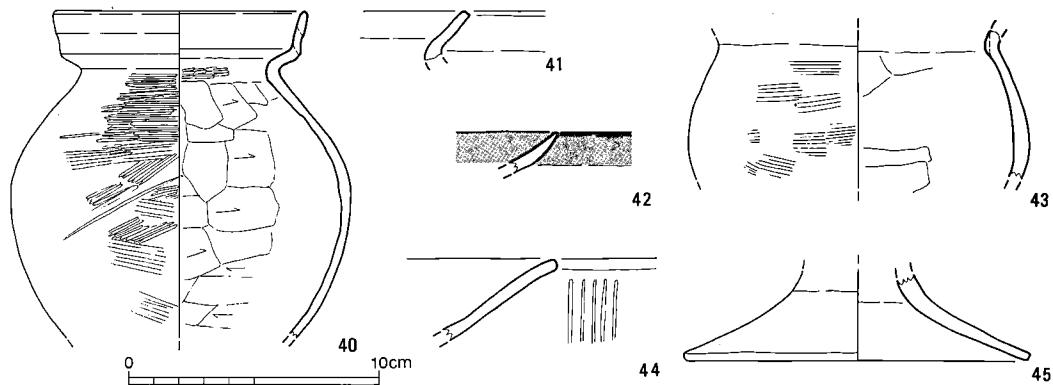
土器（図版25、第33図40~45、第34図46）

40は山陽から山陰にかけて見られる二重口縁の甕である。底部とその直上を欠き、図示した口縁から胴部にかけて「く」の字形に外反して、その上に直立よりもやや外傾した二次口縁が付く。口唇部は尖り気味の丸みを持つ。一次口縁は内外とも回転ナデ、二次口縁の外面はミガキ、内面はナデ、頸部内面はナデとミガキ、胴部は外面が横刷毛目の上に細いミガキとナデ、内面はヘラケズリを施している。胴部内面のヘラケズリはその下半部において方向が変わっている。復原で口径10cm、胴径13.6cm。やや赤みがかった黄褐色を呈する。

41は二重口縁壺の口縁部片であろうか。内外とも回転ナデである。第20図において40は(18)、41は(43)にあたる。

42は壊か高壊であろう。内外ともナデにて調整し、丹塗りを施している。

43は小型の甕で約1/7の破片。胴部外面は刷毛目の上をナデ、内面はケズリのちナデらしい。復



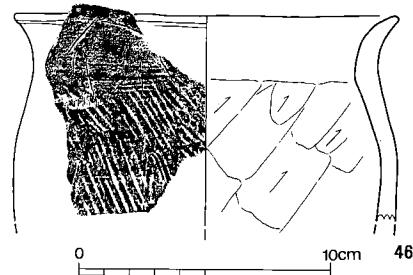
第33図 II区出土土器実測図 1 (1/3)

原胴径13.6cm。

44は高壺の壺部であろう。外面にははっきりしないが暗文風のミガキが施されているらしい。45は高壺の脚部で、器表の磨滅著しく調整は不明。復原裾径13.8cm。44と同一個体かどうかわからない。第20図において42と44は(44)、43は(16)、45は(12)にあたる。

これらの土器は40・41が3号墓の、42~45が5号墓の検出面付近での出土である。それはおそらく 第34図 II区出土土器実測図 2 (1/3) 各々の棺に遺体を埋葬し終わってのち、その周囲にて儀礼（祭祀）を行った結果として残されたものと考えられる。ただ、墓壇上面ということからすれば1・2号墓に伴っての祭祀と捉えられないこともないため、所属を限定せずにいるのであるが、ともあれ葬送儀礼に伴っての土器であることはまちがいないだろう。

第34図46は1号墳の北西端部付近で出土した土師器甕で、第20図の(34)にあたる。あまり張りのない胴部から口縁部が如意形に開く。口縁部内外は回転ナデで、胴部外面は2cmあたりに7本の粗い刷毛目を施し、内面はヘラケズリである。口縁に二次火熱を受けた部分がある。復原口径15.4cm。7世紀後半～8世紀前半代であろう。



D. V区の調査

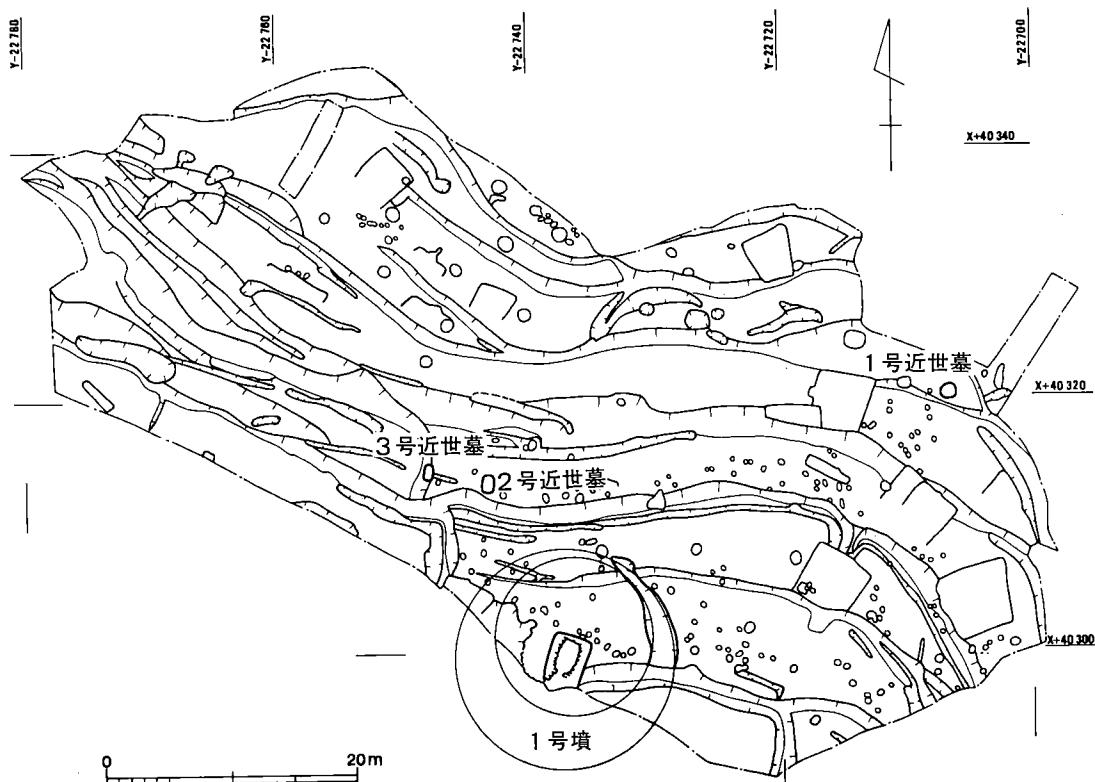
(巻頭カラー1、図版26~35、第35図)

I区の西側谷部および斜面で、II区の南方にもあたる場所のうち、西から東へと斜面を登つて峠を越えてゆく農道（もと古道）の東側をV区とした。この調査区内では標高45~58mの10数mにおよぶ高低差があるが、こここの南側の路線外一帯はやや緩やかな斜面となっていて柿畠に開墾されている。そして国道386号線を隔てて筑後川に面する。

V区では6世紀になってまず谷裾付近に古墳が造られた。その後7世紀以降になると斜面を造成して竪穴住居が営まれ、土壙・溝・柱穴等が残されている。調査区内では大きく7段のテラスを造成しているようであるが、これについては当初のものか否かさだかでない。そしてずっと降ってのち江戸時代になって、3基の墓が営まれている。

1. 古墳（図版26~30、第36~41図）

V区の谷頭よりやや西寄りの、若干の鞍部になった所に営まれた、南に開口する横穴式石室

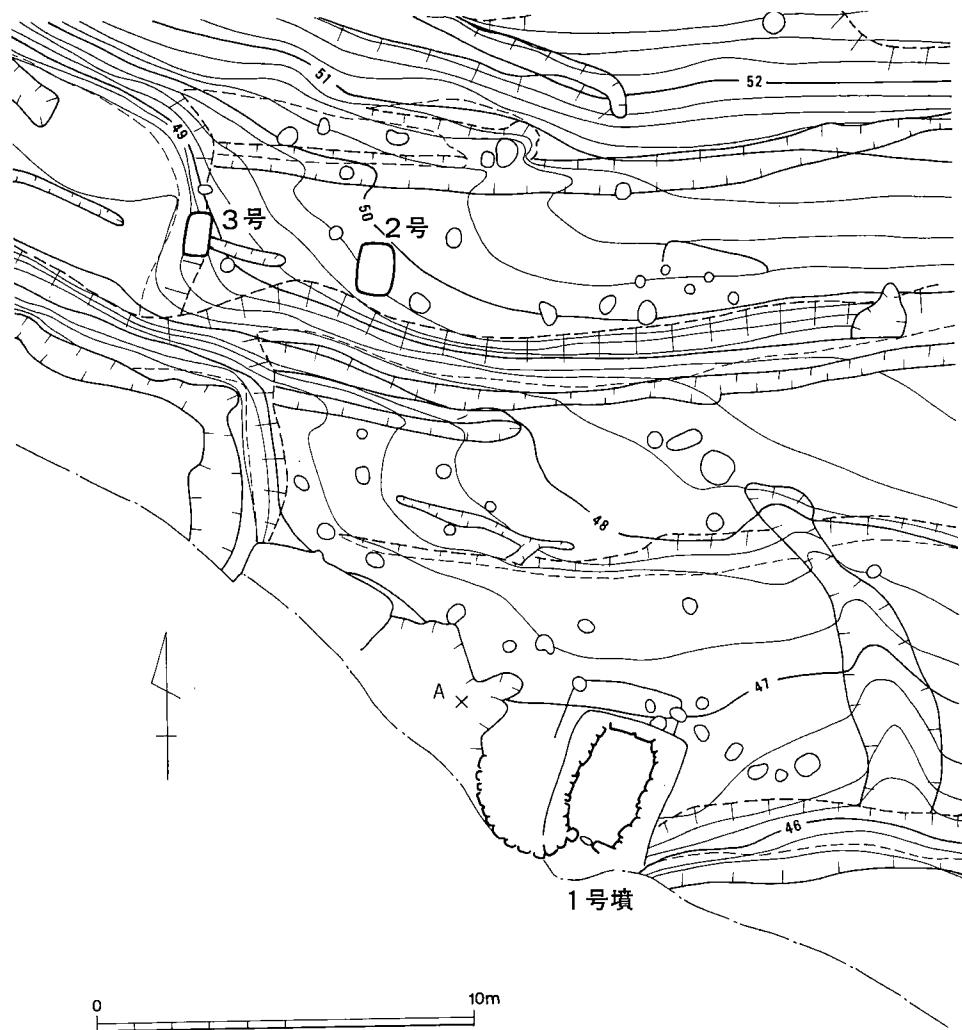


第35図 外之隈遺跡V区遺構配置図 (1/600)

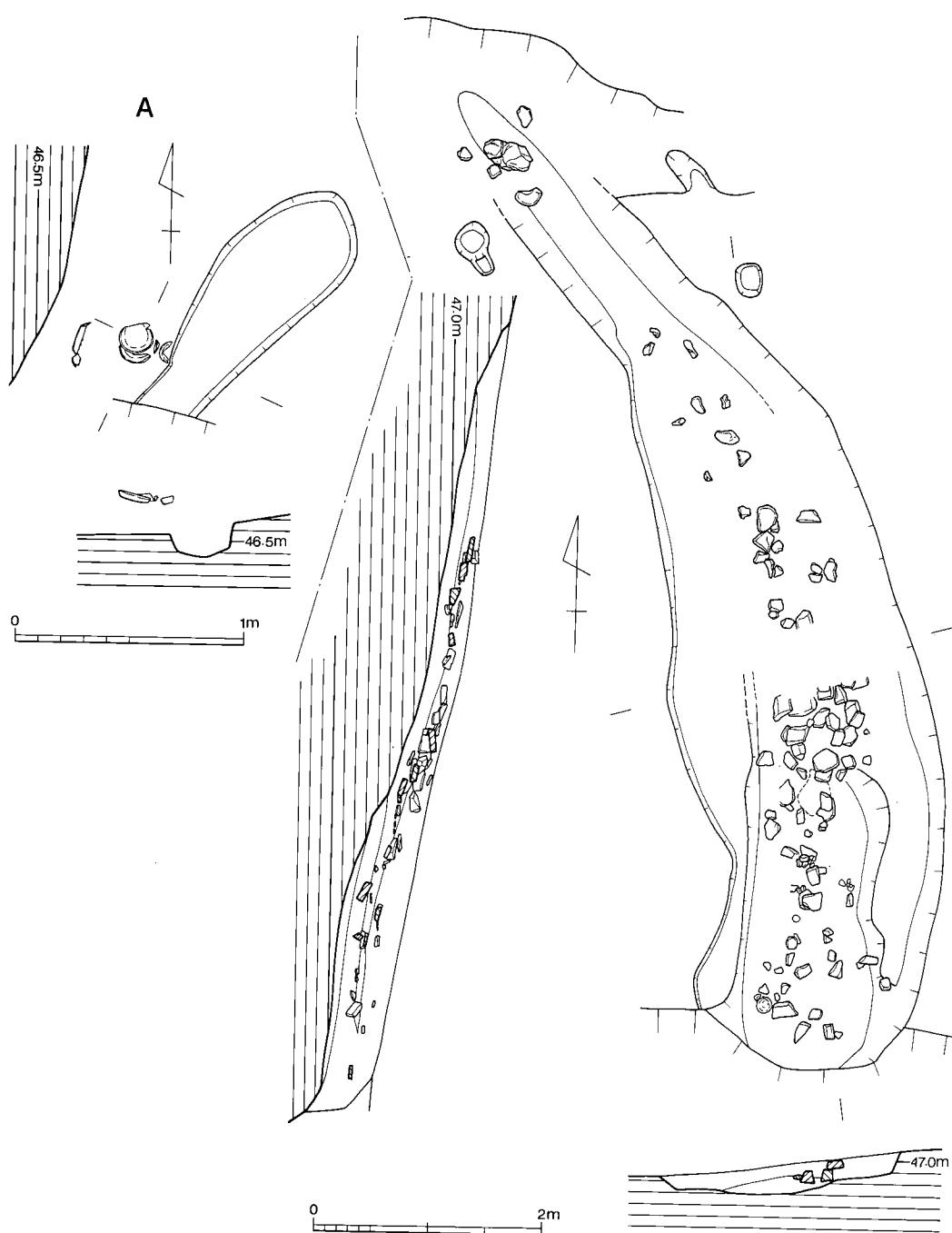
を持つ円墳である。墳丘の大半は削平され、石室も盜掘を被るとともに半壊していた。これを1号墳としておく。

墳丘は石室の回りにごく一部が残存するのみであり、それも石室の遺存している高さまでであったが、特に石室の東側については自然地形の傾斜地への堆積土も含まれているらしい。それでも本来は石室床面から2.5~3mほどの盛土を有していたのであろう。

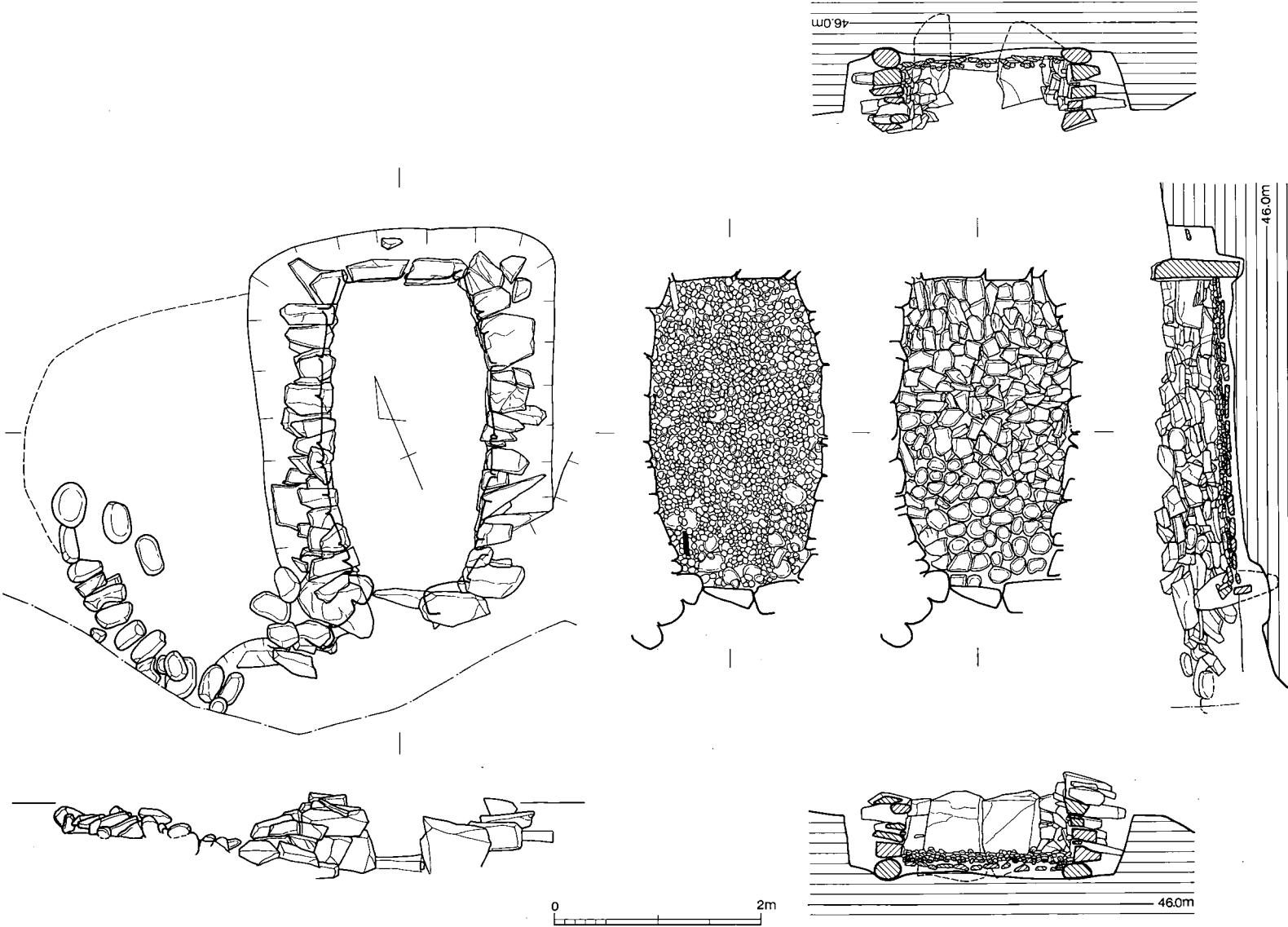
石室の東北部に周溝の一部が残っているが、高い方の北側にいくにつれて細く浅くなっている。その中からは片岩礫と土器片とが散乱して出土した。この周溝内側上端の弧線の中心を求めるとき石室掘り形の奥壁中央になり、半径6.3mを測る。周溝外側上端の弧線の中心は石室中心



第36図 V区 1号墳、2・3号近世墓周辺測量図 (1/200)



第37図 V区 1号墳周溝等土器出土状態実測図 (1/60)



第38図 V区1号墳石室実測図1 (1/60)

と一致し、その半径は8.8mである。古墳の当初の地割り設計からすれば後者の石室中心を墳丘の中心と定めるのが理にかなったあり方であろう。しかし、内護列石の存在等も考えれば、ここは前者すなわち直径約13mが古墳の規模として妥当なところであろう。

石室掘り形は東西2.8~3.0m、南北4m前後の長方形プランで、その中に石室を構築しているが、特に東側は古い堆積土を切り込んでいる。

石室は主軸方位をN-23°-Eにとる単室で両袖の横穴式石室で、胴張りを持った長方形プランをなす。床面で主軸長2.9m、幅は奥壁側1.23m、玄門側1.12m、中央部1.68mを測る。この石室は、まず平坦にした掘り形内床面の北端部に石室の奥壁2枚を縦長に据え置き、次に側壁を構築する予定の所に長めの河原石を横位置に置いて根石とする。そしてその河原石の半分くらいの高さにまで淡黄褐色礫混入土・暗茶褐色粘質土を入れ込んで床面の基盤とする。そのあと河原石の上に片岩を横位置に積んで腰石としたのち、床面の中央から奥壁寄りには偏平片岩礫を、玄門側には偏平河原石を敷いて床面としている。あとは片岩を平積みにして側壁と奥壁とを少しづつ持ちおくって壁面を形成するが、ごく一部には河原石を用いている。残存していたのは4~5段分であったが、積み方としてはやや雑な感を受けた。さきの床面の上に直径5cm内外の小円礫が敷きつめられていたのは追葬時のもの（二次床面）である。

床面中央左側壁に接した所と、右側壁の袖石付近に鉄鎌が、左側壁の袖石付近に砥石が出土したが、いずれも二次床面上である。

玄門部は幅0.5mの間に仕切石を置く。袖石は左が河原石で右は片岩である。

玄門部の前面は羨道といえるほどのものではなく、前庭部と称した方がよい。その左（西）側には貼り石が遺存し、さらにその前面西側には石室を囲繞する如く列石が置かれている。玄門の右側は段落ちとなっているが、本来はここにも列石が存したものと思われる。周溝との關係から言えば、これらは内護列石としうるものであろう。

出土遺物としては、石室西方の内護列石の少し外側（第36図A）と周溝内に土器が、石室内にて鉄器・砥石がある。

出土遺物（図版30、第40・41図）

須恵器（第40図47~58） 47~49の壺蓋のうち47は完形品で、口縁内側の段はシャープである。内天井部には焼き膨れがある。外天井部の回転ヘラ削りは時計回りに施される。口径14.6cm、器高4.1cm。

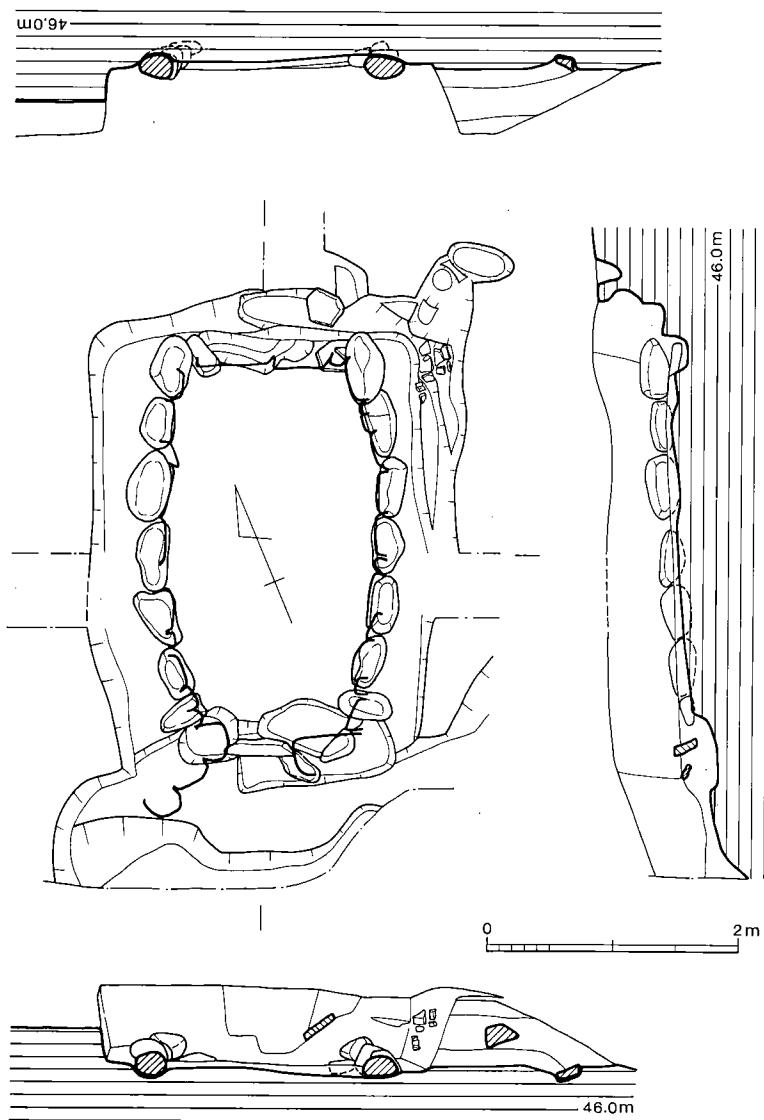
48・49は外天井部と口縁部の境に沈線が入り、49の口唇には僅かな沈線が見られる。ともに外天井部の回転ヘラ削りは反時計回り。48は天井部が分厚く約半分が残存し、復原で口径13cm、器高4.8cm。49は復原で口径14cm。

50~55の壺身は50が完形品で、やや深みのある器形をなし、口縁の立上りは高い。体部内底面

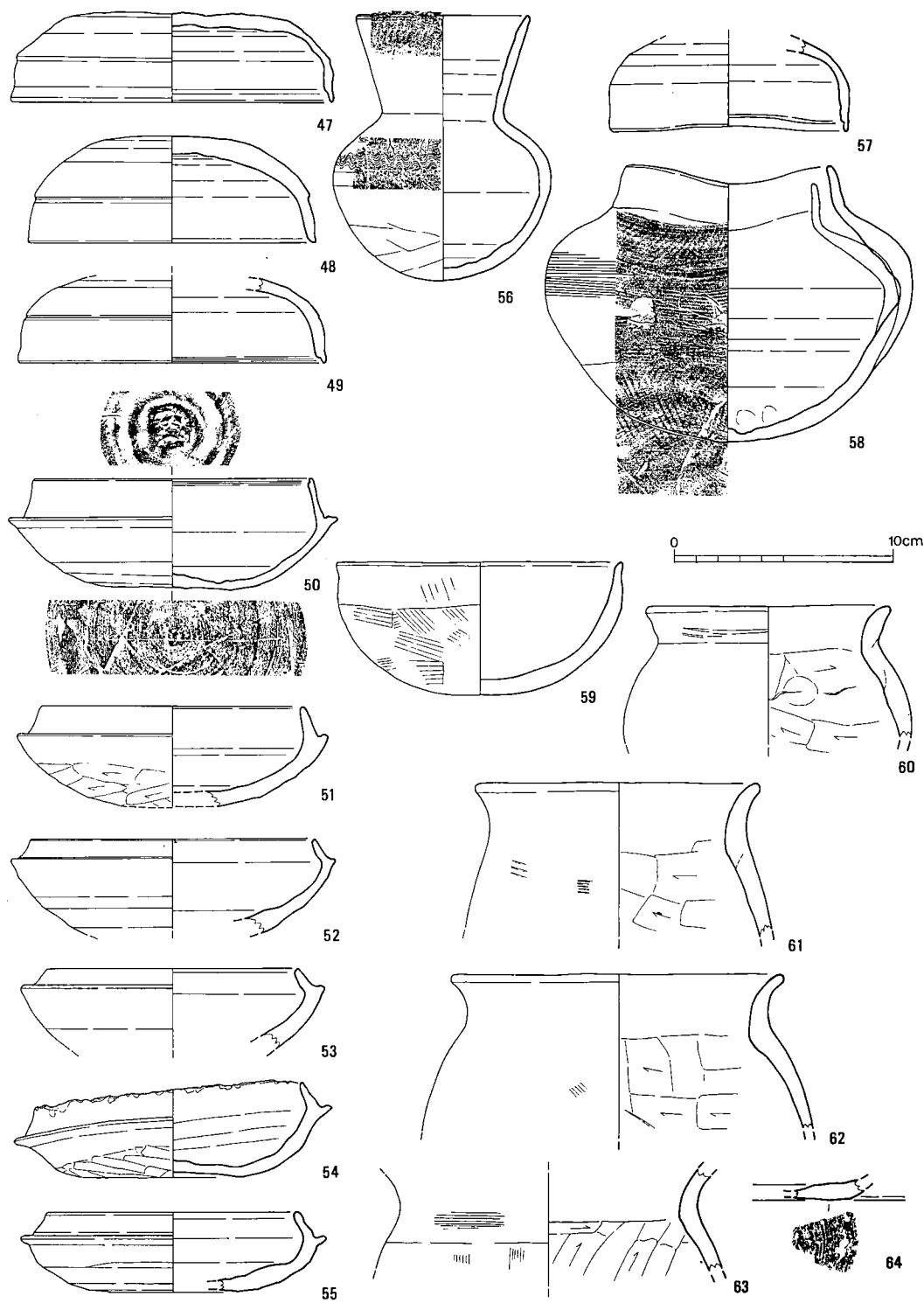
には焼き膨れがある。47の蓋とセットをなすものである。底体部外面のヘラ削りは反時計回りに施され、その上に横一線のヘラ記号があり、同内面には当具痕らしき痕跡がある。口径12.7cm、器高5.1cm。

51は底体部外面が手持ちのヘラ削りで、復原口径12cm。

52・53の口唇部は面をとり、体部の厚みも異なるが同一個体の可能性がある。ただ口径は52が13cm、53が11.4cmに復原された。52の底体部外面の回転ヘラ削りは時計回りに施される。



第39図 V区 1号墳石室実測図 2 (1/60)



第40図 V区 1号墳出土土器実測図 (1/3)

54は完形だが歪みが著しく、口唇部は内外から打欠かれている。底体部外面は手持ちのヘラ削りで、口径12.2cm、器高3.2~4.4cm。

55の底体部外面の回転ヘラ削りは時計回りに施される。復原で口径11.4cm、器高3.6cm。

56は壺で口縁直下と胴部に12条と7条に見える波状文が施される。胴部下半から底部にかけては丁寧な手持ちのヘラ削りである。1/3ほどの破片で、復原で口径8cm、胴部径10cm、器高12cm。

57は壺の蓋、58は短頸壺であり、セットになるものであろう。57はやや歪みがあり、復原で口径10.8~12cm。外天井部の回転ヘラ削りは反時計回りに施される。

58も歪みが大きく、半分は生焼けの状態であって重い。外面は肩部以下がタタキのあとにカキ目とナデが施される。復原で口径8~9.6cm、胴部径15.6~16.8cm、器高11.6~12.4cm。

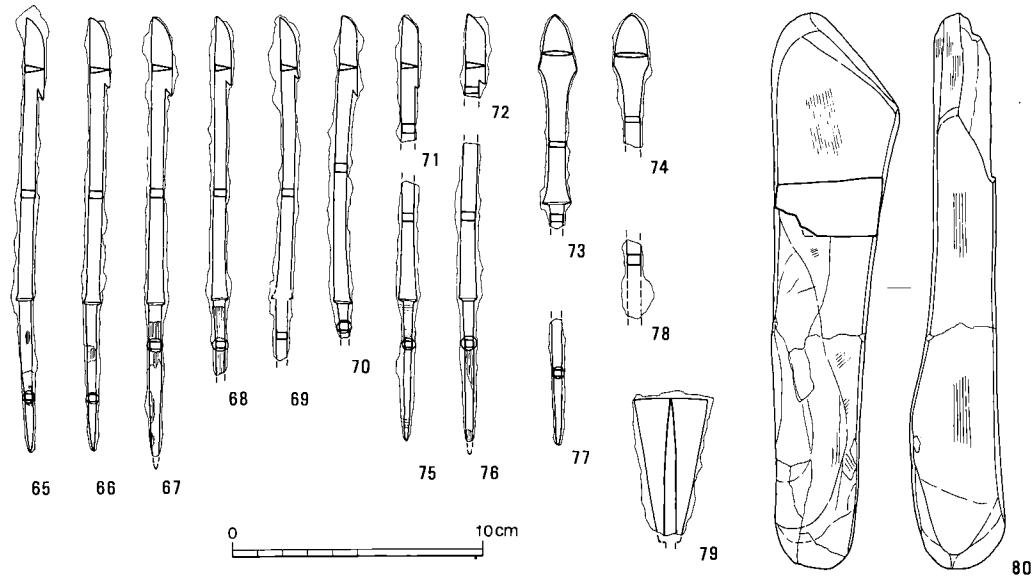
土師器 (第40図59~64) 59はやや厚みのある壺で、外面は刷毛目の上をナデ、内面はナデである。口縁部はごくわずかに外反する。復原で口径13cm、器高6cm。

60~63は甕で、いずれも胴部外面は磨滅しているが、刷毛目のあとにナデを施しているらしく、内面はヘラ削りである。口径は復原で60が11.2cm、61が13cm、62が15.2cm。

64は壊の破片で、底部に糸切り痕があり、混入品である。

以上の土器は、47・50・57が石室西方の内護列石の少し外側、つまり墳丘基底部から、55と64を除く他が周溝内から出土した。55は周辺からの採集品であるが、もとは周溝内にあったものであろう。64は墳丘内からの出土となっているが混入である。

鉄器 (第41図65~79) 全て鎌であるが鋒が著しく細部の不明なものもある。



第41図 V区1号墳出土鉄器・石器実測図 (1/3)

65~72は片刃式であり、鎌身部長は2.5~3.2cm。籠被の形狀は明確ではないが段が付くのは確かである。茎には木質が付着する。完形である65は全長17.2cm、66は17.1cm。

73・74は三角式とすべきか。鎌身は平造に近い両丸造である。

75~78の籠被部と茎部の破片は71~74に接続する一部であろうが接合しない。

79は方頭式の破片である。65~78は石室内二次床面の中央左側壁に接した所、79は右側壁の袖石付近で出土した。

石器（第41図80） 石室内の左側壁の袖石付近、二次床面上で出土した砥石である。頁岩質石材の仕上砥であり、各面を使用しているが、石材そのものに抉れた所と別に破損部がある。全長22.2cm。



Photo. 6 V区作業風景・たたずむひと

2. 近世墓（図版31、第36・42～45図）

3基の近世墓は、1号が谷頭付近の急な斜面にあり、2・3号は1号墳の北西方に近接して営まれている。

1号近世墓（図版31～33、第42・43図）

斜面の藪の中に墓標の立っていた近世墓である。もともとかなりの斜面であった所を、茶褐色粘質土の地山が現れるまで削って緩やかな傾斜を持った平坦面を造成し、そこに墓壙を掘り込んでいる。墓が造られてのちの年月の経過により平坦面は再び埋もれてしまって傾斜面となり、墓標もその基部が埋もれていた。墓標は東向きに立てられている。

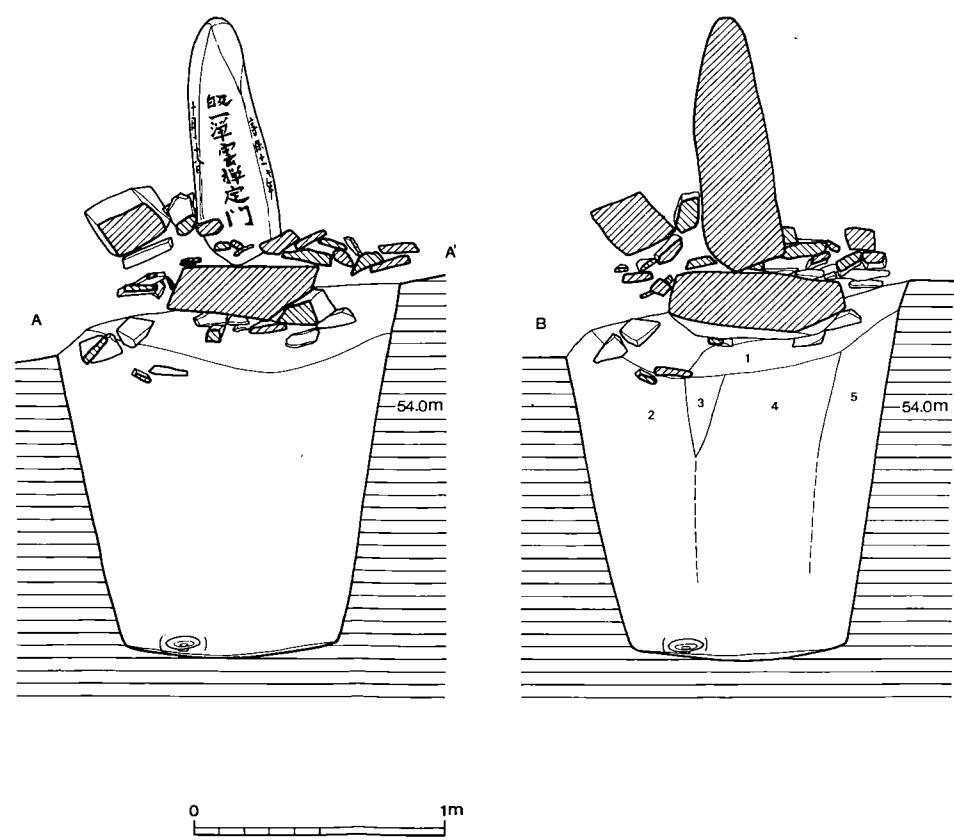
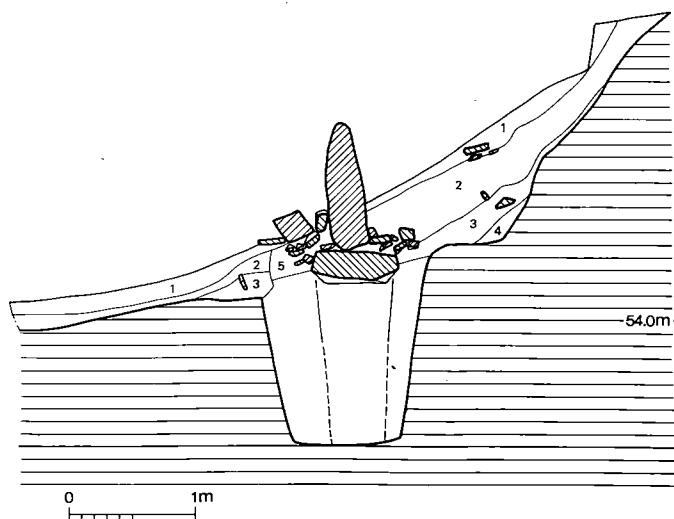
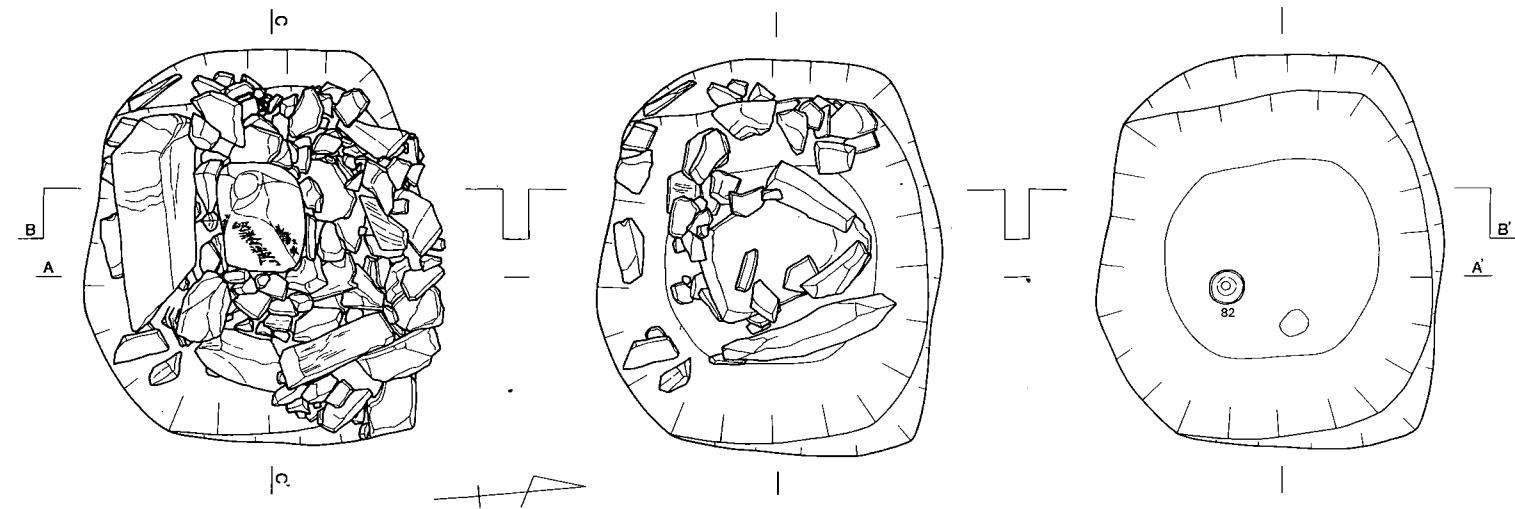
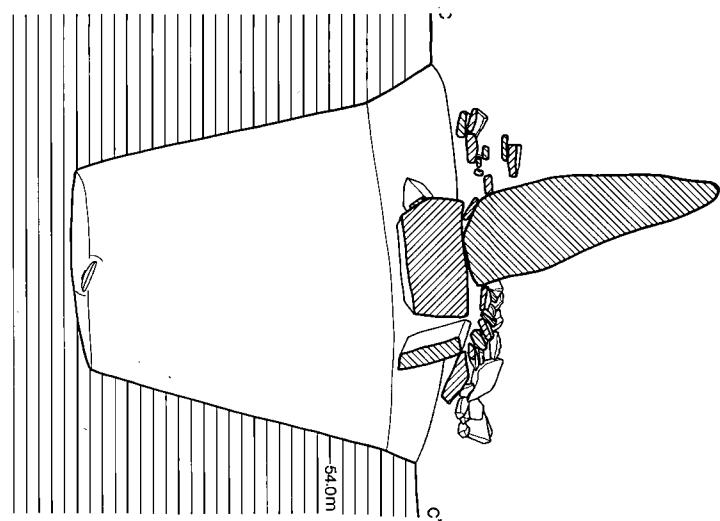
墓壙上面の平面プランは東西にやや長めながらも隅円の方形プランとしてよい。上面で東西157cm、南北133cm、底面で東西78cm、南北85cmを測り、深さは約150cmで円筒状をなす。掘り下げてゆく中で壙内に棺の痕跡は認められなかつたが、断面土層よりみて直径50～60cmほどの桶棺を埋置したものと思われる。なお、墓壙掘り形の周囲から鉄釘が出土しているが、木棺のための釘であったとは考えにくい。壙底のやや南寄りに陶器皿が正立の状態で出土した。また東寄りには木質の腐朽した漆椀があった。位置的には棺の外に置かれたものようでもあるが、棺内副葬とみるべきであろう。漆椀については図示できない。

桶棺を埋置したのち、棺の上には蓋押さえの石が置かれ、その上には墓標の台石として厚さ25cm内外で40×68cmほどの五角形状の石が据えられていた。この台石の東側、つまり墓の正面側には墓としての正面を意識したかの如くに偏平石が横向きに置かれている。これらの回りには板石・角礫などが置かれ、あるいは積まれている。墓標の石を除いて全て片岩である。

墓標は花崗岩の自然石で、基部が一辺35～43cmの四角形をなし、頭部が尖り氣味の角錐状で高さ約100cmを測る。これが先の台石の上に据えられていたが、少し西に倒れ加減であった。これの一面には「坂一淨雲禪定門」の文字が陰刻され、その面を東向きにして立てられていたものである。その北面には「享保十一年」、西面には「十月十八日」の年月日が陰刻されているが、文字は達筆としてよいだろう（第43図81）。「坂」は「歸＝帰」と同じであり、「享保十一年」は西暦1726年である。

出土遺物（図版35、第43図82～90）

82は壙底から出土した陶器の皿である。陶器とするが磁器に近い。口径に比して底径がやや小さい感がある。内底面には幅1.7cmの環状の釉の搔き取りがあり、高台疊付部分も露胎である。釉は灰黄色できわめて薄く掛かっており、内面の方が明るい色調である。また細かい貫入が入っている。ほぼ完形であるが、口縁の5箇所に幅0.7～2.2cmの欠損部分がある。これは使



第42図 V区1号近世墓周辺測量図・実測図 (1/30、1/60、1/150)

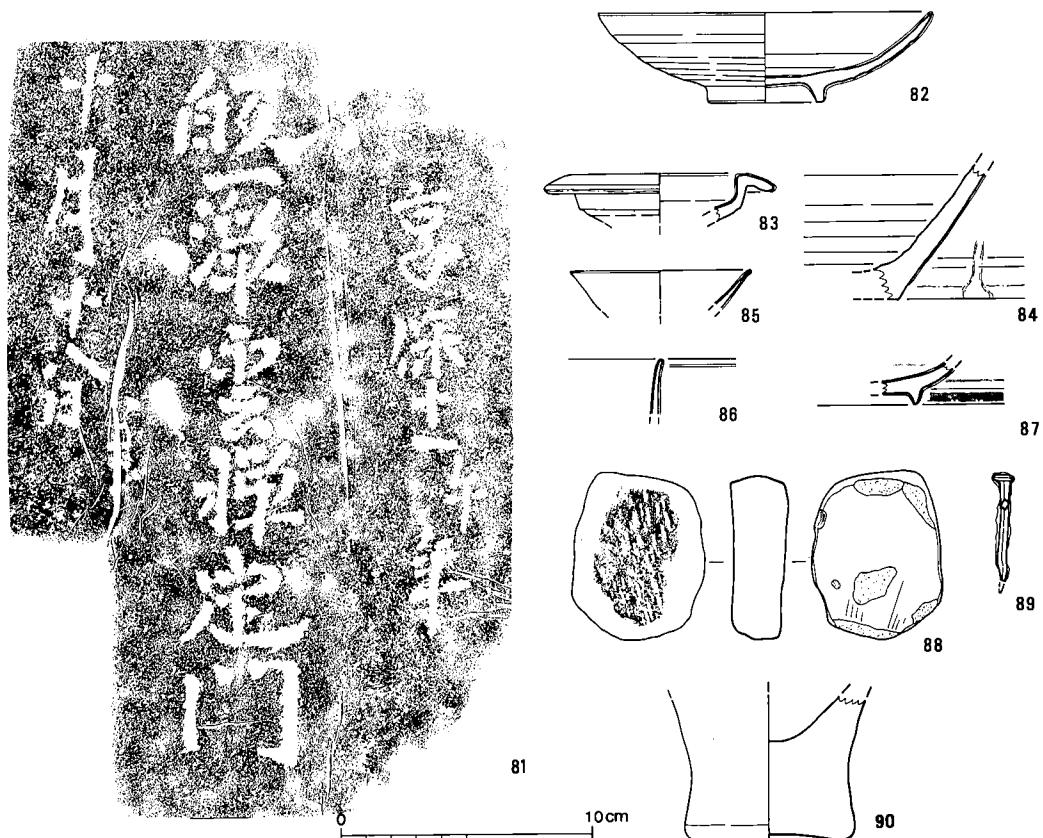
用時に欠けていたものか副葬時に打欠いたものかわからない。口径13.2cm、底径4.7cm、器高3.6cm。小石原村中野上の原窯かまたは火口谷1号窯の製品であろう。

図示できなかったが、漆椀は赤と黒の漆皮膜が残っていたのみであった。

83～90は墓壙掘り形の周囲から出土したものである。83は磁器に近い陶器でおとし蓋と思われる。口縁上面と内面に黄茶褐色の釉が掛かり、外面は茶褐色の露胎である。口径9.2cm。84も陶器で壺になろう。外面に飴釉が掛かり、内面は鉄釉である。83の蓋とセットになるのかもしれない。85は白磁で猪口であろうか。外面の口縁直下が少しくぼむ。復原口径7.2cm。

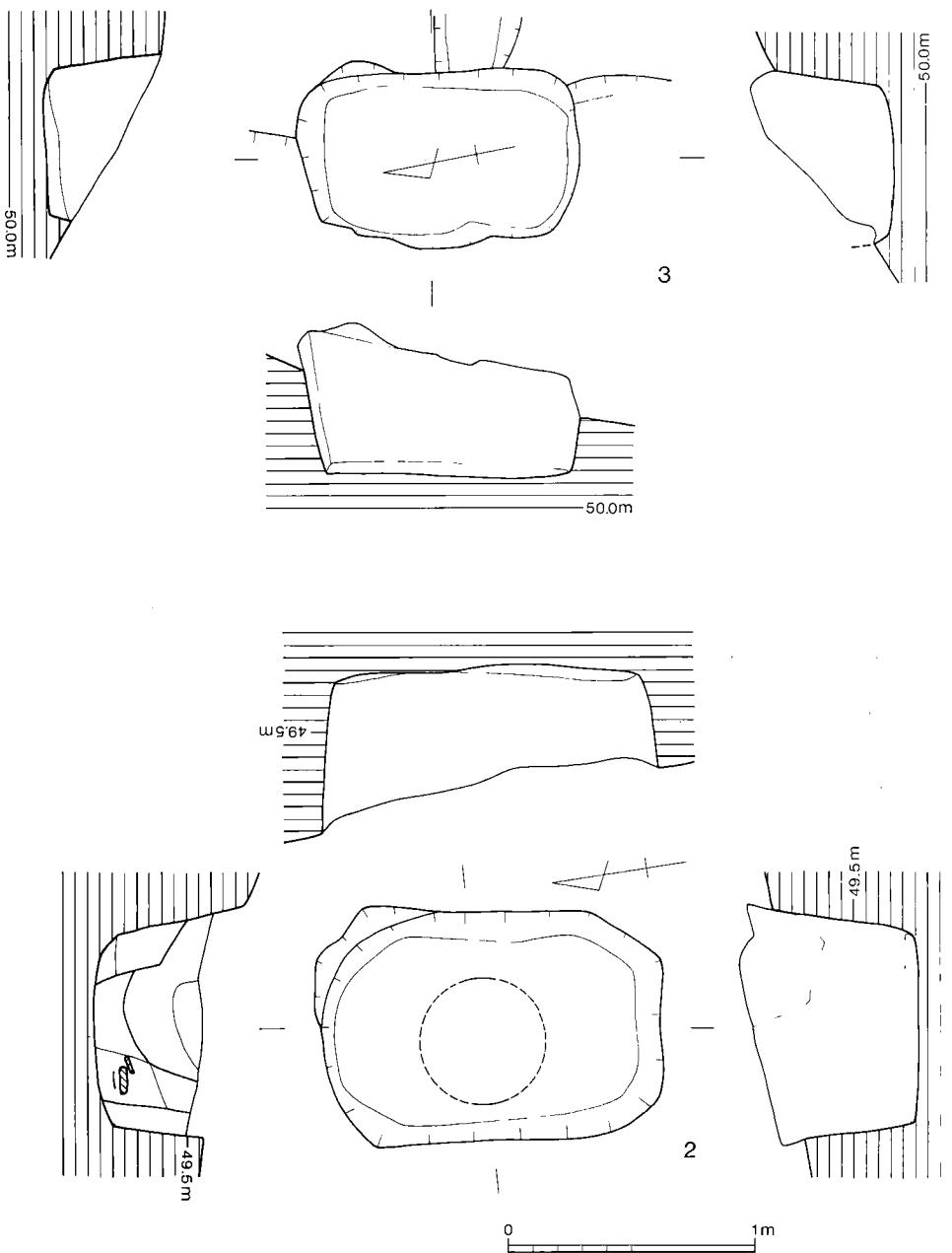
86も白磁だが器形不詳。ごく僅かに青味がかかった所がある。87は染付磁器碗で、高台畳付のみ露胎となる。呉須はコバルトブルーと群青色とに発色している。88は瓦の破片で墓標下の積石中にあった。胎は淡黒色で、外面は表裏とも灰褐色をなす。表面はなでと一部にミガキがあるらしい。裏面は繩目痕と一部に布痕がある。89は鉄釘で錆が著しい。現存長4.3cm。

90は弥生土器の甕の底部である。内外とも磨滅が著しい。二次火熱を受けているらしい。この土器のみ全くの時期はずれであるが、この外之隈遺跡の西方に隣接する大迫遺跡に弥生中期初



第43図 V区 1号近世墓墓標拓影 (1/6)、出土遺物実測図 (1/3)

頭の竪穴住居跡と土壙があるので、それに関連するものであろう。



第44図 V区 2・3号近世墓実測図 (1/30)

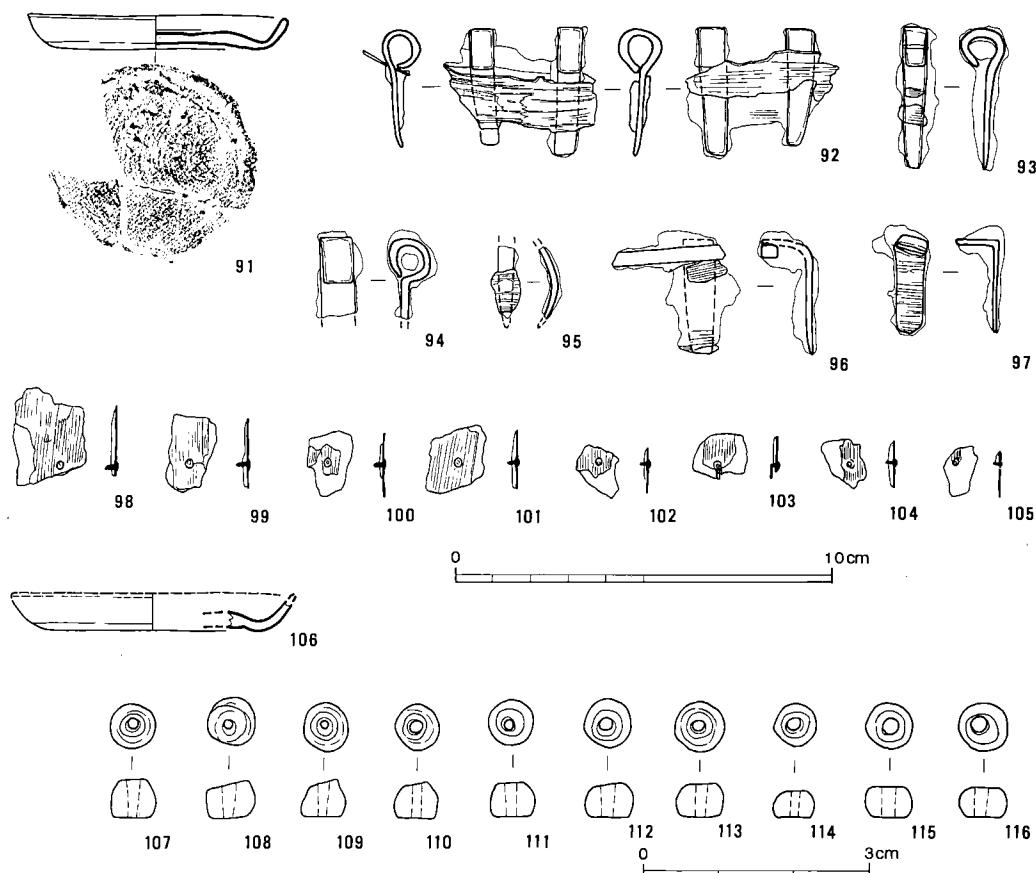
2号近世墓（図版34、第44・45図）

1号墳主体部の北西約15mの所にある。南北方向に長軸をとる長方形土壙の中に棺を埋置したものである。土壙は隅円の長方形プランで、底面において主軸長122cm、幅72cmを測り、深さは最も遺存のよい所で65cmが残る。主軸方位はN-8.5°-E。墓壙の東西土層で見ると、壙内の中央やや西寄りに底面幅45~50cmの棺の痕跡があり、棺内埋土中の床面より5cm前後のあたりで土師器小皿と釘が出土した。掘り形で見ると木棺の可能性が高いが、発掘調査時の所見では桶棺とする。

出土遺物（図版35、第45図91~105）

91は土師器小皿で全体に薄いつくりである。約5/6が残り、完形にはならない。底部外面には糸切り痕があり、上げ底になる。口径6.9cm、底径5.6cm、器高0.9cm。

92~94は折り曲げた円環の付く平釘で、横位の木質が付着する。92は1.7cmの間隔を置いて2個が並んでおり、頭部下には薄い鉄板も遺存する。全長は92が3.1cmと3.4cm、93が3.7cm。



第45図 V区 2・3号近世墓出土遺物実測図 (1/2, 1/1)

95~97も横位に木質の付着したもので96・97は頭がL字形に折れ曲がっている。縁金具であろう。

98~105は鉢らしきものが付いた薄い鉄板で、木質が錆着する。これも縁金具であろう。

3号近世墓（図版34、第44・45図）

2号近世墓の西約5mの所にあり、2号と同様に南北方向に長軸をとる長方形土壙であるが、棺の痕跡は確認できなかった。おそらく木棺を埋置したものであろう。土壙は長方形プランで、底面において主軸長97cm、幅58cmを測り、深さは最も遺存のよい所で57cmが残る。主軸方位はN.11°·E。埋土下位より土師器小皿片と数珠玉が出土した。

出土遺物（図版35、第45図106~116）

106は1/4ほどの破片の土師器小皿で体部のつくりは薄い。底部外面に糸切り痕が僅かに見える。復原で口径7.4cm、底径5.8cm、器高1cm。

107~116はガラス製の数珠玉である。別にあと2個分の破片があるから総数12個である。かなり風化していて白っぽく見えるが、もとは淡灰色の色調をなす。練りガラスである。平均して径は6mm、高さ4.4mm、孔径1.9mmを測る。

●その他出土遺物（第46図117~119）

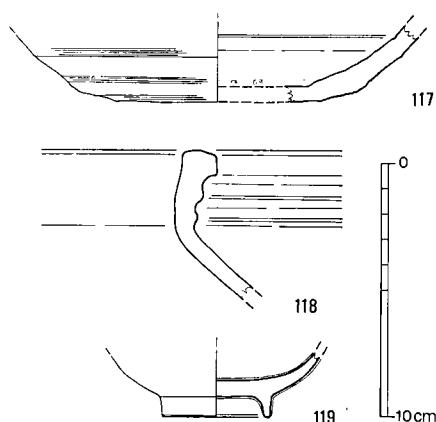
1号墳と2号近世墓の中間あたりから出土した遺物がある。

117は須恵器で壺の底部になろう。外面はヘラ削りのうちにカキ目とナデを施し、内面は回転ナデである。外底面には一直線のヘラ記号の一部が見える。底径8.2cm。1号墳に関連する土器であろう。

118は陶器の壺の口縁部片で、薄い鉄釉が掛かるが焼き締めに近い。

119は染付の磁器碗で、体部外面に群青色に発色した吳須の2本線が入る。高台畳付きのみ露胎である。高台径4.4cm。118・119は近世墓に関連した遺物とみてよい。

なお、1号近世墓と1号墳の中間あたりにおいて寛永通宝が出土していたが、整理途上にて所在不明となった。これは近世墓に関連するものか、あるいは古道が近くを通っていたことに関連しての遺物であろうが、近世墓の関連ならば六道銭であったことも考えられる。



第46図
V区 2号近世墓付近出土遺物実測図 (1/3)

IV 自然科学系の調査分析

A. 外之隈遺跡出土古墳時代人骨の調査

(PL. 1・2, Fig. 1~3, Table. 1~5)

金 爽賢^{*1} · 田中 良之^{*2}

1. はじめに

1988年の本遺跡調査において1体の古墳時代人骨が出土した。調査にあたった福岡県教育委員会から、当時九州大学医学部解剖学第二講座に在籍していた田中と土肥直美（現琉球大学医学部）に、人骨の調査が依頼された。現地での調査を終えて、人骨は九州大学医学部に保管して報告書作製の時期を待つこととなった。その後両名とも同講座を離れてしまうこととなったが、平成6年9月より医学部の人骨資料が田中が所属する大学院比較社会文化研究科に移管され、このようなかたちで報告する次第となった。

また、報告書作製にあたっては、朝倉高校が行った本遺跡の調査成果も併せて報告することとなったため、「1号石棺」出土人骨〔編者註……本書II-C参照。以下「朝倉高校1号石棺」とする〕についても報告する。

2. 人骨所見

出土状態

【II区1号墳1号墓人骨】

1号墳の最南部にある主体部に葬られた単体埋葬の被葬者で、出土状態については、遺構の項に詳しいが、東頭位の仰臥伸展葬で、頭骨は左側へと転落したかたちとなっている。下顎も体軸に直交しており、本来の位置関係ではない。また、胸椎から仙骨にかけての軀幹骨が乱れており、足根骨・指骨も原位置を動いている。しかし、下肢骨は関節した状態を保っており、上肢もおおむねそれに近い。このように、全体としては原位置に近く、乱れも特定の部位を対象にしたというような、人為を感じさせるものではない。したがって、むしろ小動物によって骨化後に一部が乱された可能性が高いと考える。

右肩部に連弧文鏡、足部に刀子等の鉄器を副葬する。

【朝倉高校1号石棺人骨】

1号墳と2号墳の中間に造られた箱式石棺で、昭和31年に朝倉高校によって調査されている。報文〔編者註……本書II-C参照〕によると東頭位で頭骨と左右脛骨のみ遺存していた。おそらく仰臥伸展葬であったと思われる。棺の東南隅に仿製連弧文鏡が副葬されていた。

保存状態

【II区 1号墳 1号墓人骨】

保存は比較的良好で、頭骨から下肢骨まで全身の部位が遺存している。しかし、どの部位も完存したものはなく、部分的に腐食し失われている。

顔面をはじめ赤色顔料の付着は認められない。

【朝倉高校 1号石棺人骨】

現存するのは頭骨のみである。頭蓋底を欠く他はほぼ完存している。顔面を中心に赤色顔料が付着している。

年齢

【II区 1号墳 1号墓人骨】

頭蓋主縫合は内外板とも開離するが、下顎の左右および右上顎の第3大臼歯が萌出しており、右大腿骨にも骨端線は認められない。残存歯式は以下に示すとおりだが、歯牙の咬耗度はおむねMartin(1922)の1度、柄原(1957)の1a度である。したがって、これらから本人骨は成年の前半期に属すると推定されよう。

○	○	M ¹	○	○	○	○	○	○	○	I ¹	○	○	○	×	M ²	×
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₂	I ₂	C	O	P ₂	M ₂	M ₂	M ₂

○歯槽開放 ×脱落

【朝倉高校 1号石棺人骨】

頭蓋主縫合は、外板は開離し、内板は閉離する。残存歯式は以下に示すとおりだが、歯牙咬耗はMartinの1~2度で、柄原の2a度である。したがって、これらから本人骨は成年の半ばから後半期に属すると推定されよう。

○	M ²	M ¹	P ²	P ¹	○	○	○	○	○	○	○	○	○	P ²	M ¹	○	○
---	----------------	----------------	----------------	----------------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----------------	----------------	---	---

性別

【II区 1号墳 1号墓人骨】

前頭結節は比較的発達し、外後頭隆起・乳様突起・眉弓の発達は弱い。また、大腿骨粗線・

上腕骨三角筋粗面の発達も弱い。したがって、これらの所見から、本人骨は女性であると判定される。

【朝倉高校1号石棺人骨】

前頭結節は比較的発達し、乳様突起・眉弓の発達は弱いことから、本人骨は女性であると判定される。

Table. 1 頭蓋主要計測値 (mm)

マルチン No.	項 目	II-1号(♀) 1号石棺(♀)	1号石棺(♀)
1	頭蓋最大長	179	(172)
8	頭蓋最大幅	—	131
17	Ba - Br 高	128	125
8/1	頭長幅示数	—	76.2
17/1	頭長高示数	71.5	72.7
17/8	頭幅高示数	—	95.4
45	頬骨弓幅	—	124
46	中顔幅	95	96
47	顔高	111	—
48	上顔高	61	66
47/45	顔面示数(K)	—	—
47/46	顔面示数(V)	116.8	—
48/45	上顔面示数(K)	—	53.2
48/46	上顔面示数(V)	64.2	68.8
51R	眼窩幅(右)	40	40
51L	眼窩幅(左)	—	41
52R	眼窓高(右)	35	33
52L	眼窓高(左)	35	33
52/51R	眼窓示数(右)	87.5	82.5
52/51L	眼窓示数(左)	—	80.5
54	鼻幅	23	23
55	鼻高	47	50
54/55	鼻示数	48.9	46

Table. 2 上腕骨計測値 (mm)

マルチン No.	項 目	II-1号(♀)	
		r	l
5	中央最大径	19	19
6	中央最小径	14	14
7	骨体最小周	53	42
7a	中央周	56	56
6/5	骨体断面示数	73.7	73.7

Table. 3 橋骨計測値 (mm)

マルチン No.	項 目	II-1号(♀) (左)
4	骨体横径	13
5	骨体矢状径	10
5/4	骨体断面示数	76.9

Table. 4 大腿骨計測値 (mm)

マルチン No.	項 目	II-1号(♀) (右)
1	最大長	432
2	自然位長	432
6	骨体中央部矢状径	26
7	骨体中央部横径	23
8	骨体中央周	76
8/2	長厚示数	17.6
6/7	骨体中央断面示数	113

計測的形質

II区1号墳1号墓人骨の頭骨・四肢骨、および朝倉高校1号石棺人骨の頭骨の主な計測値をTable. 1～4に示す。朝倉高校1号石棺人骨の頭長幅示数は76.2で中頭、ウィルヒョウの上顎示数はII区1号墳1号墓人骨が64.2で過低顎、朝倉高校1号石棺人骨が68.8で低顎にそれぞれ属する。また、右大腿骨最大長からPearsonの式を用いて推定したII区1号墳1号墓人骨の身長は156.9cmである。

Table. 5 外之限遺跡出土人骨の頭骨小変異

人骨 小変異	II区1号墳1号墓		1号石棺	
	右	左	右	左
インカ骨	—		/	
ラムダ小骨	—		—	
頸後頭縫合	—	/	/	/
上矢状洞溝左傾	—		/	/
頸管欠如	—	—	/	/
舌下神経管二分	—	—	/	/
頸靜脈孔二分	—	—	/	/
頸前結節	+	+	/	/
第三後頭頸	—		/	
アステリオン骨	—	/	—	/
後頭乳突縫合小骨	+	/	/	/
鼓室骨裂孔	+	+	—	—
外耳道骨腫	—	—	—	—
頭頂切痕骨	+	/	—	—
頭頂孔欠損	—	+	—	—
鱗状縫合小骨	—	—	—	—
翼上骨	—	—	—	—
前頭側頭連結	—	—	—	—
前頭縫合	—		—	
眼窩上縁孔	—	—	—	—
副眼窩下孔	—	—	—	—
内側口蓋管骨橋	—	—	—	+
上顎隆起	—	—	—	—
口蓋隆起	+		—	
床状突起間骨橋	—	—	—	+
副オトガイ孔	/	—	/	/
二分頬骨	/	/	—	—
頬骨顔面孔欠損	/	/	—	—
下顎隆起	—	—	/	/
顎舌骨筋神経溝骨橋	+	—	/	/

+：有 −：無 /：不明

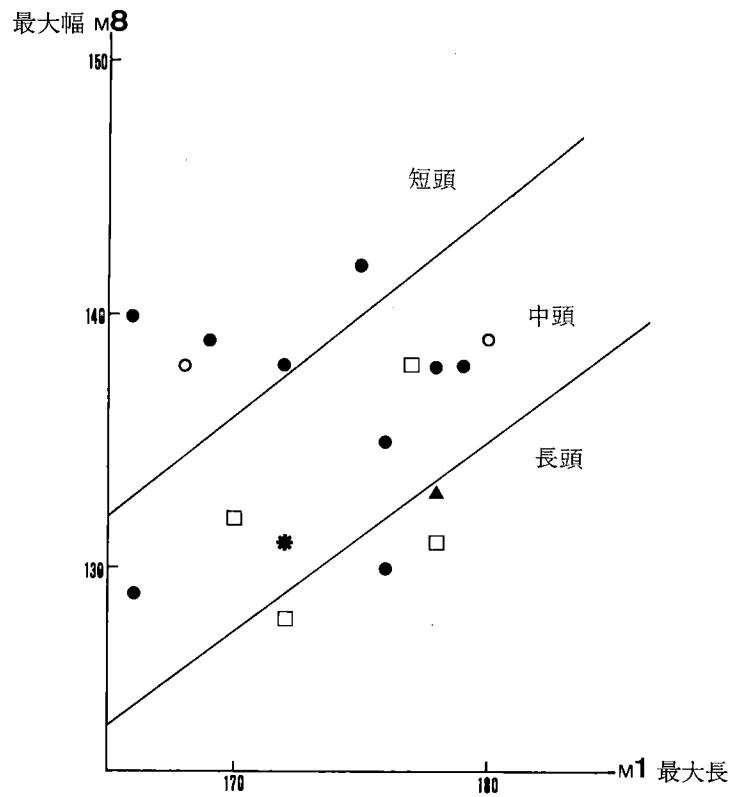


Fig.1 頭蓋最大長・最大幅 (女性)

* 朝倉高校1号石棺人骨 ● 筑前古墳人 ▲ 肥前古墳人
 ○ 筑後古墳人 □ 豊後古墳人

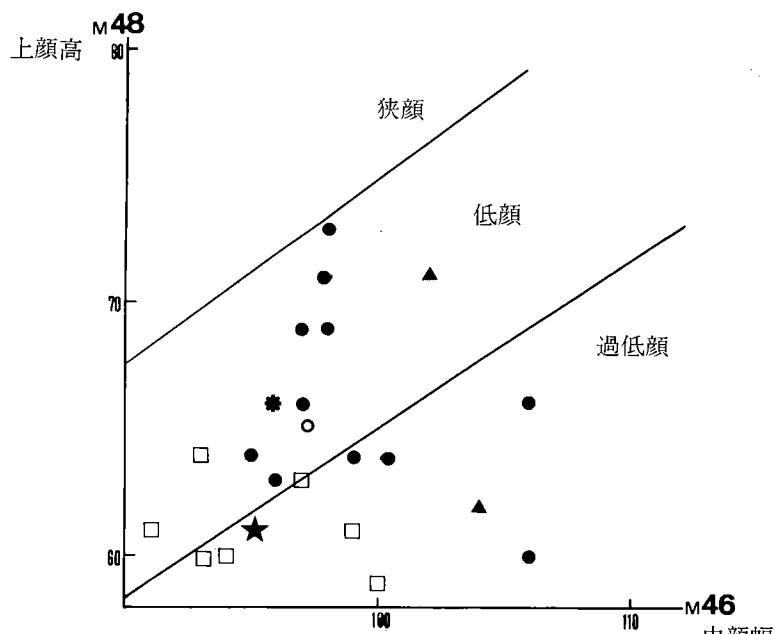


Fig.2 中顎幅・上顎高 (女性)

★ II-1-1号人骨 ● 筑前古墳人 ▲ 肥前古墳人
 * 朝倉高校1号石棺人骨 ○ 筑後古墳人 □ 豊後古墳人

非計測的形質

2体の頭骨小変異の観察結果は、Table. 5 のとおりである。これら観察された小変異のうち、II区1号墳1号墓人骨の頸前結節・口蓋隆起は著明ではない。なお、同人骨は成年女性であるが、寛骨には前耳状溝は認められない。

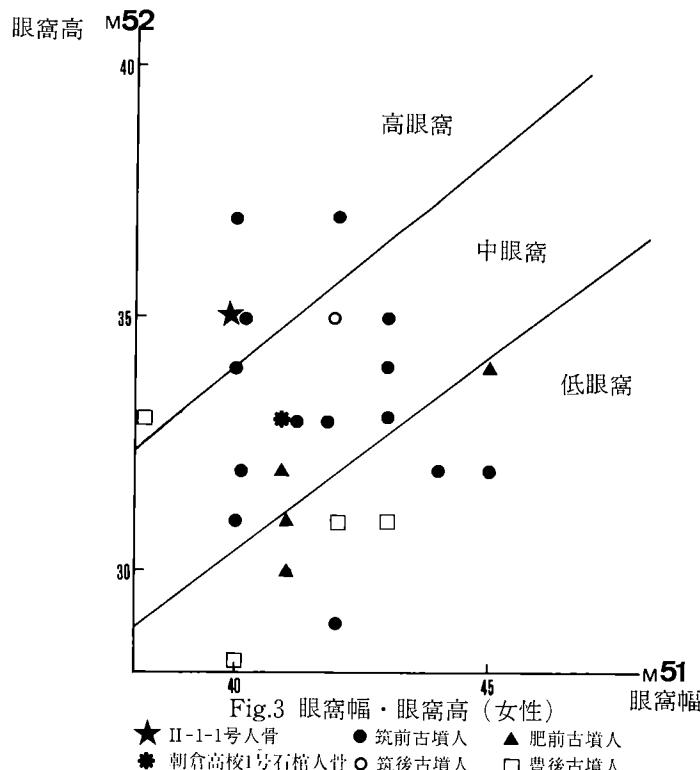
特記事項

【II区1号墳1号墓人骨】

上顎に歯周症の形跡を認める。すなわち、上顎右第2・3大臼歯および左第2大臼歯歯槽内壁に、歯根膜炎によると思われる粗慥が認められる（P L. 2）。該当する歯牙のうち右第3大臼歯は遊離歯として出土しているため、歯牙の脱落には至っていないことがわかるが、他の2本については死亡時の状態は不明である。ただ、左第1大臼歯はすでに脱落して歯槽も閉鎖しており、歯周症が上顎大臼歯部全体に広がって、進行していたことがうかがえる。

【朝倉高校1号石棺人骨】

II区1号墳1号墓人骨と同様に、歯周症の形跡を認める。すなわち、上顎右第3大臼歯、左第2・3大臼歯歯槽骨内壁に歯根膜炎によると思われる粗慥が認められる（P L. 2）。



3. 考察

本遺跡出土人骨は2体とも女性であった。九州地方の古墳人骨については、これまで主として男性の比較から、旧国でいえば筑前を中心として北豊前→南豊前→南九州、あるいは肥前・筑後→豊後→南九州といった方向で地理勾配が認められ、筑前の形質が弥生時代以来の高上顔・高眼窓といった、いわゆる渡来的形質であることから、弥生時代における渡来的形質の拡散の結果として理解されている(Doi and Tanaka, 1987)。この理解に基づけば、本遺跡が位置する朝倉町は筑前でも筑後に近く、筑前の平均よりは筑後に近い形質が予想されるだろう。

Fig. 1に頭蓋最大長・最大幅、Fig. 2には中顎幅・上顎高、Fig. 3は眼窓幅・眼窓高をそれぞれ2軸にとって、筑前・筑後・肥前・豊後の古墳人女性人骨(九大解2、1988)とともにプロットしてみた。Fig. 1には朝倉高校1号石棺人骨のみを示しているが、頭長幅示数は76.2で中頭に属しながらも、最大長・最大幅ともに値が小さいことがうかがえる。Fig. 2では、II区1号墳1号墓人骨は上顎示数が64.2で過低顔、朝倉高校1号石棺人骨は68.8で低顔に属しており、やはり上顎高・中顎幅ともに値が小さい。そして、サイズの小ささから、筑前の過低顔の個体とともに、豊後古墳人に近いことも同時に知ることができる。ところが、Fig. 3の眼窓をみると、2体は中～高眼窓に属しており、低眼窓の領域に分布する豊後古墳人とは差がある。

このように、外之隈遺跡の2体の古墳人は、これまで渡来的形質とされてきた上顎と眼窓からみると、後者は筑前古墳人の中でも低い個体に属し、繩文的形質をより多く残すと考えられている(Doi and Tanaka, 1987)。豊後古墳人とむしろ近い。また、頭型も中頭に属しながらも、頭蓋最大幅・最大長とも値が小さい点は、上顎高・中顎幅とも共通した特徴である。それらに対して、眼窓は高い傾向にあり、豊後古墳人とは差がある。したがって、全体としては筑前古墳人の平均的形質と豊後古墳人の中間的な特徴をもつということができよう。この2体のみで朝倉地域古墳人の形質を代表させるのは早計であることはいうまでもないが、朝倉地方が筑前に含まれながらも、筑後・豊後へと至るルート上にあるという地理的位置を考えると興味深い。今後男性人骨、弥生人骨を含めた資料の増加によって、この地域における形質的特徴が明らかにされることが望まれよう。

さて、外之隈遺跡出土人骨は2体とも成年女性であった。時期は古墳時代でも初期に近く、朝倉高校1号石棺はI区1号墳と2号墳の中間に造られた箱式石棺で墳丘等は不明であり、II区1号墳1号墓は1号墳の墳頂に造られた4つの主体部のうちの一つであった。この4つの主体部は中央に木棺墓が2基、その外に石棺墓が1基ずつという配置で、おそらくは木棺と石棺が一つのセットをなすものと考えられよう。このように2基をセットとして理解すると、被葬者が男女のペアであり、夫婦であったという想定もでてこよう。たしかに古墳時代前半期においては男女がペアで葬られる例も多い。しかし、歯冠計測値をはじめ人骨の遺伝的形質を用い

て分析を行ってきた結果からは、これら男女は、男性同士や女性同士の埋葬例と同じくキョウダイ関係にあったと考えられる。つまり、集団の指導者が一人に絞りこまれない場合は、複数のキョウダイが指導者として存在し得たことが考えられるのである（田中・土肥, 1989；田中, 1992）。

そうした場合、II区1号墳1号墓人骨の寛骨に前耳状溝が認められなかった点から、「女性の指導者」が終生独身の巫女の性格をもった人物であった可能性も考えられよう。しかし、古墳時代における女性被葬者を巫女とする「政祭分離のヒメ・ヒコ制」には、すでに今井堯の批判がある（今井, 1982）。また、古墳時代前半期において、女性が造墓契機となる事例はそれほど珍しくはなく、造墓契機となった人物の性比は全国的にみて男性6女性4の割合であるが（田中, 1993）、これら女性人骨の多くに前耳状溝が認められるのである。^{註1}したがって、この成年女性が集団を代表する指導者の一人ではあっても、独身の巫女というよりはたまたま出産を経験しなかったという可能性の方が高いだろう。

最後に、調査時からこんにちまでいろいろと便宜をはかっていただいた福岡県教育委員会の伊崎俊秋氏と、人骨整理にあたってご助力いただいた九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座の諸氏に感謝申し上げたい。

註1

九州大学大学院比較社会文化研究科考古・人類資料室所蔵（旧医学部解剖学第二講座所蔵人骨）の古墳時代女性人骨における寛骨前耳状溝を観察した結果、観察可能な28体中21体に認められた

Doi, Naomi and Yosiyuki Tanaka, 1987 : A Geographical Cline in Metrical Characteristics of Kofun Sculls in Western Japan. 人類学雑誌. 95-3.

今井堯, 1982 : 古墳時代前期における女性の地位. 歴史評論, 1981(2)

九州大学医学部解剖学第二講座. 1988 : 日本民族・文化の生成. 六興出版, 東京.

Martin, R., 1922 : Lehrbuch der Anthropologie II.

田中良之, 1982 : 出土人骨から推定する親族構造. 考古学ジャーナル, 348.

田中良之, 1993 : 古墳被葬者とその変化. 九州大学九州文化史研究所紀要, 38.

田中良之・土肥直美, 1989 : 出土人骨から親族構造を決定する. 新しい研究法は考古学になにをもたらしたか. クバプロ, 東京.

柄原博, 1957 : 日本人歯牙咬耗に関する研究 第1編 咬耗の形態について. 熊本医学会雑誌, 31補冊4

※1 九州大学大学院文学研究科博士課程

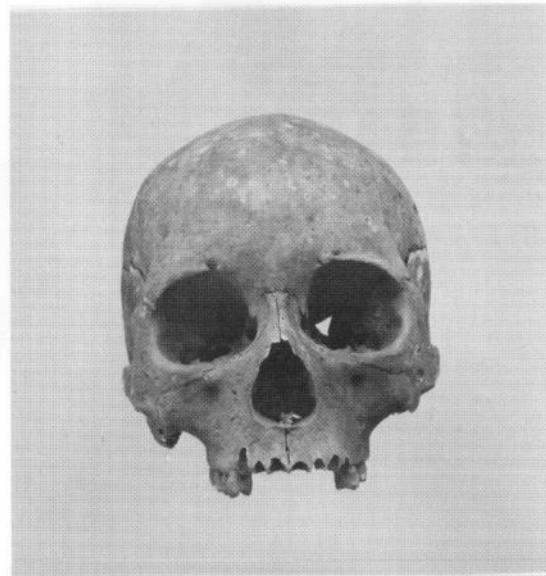
※2 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座



上面觀



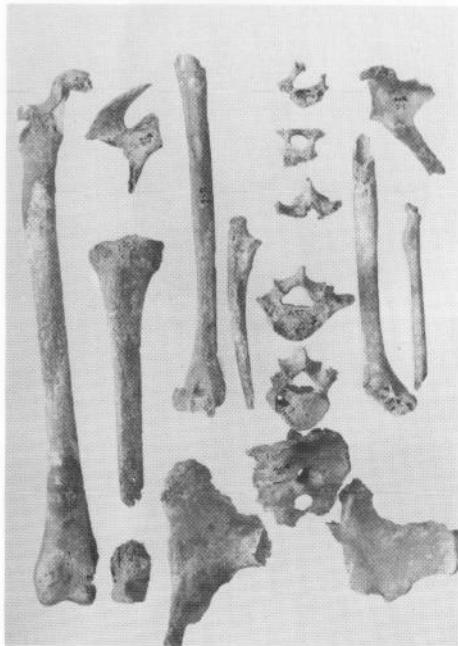
正面觀



側面觀



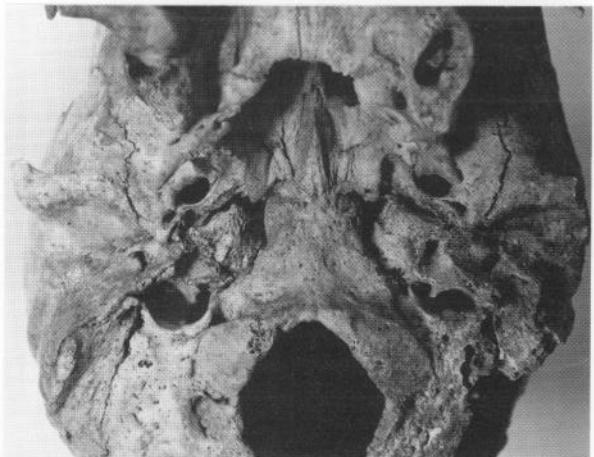
外之隈遺跡出土人骨（左：II-1-1号、右：朝倉高校1号石棺）



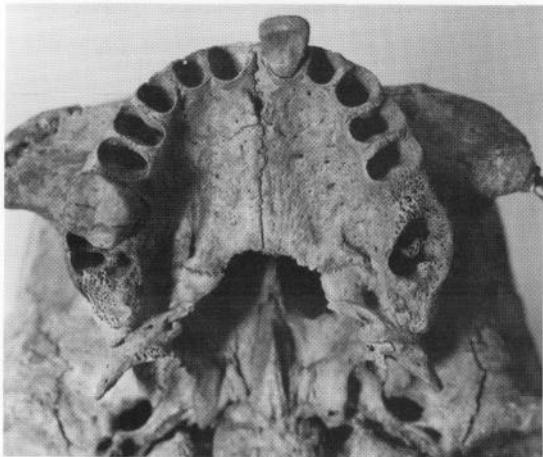
II-1-1号 体部骨



II-1-1号人骨 (後頭乳突縫合小骨・アステリオン骨)



II-1-1号人骨 (鼓室骨裂孔)



II-1-1号人骨 (歯周症)



朝倉高校1号石棺人骨 (歯周症)

B. 外之隈遺跡出土の赤色顔料について

(Table.6)

本田 光子^{*1}・川村 秀久^{*2}

はじめに

外之隈遺跡出土の赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察とX線分析を行い、その種類や特徴を調査した。試料の一覧と分析結果およびそれに基づいて推定される赤色顔料の種類をTable.6に示す。墳墓出土例や土器・木器等の彩色例に関する現在までの知見によれば、出土赤色物は鉱物質の顔料で、酸化第二鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行い、若干の考察を試みた。

試料

提供を受けた赤色物は、赤色の粉末が凝集した径1~2mmの小塊が多量に混じった土砂（I区1号墳1号墓）と赤色の粉末が全体に拡散した赤みを帯びた土（II区1号墳1・3・4・5号墓）である。赤色粉末の小塊あるいは赤色の土砂を針先に付く程度採りプレパラートを作製した。提供を受けた赤色粉末を含む土砂の全量を縮分し研和したものを、蛍光X線分析の試料とした。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・反射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の赤色顔料としてはベンガラ（酸化第二鉄）、朱（硫化水銀）、鉛丹（四三酸化鉛）の3種が考えられるが、三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。表に示したとおり、赤色顔料としてはベンガラ粒子と極めて僅かな朱粒子？を認めた。ベンガラにはいわゆるパイプ状を呈する透明感の強い管状粒子(20~70 μm)が含まれていた。特にI区1号墳1号墓のものには多量に認められた。管状のベンガラ粒子はII区1号墳1・3号墓にも認められたが、II区1号墳4・5号墓のベンガラには見いだせなかった。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；50KV、印加電流；50mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては全試料から鉄が、No.1~5・7に水銀が、No.1・2に鉛が検出された。

Table. 6 外之隈遺跡出土赤色顔料の試料一覧と分析結果

	試料の採取位置	蛍光X線分析		顕微鏡観察	赤色顔料
		鉄	水銀		
1	I 区 1号墓 鏡の下	+	+	ベンガラ、朱	ベンガラ、朱
2	I 区 1号墓 鏡周辺	+	+	ベンガラ、朱	ベンガラ、朱
3	II 区 1号墓	+	+	ベンガラ、朱	ベンガラ、朱
4	II 区 3号墓	+	+	ベンガラ、朱	ベンガラ、朱
5	II 区 3号墓 床面	+	+	ベンガラ、朱	ベンガラ、朱
6	II 区 4号墓	+	-	ベンガラ	ベンガラ
7	II 区 5号墓	+	+	ベンガラ、朱	ベンガラ、朱

まとめ

以上の結果から外之隈遺跡出土の赤色物は表に示したとおりである。No.1・2の鉛は、採取位置と検鏡結果から、鏡に由来するものと判断した。

II区1号墳4・5号墓のベンガラには今回の試料では管状粒子を見いださなかったが、赤色顔料自身の全体量が少ないためかもしれない。現在、出土ベンガラについては、粒子の形状・大きさや酸化鉄含有量の多少等からその多様性が把握・整理されつつある段階であり、本例も管状粒子を含む良好なベンガラ資料である。

朱粒子は僅かしか認められない。当初の使用量が少なかったか、その後の拡散なのか、あるいはたまたま試料の採取位置が朱の部分から外れていたのか不明である。その使用量は非常に少ないものの、I区1号墳1号墓、II区1号墳1・3・5号墓では頭胸部に朱が施されていた。ただし、その場合も朱の使用量がベンガラに比べて圧倒的に少ないことは事実であろう。ベンガラの使用量は多く、特にI区1号墳1号墓では他に比べて大量のベンガラが使われている。

北部九州地方の弥生時代後期以降の墳墓では、埋葬施設内面全体にベンガラを塗り、床面あるいは遺骸全体にもベンガラを撒き、頭胸部には朱を施すという「朱とベンガラの使い分け」が始まる。この約束ごとは「朱だけを使う」「朱とベンガラを使う」「ベンガラだけを使う」墳墓と様々な状況を見せながらも、基本的には古墳時代に全国的な風習となり、墳墓の性格の一面を示すようになる。本例もこの範疇で捉えることができるが、朱の量が極端に少ないことが特色となるかもしれない。

今回調査の機会を頂きました福岡県教育委員会の伊崎俊秋氏に感謝致します。また、蛍光X線分析装置の使用に際しては九州産業大学総合機器センター及び同吉賀啓子氏にお世話になりました。感謝致します。

※1 福岡市埋蔵文化財センター

※2 効九州環境管理協会

C. 外之隈遺跡出土土器に含まれる砂礫の観察

(Table. 7・8)

*
奥田 尚

発掘時に出土した甕、高坏、壺の表面に見られる砂礫を裸眼と倍率30倍の実体鏡とで観察した。観察は次のようにして行った。最初、土器の表面に見られる砂礫を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察事項は、砂礫種とその粒形・粒径・量・色の5項目である。石英、角閃石、輝石については、更に、粒形から他形と自形に区分した。粒径は、角、亜角、亜円、円の4段階に、量は、ごくごく僅か、ごく僅か、僅か、中、多い、非常に多いの6段階に区分した。粒径はmm単位で感覚的に計測した。深成岩の砂礫種で花崗岩としたものは石英と長石がかみ合ったものである。火山岩で流紋岩としたものは石英の斑晶があるものや玻璃質のものである。安山岩としたものは角閃石の斑晶があるものである。これらの砂礫粒は、全容がわかれれば、岩石種として異なる可能性がある。

識別した砂礫種は、岩石片として、花崗岩、流紋岩、安山岩、泥岩、片岩、火山ガラス、鉱物片として、石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。

- 花崗岩 : 色は灰白色、粒形が角である。最大粒径は1mmである。石英と長石がかみ合った粒である。
- 流紋岩 : 色は灰白色、灰色、黄土色で、粒形が角、亜角である。最大粒径は3mmである。石英の斑晶が認められるもの、玻璃質のものがある。
- 安山岩 : 色は灰色、淡桃色で、粒形が角、亜角である。最大粒径は1mmである。角閃石の柱状結晶が認められる。発泡孔が多く認められる溶岩様のものもある。
- 泥岩 : 色は褐色で、粒形が亜円である。最大粒径は2mmである。
- 片岩 : 色は灰色で、粒形が亜円である。最大粒径は1mmである。絹雲母片岩である。
- 火山ガラス : 黒色透明で、粒径が0.5mm以下である。貝殻状やフジツボ状である。
- 石英 : 無色透明で、粒形が角である。最大粒径は2mmである。自形の石英は複六角錐をなす高温型石英である。
- 長石 : 白色で、粒形が角である。最大粒径は0.5mmである。
- 黒雲母 : 金色で、粒径が3mm以下である。板状である。
- 角閃石 : 黒色で、粒形が角である。最大粒径は2mmである。粒状、柱状である。自形をなす角閃石は柱状である。
- 輝石 : 黒色で、粒形が角である。最大粒径は0.5mmである。粒状である。試料によっては自形をなす輝石が認められる。
- 砂礫種構成をもとにA～Eの5つの類型に区分した。

A類型：花崗岩類・流紋岩類・安山岩類起源と推定される砂礫、片岩からなる。

B類型：花崗岩類・流紋岩類・安山岩類起源と推定される砂礫からなる。

C類型：流紋岩類・安山岩？類と推定される砂礫、碎屑岩からなる。

D類型：流紋岩類・安山岩？類起源と推定される砂礫からなる。

E類型：流紋岩類・安山岩類起源と推定される砂礫からなる。

遺跡が位置する付近は片岩が分布し、部分的に花崗岩類が見られる。東方へ行けば新期の火山噴出物が広く分布する。甘木市付近を中心に、河川の砂礫を比べたのがTable.8である。片岩や碎屑岩、流紋岩、花崗岩が含まれているのに比べ、土器の砂礫構成には碎屑岩や片岩、花崗岩がほとんど認められない。

遺跡が位置する付近に概当する砂礫種構成はA～Eのいずれにもない。いずれの類型も安山岩・流紋岩、あるいはそれと推定される砂礫が含まれ、片岩や碎屑岩が少ないか認められないため、片岩や碎屑岩が分布しないかごく僅かに分布するような条件の地の砂礫である。この条件を満たすような砂礫が分布する地としては、遺跡の東南よりも東方の部分のいすこかの砂礫であると言える。A・Bの類型は花崗岩が含まれることから、遺跡にC・D・Eの類型に比べてより近い場所の砂礫ではあると言える。いずれの類型も場所を限定するには至らない。

(1988年10月3日 原稿挿受)

※ 奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託

Table. 7 外之限遺跡出土土器の砂礫種構成

試料番号	器種	岩										鉱物										焼 類 型	
		花崗岩	閃綠岩	安山岩	泥岩	流紋岩	岩	チャート	片岩	火山ガラス	石	長石	石雲母	角閃石	輝石	板状	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
I 区B面 二重口縁 整地層(7)	壺?	M稀 角	S稀 アコ	無																			
I 区 墓周辺(8)	高坏?																						有微量 区分不能
I 区 A-1(4)	甕?	M稀 角	M稀 アコ	M稀 E多																			
II 区44 (4)	高坏?																						無
II 区43 (4)	甕																						無
II 区12 (6)	高坏																						無
II 区 (40)	甕	M-微 角	M-稀 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	L-稀 アコ	L-稀 E多												

裸眼 = 裸眼観察 裸眼による観察； L = 粒径 2 mm以上 M = 粒径 2 mm未満0.5mm以上 S = 粒径0.5mm未満 非 = 非常に多い 多 = 量が多い 中 = 量が中 値 = 量が僅か

微 = 量がごく僅か 稀 = 量がごくごく僅か

30倍 = 実体鏡の倍率が30倍 実体鏡による観察； L = 粒径 1 mm以上 M = 1 mm未満0.5mm以上 S = 粒径が0.5mm未満 量 = 量は裸眼に同じ

- = 以下の粒径がある E = 自形あるいは結晶面がある W = 白雲母が含まれる 板 = 板状 貝 =貝殻状 東 = 東状 フ = フジツボ状 < () > は第18、16、33図の土器番号>

Table. 8 甘木市付近の河川の砂礫種構成

試料採取地	岩										石										鉱物										参考	
	花崗岩	閃綠岩	流紋岩	砂岩	砂	泥岩	岩	チャート	片岩	火山ガラス	石	英長石	雲母	角閃石	輝石	石英	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				
朝倉郡朝倉町多々連 朝倉IC用地 桂川	L-僅 角	L-微 垂直円	L-僅 30倍 裸眼	L-僅 30倍 裸眼	L-微 垂直円	M-微 垂直円	L-微 垂直円	L-僅 30倍 裸眼	L-僅 30倍 裸眼	L-僅 30倍 裸眼	L-僅 30倍 裸眼	L-多 L-中 亞角	L-多 L-中 亞円	L-僅 E僅	L-多 L-中 E稀	L-多 L-中 E微	L-微 粒板	M-微 粒板	M-微 E非	L-僅 E非	M-微 E微	M-微 E非	L-僅 E非	M-微 E微	安山岩 僅石							
朝倉郡朝倉町上原 荷原川	L-稀	L-微 垂直角			M-稀 垂直円		L-僅 垂直角					L-中	L-中 亞角						MW稀	粒板												
甘木市柿原 佐田川	L-稀	L-微 角					L-僅 垂直円				L-多 L-中 亞円	L-多 L-中 亞円	L-中	M-中																		
久留米市善導寺 鎮西湖東岸	L-稀	L-微 角			M-僅 角		L-僅 垂直円		L-僅 垂直円		L-僅 垂直円		L-中	L-中 亞角	L-稀	M-稀 板	M-稀 板	M-僅 板	M-僅 板	M-僅 板	M-僅 板	M-僅 板	M-僅 板	M-僅 板	M-中 堅石							
甘木市天神森 ?川	L-僅	L-微 角			M-稀 角		L-僅 垂直円		L-僅 垂直円		L-僅 垂直円		L-中	L-中 亞円	L-稀				S僅 E非													
甘木市鍊崎 佐田川	L-稀	L-微 垂直角			M-微 垂直円		L-稀		L-微 垂直円		L-微 垂直円		L-中	L-中 亞円	L-稀																	M-稀 E非
甘木市神田町 小石原川	L-微	L-微 角	L-稀 亞角	L-稀 亞角	L-稀 垂直円		L-稀 垂直円		L-微 垂直円		L-微 垂直円		L-中	L-中 亞角	L-稀																	
朝倉郡杷木町寒水鞍 掛 杷木IC用地	L-僅	L-中 角	L-僅 角	L-僅 角									L-稀	L-稀 垂直円		L-多 L-中 亞角	M-微 E微	L-多 L-中 E僅	M-微 E微	L-微 板	M-微 板	L-微 板	M-微 板	L-微 板	M-微 板	L-微 板	M-微 板	L-微 板	M-微 板			
筑紫野市小鳥持 宝満川	L-中	L-僅 角	L-僅 角	L-僅 角									L-多	L-中 亞角	L-僅					M-微 板粒	S稀											

V 関連する諸調査

A. 本陣古墳採集の埴輪

(P L . 3 · 4 , Fig. 4 · 5)

1. 本陣古墳発見の経緯

本陣古墳は、福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字本陣に所在し、外之隈遺跡II区台状墓の北北西140mに位置する。発見当時、小田は大迫遺跡の発掘調査を実施しており、併せて周辺遺跡の踏査を行ったところ、外之隈遺跡II区北方の山頂部（標高120m）に川原石が二段に渡って円形に巡っていることを発見した。川原石が山頂部に存在することを不思議に思い、葺石を有する円墳ではないかと、外之隈遺跡を調査中であった伊崎に話した。当初、伊崎は古墳という点に関して疑問に思っていたが、現地周辺を踏査する中ではからずも当人が埴輪を採集したことにより(註1)（Fig.4×印地点）、葺石を有する二段築成の円墳と認識した次第である。

また、当古墳は福岡県遺跡分布図に未登録の古墳だったので、急遽、遺跡発見届・遺物発見届を提出し、周知の遺跡として登録した。なお、採集埴輪は福岡県教育庁文化課甘木発掘調査事務所で保管している。本稿で紹介する埴輪は、昭和63年3月に伊崎・小田が採集したものである。

2. 本陣古墳採集埴輪 (P L . 3 · 4 , Fig. 5)

採集した埴輪は総数21点で、その内12点を図示した。埴輪は口縁部・体部・基底部の5~15cm程の破片であり、全容を知りうるものではないが、形象埴輪は含まれていないようである。

1は普通円筒埴輪の口縁部であるが、小片のため傾きには自信がない。口唇部はヨコナデ、内外面はハケ目調整による。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。残存部位に黒斑・赤色顔料は認められない。色調・手法からして1・3・4・11は同一個体になると思われる。2~9は体部破片で、3・5・6は凸帯が剥離している。2は口縁部付近の破片で、外面縦ハケ目（4条/cm）、内面上半部は横ハケ目→ナデ消し調整による。焼成は良好で、内面褐色、外面茶褐色を呈する。また、内面には赤色顔料を塗布している。3の調整は外面縦ハケ目、内面指ナデによる。色調は内外面とも暗褐色を呈し、先端下部に黒斑が認められる。4は凸帯を有する唯一の採集埴輪である。凸帯は突出度が2cmと非常に大きく、下面に稜を有する。外面縦ハケ目、内面横ハケ目→指ナデ調整による。焼成は良好で、内外面とも暗褐色を呈する。残存部位に黒斑・赤色顔料はみられない。

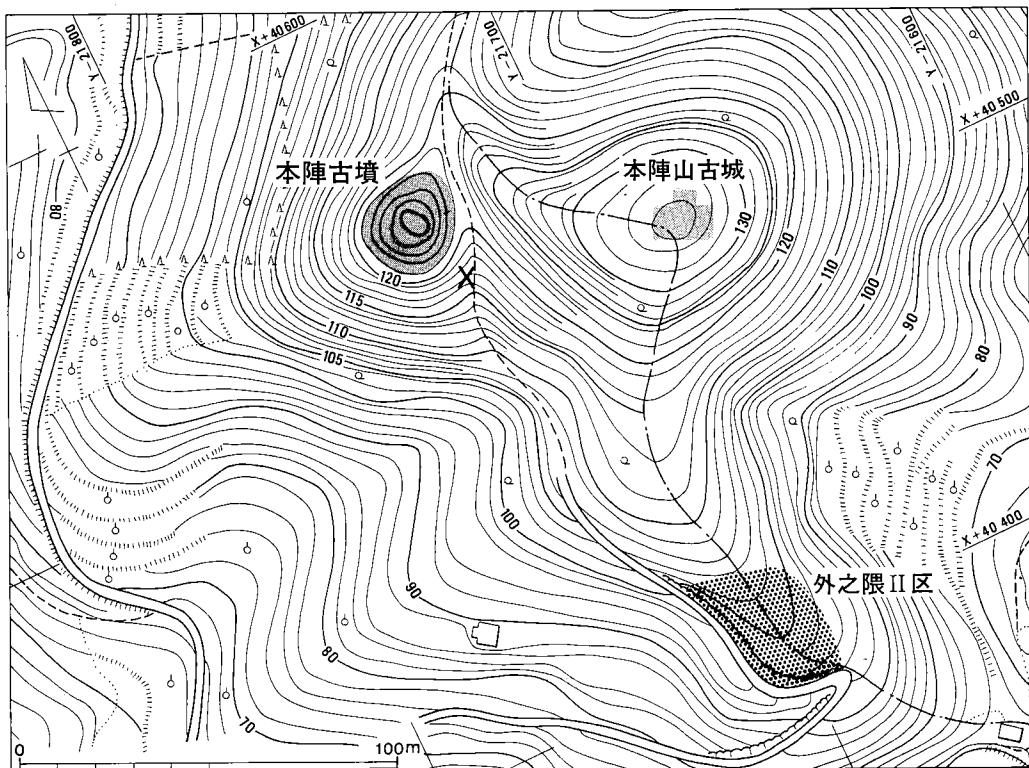


Fig. 4 本陣古墳埴輪採集位置図 (1/2,000)

5は唯一スカシ孔を有する資料である。工具による切り込みに伴う膨隆が方形にみられるところから長方形のスカシ孔を穿ったものと考えられる。内外面ともナデ調整によるが、他の埴輪に比して器壁が薄い。また、外面には薄いが赤色顔料の塗布がみられる。6～9は5cm程の体部小片である。調整は外面縦ハケ目、内面ナデを基本とする。また、7は外面に黒斑・赤色顔料が、8は外面に黒斑がみられる。10～12は基底部破片である。10は基底部幅2.9cmで、外面ハケ目、内面指オサエによる。胎土に石英・雲母を多く含む。焼成は良好で、暗黄褐色を呈する。この1点のみ色調が他と異なる。11は基底部幅2.0cmで、12は基底部幅1.2cmと薄く、11・12とも粘土板を二枚張り合わせている。3点とも器面に黒斑・赤色顔料はみられない。

3. 本陣古墳の築造年代

埴輪は墳丘南側の斜面部で採集したもので、原位置を留めた状況ではない。採集遺物は埴輪片のみで土器は採集していないが、築造年代の推測は可能であり、若干考えてみよう。

採集埴輪の特徴を挙げると、

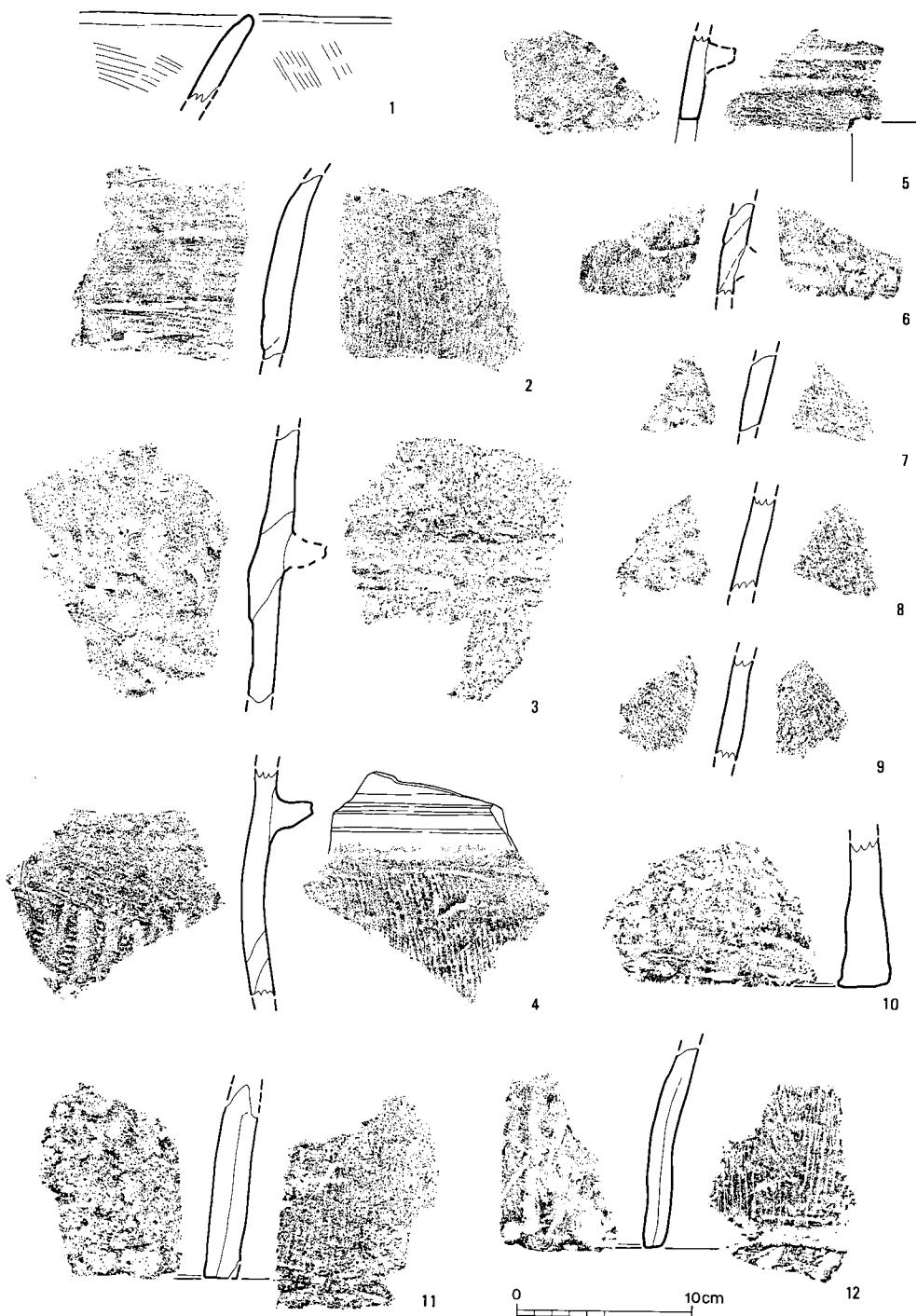


Fig. 5 本陣古墳採集埴輪実測図 (1/4)

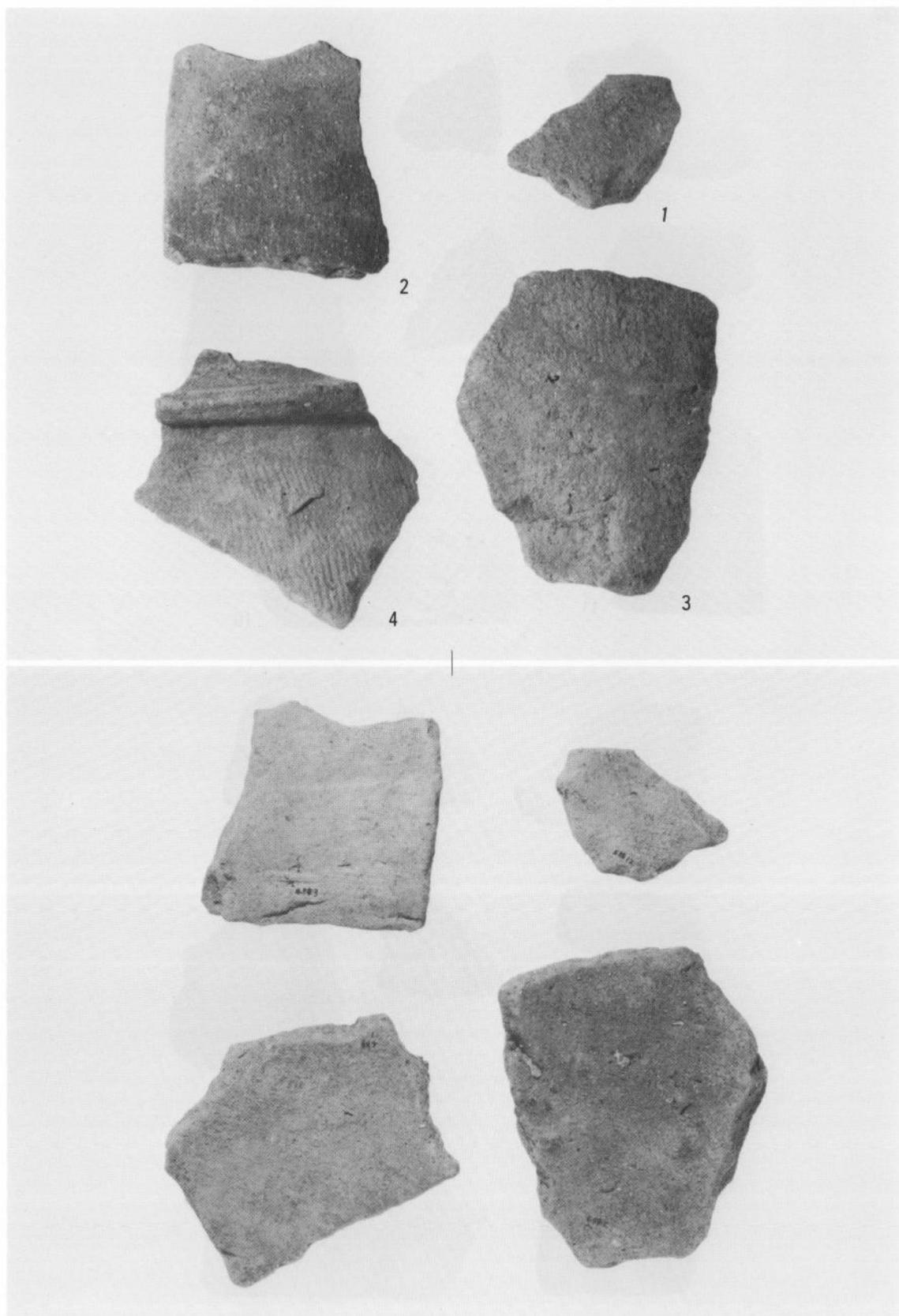
1. 凸帯の突出度が2cmと大きい。
2. 長方形のスカシ孔を穿っている。
3. 器壁は1.2cm～1.5cmと薄い。
4. 有黒斑の埴輪がある。
5. 赤色顔料を塗布している。
6. 外面調整は縦・斜め方向のハケ目で、所謂横ハケ目はみられない。

以上の諸点は、何れも古式の埴輪の特徴である。有黒斑の埴輪は野焼きによるもので、無黒斑の窯焼成による埴輪に先行するとされている。^(註2)また、器面に赤色顔料を塗布した円筒埴輪は、^(註3)^(註4)^(註5)丸隈山古墳・博多1号墳・沖出古墳等でみられ、4世紀後半～5世紀前半に位置付けられている。

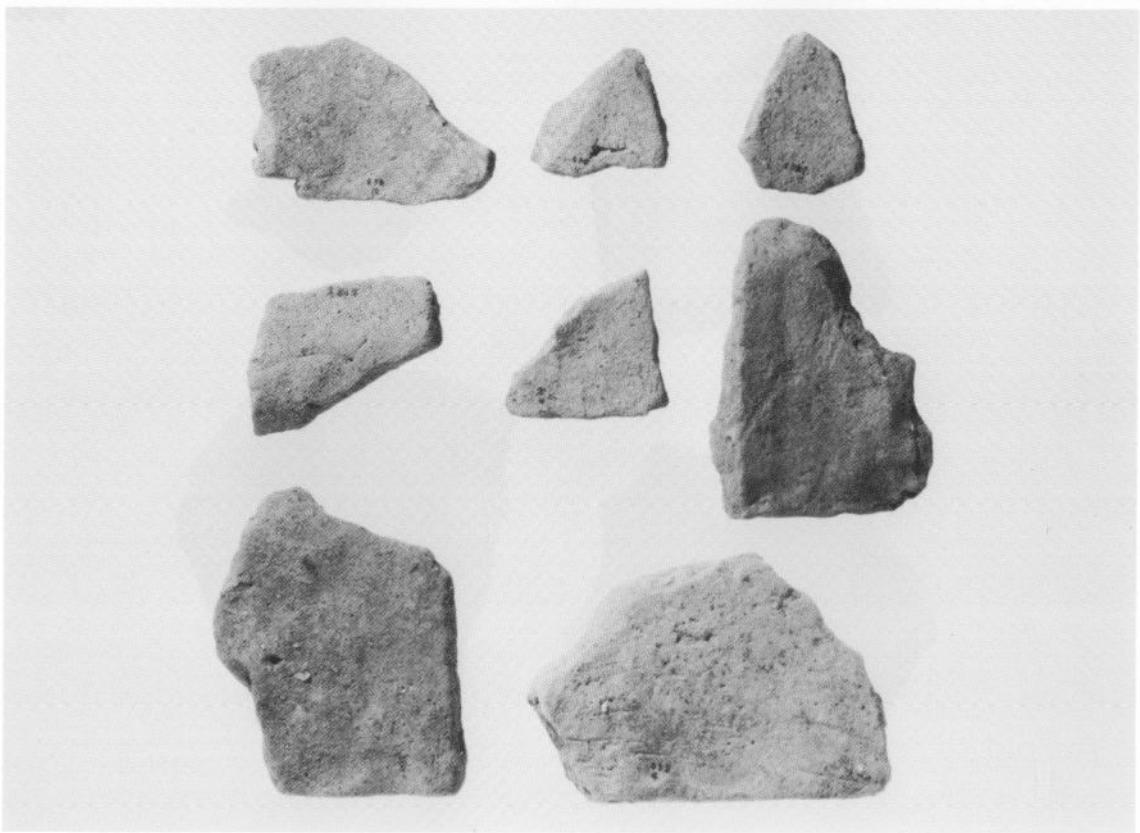
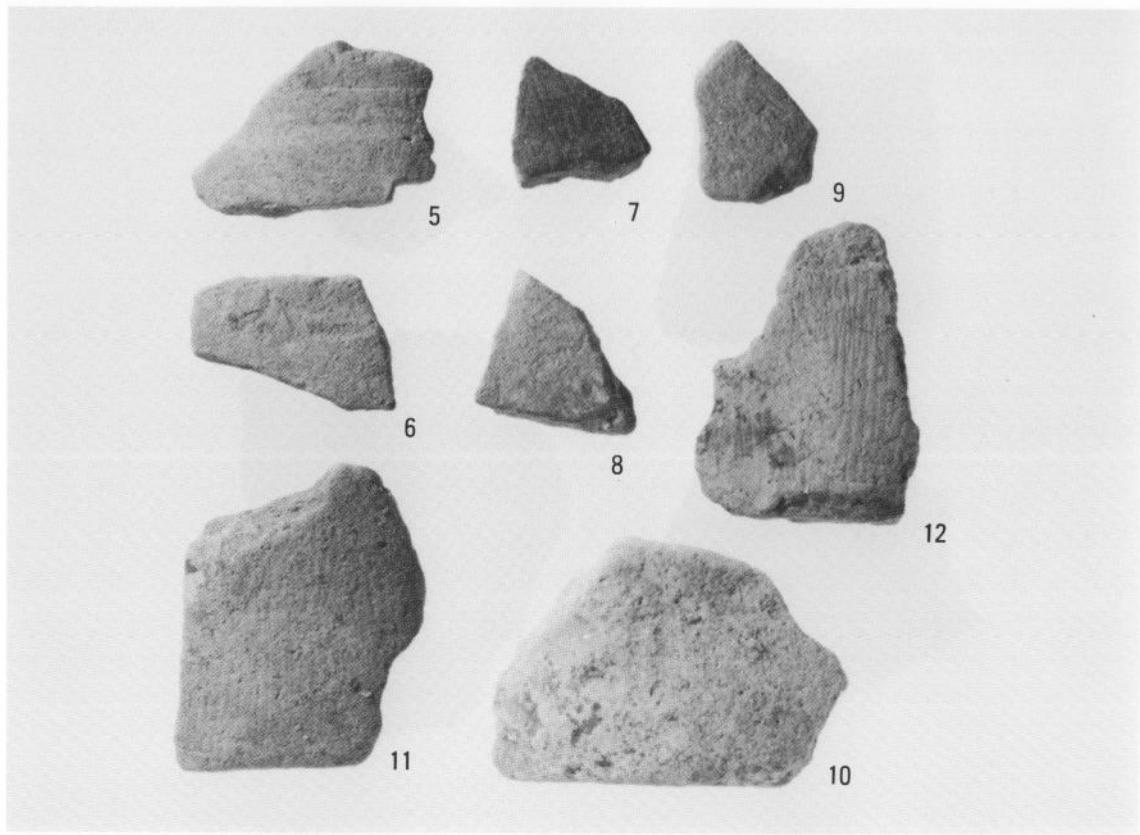
本陣古墳採集の円筒埴輪は、凸帯の突出度合いが沖出古墳出土の円筒埴輪よりもかなり大きく、丸隈山古墳の円筒埴輪よりも大きい。また、外之隈遺跡はII区台状墓→I区台状墓へと変遷したとされるが、II区台状墓の上方に立地することを考慮して、本陣古墳の築造年代を4世紀後半頃におきたい。

註

- | | | |
|---|---------------------------------------|------|
| 1 | 円墳としたが、何分未調査であり、前方後円墳としての可能性も否定できない。 | |
| 2 | 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 | 1978 |
| 3 | 福岡市教育委員会 『丸隈山古墳』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第142集) | 1986 |
| 4 | 福岡市教育委員会 『博多X』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第150集) | 1987 |
| 5 | 稲築町教育委員会 『沖出古墳』(稲築町文化財調査報告書 第2集) | 1989 |



本陣古墳採集埴輪 1



B. 外之隈の旧街道について (P L. 5・6, Fig. 6)

佐藤 尚隆*

外之隈遺跡内を旧道が通っていたのではないかという指摘を受けて、文献などによる裏付けをすることになった。

(1) 古図による確認

遺跡内に旧道が通っていたと考えられた理由に、「甘木市文化財調査報告 第17集『筑前秋月城跡』」^(註1)所収の「上座郡志波村本陣山古城ノ図」の存在があった。

この図(P L. 5-1)では、遺跡のほぼ北に位置する本陣山古城のすぐ下を志波宿からの日田街道が迂回するように描かれている。とすればこの図の描かれた文化14(1816)年になんらかの理由で、従来考えられていた筑後川沿いの(現在の国道386号にあたる)コースではない、筑後川に張り出す本陣山古城の置かれた丘陵を山越えのように通るコースが日田街道として利用されていたことになる。

確認のため他の古図を探したところ、甘木歴史資料館収蔵の宝暦6(1756)年と書かれた「従上座川筋博多迄堀川目論図」^(註2)(以後「目論図」と略す)に該当する部分があり、これによっても筑後川沿いではない丘陵越えの「往還筋」が確認できた(P L. 5-2)。この図の存在により、宝暦以前に旧街道の付け替えが行われていたことが確実となった。

現地の地形と街道の関係を比較的正確に描いているのは「上座郡志波村本陣山古城ノ図」である。

「目論図」は「往還筋」を完全に山の裏手に隠れるように描いており、また志波宿への道筋が省略されているため不明瞭な部分もある。しかし「目論図」には「石割場」が山田村・志波村境に記されている。これは九州横断道の完成によって姿を消すことになる国道386号沿いの朝倉・杷木町境にある採石場の跡である。この存在は文献による確認を補強する重要なものである。

(2) 文献による確認

「黒田新續家譜二十五」によれば、福岡藩は日田街道の付け替えを元文3(1737)年に幕府から許可されたことがわかる。それによれば、

「上座郡志波村と山田村の境、外か隈の道を替らるべき旨、老中に伺ひ給ひしか、八月廿八日本多中務太輔の宅に於て伺の通たるべき由、付札を以て達しあり。此外か隈は日田への往還なるか、千年川の河水に臨みて、道危く、殊更築石をとる處なれば、旅人通行の障りともなれば、

此度道を山の裏に付替られける、路程も相同しくして行人のなやみなし」とある。

付け替えの理由は、筑後川（千年川）に丘陵が迫り隘路になっていること、「築石をとる処」すなわち、採石場（「石割場」）が街道に面して危険であることをあげている。現状からもこの付け替えの理由はうなづける。ただし、現在の国道と付け替えられた街道の最も高い所の比高は約40mあり、付け替えられた道はかなりの急坂となり、「行人のなやみなし」であったかは疑問が残る。

(3) 踏査による確認

古図では具体的な道筋までは確認できないので、現地の踏査をおこなった。発掘調査区域の周辺部に残る石碑・小祠及び旧道などからほぼ確認できた (Fig.6)。

恵蘇八幡宮（朝倉郡朝倉町大字山田所在）の門前を国道386号が通っている。日田街道も同じように門前を経て筑後川沿いに志波宿に至るのであるが、上述のように、元文3年に付け替えられ、八幡宮より約375mほど東側で川を臨む丘陵上へと旧道が分岐する (P L. 6-1)。

この分岐点には国道と旧道に挟まれるように小祠が祀られている。昭和5(1929)年建立の地蔵菩薩をはじめ数体の仏像が置かれている。この小祠の設置の年代は明らかにできないが、旧道より短い階段状の参道があり、その両脇に立てられている崩れかけた石塔の「安永五(1776)」「文政九(1824)年戌六月」の紀年より江戸中期には祀っていたことが確認できた。文政九年のものは「恵蘇宿連中」と刻まれている。

旧道はこの地方の特産柿の畠の中を「石割場」のある丘陵の突出した部分へ続く (P L. 6-2)。この部分は九州横断道で削り取られてしまう。

付け替えられた旧道は峠道のようになっている。その峠は「石割場」のある丘陵の突出部を丘陵と区分するように作られた切り通しになっている (P L. 6-4)。現在は農業用水の溜枡が峠をふさぐように作られている。峠が朝倉・杷木町境となる。峠より東側の旧道の一部は柿畠に取り込まれている。しかし畠の畝が旧道と同じ幅で続いていることからそれと確認できる。杷木町側でも旧道は柿畠の農道として利用されている (P L. 6-5)。

旧道が再び国道386号と合流する地点より約25mほど旧道を西に戻った場所に六地蔵が置かれている。この地蔵の一つの台座に「元文三年 奉建立六地蔵 未二月廿四日」と刻まれている (P L. 6-6)。

恵蘇宿側にも地蔵が祀られていたが、地蔵は道祖神・庚申などの石碑・石塔と同じように、行政上の村境よりも内側の、いわば集落の出入口と想定される場所に置かれ、村へ疾病などの災いが入ることを防ぐという存在である。^(註4)

のことから六地蔵を祀った人々は不明ながらも、志波宿の入り口と想定される場所に (そ

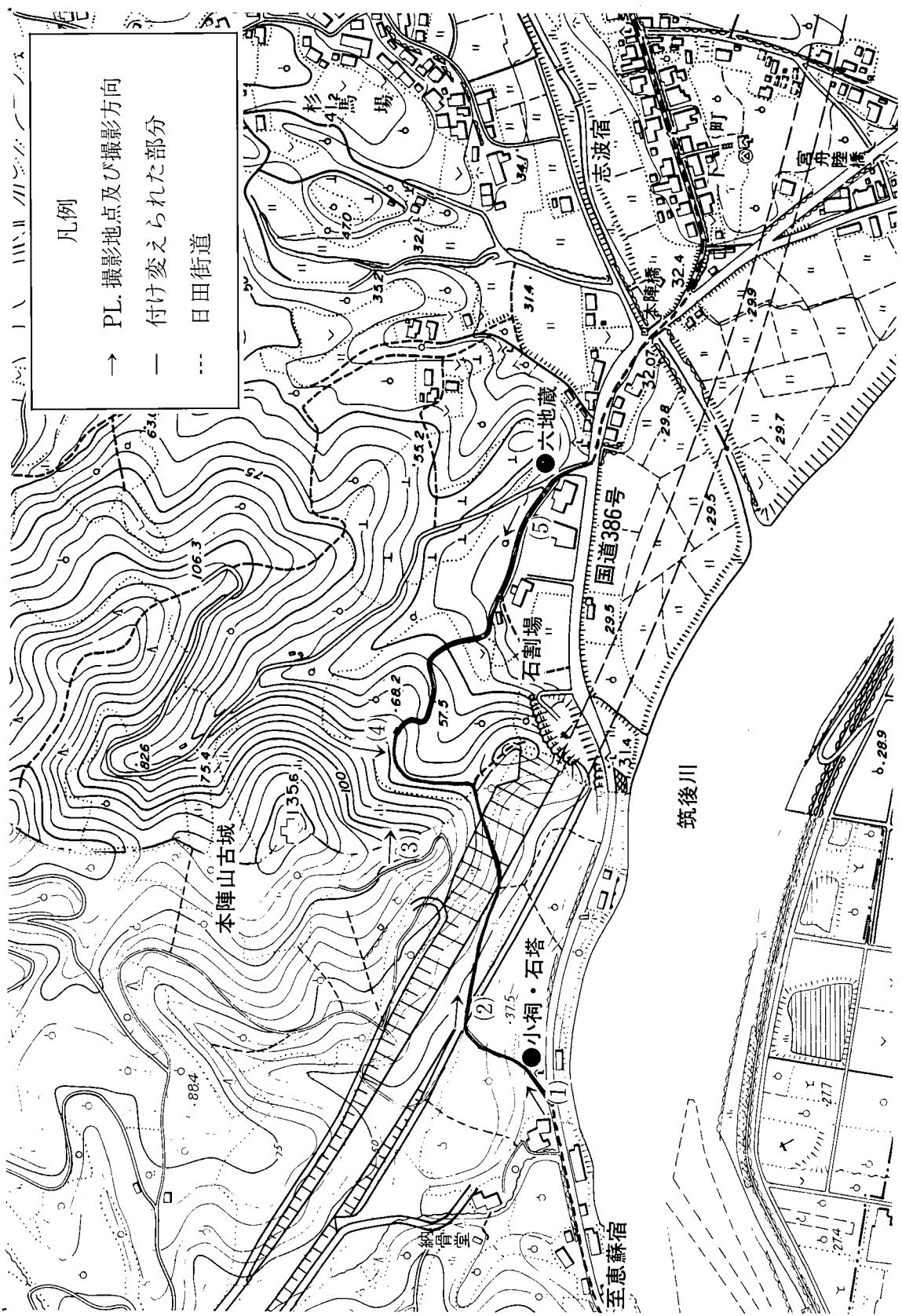


Fig. 6 外之限の旧道と周辺石碑等位置図 (1/5,000)

こは志波側の峠の入り口にあたる) 日田街道の付け替えにともなって新たに祀られたと考えられる。それは幕府の付け替えの許可がおりた元文3年と六地蔵建立が同じ年であることから裏付けられる。

なお、地蔵の建立が2月で、幕府の許可の出た8月以前になっているのは、道の付け替えそのものは終わっていたが、藩が幕府へ届けを出し、許可を得るまでの時間的ずれの結果と考えられる。

註

1 副島邦弘・内田俊和編『筑前 秋月城跡』(甘木市文化財調査報告 第17集)に所収の内閣文庫大倉喜太郎献納本「古戦古城之図」より

この図は秋月藩士大倉種周が現地調査に基づいて描いたものであるが、文化～天保年間にかけて調査している。「本陣山古城ノ図」はその一葉であるが、描いた年が記されていない。しかし本陣山古城の東隣にある前隈山古城の「上座郡志波郷前隈山古城之図」が文化14年に描かれており、同じ時に描かれたと考えられる。

2 朝倉町教育委員会所有 甘木歴史資料館収蔵

「目論図」はその作成された経緯から運河と街道・河川などの位置関係はかなり注意を払って作成され正確であるが、山などはその背景として描かれ実際とは相違する点がみられる。

3 伊東尾四郎編「福岡県史資料 第八集」より

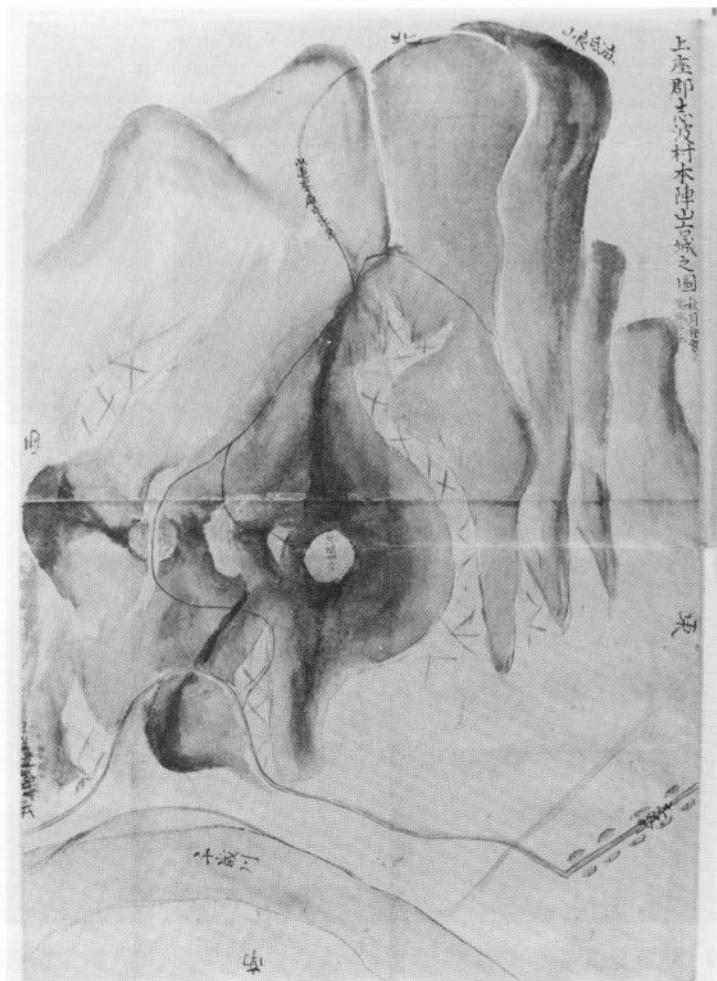
4 宮田登「五 信仰施設」(「日本民俗文化財事典」、『六 信仰』—文化庁文化財保護部監修—)を参照。

秋月街道の沿線では庚申の石碑が集落の入り口に置かれることが多く、地蔵は少ないが、小祠が祀られている場合は地蔵が諸仏とともに置かれる例が多い。(「秋月街道」 朝倉高校史学部報23号より)

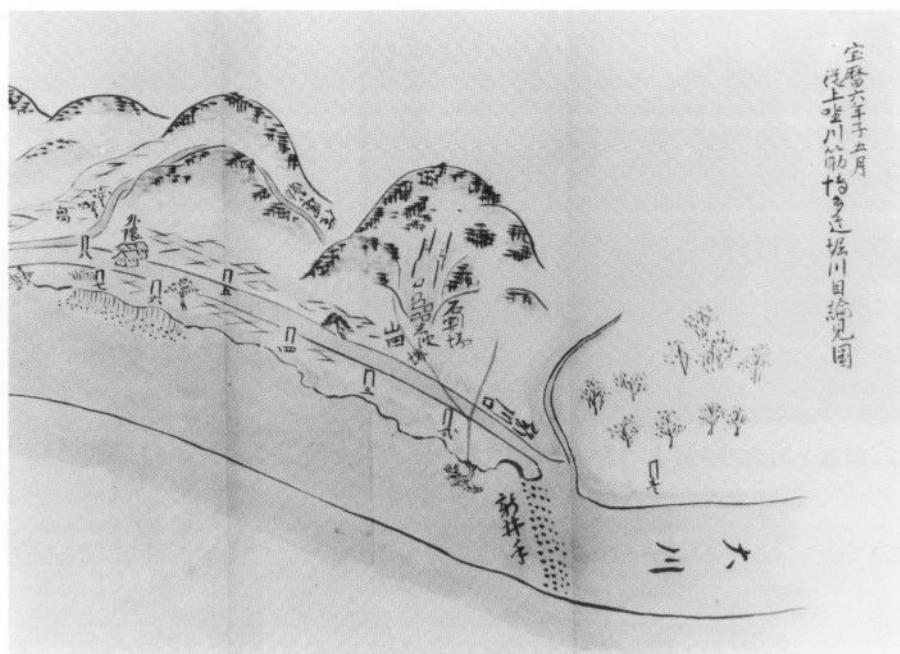
(1989年3月7日 原稿挿受)

〔編者註〕 P L . 5 (1)は註1に使用されたものを、P L . 5 (2)は甘木歴史資料館蔵のものを複写したものである。

※ 福岡県立八幡中央高校教諭



(1)
上座郡志波村本陣山
古城ノ図（部分）
<複写>



(2)
從上座川筋
博多迄堀川
目論図（部分）
<複写>



(3) 峠より志波宿を臨む（左手）



(4) 峠の切り通し



(2) 峠道を西側から



(5) 峠道を東側から



(1) 国道と旧道の分岐点



(6) 六地蔵

VI 結語

A. 外之隈遺跡の古墳・近世墓その他

外之隈遺跡 I・II区全部とV区の墳墓については以上に報告してきたとおりであるが、特にI・II区の墳丘墓と主要な遺物については別に述べるとして、ここではそれ以外の全体のまとめを行っておく。

I区は古墳時代初頭期の墳丘墓が主要な遺構であり、それ以外には土壙2基があった。1号土壙の上面から出土した土師器は特に壊に古い様相を留めており、12世紀後半代のものと考えられる。やや古きに過ぎる感はあるが、この北方にある本陣山古城に関連した遺構と考えたい。SK-1については時期は全くわからない。B面整地層から採集されたものに石斧2点があるが、縄文～弥生時代の遺構は全く見られなかった。地形的にみて住居を営むような所ではないが、西方の平坦地であるIII区に縄文期の遺構・遺物があるのでそれとの関連があるのかもしれない。

II区も主要な遺構は古墳時代初頭期の墳丘墓である。それ以外には浅い土壙があったのと、出土土器の中に7世紀後半～8世紀前半と目される土師器の甕があった。この時代にこの場所で人が活動した痕跡としての土器であることは確実であるが、とても住居を営むような場所ではない。とすれば、人の動きとして考えられるのは、地形上の利点を活かしての、狼煙をあげるような行動があった結果ではないかということである。用地境の所にあって精査できず出土遺物もなかったけれども、壁面も焼けた焼土壙があったのはそのことを裏付けているのではないかと考える。いまはそう捉えるのが最も蓋然性が高いとしておきたい。眼下には「朝倉橋広庭宮」に行宮を置いた齊明天皇ゆかりの惠蘇八幡宮があり、眺望は絶佳である。

V区の古墳（1号墳）は単室で両袖の横穴式石室を主体部におく円墳であり、直径は13m程度であったろうと思われる。石室玄門の前面は前庭部と称しうるものであって、墓道は不明であるが本来長くなるようなものではないだろう。石室としては古相である。石室はやや胴張りを持つ長方形プランで、側壁の基部に河原石を置いて根石とする点は特徴的である。前庭部側壁から続く内護列石を有し、そのすぐ外側から須恵器が出土していて、これは古墳造営時に埋置されたものとみてよい。この須恵器は6世紀初頭～前半代の所産としてよく、すなわちこの時期に古墳が造られ、周溝内から出土した大半の土器の示す6世紀後半代まで追葬がなされたと考えられる。なお、周溝出土壺(58)と内護列石外側出土の蓋(57)とはセットと考えられるので、追葬時のみならず築造当初にも墳丘裾付近に須恵器が置かれていたか、またはそこである

種の祭祀が行われていた可能性が高い。6世紀前半～後半の、古墳が機能していた時にはIII区その他に竪穴住居群があつて、それらは古墳の造営者と無関係であるはずはないが、この点については外之隈遺跡全体の報告の際に検討されることとなろう。

V区の近世墓は3基が確認された。1号は墓標に享保11年の銘があり、西暦1726年に死んだ人のために造営された墓である。墓壙底から出土した陶器皿(82)は半磁器とも称すべきもので、これは17世紀後半に操業が開始されたという小石原村中野上の原窯跡(註1)もしくは火口谷1号窯跡(註2)で焼かれた製品とみて間違いないところである。その流通と年代の一端が知られたことの意義は大きいとしてよい。2・3号からは土師器小皿や数珠玉・釘などが出土しているが、これの年代比定は難しい。土師器小皿は通常の江戸時代に見られるものと比較すれば古い様相があるが、いまは1号とはやや離れて位置するけれどもほぼ同じ頃の所産と考えておきたい。

註

- | | | |
|---|---|------|
| 1 | 小石原村教育委員会『中野上の原窯跡』 小石原村文化財調査報告書 第1集 | 1978 |
| | 小石原村教育委員会『中野上の原窯跡』 小石原村文化財調査報告書 第3集 | 1990 |
| 2 | 小石原村教育委員会『火口谷1号窯跡』 小石原村文化財調査報告書 第2集 | 1989 |
| 3 | 調査担当者である児玉真一氏に見てもらったところ、いずれかの窯の製品としてよいとのことであった。 | |

B. 外之隈遺跡 I・II区の墳丘墓

外之隈遺跡I・II区ではともに古墳時代初頭期の墳丘墓を確認したが、それはいずれも単独墳として存するものではないと考えられた。残念なことに、両区とも今回の主要な調査対象となった1号墳に比して2号墳はともにその実態がよくわからない。2号墳の時期が1号墳とほぼ同じであるかどうかかも検証されたわけではないのであるが、ただI・II区とともに1基のみではなかったということは重要視しておく必要があろう。そのことを念頭におきながら、各々の墳墓の形態や出土遺物等が時期的にきわめて重要な問題を内包していると考えられるので、以下に若干の検討を行いたい。

1 土器の検討（第47～50図）

I区出土の墳丘墓関係の土器で図示したのはごく僅かであった。それも原位置を示す出土状態ではないので第一級の資料とはいえないが、それでも時期を推し測るのに欠かせない稀少なものである。採集された場所からすると、確実ではないものの4～6が1号墳丘墓、7～13

が2号墳丘墓に伴う可能性が高いと考えているが、あるいは全てが1号墳丘墓に関連したものかもしれない。それは後者の7~13の土器が高い方の削平によって下方へ移動して出土したものとも考えられること、そしてさらにこれらは現在の編年観からすればあまり時期差のない土器と捉えられることからである。13は壺棺であった可能性もある。

II区出土土器で図示したのはさらに少なく、わずか6点である。40・41が3号墓、42~45が5号墓の周辺出土であるのでそれに伴う可能性が高いものの、これらもあるいは1・2号墓の造営時のものの可能性も全くないわけではない。これら40~45も現在の時間軸ではあまり時期差のない、ほぼ同一時期の所産と捉えられる。

外之隈遺跡I・II区における古式土師器は、少ない断片的資料ながら、5・7の二重口縁壺は畿内に、13・40の二重口縁壺・甕は山陽から山陰にその系譜が辿れるものである（第47図）。後者は山陽というよりはどちらかと言えば山陰地方の影響の方が強いらしい。例えば、島根県出雲市宮松遺跡、鳥取県倉吉市上神猫山遺跡・イザ原古墳群・長瀬高浜墳墓群（第48図）などに器形のよく似たものが出土している。以下にこれらとよく似た形態の土器の北部九州での出土例を見てみよう。

まず、5の二重口縁壺は頸部のみの小破片で比較が難しいが、一次口縁部先端が垂れ下がっているところに特徴があり、これと同様の形状のものは筑紫野市峰山1号墳（第49図A）や同阿志岐22号墳（第49図B）、浮羽郡吉井町塚堂遺跡E地区6号竪穴住居跡、唐津市双水柴山2号墳（第49図D）などに見られる。しかしそれらも微妙な形態差がある。

7の二次口縁端部を内側につまみ上げる例は甕や広口壺などではよく見るが、二重口縁壺ではあまり見ないものである。ただ畿内の箸墓古墳（第49図G）や桜井茶臼山古墳などではその例がある。

13の二重口縁壺は二次口縁が直立し、口唇部の外側が突帯風につまみ出されているところに特徴がある。二重口縁の二次口縁が外反する例は多々見られるが、直立するものはわりに少ない。実際の出土例では直立するものと外傾するものの共伴が多い。直立口縁でよく似たものは、福岡市西新町遺跡D地区第1・8号竪穴住居跡（第50図H）、同遺跡SC06住居跡、佐賀県西一本杉遺跡西丘陵南斜面（第50図K）などから出土している。

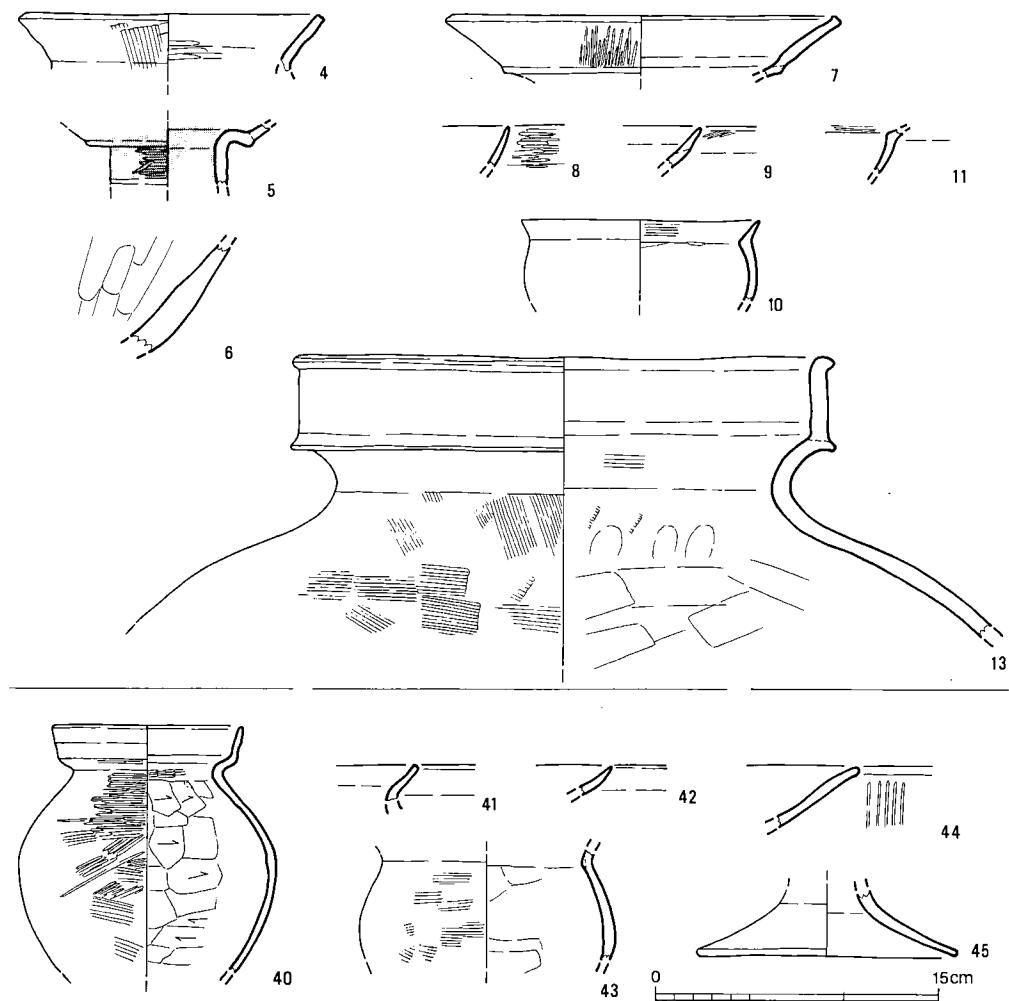
40の二重口縁甕は一次口縁と二次口縁の接点が突帯風になることなく屈折し、二次口縁はわずかに外傾して、口唇部を尖ったように丸くおさめている。このような形態のものもあり多く見ないが、時期的なことを別にして甘木市上々浦遺跡溝8上層（第50図I）、前述の福岡市西新町遺跡SC06住居跡などにそれに近いものが見られる。

さて、山陽地方の編年を基準に岡山県北部と山陰地方の弥生後期～古式土師器の併行関係を検討した藤田憲司氏の編年によれば、13・40の土器はともにそのIV期に位置づけられるよう

ある。「景初三年」銘三角縁神獸鏡を出土した神原神社古墳出土土器よりも古いと見られ、IV期でもより古式のほうに位置づけられる。氏によればIV期は山陽の酒津式に併行し、布留式古段階より先行するとされている。^(註13)

蒲原宏行氏は北部九州出土の畿内系二重口縁壺を検討して1～4期に区分し、畿内における編年での庄内3式～布留2式に対応させている。5に類似の筑紫野市峠山1号墳例は2期すなわち布留0式併行に比定されている。^(註14)

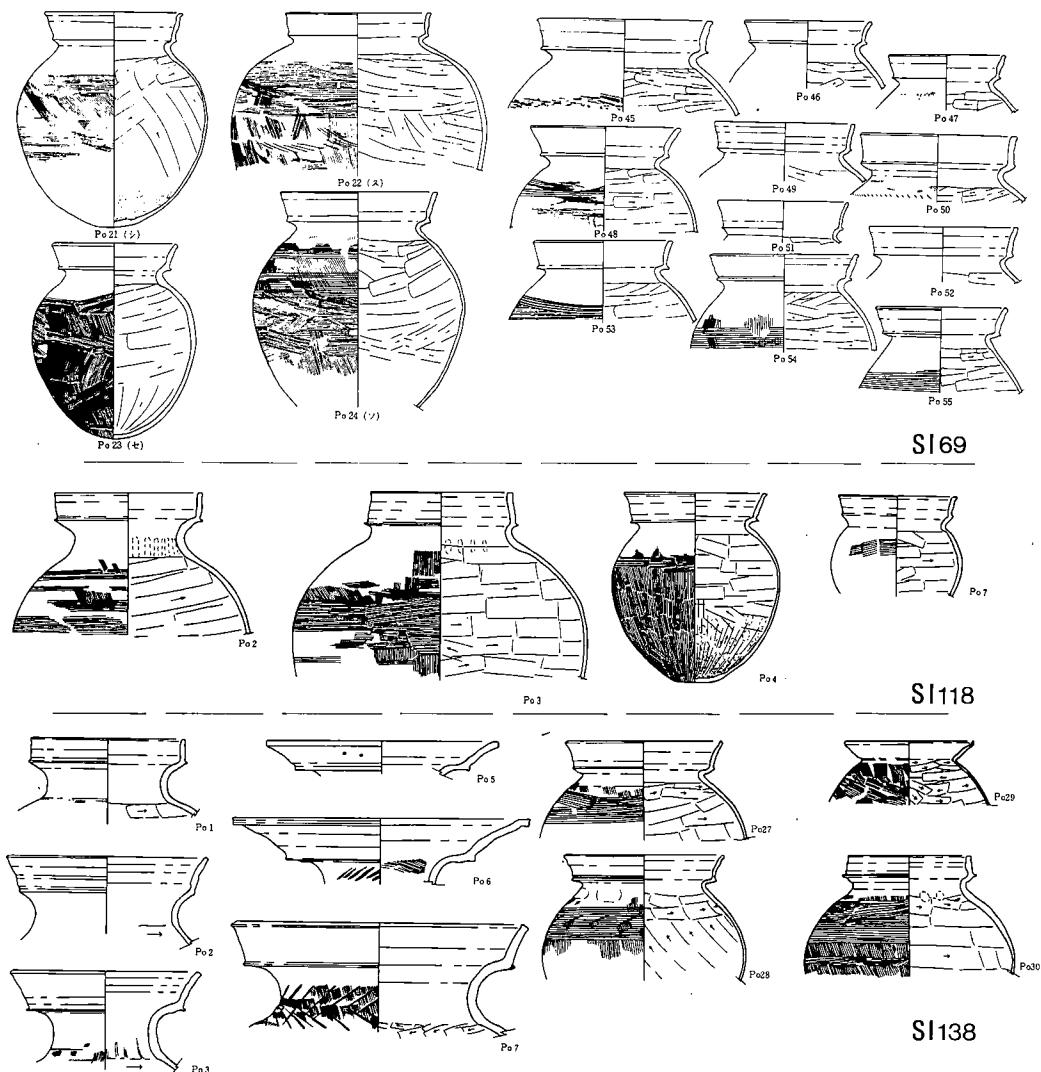
次に、北部九州においてこれまでになされてきた古式土師器の編年の中で、外之隈遺跡出土土器がどのような位置づけになるかを見てみよう。



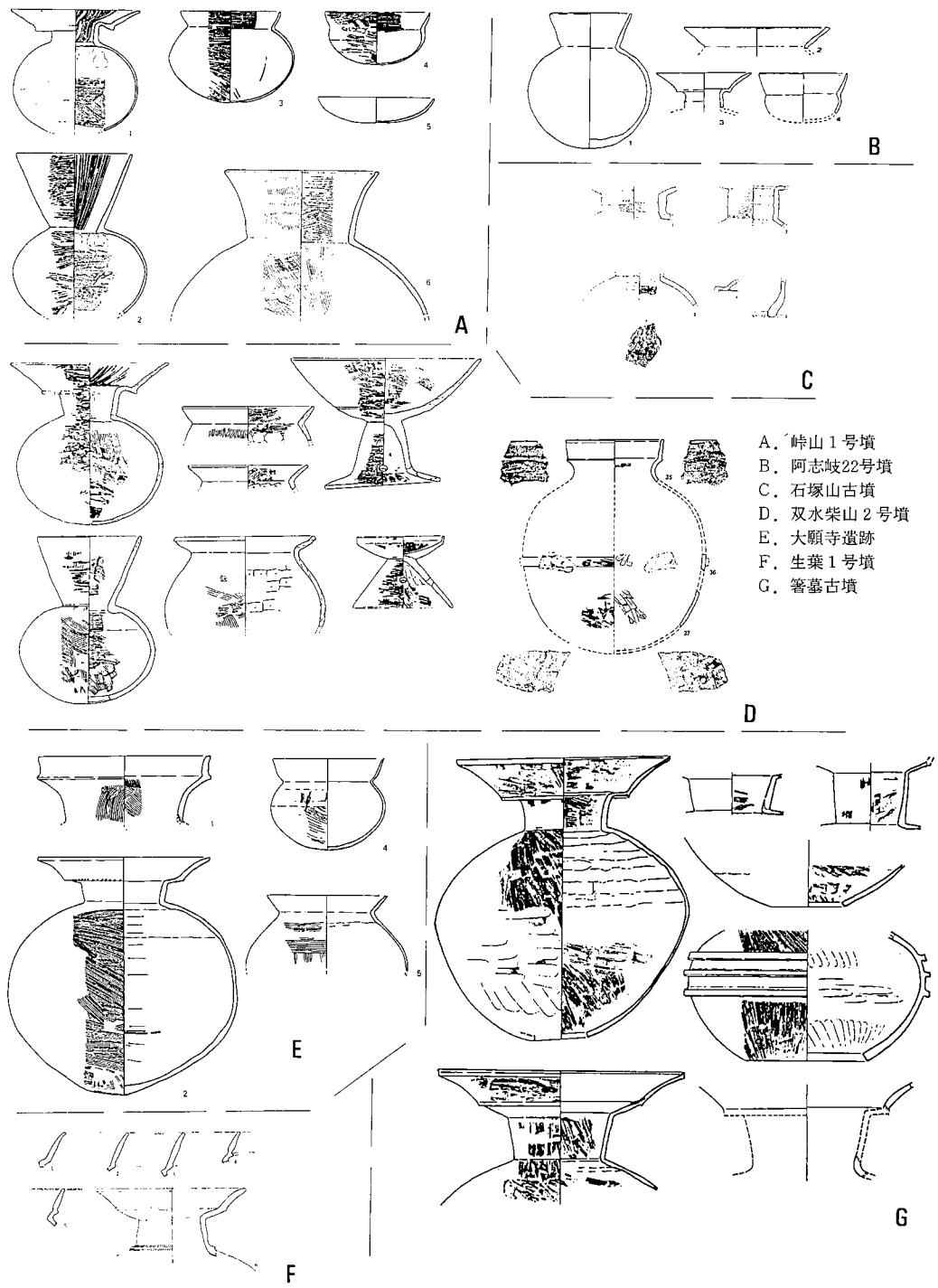
第47図 外ノ隈遺跡I・II区出土土師器実測図 (1/4)

(註15) 柳田康雄氏は、新たな外来系土器つまり庄内式土器を伴う時期以後を土師器として扱い、その最古の土師器 I a 式の暦年代を 3 世紀中頃から後半の時期においている。北部九州各地の土器を検討する中で、峰山 1 号墳の土器は II a 式に比定されている。なお、II 区出土の 44・45 の高壺は I a 式か I b 式に近いように思えるが、小破片にて速断できない。

(註16) 田崎博之氏は、弥生時代末から古墳時代初頭の土器を西新町式・有田式・柏田式の三つの様式に分け、各々古相段階・新相段階の型式群を捉えたうえで、古墳時代の開始時期を有田式土



第48図 長瀬高浜遺跡出土土器 (1/8) <報告書より改変転載>

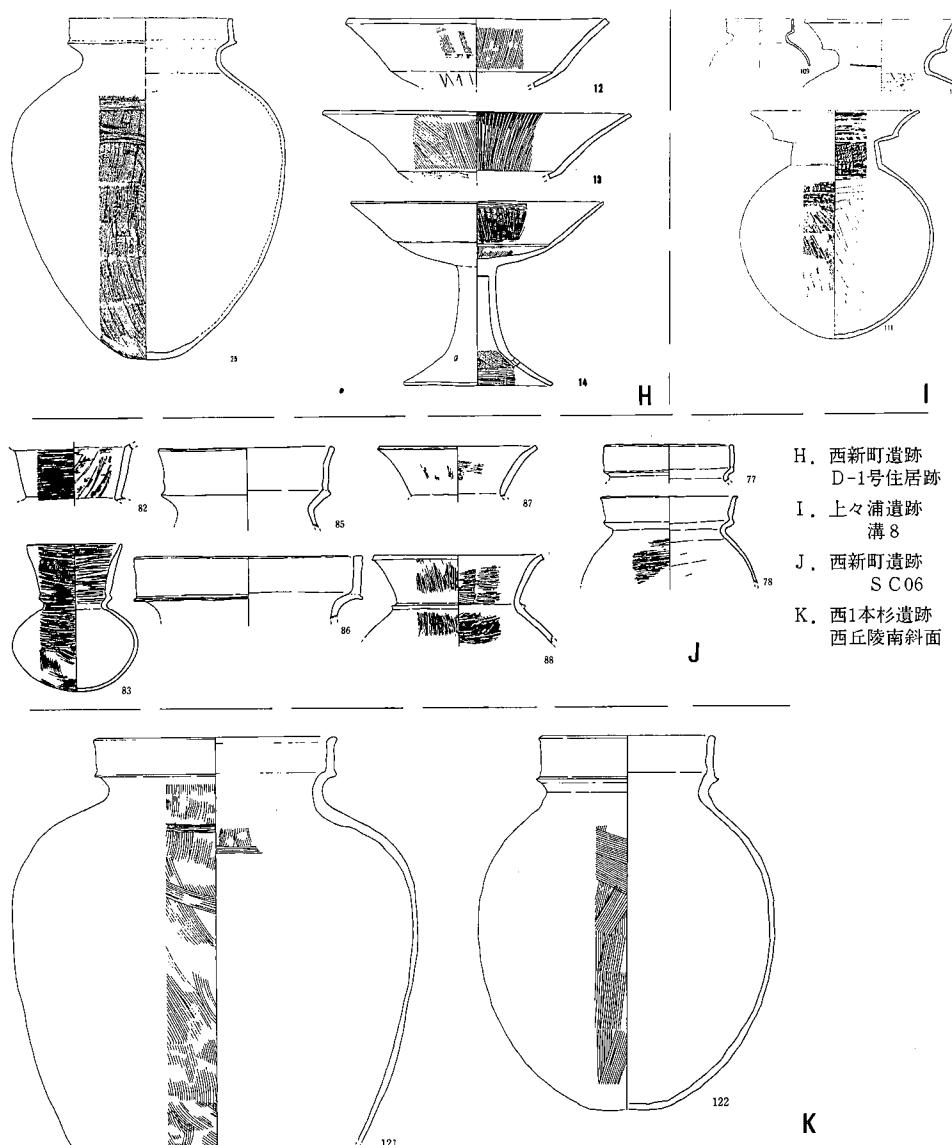


第49図 二重口縁土器等実測図1 (縮尺不同) <各報告書等より改変転載>

器古相段階と考えている。その中で西新町遺跡D地区1・8号住居跡出土土器は有田式新相段階に比定されている。

(註17)

柳沢一男氏は、古墳出現期から初期須恵器までの土器を6期に分けて編年図を提示している。1・2期は布留式古併行期であり、西新町遺跡D地区1号住居跡、塚堂遺跡E地区6号竪穴住居跡出土土器は1期に、双水柴山2号墳は2期に比定されている。



第50図 二重口縁土器等実測図2 (縮尺不同) <各報告書等より改変転載>

(註18)

井上裕弘氏は、弥生時代後期後葉から古墳時代前期の土器を8様式に分け、古墳前期1式の段階で多量の畿内系土器とともに山陰系土器の大半も九州へ流入しているとされた。西新町遺跡D地区1・8号住居跡、塚堂遺跡E地区6号竪穴住居跡、双水柴山2号墳の出土土器は古墳前期1式に、^(註19)峠山1号墳のそれは古墳前期2式に比定されている。

蒲原宏行氏は、佐賀平野の資料を素材に弥生時代後期後葉から古墳時代にかけての土器を3大別様式にくくり、さらにそれを惣座1・2式、タケ里式、土師本村1・2・3式の6細別様式に分けた。また北部九州や畿内との併行関係も表示しており、古墳時代初頭に位置づけるタケ里式を畿内寺沢編年の「布留0式」にあてるとともに、その時期に山陰IV期の甕が共併するとしている。西一本杉遺跡西丘陵南斜面出土の土器はタケ里式に含められている。なお峠山1号墳出土土器についてはさきに畿内系二重口縁壺を検討した中で「布留0式」併行ということなのでやはりタケ里式に含められることになる。

以上の編年案において、土器の型式的変遷については各人ともあまり大きな差異はないものの、様式として把握していく際に、同じ土器を扱っていても人によってその位置づけに微妙な差異が見られたりする。それはまた古墳の発生にからんだ時代背景の捉え方の違いも反映しているとみてよいだろう。いま筆者にその適否を云々する余裕はない。

外之隈遺跡出土土器の位置づけは難しい側面があるが、上述の編年案において、I区出土土器が柳田編年の土師器IIa式、田崎編年の有田式古相段階、柳沢編年の1期、井上編年の古墳前期1式、蒲原編年のタケ里式に相当すると捉えてよいだろう。すなわちいわゆる布留式古段階併行であって、畿内寺沢編年の布留0式の範疇に含まれるとしておきたい。II区の土器もI区とあまり違わない時期と捉えられるが、問題は最も器形のよくわかる40の二重口縁甕であって、この位置づけを同じ二重口縁の13の壺より新しいとみるか古いとみるかである。この位置づけ如何によっては、I・II区の墳丘墓の捉え方に大きな差異が生じてくるのである。現時点ではII区の44・45の高坏に古い様相を認めて、同じ布留0式のなかでもI区よりはやや古いと捉えておきたい。

註

1. 以上の遺跡については埋蔵文化財研究会『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』 第25回埋蔵文化財研究集会 1989 を参考にした。
2. 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡—『伊都』の土器からみた北部九州—」
『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
3. 筑紫野市教育委員会『阿志岐古墳群』 筑紫野市文化財調査報告書 第7集 1982
筑紫野市教育委員会『阿志岐古墳群II』 筑紫野市文化財調査報告書 第12集 1985
4. 福岡県教育委員会『塚堂遺跡III』
一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 1984

5. 唐津市教育委員会『双水柴山遺跡』	唐津市文化財調査報告書 第20集	1987
6. 中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」	書陵部紀要27 奈良県立橿原考古学研究所編『磯城・磐余地域の前方後円墳』	1976
	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第42冊	1981
7. 上田宏範・中村春寿『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第19冊	1961
8. 福岡市教育委員会『西新町遺跡』	高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告II 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第79集	1982
9. 福岡市教育委員会『西新町遺跡 3』	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第375集	1994
10. 佐賀県教育委員会『西原遺跡』	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 佐賀県文化財調査報告書 第66集	1983
11. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告- 1 -』		1982
12. 藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」	考古学雑誌64-4	1979
13. 前島已基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器—土器型式にみるその編年的位置について—」	考古学雑誌62-3	1976
14. 蒲原宏行「北部九州出土の畿内系二重口縁壺—その編年と系譜をめぐって—」	古文化談叢 20(中)	1989
15. 註2に同じ		
16. 田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」	史淵120	1983
17. 柳沢一男「土器出土古墳編年試案の概要—九州—」	埋蔵文化財研究会『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』 第25回埋蔵文化財研究集会	1989
18. 井上裕弘「北部九州における古墳出現前後の土器群とその背景」	『児嶋隆人先生喜寿記念論集 古文化論叢』	1991
19. 蒲原宏行「古墳時代初頭前後の土器編年—佐賀平野の場合—」	佐賀県立博物館・美術館調査研究書 第16集	1991
20. 註14に同じ		
21. 寺沢薰「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」	『矢部遺跡』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第49冊)	1986

2. 鏡の検討

外之隈遺跡では I 区で画文帶環状乳神獸鏡片、II区で飛禽鏡、重圈連弧文鏡片が出土した。これらについて先学の所説を見ながら若干の検討を試みる。

画文帶環状乳神獸鏡は面径13.8cmの四神四獸型式であり、非常に作りのよい中国鏡である。飛禽鏡は斜縁の薄肉彫りのもので面径9.0cm。完形に近いが、出土状態を見ると「打割鏡」または「破碎鏡」と称される状態にて副葬されたものであったと思われる。これも明らかに舶載鏡である。重圈連弧文鏡片は復原面径12.6cmで圏線が多く、縁の断面が三角形をなす。国産鏡の可能性が高いものの鏡質はそれほど悪くない。

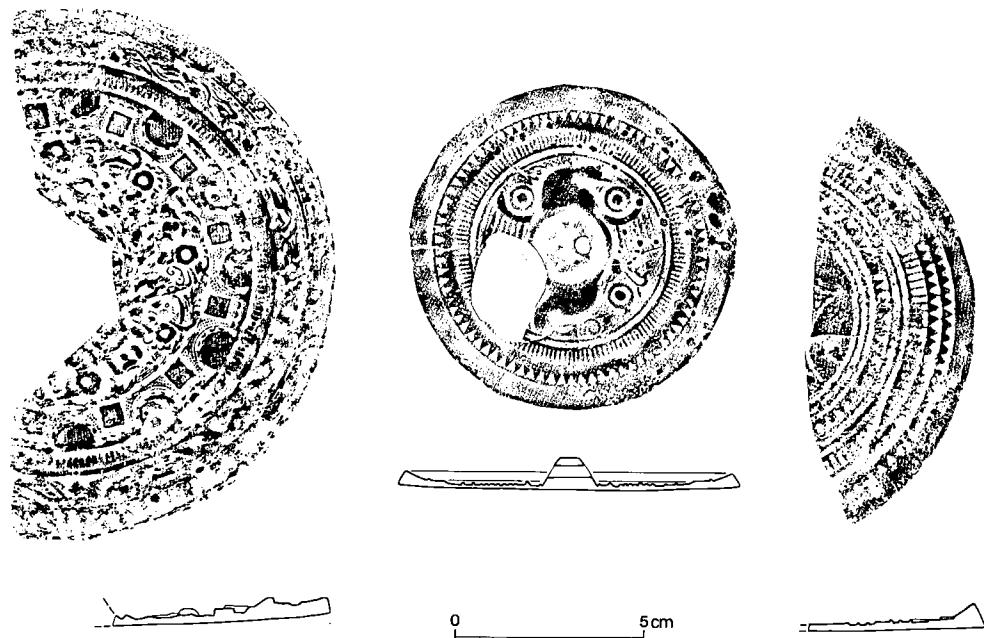
a. 画文帶環状乳神獸鏡

(製作年代)

樋口隆康氏はその著『古鏡』の“環状乳神獸鏡”の項目中で、「神獸鏡は後漢の中頃（2世紀初）に出現し、三国、西晋時代に最も盛行し、南北朝代までつづいた……」とし、紀年鏡9例を示したのち、永康元年、中平四年の鏡は「画文帶のある最も古い例で、主文は四神四獸となり、方格銘は四字ずつとなっている。このタイプが2世紀後半から3世紀初の作である。」と述べられている。

これを受けた形で時雨彰氏は「後漢の永康元年(167)から中平四年(187)の20年間では画文帶を有する物と銘帶を有するものが併行して製作され、環状乳8個による四神四獸鏡が出現する。……銘帶式から画文帶式へ、三神三獸式から四神四獸式へ変遷したのが後漢後期のこの時期である。」と述べている。

岡村秀典氏は漢鏡を1～7期に区分する中で、三角縁神獸鏡以前の2世紀後半から3世紀初頭を漢鏡7期とし、さらに漢鏡7期を3つのグループに分けている。^(註3)画文帶神獸鏡はその第IIのグループに属するとし、四神四獸環状乳神獸鏡に2世紀後葉の製作年代を与えている。そしてさらに「IIグループの鏡の段階にいたって、三角縁神獸鏡と同じような配布の中枢が畿内に



第51図 外之隈遺跡出土鏡 (1/2)

(註5)
形成されたことが推測できる」と述べる。

なお、氏は5世紀代の古墳から出土する画文帶神獸鏡—熊本県江田船山古墳や埼玉県埼玉稻荷山古墳出土鏡を中心とする—については踏み返し鏡であろうとするが、この点は樋口氏もすでに見通しを示しているところであり、筆者も同様に考える。

樋口隆康氏が取り上げた紀年鏡のほかに、その後に中国で確認された紀年鏡を見てもこの見解を変更するような出土例は、今のところ管見のかぎりでは見られない。つまり外之隈遺跡の鏡についても、現時点では2世紀後半以降に製作されたものとすることができるのである。

画文帶のある環状乳神獸鏡は、紀年鏡として西晋の泰始6年(270)鏡があるので、3世紀後半までは製作されていたことが伺えるが、魏・西晋期のものは後漢代のものに比べてやや異質であるから、外之隈鏡の如きは後漢代のうちに鋳造されたものとしてまず間違いない。

(銘文)

外之隈鏡では銘文の入った方格は8個が遺存するが、そのうち2個は鏽で全く見えない。残りの6個はある程度見えるものの読みこなすのはきわめて難しい。参考までに他の例をあげてみよう。

(註6)
永康元年鏡の方格12個内に見られる銘文は「永康元年 正月午日 幽凍黃白 早作明鏡 買者大富 延寿命長 上如王父 西王母兮 君宜高位 位至公侯 長生大吉 太師命長」である。

(註6)
中平四年鏡の方格13個内にある銘文は「中平四年 五月午日 幽凍白同 早作明鏡 買者大富 長宜子孫 延年命長 上如王父 西王母兮 大樂未央 長生大吉 天王日月 太師命長」である。

(註7)
近年公表されたもので、外之隈遺跡の画文帶環状乳神獸鏡に文様構成等が非常によく似ている鏡がある。それの方格12個内にある銘文は「潘利作鏡 幽凍三商 周刻無□ 配象万方 白牙禹樂 衆神見容 百吉并存 服者吉羊 福佑自从 保子宜孫 位至三公 其師命長」である。

外之隈鏡も上記のような吉祥句の銘文が鋳出されていたと思われるが、本文中に示したような一部の文字しか判読できない。6個の方格内に見える文字は同じものの繰り返しがあって文章となりえていないように見受けられる。そうすれば上記引用の紀年鏡よりは時期が若干降るものかもしれない。

(註8)
九州における神獸鏡としては銘帶式のものが久留米市祇園山古墳の裾部外周にある甕棺墓から出土しており、先述の5世紀代のものを除けば九州では2例しかなく、それはとともに約半分の鏡片であることになる。これが三角縁神獸鏡と同じように畿内から配布されたものであったとする岡村氏の説があるものの、鏡片として出土している事実は三角縁神獸鏡とは異質であって、この点の解釈は大きな問題をはらむものといえよう。ともあれ、この外之隈鏡は、遅くとも2世紀末までに中国は長江流域で造られたものが日本（倭）にもたらされ、倭国内にて鏡片

にされてのち副葬されるに至ったと考えられる。

なお、この同範鏡あるいは同型鏡がないかみてみたが、現時点では見あたらなかった。
(註10)

また、この外之隈鏡の鉛同位体比の測定結果では、華中または華南の鉛の領域に入るとされている。

b. 飛禽鏡

盤龍鏡の龍か虎を鳥に変えた、広義の盤龍鏡の一種であるとしてよい。飛禽文鏡と言われる
(註11)こともある。舶載鏡であるが、中国・朝鮮半島においても出土例は少ない。

飛鳥文の表現に薄肉彫りと線描きの二種があるうちの、外之隈鏡は前者である。

岡村秀典氏は前述の漢鏡7期の鏡を説明する中で、「Iのグループは『上方作』系浮彫式獸帶鏡が中心で、ほかに飛禽鏡、画像鏡、夔鳳鏡などがある。獸帶鏡や画像鏡は三角縁神獸鏡のモ
(註12)デルになっており、製作年代は2世紀後半を中心とする。」としている。そしてこれら「Iのグ
ループの鏡はやや低いレベルの首長ないし共同体内の有力者層が後の畿内政権のような中央政
権の手を経ることなく、朝鮮半島からの流通ルートによって入手したのではないかと想像して」
(註13)いる。また「飛禽鏡は上方作系浮彫式獸帶鏡に近い性格ものであったと考えられる」とする。
さきの画文帶神獸鏡より一段階古く位置づけていることになる。

間壁葭子氏は外之隈鏡を含めて国内出土の8例—京都府2、福井県1、岡山県1、福岡県2、
大分県1、愛知県1—を取り上げた後、この種の鏡を副葬した人物について、「古墳出現期の各地で、一定の地位は得ていても、後に古墳時代の中心勢力となる大和王権と、とくに関わりを持った系譜とも思えない」とし、岡村氏と同様の見解を示される。そして、「自ら大海を渡り海外の国々へ出向いたような人物」にとって「鳥は、一つの理想像であり、自分の守護像であつたかも知れない。樂浪あたりで、比較的容易に入手出来た可能性のある鏡の中から、彼らは意識してこの飛禽の図柄を撰んだ可能性もある」と述べて、この鏡と被葬者との関係にまで言及
(註15)された。

国内出土例としては他に、広島県石槌権現第5号古墳の墳裾にあるSK14の鏡片と、佐賀県
(註17)西一本杉遺跡ST009古墳の推定品がある。これを入ても全国で10例と数は少なく、その分布は西日本に点在する傾向にある。この種の鏡を副葬した被葬者像については先の岡村・間壁氏の見解があるが、被葬者自らが海外へ雄飛したかどうかは別にしても、現時点ではそれ以上の性格づけは困難である。

この鏡と同種の盤龍鏡は中国北方で流行していたとされるが、江南地方の鄧城からは線描き
(註19)式と薄肉彫り式の中間形態ともいえる「飛鳥鏡」「飛鳳鏡」が出土しており、六朝初期に属するとされている。また、この種の鏡が朝鮮半島北部の旧樂浪郡地域で製作された可能性を指摘さ

(註20)
れでいることも注意しておきたい。

c. 重圏連弧文鏡

この鏡片については出土当初から中国鏡か国産（倭）鏡かを検討してきた。直感的には仿製鏡であろうと考えたが、鏡質がかなり良いことが気になっていたのである。

内区にある連弧文が復原すれば7弧であることは中国鏡でないことを暗示する。戦国式鏡の雲雷文地連弧文鏡や蟠螭連弧文鏡には7弧のものがあるが、これは突線かヒ面素帶の表現であって漢式鏡の連弧文（「内行花文」）のそれとはちがい、外之隈鏡にそのままつながるものではない。内区に連弧文を有するもので最も古い日光鏡・昭明鏡等の前漢式鏡の連弧文銘帶鏡は基本的に8弧である。^(註21) 後漢式鏡の四葉座鉢・蝙蝠座鉢連弧文鏡も基本的に8弧である。^(註22) ただごく稀に河南省洛陽西郊漢墓出土鏡の6弧、^(註23) 河南省陝県後漢後期墓・西安東郊十里鋪出土の7弧の^(註24) ものがあるが例外といってよい。つまり中国鏡の内区にある連弧文はほとんどが8弧とみてよい。その意味では外之隈鏡は中国鏡から逸脱する可能性が高い。

また圏線が多いことも国産（倭）鏡である可能性を強く示唆していた。中国鏡で圏線の多い鏡はこれまた少なく、後漢～三国の鏡にはほとんどないといってよい。隨唐鏡式の神獸鏡には多重圏線を巡らすものがある。^(註25)

鏡質の捉え方については感覚的な側面もあるので重要視できないが、気にはなるところである。現時点ではこの重圏連弧文鏡片については国産鏡の可能性が高いものとしておきたい。なお、鉛同位体比の測定は行っていない。

ちなみに、筆者が1990年9～10月に中華人民共和国を訪れた際に、幾人かの考古学者にこの鏡の写真を見てももらった。写真からの判断ではあるが中国社会科学院考古研究所の徐萃芳所長や南京博物院の王興平氏は「日本製の可能性が高い」とのコメントであった。

註

1. 樋口隆康『古鏡』 新潮社 1979
2. 時雨彰「画文帶神獸鏡の研究—前編—」 卍邪志 第2号 1989
3. 岡村秀典「中国の鏡」 弥生文化の研究 6 雄山閣 1986
4. 岡村秀典「卑弥呼の鏡」 都出比呂志・山本三郎編『邪馬台国の時代』 木耳社 1990
5. 岡村秀典「三世紀の東アジア情勢と鏡の贈与」 福岡県教育委員会『卑弥呼の銅鏡百枚の謎—銅鏡の製作と分布—』（第5回 国際シンポジウム） p 30 1991
6. 陳佩芬編『上海博物館藏青銅鏡』 1987
7. 楊仕衡「湖南祁陽県発現漢代銅鏡」 考古 1989-4
8. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—X XVII—』 1979
9. 徐萃芳「三国・両晋・南北朝的銅鏡」 考古 1984-6
- 徐萃芳「三国・両晋・南北朝の銅鏡」『三角縁神獸鏡の謎』 日中合同古代史シンポジウム 1985

- 王仲殊「論日本出土の吳鏡」 考古 1989-2
- 孔祥星・劉一曼『図説 中国古代銅鏡史』(高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳) 1991
10. 馬殻久夫・平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」 考古学雑誌75-4 1990
11. 孔祥星・劉一曼『図説 中国古代銅鏡史』にこの種の鏡が取りあげられていないのは、やはり出土例が僅少なためと思われる。
12. 註5に同じ p 28
13. 註4に同じ p 22
14. 岡村秀典「浮彫式獸帶鏡と古墳出現期の社会」 出雲考古学研究会『出雲における古墳の出現を探る—松本古墳群シンポジウムの記録—』 p 106 1991
15. 間壁葭子「飛禽鏡の性格」 季刊考古学 第43号 p 51 1993
16. 広島県埋蔵文化財センター『石棺現遺跡群発掘調査報告』 1981
17. 鏡片を実見していないが、その内区はごく一部しか遺存せず、原報告では「船載鏡であろう」の記述のみである(佐賀県教育委員会『西原遺跡』一九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3) — 佐賀県文化財調査報告書 第66集 1983)。これを藤丸詔八郎氏は飛禽文鏡片とされている。
- 藤丸詔八郎「市域外の破鏡について」(『高津尾遺跡4』一九州縦貫自動車道関係文化財調査報告25—北九州市埋蔵文化財調査報告書 第102集 1991)
18. 註8徐萃芳論文参照。
19. 湖北省博物館・鄂州市博物館編『鄂城漢三国六朝銅鏡』文物出版社・古代学研究会 1987
20. 西川寿勝「我が国にもたらされた船載鏡」 大阪府埋蔵文化財協会研究紀要2 1994
21. 樋口隆康『古鏡』(註1)や孔祥星・劉一曼『図説 中国古代銅鏡史』(註9)、孔祥星『中国銅鏡図典』(註23)を参照
22. 註1の p 135
23. 孔祥星『中国銅鏡図典』 文物出版社 P 374 1992
24. 陝西省文物管理委員会編『陝西省出土銅鏡』 文物出版社 1959
25. 註24文献の p 89 や広西壮族自治区などに出土例がある。

3 . 墳丘墓の年代と位置づけ

先にI・II区出土土器について、出土点数が少なく小破片にて難しい側面があるけれども、おおむね布留式古段階併行であろうとした。またI区よりもII区の方が少し古いのではないかとした。II区の方が古いのではないかとするのは、ひとつには墳墓のあり方の問題がある。

II区1号墳は不整長方形の墳丘墓であり、墳頂部の主体部は5基があった。3~5号墓には切合い関係があって、全部が同じ時に埋葬されたものではないが、3号墓と5号墓は平行して埋置され、1・2号墓はその脇にやはり平行に営まれている。2・3号墓は2号墓の方が新しいけれども、それは時期差ではなく時間差なのである。1号墓と5号墓、2号墓と3号墓とはその位置・占地関係から見ておそらく一セットではないかと考えうるのである。4号墓が最も早く営まれ、その後に2・3号墓そして1・5号墓が相次いで造墓されたものと思われる。金・田中氏が予測されているように、1号墓の被葬者が女性であることから、木棺を使ってい

る3・5号墓の被葬者は男性で、石棺をしつらえた1・2号墓の被葬者は女性であったと捉えてよいのではないかと考える。

それはさておいても、このII区1号墳のあり方は地域の有力首長者層の墳墓として捉えられるとしてよい。

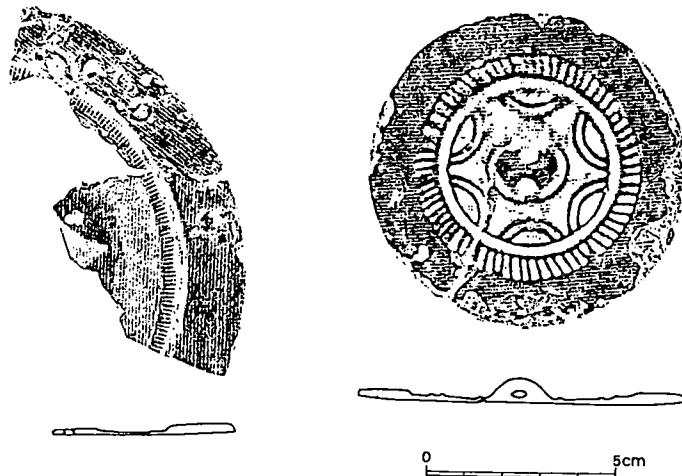
I区1号墳は前方後方形墳丘墓の形態をとり、墳頂部中央にあるのは1号墓1基のみであった。まさに個人のために墳丘墓が築かれているのである。

これを見ると、II区1号墳における有力首長者層の中から析出された有力個人が造ったのがI区1号墳である、として捉えられよう。とすればII区→I区への時間的推移となる。

次に出土した鏡において見ると、岡村秀典氏は漢鏡7期に位置づけた鏡の中で、飛禽鏡をIグループ、画文帶神獸鏡をIIグループとして、IIグループは「Iグループよりも若干新しくて、(註1)三角縁神獸鏡よりかは古い時期」としている。それは中国における製作年代の順序であるわけだが、日本へもその通りにもたらされ、かつ墳墓へも副葬されたのだとすれば、飛禽鏡のII区から画文帶神獸鏡のI区へという順になるのである。

以上のことより、ここ外之隈遺跡では、古墳時代初頭期にII区に飛禽鏡や連弧文鏡を副葬した有力首長者層の墳墓が築かれ、その中から出た首長は画文帶神獸鏡を手にし、そしてその死とともにI区に墳丘墓が造営された、というように捉えられよう。

ところで、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての墳墓について、小田富士雄氏はI～IIIの3類型を設定し、そのうちのI類型は小地域の首長墓的性格を有するもので、この外之隈遺



第52図 山田後山遺跡出土鏡（1/2）〈「甘木市史資料編」より改変転載〉

(註2)
跡I区1号墳もそれに含められている。まさにそのとおりであろう。眼下に見渡せる一帯の首長であったと思われる。

(註3)
ここから北西1.5kmほどの所には山田後山遺跡があり、箱式石棺墓から後漢鏡片と小形仿製鏡が出土している(第52図)。弥生時代後期後半から終末頃の時期に當まれたと思われる4基のうちの2基から出土したのであるから、おそらくそこは特定有力者集団の墳墓群だったのである。時期的には外之隈遺跡の前段階にあたり、この地域一帯において首長といえる勢力の醸成が段階的になされていったことを伺わせる。

(註4)
甘木朝倉地域では甘木市神藏古墳から天王日月・獸文帶四神四獸の三角縁神獸鏡が出土しており、これは山口・竹島御家老屋敷古墳、京都・椿井大塚山古墳(3)、神奈川・白山古墳に同範鏡を有するものである。また同じ甘木市平塚大願寺遺跡からも張氏作三神五獸の三角縁神獸鏡が出土したと伝えられ、一つ木-小田台地(福田丘陵)上には古墳時代初頭期に一大勢力が存したことは間違いない。ここ外之隈遺跡から一つ木-小田台地までは約10kmの距離があることからすれば、外之隈遺跡の造営者集団と神藏古墳周辺の集団とは直接的な関係はなかったものと考えてよかろう。この近くで外之隈遺跡I・II区とほぼ同じか後続する時期の古墳が存するかも知れない。その意味ではII区の北方にあって古期の埴輪片が採集された本陣古墳は重要な位置を占めているといえよう。

さて、最後に外之隈遺跡I・II区墳丘墓の暦年代について考えておこう。I区出土の画文帶神獸鏡は遅くとも2世紀末から3世紀初頭頃には製作されていたものと思われるが、それが日本(倭)にもたらされたのははたしていつであろうか。

倭国大乱ののち倭の女王に共立された邪馬台国の卑弥呼は、西暦239年に魏に使いを送り、魏の少帝芳から銅鏡100枚その他を下賜された。それは『三国志』の魏書東夷伝倭人条に見えるとおりである。魏は司馬懿仲達をしてその前年に朝鮮半島の公孫氏政権を滅ぼしており、そのすぐあとに遣使であってきわめて慶賀すべきことであったので魏の公式の記録に残ったのだともいわれる。それは首肯されることであって、記録されない交渉は、特に私的なそれは間断なくあったものと推察されるのである。

I区の画文帶神獸鏡はおそらく3世紀前半～中頃にはもたらされていたであろう。それから若干の期間をおいて副葬されることになるが、大幅な伝世等は認め難い。そうすれば、3世紀後半代でもやや古い段階には墓に納められたとみられるのである。

註

- | | |
|---|------|
| 1. 岡村秀典「卑弥呼の鏡」都出比呂志・山本三郎編『邪馬台国の時代』木耳社 P19 | 1990 |
| 2. 小田富士雄「弥生から古墳へ」『弥生古鏡を掘る—北九州の国々と文化—』
北九州市立考古博物館 | 1991 |
| 3. 福岡県立朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』 | 1969 |
| 4. 甘木市教育委員会『神藏古墳』 甘木市文化財調査報告 第3集 | 1978 |

図 版



1. 外之隈遺跡遠景（西南から）



2. 外之隈遺跡遠望（南から）

図版 2



1

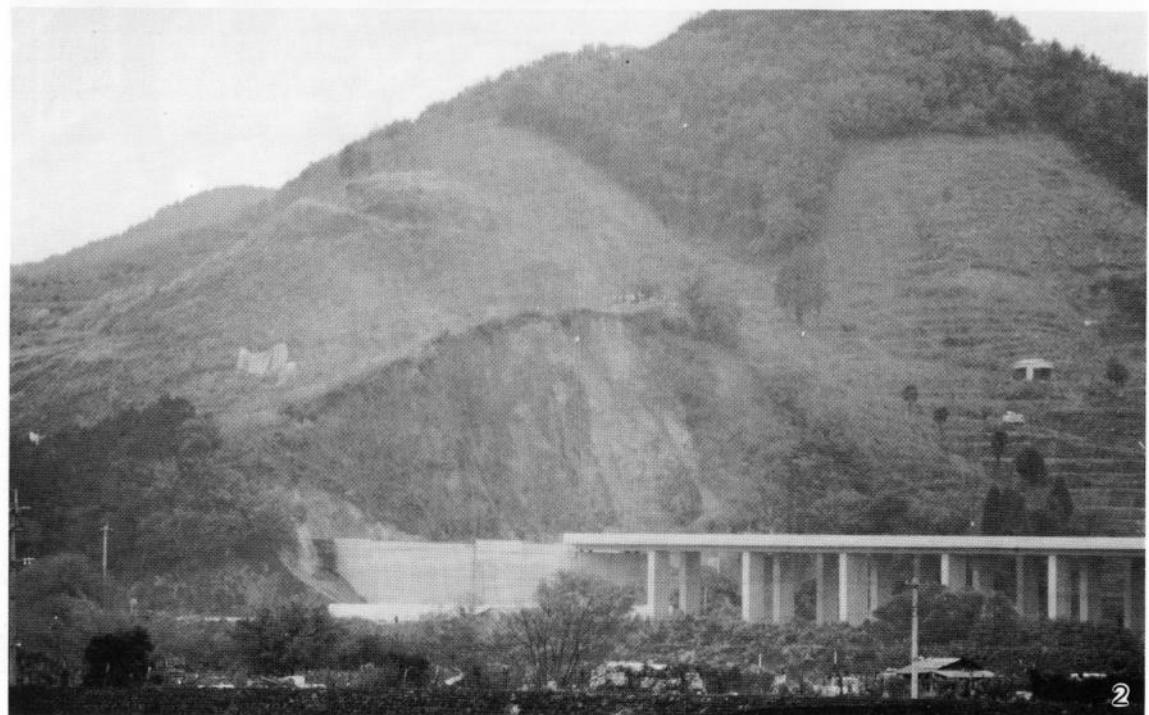


2



3

1. 外之隈遺跡と惠蘇八幡宮遠景（西から）2. I・V区空中写真（西から）3. 高山より遺跡をのぞむ（東南から）



1. I・II区遠景（西から） 2. 同（南東から） 3. II区よりI区をのぞむ（北西から）

図版 4



1. I 区全景（西上空から）



2. I 区 1 号墳全景（西上空から）



1. I区1号墳（南西から）



2. I区1号墳北側トレンチ（北から）

図版 6



1.
I 区 1 号墳 1 号墓
(北から)



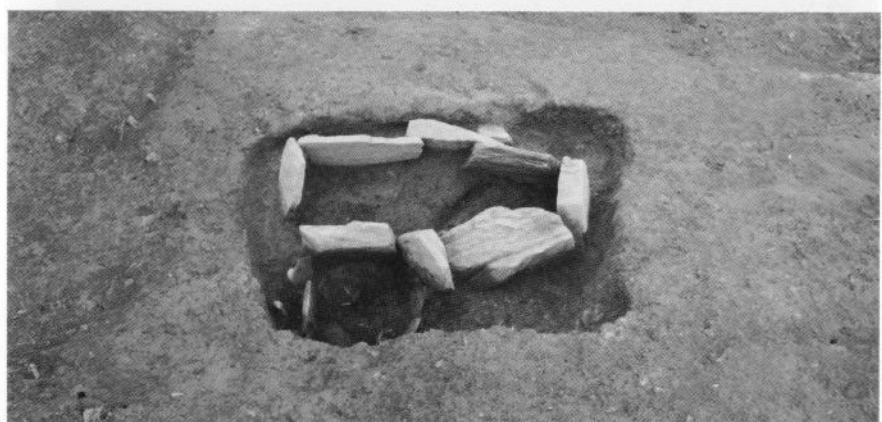
2.
同上
遺物出土状態
(西から)



3.
同上 (北から)



1.
I 区 1 号墳 2 号墓
(西から)



2.
同上
蓋石除去後

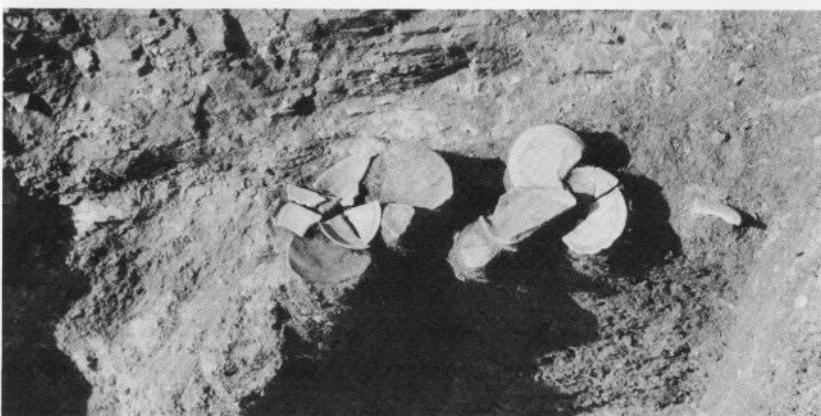


3. 同上 (北から)

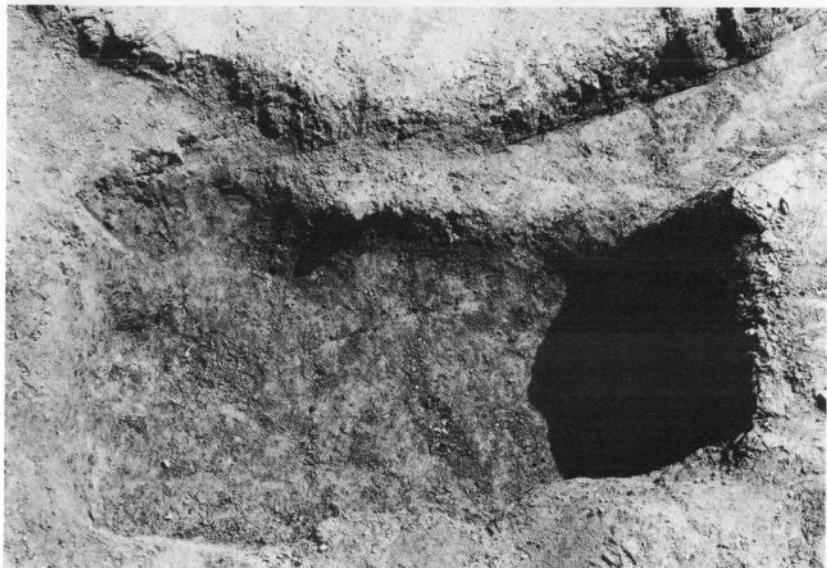
図版 8



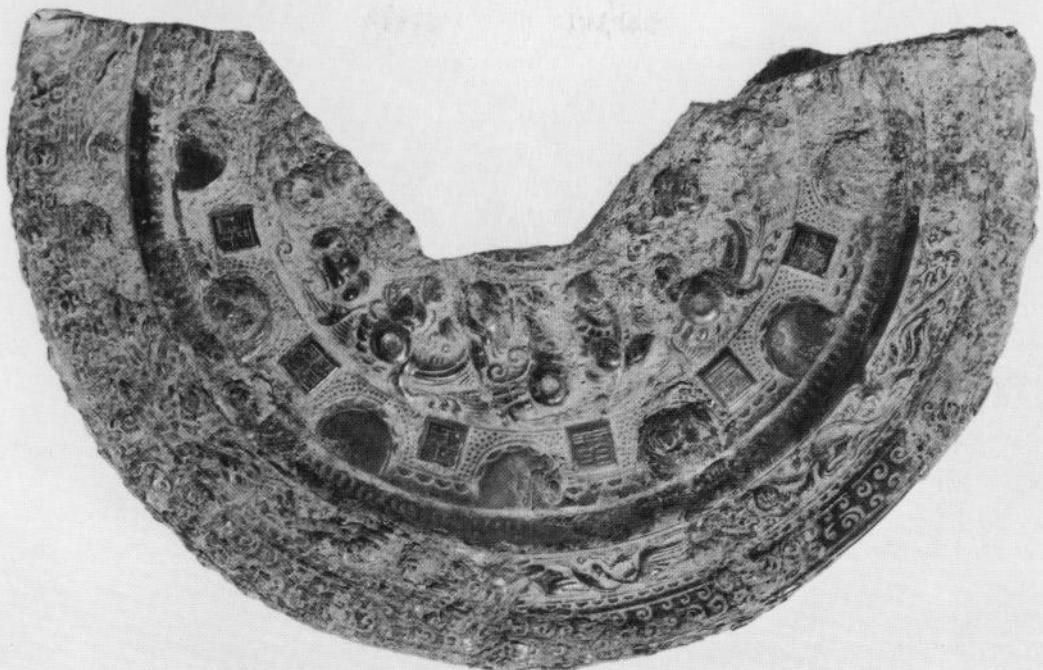
1.
I区1号土壙
(東から)



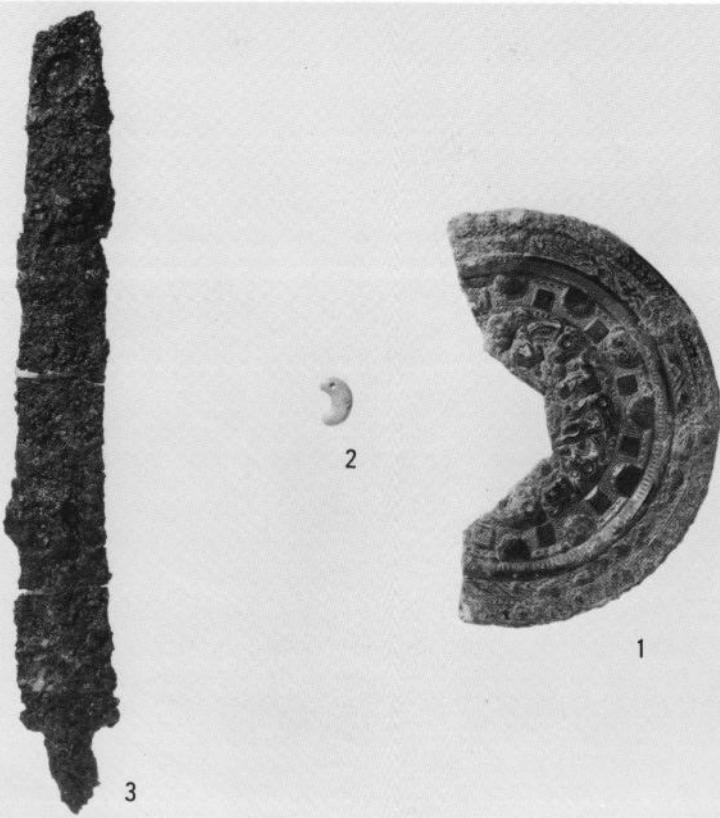
2.
同上
土器出土状態



3.
I区SK1
(南から)



1

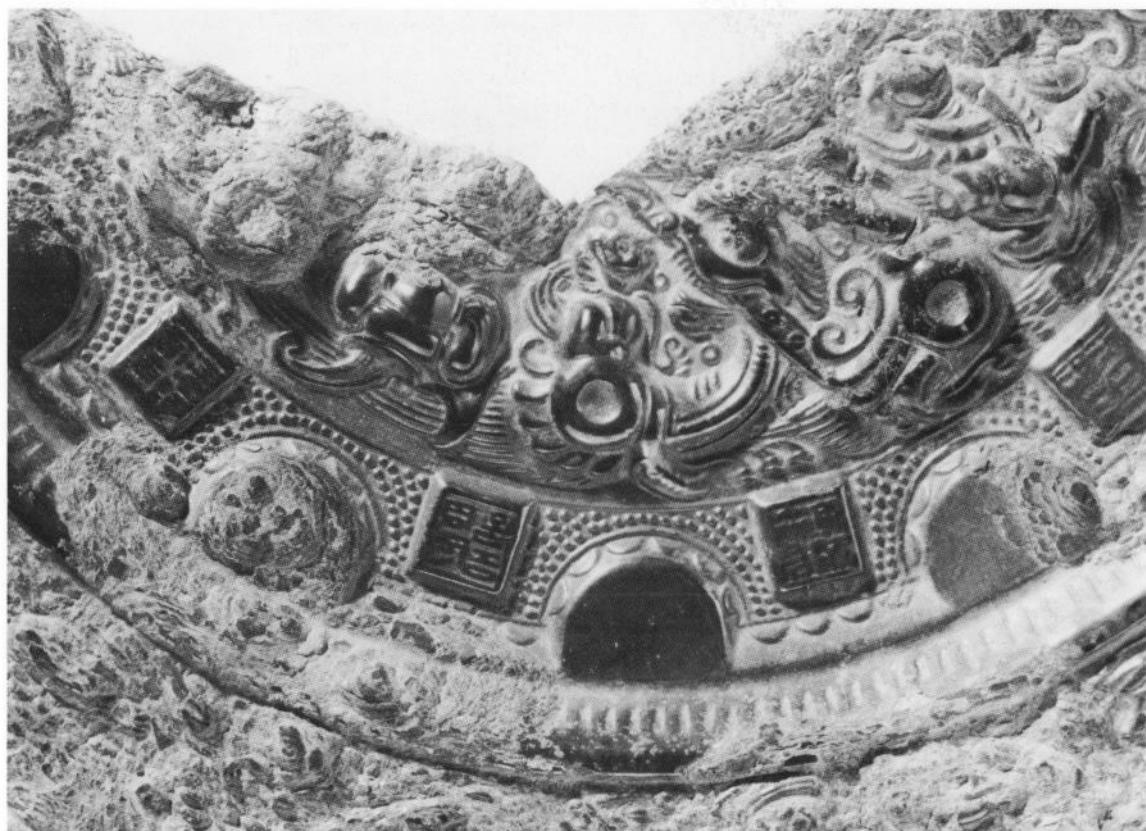


2

1

2

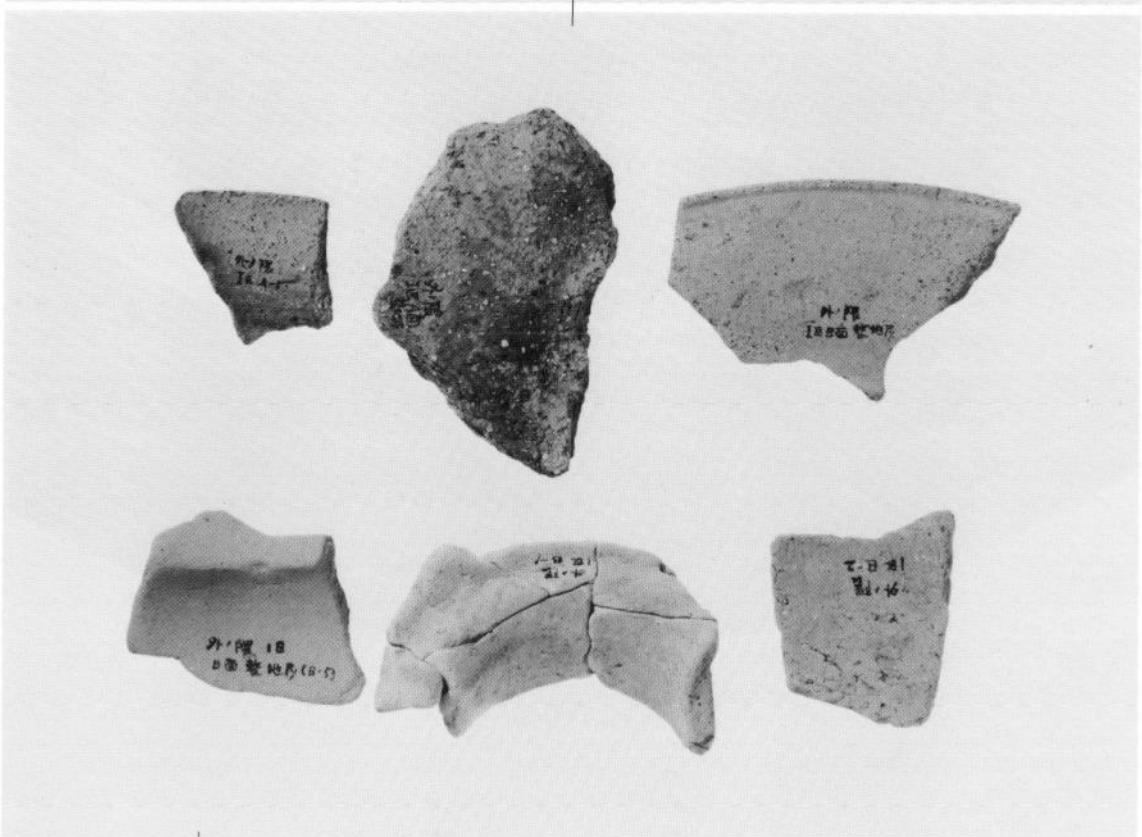
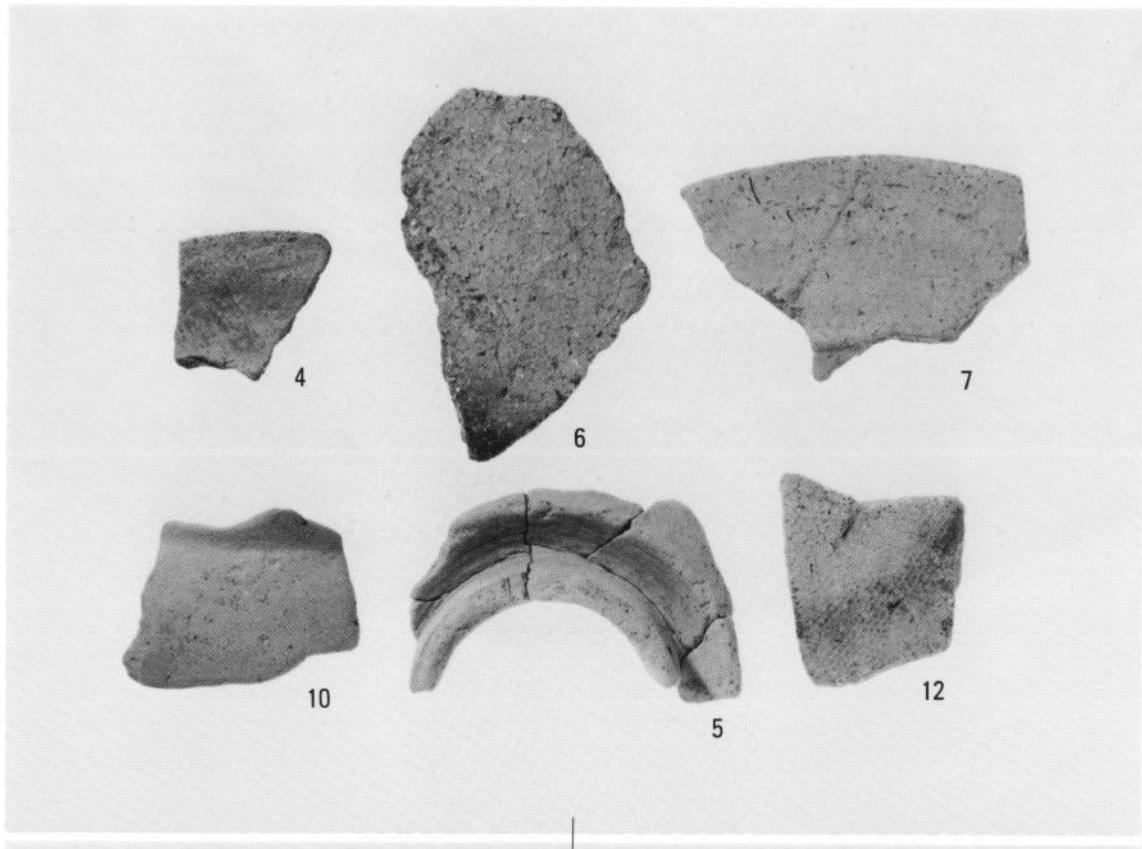
I区1号墳1号墓出土遺物（1. 画文帶環状乳神獸鏡 2. 鏡・玉・劍）



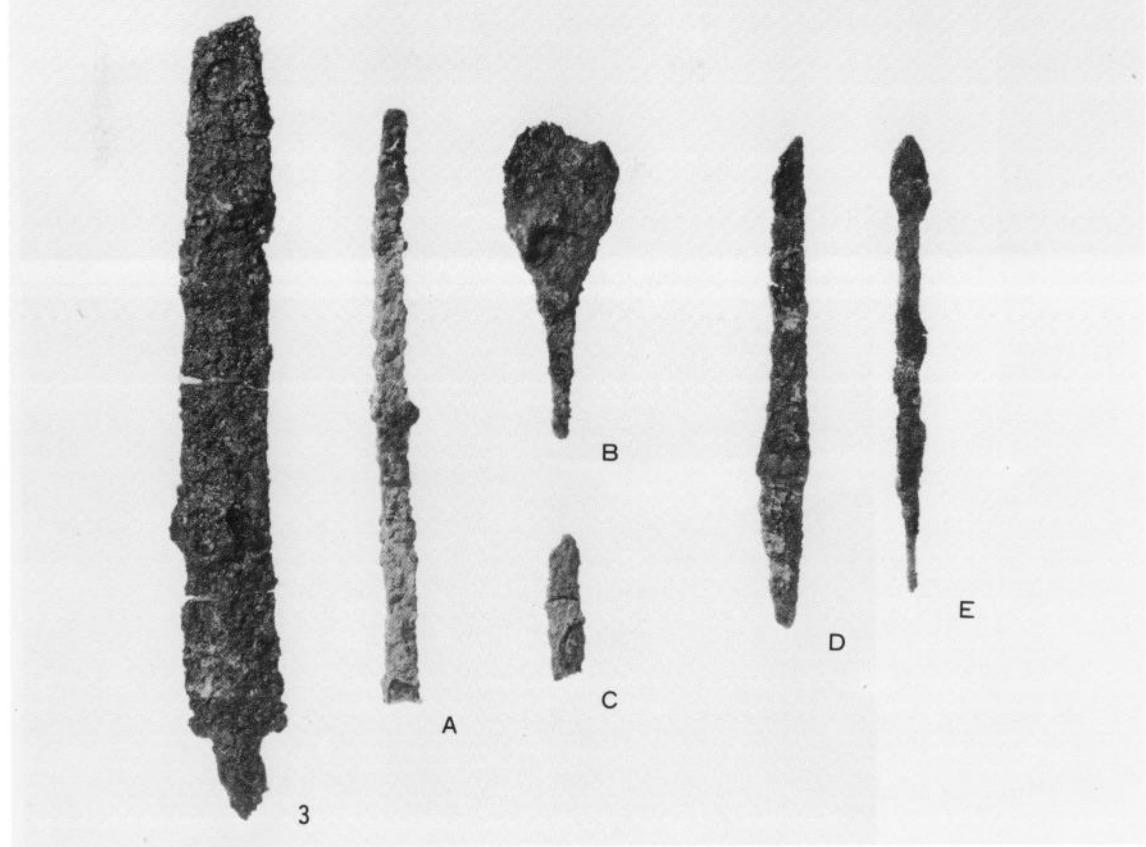
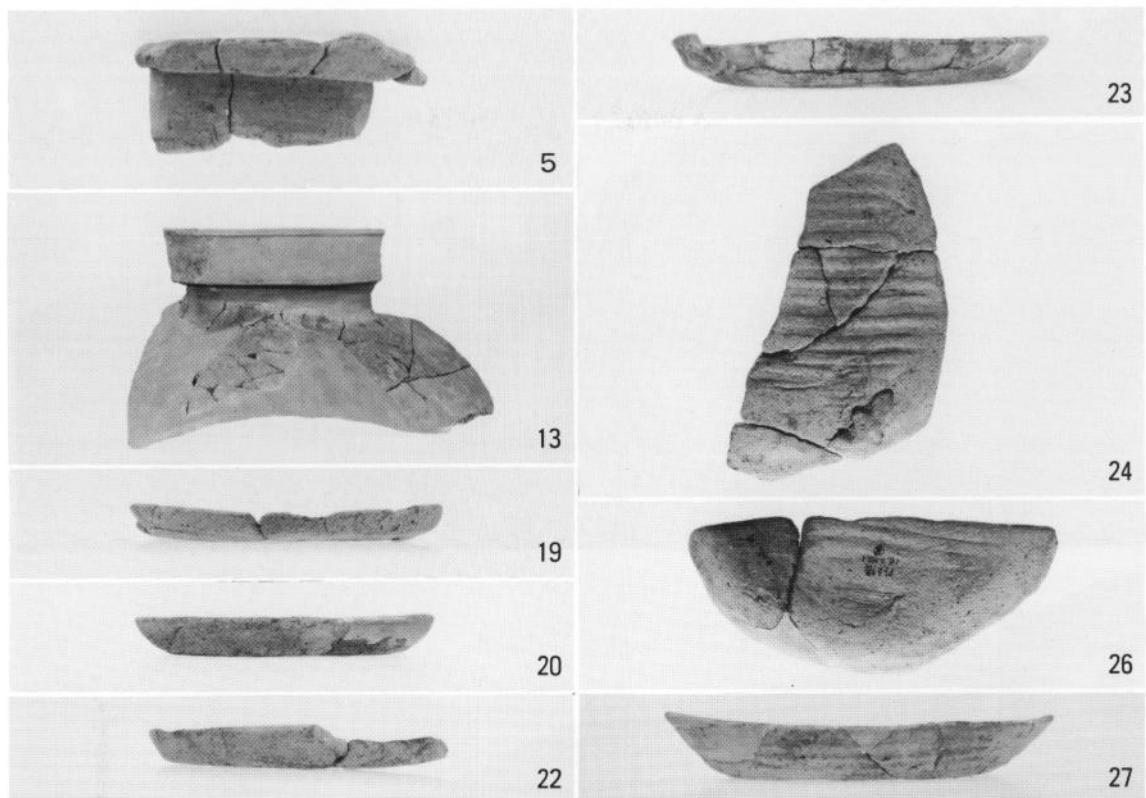
画文帶神獸鏡の神像・獸像部分と方格銘

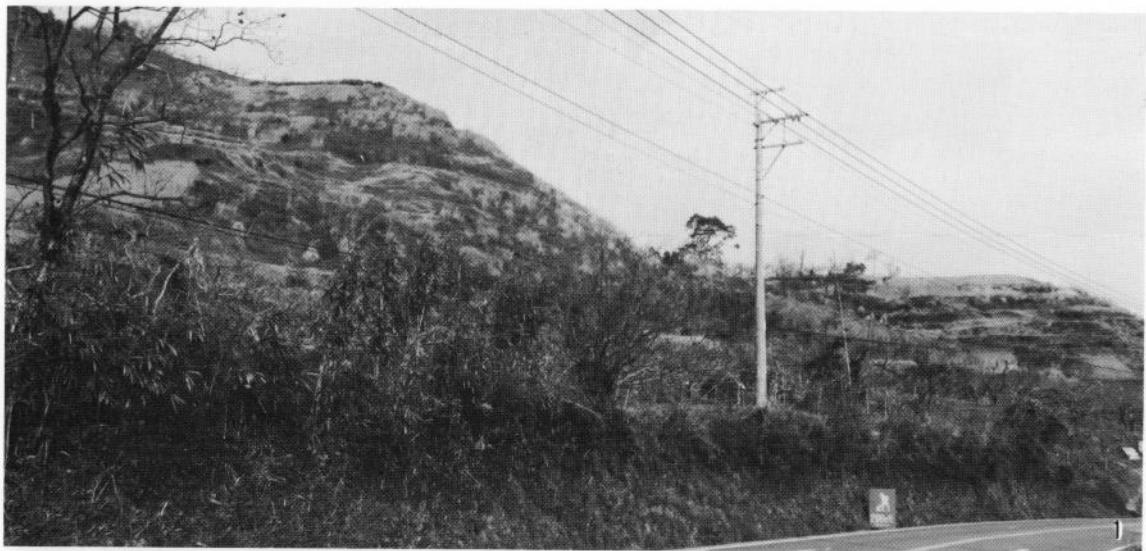


画文帶神獸鏡の画文帶部分

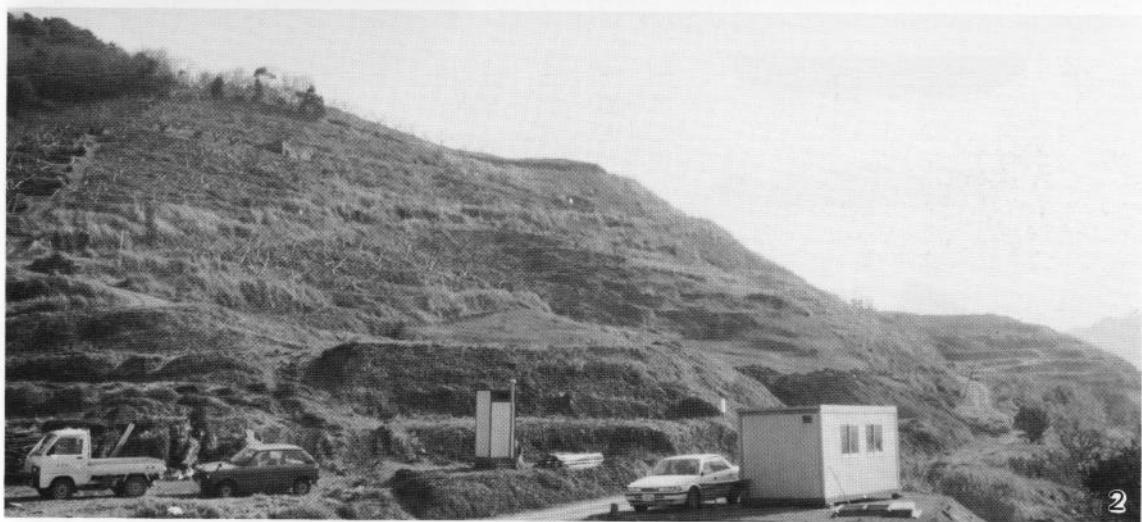


外之限遺跡 I 区出土土器





1



2



3

1. 外之隈遺跡II区遠景（西南から）

2. 同（西から）

3. II区墳裾部分（北から）



1. 外之隈遺跡II区全景（南西上空から） 2. II区1号墳全景（真上から）



1. II区1号墳主体部検出前（北から）



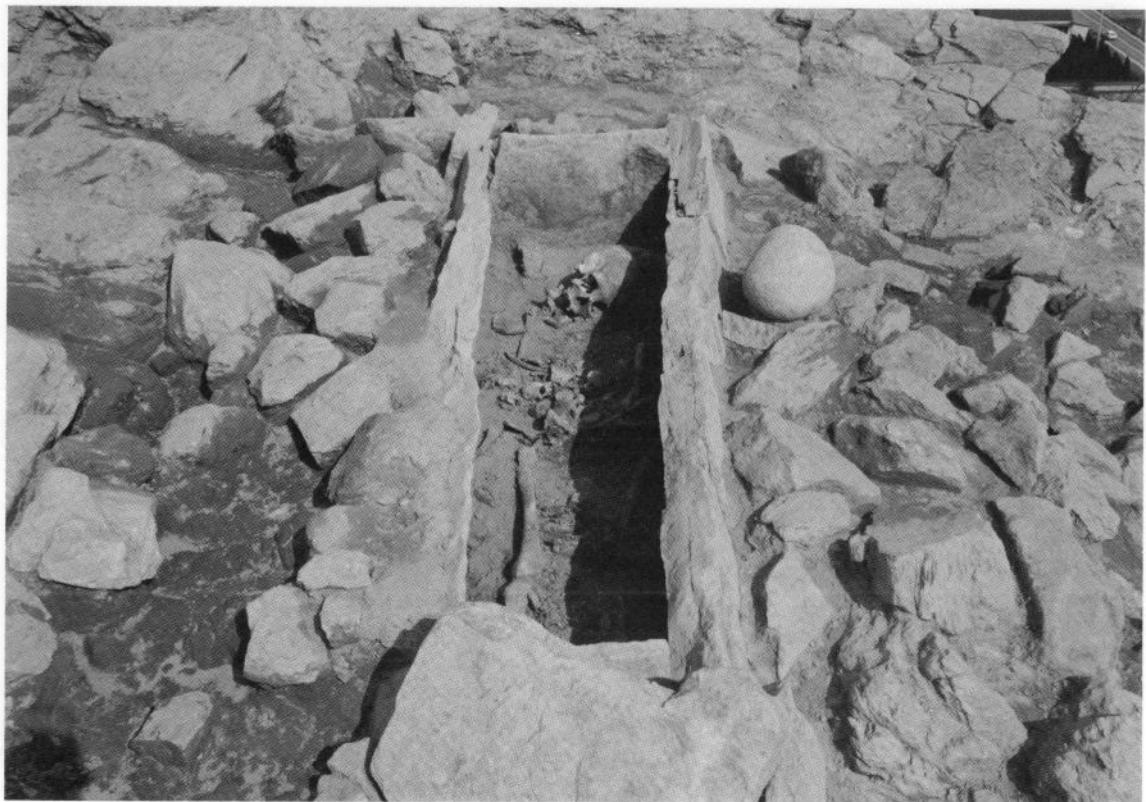
2. 同上 検出後（北から）



1. II区1号墳1号墓（北から）



2. 同上 蓋石除去後（北から）



1. II区1号墳1号墓人骨出土状態（西から）



2. 同上 人骨上半部（西から）



1. II区1号墳1号墓
鏡出土状態
(南から)



2.
同上 鉄器出土状態
(西から)



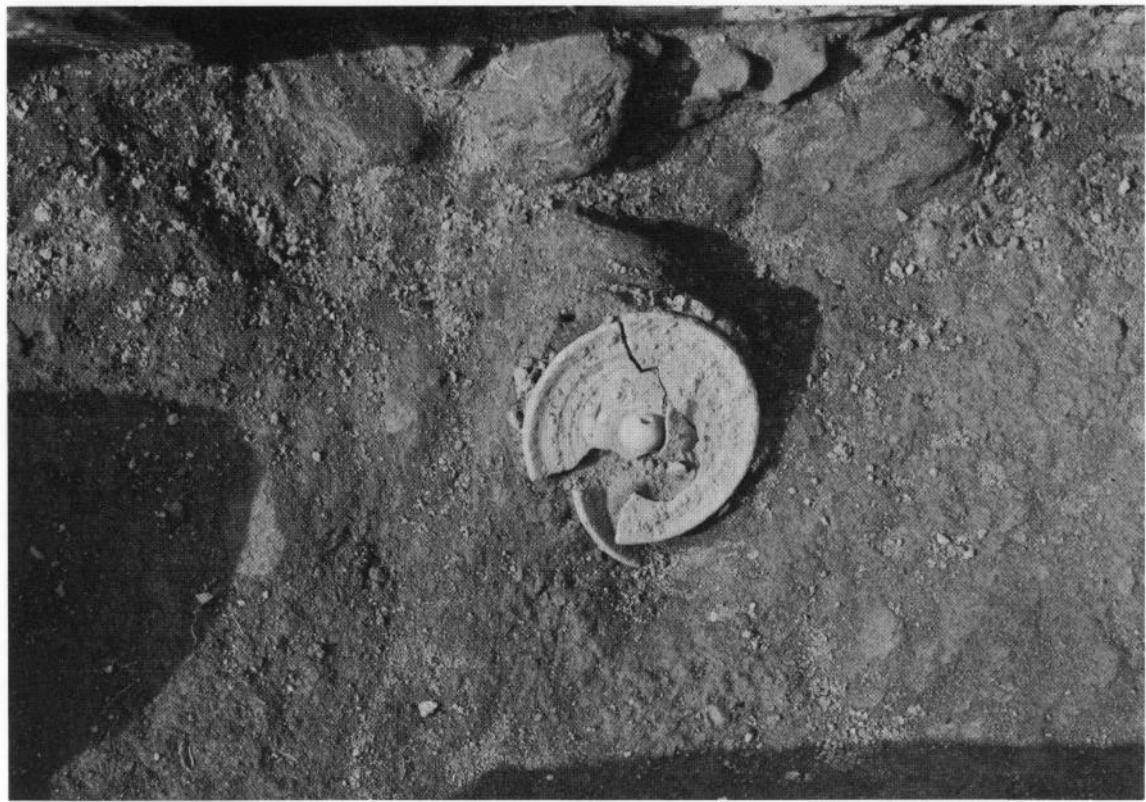
1. II区1号墳2号墓（北から）



2. 同上 蓋石除去後（北から）



1. II区1号墳2号墓遺物出土状態（西から）



2. 同上 鏡出土状態（南から）



1. II区1号墳3・4・5号墓（北から） 2. 同3・4号墓（北から）



1. II区1号墳5号墓（北から）



2. II区1号墳6号墓（西から）



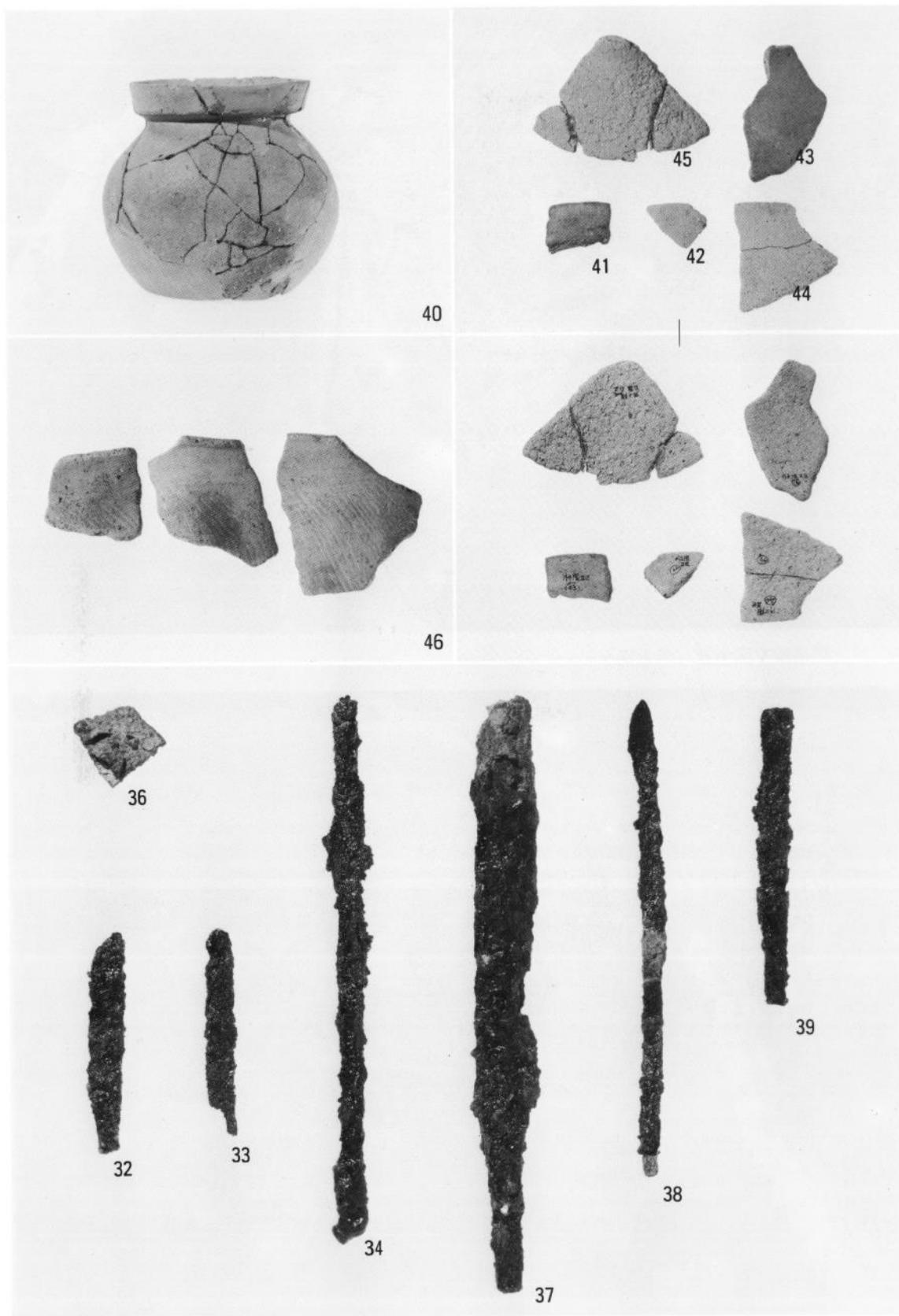
31

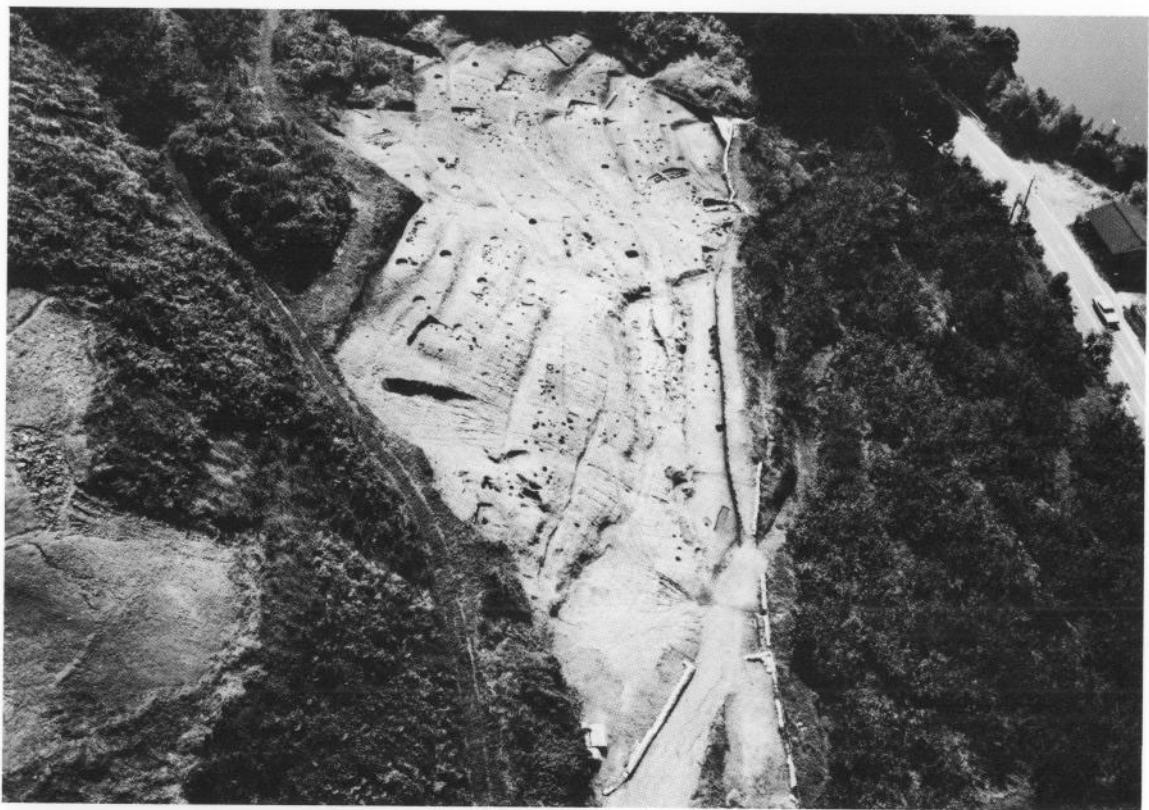
1. II区1号墳1号墓出土重圏連弧文鏡



35

2. II区1号墳2号墓出土飛禽鏡





1. 外之隈遺跡V区全景（西上空から）



2. 外之隈遺跡V区 1号墳全景（東から）



1. V区1号墳全景（南から）



2. 同上 一次床面（南から）



1. V区1号墳石室（東から）



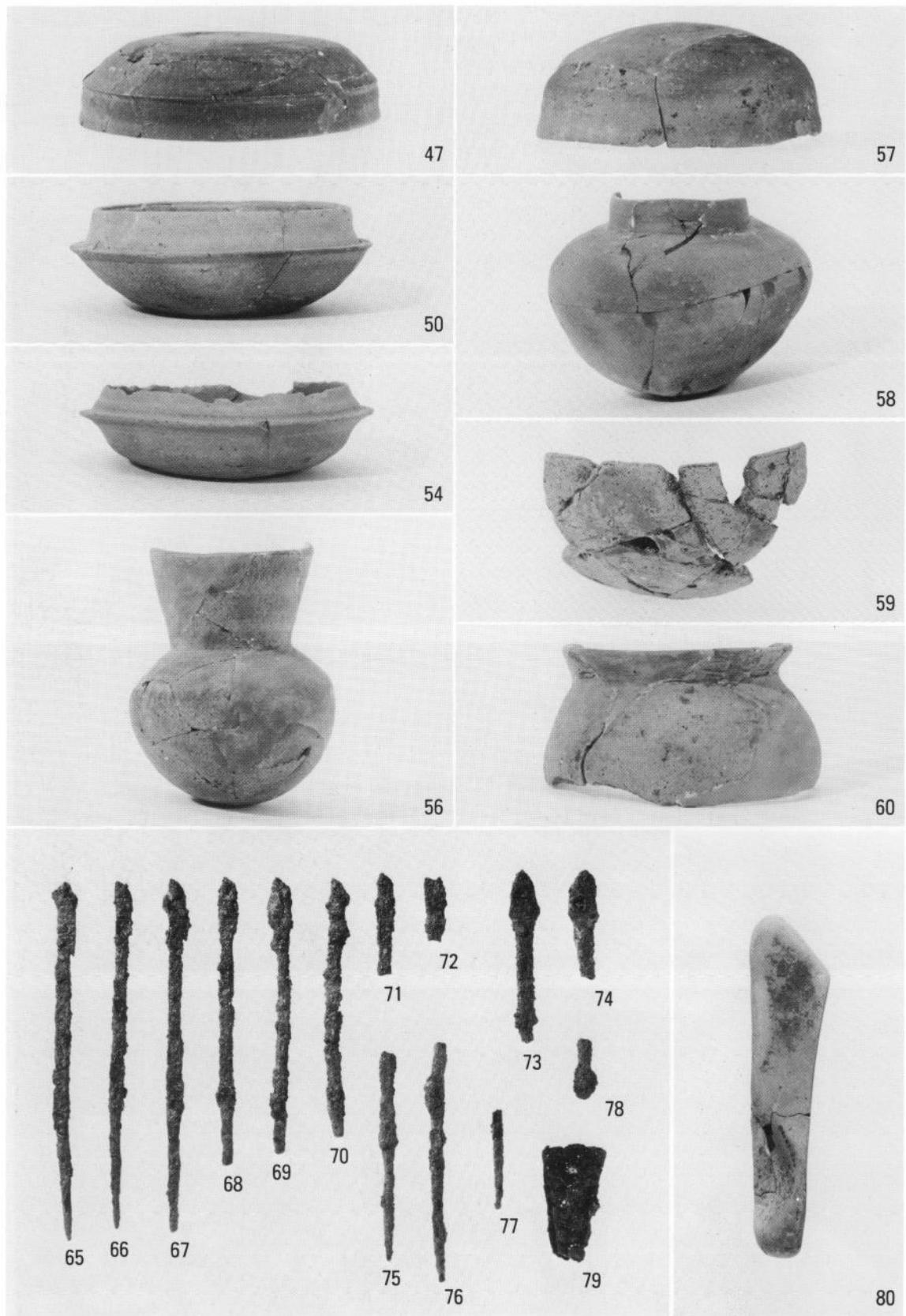
2. 同上（西から）



1. V区 1号墳石室基底部（南から）

2. 二次床面鉄器出土状態

3. 同 砥石出土状態





1.
外之隈V区
1号近世墓
(東から)



2.
同上
土層の状況
(東から)



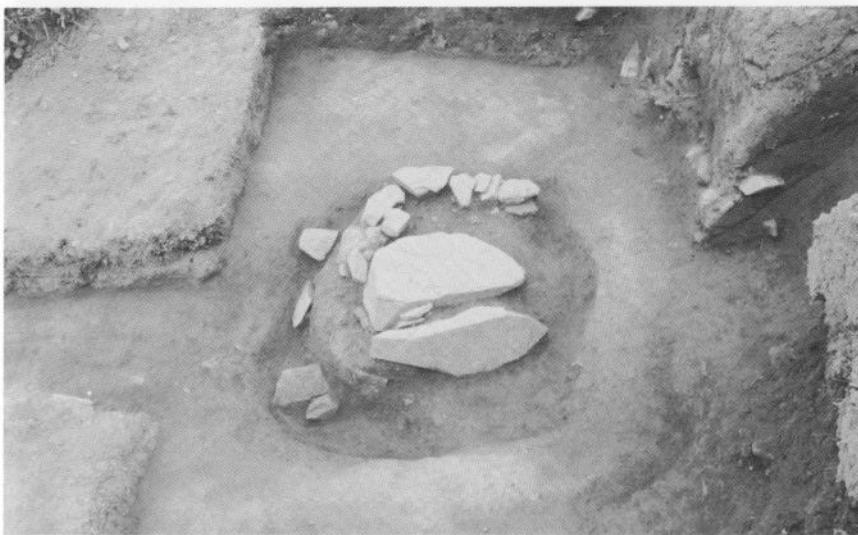
3.
同上
墓標下部の状態
(東から)



1.
1号近世墓
墓標下部の状態
(北から)



2.
同上
(南から)



3.
同上
墓標除去後
(東から)



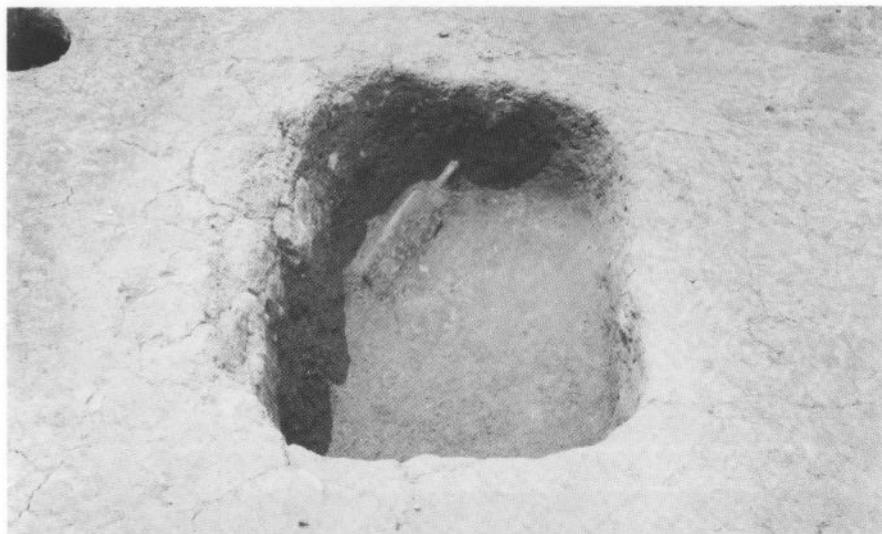
1.
1号近世墓
墓壙（東から）



2.
同上
遺物出土状態
(東から)



3.
同上
遺物近影



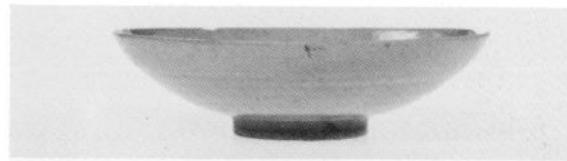
1.
外之隈V区
2号近世墓
(南から)



2.
同上
土層の状況



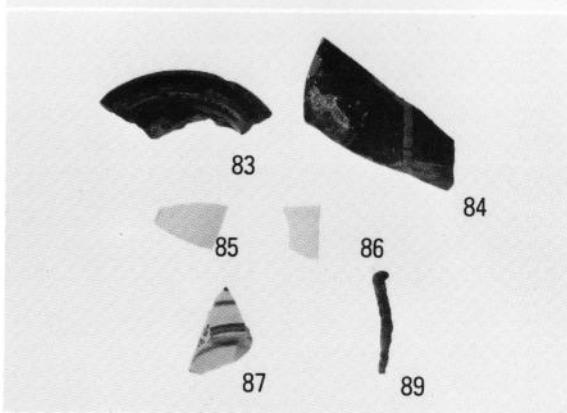
3.
3号近世墓
(北から)



82



88



83



84



85

86



87

89



90



91

107~116



92~103

報告書抄録

ふりがな	そとのくまいせき
書名	外之隈遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	35
編著者名	伊崎俊秋・小田和利・田中良之・金宰賢・本田光子・奥田尚・佐藤尚隆
編集機関	福岡県教育委員会
所在地 (発行機関)	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 Tel 092-651-1111
発行年月日	西暦 1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北緯 °〃	東經 °〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
外之隈	福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字外隈 杷木町大字志和字本陣	404420	570390	33° 21' 48"	130° 46' 1"	1987.11.16 ~1988.10.12	約3,600	道路(九州横断自動車道)建設に伴う調査
			404411					
本陣	朝倉町大字山田字本陣	404420		33° 21' 56"	130° 45' 58"			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
外之隈	墳墓	古墳時代 初頭	墳丘墓 3基	土師器・玉 画面文帶神獸鏡 重圈連弧文鏡・飛禽鏡 鉄器(鎧・刀子)	古墳発生期の墳丘墓があり、鏡等が出土した
		古墳時代 (6世紀)	古墳 1基	土師器・須恵器 鉄器(鎌) 砥石	横穴式石室はやや古い
	江戸時代	墓	3基	土師器・須恵器 鉄釘・珠数玉	江戸時代・享保11年の墓標あり
本陣古墳	古墳	古墳時代	古墳 1基	円筒埴輪片	4世紀代に遡る可能性あり

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 H 6	登録番号 3

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—35—

平成 7 年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡県福岡市博多区東公園 7-7

印 刷 赤 坂 印 刷 株 式 会 社

福岡市中央区大手門 1 丁目 8-34